



文学叢書
上

F83-G67-37



1200500765353

F83

7

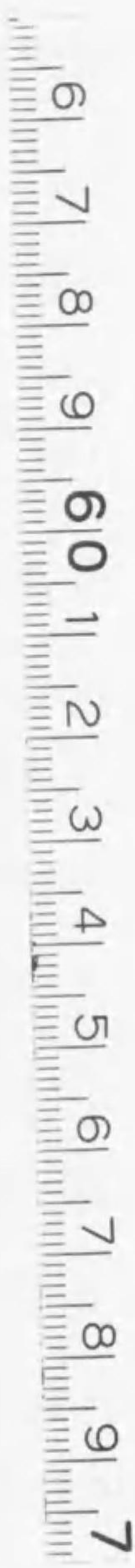
幼年時代



文学叢書

3

高山書院



始





F83

G67

3

ロシア文學叢書

— 2 —

ゴーリキイ作

幼年時代

上田進譯

高山書院



1013
414

譯者序

一九〇六年から第一次世界大戦がはじまるまでの、帝政ロシアの最後の暗黒時代を、ゴ
リキイはずつと亡命生活をしてゐた。

そのあひだに彼は『母』をかき、『オクロフ町』をかいた。

・ 國外にありながら彼は、國內で發行された『知識』^{ズナニエ}叢書を主宰してゐた。そこには當時の
進歩的な寫實主義作家ヴェレサエフ、チリユフ、スキタレツツ、それからセラフイモウイチ等
があつまつた。一方ではまた彼は、進歩的な雑誌『星』^{ズゲズギ}、『啓』^{ノロスウニツチエニエ}、
あるひはルナチャルスキイの斡旋によつて『プロレタリア』新聞の文藝欄の編輯をうけもつ
たりしてゐた。

『幼年時代』が書かれたのは、この亡命時代のをはりのころである。これから、ゴ
ーリキ

2
イの創作の最後の時期がはじまる。その最後の時期のゴロリキイの創作といふのは、おもに回想的なものである。彼が身をもつて生きぬいてきた生活、時代、社會を、あらためてふりかへり、掘りかへしてみてゐるのだ。

『幼年時代』につづいて、『世の中へ』、『私の大學』が出てゐる。この三つの自傳的作品によつて、ゴロリキイの幼年時代から青年時代までの成長が語られてゐる。發展とは還境との闘争であるといふのが、これらの作品を一貫してゐるモチーフである。

この系列は、一人のインテリゲンチヤの生活をとほして、十九世紀末から二十世紀にかけての四十年にわたるロシア社會の變轉を描いた、最後の大作『クリム・サムギンの生涯』にまでつづく。

『幼年時代』に描かれてゐる古いロシアの田舎町の陰鬱な生活——それは、とりもなほさず封建ロシアの縮圖である。そこに、この小説が單なる自叙傳以上の意義があるのだ。

ゴロリキイは人間を愛し、人間性を尊重してゐる。だから、人間性を無視し、人間を毒し

苦しめるものを極度に憎惡する。そのかはり、ひとたび人間の眞の姿にぶつかれば、心から感動の叫びをあげる。ゴロリキイの作品はどれも大抵さうであるが、この『幼年時代』でも、明暗がはげしい對照^{コントラスト}をなして交錯してゐる。これは、そこからきたものだ。

『幼年時代』は、十九世紀の終りにちかいかある時代のロシアの社會の『年代史』であるとともに、汚辱をたへしのび、苦難をつきのけて成長してゆく美しい魂の抒情詩である。

敗戦後の混亂と汚辱と苦難の中にあつて、自らのうちに新しい人間性を發見し、新しい日本を建設してゆかうとするわが國の若い人々の魂に、この作品は必ずや深い感銘を與へずにはあかないであらう。

一九四六年九月

上 田 進

幼
年
時
代

うすぐらい狭い部屋の、窓の下の床のうへに、白いものをまとつた、ひどくひよる長い私の父が横たはつてゐる。むきだしになつた足の指は奇妙につつぱり、胸の上にしづかにおかれたおとなしい手の指もへんに曲つてゐる。陽気な眼はびつたりととざされて、まるで黒い銅貨をはめこんだやう、人のいい顔も陰氣にくろずみ、ぶきみにむきだした膚が私をびつくりさせる。

赤いスカートをはいた半裸體の母が、枕もとにしやがみこんで、父の長いやわらかい髪の毛を、黒い櫛で、額から後頭の方へととかしてゐる。その櫛でよく私は西瓜の皮をけづつたりしたものだが、母はしわがれた低い太いこゑで、ひつきりなしになにかブツブツつぶやいてゐる。彼女の灰色の眼ははれあがり、なかの眼玉が溶けて大粒の涙となつて外にながれだしてしまつたやうな気がする。

祖母が私の手をつかまへてゐる。祖母は、眼が大きくて、鼻が妙にふがふがしてゐる、大頭の、何だかかう丸

つこい身體つきの女だ。どこからどこまでも熱つぽくで、ものやわらかで、とても面白い人間だ。彼女もやつぱり泣いてゐる、何だかひどく上手に母の泣聲に調子をあはせ泣いてゐるやうだ、そして、ひつきりなしに身體をふるはせてゐる。私をつかまへて、父の方におしやらうとする。私は身體をつつぱつて抵抗し、彼女のかけにかくれようとする。私はこわいのだ。きまりがわるいのだ。

私は大人が泣くのを見たのは、はじめてであつた。それに、祖母がなんともなんともくりかへしていふ言葉が何のことやらちつともわけがわからなかつたのである。

——さあ、お父ちゃんにさよならをしなよ。もうこれつきり進へねえだからな。お父ちゃんはたア、死んぢまつただけ、まだそんな歳でもねえのにな。まだまだ死ぬ歳ぢやねえのに……

私もそのころ重い病氣をして、やつと起きられるやうになつたばかりのところであつた。その病氣のあひだ、父は何くれとなくやさしく私の世話をしてくれた。私はいまでもそれをよくおぼえてゐる。そのうちに、急に父の姿がみえなくなつた、そして祖母が代つて私の世話を

4
みにきてくれた。はじめは何だか得體のしれない人であつた。

——お前、どこからきたの？——私は彼女に訊いてみた。

彼女は答へた。

——上の方からさ、ニージニイからよ。きたつて言つたつて、歩いてきたちやねえよ、舟にのつてきただ。水の上は、歩けやしねえだからな。シツシ！

これはわけのわからない、おかしいことであつた。家のなかで、上の方つていへば、二階に置むじやのおしやれのベルシャ人の一家が住んでゐるのだし、下といへば……、地下室に、黄色い顔をした年よりのカルムイタ人が羊の毛皮の商賣をやつてゐるのであつた。そしてこの階段は、手すりに馬のりになつて上りおりることできるし、段段をふみはづしたら、もんどりうつて轉がりおちることもある。——それなら私だつてよく知つてゐるけれど、水だなんて……いつたどこに水なんてあるのだらう？ 何もかもがでなめらで、變てこにこんぐらかつてゐた。

——なぜおらがシツシなの？

一度も私の方を見てはくれぬ。ただ父の髪をとかし、腰にむせびながら、ひつきりなしに泣きつづけてゐるだけだ。

兵隊巡査と、まつくろな百姓男が二三人、扉口からのぞきこむ。巡査が、がみがみとなる。

——早くかたづけろ！

窓には黒っぽい肩掛がカーテンの代りにかけてある、それが風をはらんで帆のやうにふくらむ。いつか一度父が私を帆かけ舟にのせてくれたことがあつた。そのとき急に雷がなりだした。父はニコニコ笑ひながら、私をしつかりと膝のあひだにおさへつけておいて、叫んだ。

——なんでもねえよ、びくびくするな、蕪坊主！

ふいに母が大儀さうに立ちあがつたと思つた、とたんにまたヘタヘタと坐りこみ、そのまま仰向けにひつくりかへつてしまつた。髪の色が床の上にはばらばらにみだれた。眼をつぶつた彼女の色白な顔に血の氣がなくなつた。そしてちやうど父とおなじやうに齒をむきだして、おそろしい聲で叫んだ。

——扉をしめておくれ……アレクセイを、あつちへつれてつて！

——うるさいからさ。——彼女はやつぱり笑ひながら言つた。

彼女はやさしい、陽氣な、なめらかな調子でしゃべつた。私はきた日からすぐに彼女と仲よしになつてしまつた。そしていま私は、彼女が一刻も早く私をこの部屋からつれだしてくれればいいと思つてゐるのである。

私は母の悲しみに壓倒される。母の涙と泣聲が私の體内に新しい不安な氣もちをかきたてた。私は母のそんな姿をはじめて見たのだ。母はいつもきつい顔をしてゐて、言葉數も少なかつた。小ざつぱりとした風をしてゐて、色つやもよく、馬のやうに大柄な女であつた。頑丈な身體でおそろしく腕力がつよかつた。その母が、いまはまるで何だか見てゐても氣もちのわるいほどふくれ、だらしがなくなり、着てゐる物もすつかりぼろぼろになつてしまつてゐた。いつもきちんと髪を結つて、明るい色の大きな帽子をかぶつてゐたのに、いまはその髪がばらばらにほぐれて、裾の肩の上のみだれかかり、顔にたれさがり、半分だけ纏んで垂らしたのがブランブランして、永い眠りにおちた父の顔をこすつてゐる。私はもうずぶんながれこの部屋に立つてゐるのだが、母はまだ

私をつきとばして、祖母は扉口にとんでいつて、わめきたてた。

——みなさんや、何でもねえだよ、放つといっておくんな、むかふへいつておくんや、おねがひだから！ コレラぢやないんだよ、お産がはじまつただ。さあ、あつちへいつとくれよ、お前さんがた！

私は隅のくちがりの長持のかけにかくれて、そこから母が齒をくひしぱり、ヒィヒィいひながら、床の上をのたうちまわるさまを眺めてゐた。祖母はそのまわりを這ひまわりながら、やさしく元氣をつけるやうに言つてゐる。

——神さまがお守りくださるだよ！ ワリニューシャ、ちつとべえ我慢してな！ 聖母さま、力をかしておくんなすつて……

私はおそろしかつた。彼らは父の横たはつてゐるすぐそばで騒ぎたててゐるのだ。まるで父の眠りを邪魔しようとしてゐるやうだ。呻き聲をたてたり、叫び聲をあげたり……だが父はびくとも動かない。何だか笑つてゐるやうに思はれる。床の上の騒ぎは、ずるぶん長いことつづいた。母はいく度か立ちあがつては、その度にまたバ

ツタリたはれた。祖母は、大きな黒いやわらかいまりがころがつてゆくやうに、何度も部屋からとびだしていつた。やがてそのうちに、とつぜん闇のなかで赤兎が泣き聲をたてた。

——おお、よかつた、よかつた！——祖母がいつた。

——男の子だよ！

そして彼女は蠟燭に火をつけた。

私は、きつとそのまま、隅つこの暗がりでも眠りこんでしまつたのであらう。——それからさきのこととは何もおぼえてゐない。

私の記憶にきざみこまれてゐる第二の刻印は、雨の日の、わびしい墓場の一角だ。私はつるつるする粘土の盛土の上になつて、父の棺がおろされた穴のなかをのぞきこんでゐる。穴の底には水がいつぱいたまつてゐて、蛙がたくさんゐる。そのうち二匹はもう、黄いろい棺のふたの上に這ひあがつてきた。

お墓のそばには、私と、祖母と、びしよぬれになつた巡査と、シャベルをもつてぶりぶりしてゐる百姓が二人立つてゐた。南京玉のやうにこまかな、あたたかい雨がみんなの上にふりそそいでゐる。

——さあ、埋めろ！——巡査がわきへのいて言つた。

祖母は頭布のはしで顔をかくして泣きだした。百姓たちは、かがみこんで、せつせと墓穴に土を放りこみはじめた。水がびしやりとはねた。蛙どもは棺からとびのいて、穴の縁にしがみつかうとあせつたが、土塊がきては穴の底にはらひおとした。

——どきなま、アレクセイ。——祖母が私の肩をつかんで言つた。私はその手をすべりぬけた。その場から去りたくなかつたのだ。

——仕様のない子だね、お前は。ああ、神さま。——

祖母はぶつぶついつた。しかしべつに私にたいして不平をいつてゐるのでもなければ、神さまにたいして不平をいつてゐるのでもない。さうして、ながいこと黙つて立つてゐた。もう墓の土はすつかりならされた。けれど祖母はまだ相かはらず突立つてゐる。

百姓たちは大きな音をたてて、シャベルで土を叩き均してゐた。風がヒューツと吹きぬけて雨をさらつていつた。祖母は私の手をつかんで、古びた十字架がたくさん立つてゐるあひだをとほつて、ずつとむかふにある教會につれていつた。

——お前、どうして泣かないんだい？——圓ひの外にでたときに祖母が訊いた。——泣けばいいのに！

——んだつて、泣きたくねえもん。——私はいつた。

——ふん、さうかい。泣きたくねえなら、そらあ泣かなくてもいいけえど。——彼女がひくい聲でそつと信つた。

だれが聞いたつてびつくりするだらうと思ふが、私はめつたに泣いたことがなかつた、しかもたまに泣いてもそれは侮辱をうけたときだけであつて、痛くて泣いたなんてことは絶対にないのであつた。父は、私が泣くといつても私を嗤つたし、母はいきなりどなりつた。

——めそめそするんぢやないよッ！

私と祖母は、それから馬車にのつて、兩側に赤ぐるい家の立ちならんだ、おそろしく泥んこの、ひろい通りをかへつてきた。私は祖母に訊いてみた。

——蛙の野郎どもは這ひ出せねえかな？

——だめさ、もう這ひ出せやしねえだよ。祖母が答へた。——お陀佛さ。神よ、守りたまへ！

父も母も、こんなにたびたび、しかもこんなに打とけて、神様の名を口にするとはなかつた。

.....
數日後、私と祖母と母とは汽船にのつた。小さな船艙に陣どつた。生れたばかりの私の弟のマクシムは死んでしまつて、白いものにつつまれ、赤い打紐でしばつて、隅つこの卓の上においてあつた。

包みや鞆の上に這ひあがつて、私は窓をのぞく。窓はちやうど馬の眼のやうに、まんまるで、外にとびだしてゐる。ぬれたガラスのむかふには、濁つた水が泡をかんで絶えまなしに流れてゐる。ときをり、その水がおどりがあがつて、ガラスをなめにくる。私は思はず床の上にとびのく。

——恐いことはねえよ。——祖母がいふ、そしてやわらかい手でそつと私をだきあげて、また包みの上のせてくれる。

川の上には、灰色の濕つぽい霧がまいてゐる。どこか遠くの方に黒い土がちらりと見えた、かと思ふとすぐにそれはまた霧と水とのなかに消えてしまふ。まはりのものは何もかも、たえずカタカタゆれてゐる。ただ母ひとりだけが、兩手を頭のうしろにおしかつて、壁によりかかり、身を硬ばらせて、じつと動かずに突立つてゐる。

その顔は、まるで鐵かなんぞのやうにくろずんで陰氣くさくさなり、兩眼が盲のやうにびつたりと閉ざれてゐる。彼女はいつまでもおし黙つてゐる。なんだかまるですつかり人が變つてしまつたやうだ。さういへば、着てゐる物までが、私にはなじみのないものであつた。

祖母がいく度もそつと彼女にいつた。
「ワリーヤ、なんか食べたらいいた、ちよつとでもいいからさ。え、どうだい？」

母はそれでも黙つてゐる、身うごきもしやしない。祖母は、私と話すときには、まるで内密話でもするやうにひそひそしやべるが、母と話すときには大きな聲をだす。だが、なんだかひどくびくびくして、遠慮がちに話すのだ。だから自然言葉かすも少なくなるのであらう。どうやら祖母は母をこわがつてゐるらしい。その理由には私にもわかる。で、そのために私と祖母とはいつさう近しくなつてゆくのである。

「サラトフだね。母がふいに大きな聲で、怒つたやうにいつた。水夫はどこにゐるの？」
言葉までがおかしい。サラトフだとか、水夫だとか、そんな言葉は、私はきいたことがない。

切りたての大きなパン片を思はせた。

「お祖母ちゃんはどこへいつたの？」

「孫を埋めにさ。」

「やつぱり土んなかへ埋めるの？」

「きまつてるぢやねえか、土んなかさ。」

私は水夫に、父を葬つたとき、蛙が生きたまま埋められてしまつたことを話した。すると彼は私をだきあげ、しつかりとだきしめて、接吻した。

「おい、兄ちゃん、お前はまだ何もわからねえんだな。——彼はいつた。——蛙つ子なんてかはいさうがることばねえんだよ。それよりも、おつ母さんがかはいさうぢやねえか。見る、切なくて、切なくて、氣も顛倒してるぢやねえか！」

私たちの頭上で汽笛がなり、鐘がなりはじめた。私はもう、これが汽船であることを知つてゐたので、ちつともおどろかなかつたが、水夫はあわてて私を床におろし「さあ、いそがなくなちや！」といひながら、かけだしていつた。

私もかけだしていきたくなつた。扉の外に出てみた。うすぐらい狭い通路には人かげがなかつた。扉口からさ

青い服をきた、肩幅のひろい、白髪の男が、小さな箱をもつて入つてきた。祖母はその箱をうけとつて、それに弟の屍體をいれて釘づけにした、そして兩手にかかへて扉口にもつていつた。けれど、肥つちよの祖母は、その狭い船室の扉口をとほるにはどうしても横むきにならなければならなかつたので、扉口のところでつかへてしまひ、滑稽な恰好をしてゐた。

「まあ、おつ母さんたら。母が叫んで、祖母の手から棺をひつたりとくり、二人で外に姿をけした。ひとり船室においてきぼりにされた私は、青い服をきた百姓をじろじろ眺めまはしめてゐた。

「そら、お前の弟はどつかへいつちまつたぜ、いいかい？——百姓は私のうへにかがみこんでいつた。

「おぢさんは誰だい？」

「水夫さ。」

「んぢや、サラトフつてのは、誰のこと？」

「そりや町の名前だよ。窓から見てみな、ほら、あれがサラトフさ！」

窓のむかふに陸地がうごいてゐた。切りそいだやうなくすんだ地肌を見せ、霧のなかにかすんでゐた。それは

う遠くないところに、階段の眞鍮の金具がひかつてゐた上の方をみると、手に手に靴や包みをさげた人人の姿が見えた。みんなが汽船からおりてゆかうとしてゐるのだといふことは一眼でわかつた。とする、私もおりてゆかなければならぬといふことになるわけだ。

だが、百姓たちの群にまちつて、私が、汽船の舷から岸にわたした橋のそばに姿をあらはすと、みんなががやがやをわざだした。

「こりや誰の子だい？ お前どこのもんだい？」

「知らねえよ。」

ながいこと、みんながよつてきて、私を突ついたり、肩をもつてゆすぶつたり、なでまはしたりした。たうとうおしまひに、さつきの白髪の水夫があらはれた。彼は私をつかまへて、説明した。

「こりやアストラハンのもんだよ。船室から這ひだしてきただ……」

彼は大きいそぎで私を船室につれもどし、包みの上に坐らせて、「あとでひどい自にあはせてやるぞ！」と指をたてておどかしておいて、かへつていつた。

頭上のさわぎはだんだんにしづまつてきた。船はもう

ゆれてはゐなかつたし、水もパチャパチャ音をたててはゐなかつた。船室の窓はぬれたガラスでふさがれてゐた。あたりが暗くなり、息苦しくなつてきた。包みがだんだんにふくれあがつてきて、私をぎうぎうおさへつけるやうな気がした。何もかもが薄気味わるくなつてきた。何だか私は、このからつぼの汽船のなかにいつまでも一人きりで放つておかれるやうな気がしてきてた。

扉のところについてみた。扉はあかない。その真鍮の把手をまはすことができないのだ。私は牛乳壺をとりあげて、力まかせに把手をたたいた。壺がわれて、牛乳が私の足にこぼれ、長靴のなかに流れこんだ。

この失敗にすつかり悲観して私は包みの上に身をなげだし、しくしく泣きだした。が、そのままいつか泣き寝入りして眠つてしまつた。

眼をさましたときには、汽船はまだ大きな音をたててゆれてゐた。船室の窓が太陽のやうにあかあかと燃えてゐた。祖母は私のそばに坐つて髪を梳いてゐた。顔をしかめて、なにかぶつぶつぶやいてゐる。彼女は妙に髪があつかつた。その青びかりのするまつ黒な髪の毛はもさもさと肩や胸や膝をつつみ、床の上にまでたれてゐた。

それを片方の手で床からひきあげ、宙にもちあげておいて、彼女は苦心さんたんして、目のあらい木の櫛でふさふさとした毛の房を梳いてゆく。唇がへんにゆがみ、暗い眼が瞷だたしげにギラギラひかる、そして顔はこのありあまるほどの髪につつまれて、ひどく小さく、滑稽にみえた。

今日は、彼女は意地わるさうに見えた。けれど私が、どうしてそんなに長い髪じてるの、と訊くと、祖母は昨日とおなじやうに温かみのあるやさしい聲でいつた。

——こりやきつとね、神さまの罰があつたんだよ。まあ、これを梳かしてみな、順にさわるつたらありやしないよ！ そりや若い時分には、この髪を日慢にし、のたもんだがね、年をとつてからはもうただ厄介でな！ さあ、お前はもう一寝入りしな！ まだ早いだから。お天道さまがやつといまお昇りになつたばかりで……

——んでも、おらもう眠くねえもん！

——さうかい、そんなら、ねなくてもいいさ。——すぐに彼女は賛成した。そして髪をおさげに編みながら、母が弦のやうに身體をびんとのばして仰むけになつて寝てゐる長椅子の方をチラリチラリとながめた。——昨日

お前は、なんだつて壺をわつたりしただい？ さあ、そつと話してごらん！

彼女は歌でもうたふやうに一つ一つの言葉に特別の調子をつけてしゃべるので、その言葉はやさしい、明るい色をした、みずみずしい花と同じやうに、たちまち私の記憶にしつかりと刻みこまれてしまふのであつた。彼女が笑ふと、櫻んぼのやうに暗い色をした臍がずつとひらいてきて、何ともいへない気もちのいい光がさしてくる。それといつしよに、まつ白な、こまかい齒が嬉しさうにむきだされ、くろずんだ頬の皮膚にはいちめんに皺がよつてゐるにもかかはらず、顔ぜんたいがとて若わかしく、明るく見えてくるのであつた。ただひどく小鼻のいかつた、先の赤い、例のふがふがの鼻が、その全體の調子をぶちこはしてゐた。彼女は銀の飾りのついた黒い煙草入から喫煙草をだして、鼻につめた。彼女の外見は、何だか暗い感じであつたが、しかしいつも内部から、消えることのない、陽気な、温みのある光でてらしたされてゐた。それは眼を見るとよくわかつた。彼女はまるでせむしのやうに猫背で、おまけにぶくぶく肥つてゐたが動作は大きな猫みたいに軽快で、敏捷であつた。さうい

へば、祖母はこのやさしい動物とおなじやうに、身體ぜんたいがものやわらかい感じであつた。

祖母があらはれるまでは、私は言はば暗闇のなかにかくれて眠つてゐたやうなものであつた。だが彼女が姿をあらはすと、私の眼をさまし、私を明るい世界につれてだしてくるのである。私のまはりのすべてのものを、すつと一本の糸でむすびあはせて、色とりどりのレースに編んでくれたのだ。そしてたちまち彼女は、私の心にもつとも近い友だち、私には一番よく理解のできた、大切な人間になり、それは彼女が死ぬまでつづいた。この世界にたいする彼女の無愁な愛情が私を育てくれ、困難な人生にむかつてゆく強い力を私のうちに満たしてくれたのであつた。

四十年まへには、汽船はまだのろかつた、だから私たちはニュージニイまでゆくのに、ずるぶん長いことかかつた。私は美しさにみちみちたこの最初の日日のことを、よくおぼえてゐる。

いいお天氣がつづいた。朝から晩まで、私は祖母といつしよに甲板にでて、澄みきつた青空の下にゐた。ダオ

ルガの兩岸は、ほんのりと秋の黄金色にそまり、絹の衣裳をまとったやうだ。急がず慌てず、のろのろと、薄茶色の汽船は、水車で大きな管をたてて灰青色の水をかき長い曳綱で綱をひつばつて、流れをさかのぼつてゆく。灰色の躰は草鞋型そっくりだ。太陽がいつとはなしにヴオルガの上をうごいでゆく。一時間ごとにあたりの風景がすつかりかはつて、新しくなる。緑の山山は、豪華な大地の衣裳の派手な襷のやうだ。兩岸には町や村が、とほくから見るとちやうどお菓子のやうに、點在してゐる。黄金色の秋の木の葉が水面をながれてゆく。

「ほら、ごらんよ、なんていい景色だらう！——祖母は杖から杖へと歩きまはりながら、ひつきりなしに感嘆の聲をあげる。彼女の身體ぜんたいが輝きを發し、兩眼が喜ばしげに大きく見ひらかれてゐる。

ときどき彼女は、われを忘れて、じつと岸に眺め入つてゐた。杖にもたれて、兩手を胸にくんで、微笑をうかべだまつてゐる。その兩眼には涙がひかまつてゐる。私は彼女の花模様をついた黒つぼい色のスカートをひつばつてゐる。

「何だい？——彼女はびつくりして、われにかへる

「わしは、うとうとして、まるで夢でも見てゐるやうな氣もちだよ。

「——んでも、せいぢや、何を泣いてるの？
——これはな、坊や、嬉し泣きだよ、それに年をとつてるせいもあるだよ。——彼女は微笑みながらいふ。

「——んだつて、わしはもう年よりだもんな、六十年もこの世に暮してきただからな。

さういつて喫煙草をかいでから、私にむかつて、人の好い泥棒の話とか、聖者の話とか、いろんなけだものや魔法の話とか、さまざまの不思議な話をはじめる。

お話をするときには、彼女は、私の顔のうへにかがみこんで、大きく見ひらいた瞳でじつと私の眼をのぞきこみながら、まるで私の心に私をふるひたさせる力を注ぎこまうとでもするやうな調子で、しづかに、わざと神秘めかして、語つてゆく。まるで歌でもうたつてゐるやうな調子で話す。そして語つてゆけばゆくほど、ますます調子がでてくるのだ。それを聞いてゐるのは、何ともいへないほど氣もちがいい。私はおとなしく聞いてゐてはまたせがむ。

「——もつと話しておくれよ！

「——さうだな、まだこんなのもあつたつて。むかしむかし、お爺さんが煖爐の下に坐つてゐた。お爺さんは掌に薬麴のとげをたて、身體をゆすぶつて、泣いてゐた。「おーい、鼠公、痛いよオ。痛くて痛くて、たまらないよオ！」つて。

祖母は片足をもちあげ、それを兩手でつかんで、宙でゆすぶりながら、ほんとに自分が痛さうに、滑稽に顔をしかめた。

水夫たちがまはりをとりまいてゐる。震むじやだが、親切な男たちだ。みんなおとなしく聞いてゐて、ときどき笑ひだす。そして祖母の話し上手をほめて、やつぱりあとをせがむ。

「——なア、おばあさん、もつと何か話しておくれよ！
——として附加へる。

「——夕飯はな、おいらのここへ招ばれてきておくれよ！

夕飯のときに彼らは祖母にウオトカをふるまふ。私には、西瓜やメロンだ。ただし、これは内密の仕事である汽船では果物をたべることが禁じてあり、それを見張る人がゐる。見つければ、とりあげて、川になげすて

てしまふ。その男は、巡査とそっくりな、眞鍮のボタンをついた服をきて、いつも酔つぱらつてゐる。みんなは、その男の目をかすめて、こつそりやつてゐるのだ。

母はめつたに甲板には出てこない。私たちを避けてゐるやうだ。彼女はいつもだまりこんでゐる。よく均整のとれた大きな身體、鐵色をした陰氣な顔、編んで下げた薄色の髪にのせてある重たい帽子……どこからどこまでも力強い、がつしりした母の姿を、私はいま霧か透明な雲をとほして見るやうに、思ひだす。そのぼんやりとした雲のなかの、はるか彼方から、祖母とおなじやうに大きな、灰色の眼が、不機嫌さうに私をながめてゐる。

ある日、母が氣むづかしい顔をして言つた。

「——おつ母さん、みんながあんたを笑ひものにしてるよ！

「——いいぢやないか！——祖母は屈托なげに答へた。笑ひたい者にや笑はせとくさ。その方が身體のためにもいいからな。

ニージニイの町が見えてきたときに、祖母がまるで子供のやうに喜んだのをおぼえてゐる。彼女は私の手をひつばつて杖にかけより、大きな聲で叫びだした。

ほら、見なよ、見なよ、いいところぢやないか！
 ナア、坊や、これがニージニの町だよ！ほんとに、
 何んていい町だらうね！ほら、見なよ、教會が、まる
 で鳥のとんでるみたいに、あつちこつちにあつてさ！
 それから母にむかつて、泣かんばかりにしてたのん
 だ。

ワリニューシヤ、見てみなよ、ほら、ちよつと見て
 くんないかい、え？お前はもう忘れちまつたらうが
 な！どうだい、ちつとは嬉しいだらうが！

母は氣のなさうな微笑をうかべてゐた。

汽船が、美しい町をまへにして、何百といふ船がどが
 つたマストをつきたててぎつしりもやつてゐる川のまん
 なかにとまると、たくさんの人間をのせた大きな艇が舳
 に漕ぎよせてきて、汽船からおろされたタラップに鈎竿
 をひつけて、つなぐれた。そして、艇にのつてきた人
 たちが次次にと甲板にのぼつてきた。ひからびたやうな
 小柄の老人が、一番先頭にたつて、急ぎ足でのぼつてく
 る。裾のながい黒い着物をきて、黄金色のやうに見える
 緒毛の鬚鬚をのぼし、小鳥の嘴のやうにとがつた鼻と、
 緑色の眼をしてゐた。

——おらあ、アストラハンのもんで、船室から出てき
 たの……

——何をいつてるんぢやい、この子は？——祖父は母
 の方にむいていつた、そして答へも待たずに、私を母の
 方へおしやつて、言つた。

——頬骨の工合なぞは親父そつくりだぞ……さあ、み
 んな、艇にのれ！

岸にあがると、みんなは一團となつて、大きなごろた
 石を敷いた坂道を山の方にのぼつていつた。兩側は、く
 じやくしやに踏みつぶされた枯草におほはれた、高い斜
 丘になつてゐた。

祖父と母がいちばん先にたつて歩いていつた。祖父は
 母の肩ぐらゐしか丈がないので、小走りにちよこちよこ
 歩いてゆく。母はそれを上から見おろしながら、まるで
 空中を泳いでゆくやうな歩きぶりだ。そのあとから二人
 の伯父がだまつてついてゆく。まつ黒な、つやつやした
 髪のみハイル伯父は、祖父とおなじやうに干からびてか
 さかさしてゐるし、ヤコフの方は明色のぢぢれ毛だ。そ
 れにつづいて、派手な着物をきた肥つた女たちと、子供
 が五六人ゆく。その子供たちはみんな私より大きくて、

——お父つあん！——母が太い、大きな聲で叫んで、
 いきなり彼のところにとんでいつた。すると彼は、母の
 頭をかかへ、小さな赤い手で母の頬を氣ぜはしげになで
 まはし、キーキー聲で叫んだ。

——どうしただ、馬鹿め？びつくらするぢやねえ
 か！さあ、それ、それ……えい、こいつらめ！

祖母は獨樂のやうにくるくるまはつて、たちまちのう
 ちにみんなを抱いて接吻した。それから私をみんなのま
 へにおしやつて、せかせかと言つた。

——さあ、大いそぎだよ！これがミハイロ伯父さん
 これがヤコフ……そつちがナタリヤ伯母さん、それから
 この子供は二人ともサーシヤつていふんだよ、それとカ
 テリーナ姉さん。これがみんなわしらの一族だよ、どう
 だい、ずいぶんたくさんあるだらうが！

祖父が彼女にいつた。
 ——達者でいつてきたかな、おつ母？

二人は三度接吻した。

祖父は、みんなが押しあひへしあひしてゐるなかから
 私をひつぱりだして、私の頭をおさへながら訊いた。

——お前はどこの家の者になるんぢやい？

みんなおとなしい。私はいちばんあとから、祖母と、小
 柄なナタリヤ伯母といつしよにゆく。青い眼をした、顔
 色のわるい伯母は、お腹が大きいので、ときどき立ちど
 まつて苦しうに溜息をついて、つぶやく。

——ああ、とても駄目！

——なんだつてお前まで狩りだしてきたんだらうね？
 ——祖母が腹だたしうにわめいた。——ほんとに仕様
 のない人たちだ！

大人も子供も、みんな私の氣にいらなかつた。私は彼
 らのあひだにあつて、自分ひとりだけが他人のやうな氣
 がした。祖母までが、なんだか急に光を失つて、私から
 遠のいてしまつた。

とくに嫌だつたのは祖父だ。私は彼のうちにすぐさま
 敵を感じた。そして私は彼に特別の注意をはらひ、一種
 の用心ぶかい好奇心をいだいたのであつた。

やつと坂道をのぼりつめた。その頂上に、右側の斜丘
 によりかかると、ぶんぐりした平家建の家がた
 つてゐて、そこからまた別の新しい通りになつてゐた。

その家は、どすくろいバラ色に塗つてあり、低い屋根が
 眼深かに庇をおろし、窓がとびでゐる。通りから見た

ときには相當大きな家のやうに見えたが、内部に入つてみると、小さなうすくらの部屋ばかりで、狭くろしかつた。ちやうど波止場についてゐる汽船のなかみたいだ。どこへいつても怒つた顔をした人人があくせく動きまはつてをり、餌をあさつてあるく雀の群みたいの子供たちがとびまはつてゐた、そして家のなかちやうどこへいつても、えたいの知れない、いやな臭ひがたちこめてゐた。

私は中庭にでてみた。ここもやつぱりつまらなかつた庭ちやうに、濡れた大きな布片がいつぱいにかけてわたしてあり、とても濃い、さまざまの色をした水の入つてゐる桶がそちこちにおいてあつた。その桶のなかにも布片が漬けてある。庭の隅つこの、半分こわれかけた低い傍屋のなかでは、竈にどんどん火が燃えてゐて、なにかふつふつと煮えたぎつてゐた。その奥の方で、姿のみえない人が大きな聲でわけのわからない、をかしのことを叫んでゐた。

——白檀……唐紅……藤……

重苦しい、ひどくこんくらかつた、なんとも言ひやうのない妙な生活がはじまり、それはおそろしい速さで流れていつた。いま私はそれを思ひだしてみると、なんだか、善長な、けれど慮げられた誠實な天才が巧みに語りだした、峻厳な物語をよんでゐるやうである。いま、過ぎさつたことを再び生きかへらせて筆にのぼせてゐながら、私はときを再び自分でも、これらすべてのことがたしかに本當にあつたことだとはなかなかに信じられないうらみであり、また自分から反駁して、拒否したいこともたくさんにでてくるのである。なにしろ、この「馬鹿げた一族」の暗い生活には、あまりに殘忍さがみちみちてゐたものだ。

だが、眞實は同情よりも尊い。といふのは、私は自分のことを語るのが眼目ではない、單純なロシアの人間がそのなかに住んでゐたところの、そしていまも住んでゐるところの、身の毛もよだつやうな恐ろしい印象ばかりがよりあつまつてできてゐる、胸をしめつけるやうな

——息苦しい世界について語る事が目的なのであるから。

祖父の家は、家族のものみんながお互ひ同士にいだきあつてゐる。火のやうにはげしい敵意の霧でとざされてゐた。それは大人たちみんなのなかに根をはり、子供たちまでがそれに加はつた。あとで祖母の話をきいて知つたことだが、母がかへつてきたのは、ちやうど彼女の兄たちが父に財産の分配を執拗に要求してゐる最中であつた。思ひがけなく母がかへつてきたので、財産を分けでもらはずといふ彼らの欲望は、ますますはげしく、強くなつた。彼らは私の母が、當然もらふことになつてゐるけれど、彼女が祖父の意志にさからつて「自分勝手」に好きな男といつしよになつてしまつたために、祖父の手におさへられてゐる持參金を、要求しはしないかとおそれた。伯父たちは、その持參金を當然自分たちのあひだで分けるものと見なしてゐたのだ。その伯父たちがまたお互ひ同士、どつちが町に工場をひらき、どつちがオカ河のむかふのクナイネ村に工場をたてるかといふことで、もうずるぶんまへから、はげしく争つてゐるのであつた。

私たちがきてからまもないある日、臺所で食事をして

ある最中に、喧嘩がはじまつた。二人の伯父はふいにすつくと立ちあがり、卓をはさんで身をのりだして、大のやうにあさましく齒をむきだし、全身をぶるぶるはせて、祖父にがんがんわめきたてた。祖父も匙で卓をたいて、顔ちやうまつ赤にして、雞のやうに甲高い聲で叫びだした。

——きさまらにや一文もやるもんか！ みんな乞食にでもなつちまへ！

——祖母が苦しさに顔をしかめていつた。

——みんなやつておしまひなよ、お父つあん。その方がお前さんも氣らくにたるだよ。やつてしまひなされや！

——うるせえ！ 手前はそんな甘えことばかりいつてけつかる！——祖父は眼をむきだして、どなつた。あんな小さな身體から、こんな大きな聲がでるのが不思議であつた。

母は食卓からたちあがつて、ゆつくりと窓ぎはによつていつて、くるりとみんなの方に背をむけてしまつた。ふいにミハイル伯父が、ヤコフの顔にしつぺいをくらはせた。するとヤコフはウオーツとわめいて相手に組つ

いていつた。二人はハアハア息をきらせながら床の上をころがりまはり、なほも悪態を浴びせあつてゐた。

子供たちが泣きだした。身重のナタリヤ伯母が氣狂ひのやうに叫びだした。私の母が彼女を両手にだきかかへて、どこかにつれだしていつた。あば大面の元氣のいい乳母のエヴゲニヤが子供たちを臺所から追ひだした。腰掛がころんだ。「ツイガノツク」と呼ばれてゐる若い、頭巾な身重つきの徒弟がミハイを伯父の背中馬のりになつてゐた。黒眼鏡をかけて、鬚鬚をはやしてゐる、禿頭の職人のグリゴリイ・イワノウイチが、おちつきはらつて、手拭で伯父の両手をしばつた。

伯父は首をのぼして、まばらな黒い鬚鬚で床をこすりおそろしいしがれごゑをたてた。祖父は卓のまはりをかけまわりながら、悲痛な金切聲をあげた。

「それでも兄弟かよ、うむ？ 血を分けた仲かよ！ えい、こいつらめ！」

私は喧嘩がはじまるとさうさうに、びつくりして燻燻の上に這ひあがり、そこから、恐ろしさのあまり息をこらして、祖母が銅の手鉢の水で、ヤコフ伯父の怪我をした顔の血をあらつてやつてゐるさまを眺めてゐた。伯

父はボロボロ涙をこぼして、地だんだふんでゐた、が祖母はおさへつけられたやうな陰氣な聲でいつた。

「馬鹿どもめ、家ぢうまるで隙のよりあつまりみないぢやないか。たまには正氣になつてみるがいいだ！」

祖父は、ずたずたにひきさかれたシャツをむりに肩にひつかけて叫んだ。

「何をこきやがる。すべた女め、こんなけたものばか、生みならべておきやがつて！」

ヤコフ伯父が去ると、祖母は隅っこにひっこんで、人の心をゆりうごかすやうな深刻な調子で祈りをあげた。

「ああ、聖母さま、どうかわしの子供らを人間の本性に立ちかへらせておくんなさりませ！」

祖父は彼女のわきに突立つて、何もかもひつくりかへり、中のものがこぼれて、眼もあてられぬ惨状を呈してゐる食卓をながめながら、しづかにいつた。

「おつ母や、お前あいつらによく氣をつけてるよ、でねえとあいつらはワルワラをひでえ目にあはせるかもしれないねえからな。まつたく、ろくなことはありやしねえ……」

「大丈夫だよ、神さまがついてござるだよ！ さあ

シャツをぬぎなさいよ、わしが縫つてあげるだ……

そして祖母は、両手で彼の頭をだきかかへて、額に接吻してやつた。祖母とならぶと一まはり小柄な祖父は、祖母の肩に顔をおしつけてゆくのであつた。

「どうもなア、分けてやらなきやなるめえな、おつ母や……」

「そりやさうですともな、お父つあん、分けてやらなくちや……」

二人はながいこと話しあつてゐた。はじめのうちはとでも仲よく話してゐたが、そのうちに祖父は、職合ひをするまへの雌鷄みたいに、しきりに床を足でこすりはじめた、そして指をたてて祖母を威嚇しながら、大きな聲で文句をならべた。

「おれにやちやんとわかかつてゐるぞ、きさまはあいつらの肩をもつてやがるだ！ だがな、ミシカの野郎はエズイットだし、ヤシカの野郎はフリーメーションだ。見てろ、あいつらはおれの財産をすつかり飲んぢまひ、すつからかんにしちまひやがるぢやうからな……」

燻燻の上で寝かべりする拍子にへまをやつて、私はアイロンをおつこととした。そいつは燻燻にあがる梯子に

父はボロボロ涙をこぼして、地だんだふんでゐた、が祖母はおさへつけられたやうな陰氣な聲でいつた。

「馬鹿どもめ、家ぢうまるで隙のよりあつまりみないぢやないか。たまには正氣になつてみるがいいだ！」

祖父は、ずたずたにひきさかれたシャツをむりに肩にひつかけて叫んだ。

「何をこきやがる。すべた女め、こんなけたものばか、生みならべておきやがつて！」

ヤコフ伯父が去ると、祖母は隅っこにひっこんで、人の心をゆりうごかすやうな深刻な調子で祈りをあげた。

「ああ、聖母さま、どうかわしの子供らを人間の本性に立ちかへらせておくんなさりませ！」

祖父は彼女のわきに突立つて、何もかもひつくりかへり、中のものがこぼれて、眼もあてられぬ惨状を呈してゐる食卓をながめながら、しづかにいつた。

「おつ母や、お前あいつらによく氣をつけてるよ、でねえとあいつらはワルワラをひでえ目にあはせるかもしれないねえからな。まつたく、ろくなことはありやしねえ……」

「大丈夫だよ、神さまがついてござるだよ！ さあ

ぶつかつて大きな音をたてながら、洗ひ流しの水を入れたたらひのなかへバチヤンととびこんだ。祖父は梯子をかけたあがつてきて、私をひつぱりおろし、まるで初めて見るとでもいつたやうな眼つきで、しげしげと私の顔に見入つた。

「だれがきさまを燻燻の上へなんかのつけただ？」

「おつ母アか？」

「おらア、ひとりでのぼつただよ。」

「うそつけ。」

「ううん、ほんとだよ。おらア、びつくりしちまつただもん。」

彼は掌で私の額をかるくたたいて、私を追ひだした。

「親父そつくりぢやねえか！ さあ、あつちへいけ……」

私はよろこんで臺所から逃げだした。

私は、祖父が、抜けめのない、眼光のするどい緑色の眼で、たえず私を見まもつてゐるのを、よく知つてゐた。私は彼がこわかつた。私は人をいらいらさせるやうなその眼ざしからいつも逃れよう、逃れようとしてゐたのを

忘れない。祖父は實につむぢの曲つた人間のやうに思へた。彼はだれにむかつて、相手を嘲弄するやうな調子で話し、わざとみんなを怒らせようとかかつてゐるやうに見えた。

「えい、こいつらめ！」これが彼の口ぐせであつた。「こいつらめ！」とながく引けるこの言葉をきくと、いつも私は背すぢがそつとし、憂鬱になつてしまふのであつた。

休み時とか、晩のお茶のときには、祖父や伯父や職人たちが、くたくたにつかれて工場から寮所にやつできたみんな手が白癩でそまつたり、明眸で焼けたらしてゐて髪は証でゆはへてある。みんな、聖所の隅にある煤けた聖像をつくりだ。——さういふ危険なときに、祖父はよく私のまへにきて坐つた、そして他の孫たちを相手にせず私とばかり話をして、彼らにわざと嫉妬の念をおこさせるのであつた。彼は身體ぜんたいがよく均整がとれてゐて、きちんとしてをり、きびきびしてゐた。組の縁をとつた繩子の、窮屈なチョッキは、もう古くなつて、すつかりすりきれてをり、更紗のシャツは破くちやで、ズボンに膝のところに入れいれしく大きな補布があたつて

と！」と——訊いたりすると、彼女はびつくりして、あたりを見まはし、私をたしなめた。

「そんなこと訊くもんぢやないよ、いけないんだよただ私のいふとほりに言へばいいんだよ。さあ、「天にまします……」ねえ、どうしたの？」

私は心が安らかでなかつた。なぜ訊いてはいけないんだらう？「ヤーク ジェ」といふ言葉が急に秘密な意味をもつてきた、そして私はわざとその言葉をいろいろにひねくりまはして見た。

「ヤーク ジェ（ヤークこそ）、ヤーク ジェ（私は皮をかぶつてゐる）……」

けれど、大分衰弱してゐるらしい、顔色のわるい伯母は、たえずとぎれがちな聲で辛抱づくくなほしてくれ

た。
「さうぢやないよ、ただ「ヤーク ジェ」つていふの、さあ言つてごらん……」

しかし、さういふ伯母自身も、また彼女の言ふこともちつとも簡單ではなかつた。それが私をひどくいらいらさせ、祈禱をおぼえる、邪魔をした。

ある日祖父が訊いた。

「あつた。それでゐながらやはり彼は、胸當のついたワイシャツをきて、ちやんとした上衣をきて、絹の襟巻なぞをまいてゐる息子たちよりも、小ざつぱりとして、きれいな身なりをしてゐるやうに思へた。」

ここへきてから五六月たつと、祖父は私に祈禱をならはせることにした。ほかの子供たちは私よりも大きいので、みんなもうウスペンスキイ教會の助祭のところへいつて讀み書きを教はつてゐた。その教會の黄金色の圓屋根が家の窓から見えてゐた。

いつもおどおどしてゐる、ものしづかなナタリヤ伯母が私の先生になつた。彼女は子供つばい顔つきをしてゐて、その透きとほつた眼を見ると、そこから頭のなかにあるものがすつかり見とほせるやうな氣がした。

私はその彼女の眼を、眼ばたきもせず、いつまでもじつと眺めてゐるのが好きであつた。彼女はまぶしさを眼をほそめ、首をまはして、そつと、まるでささやくやうにいつた。

「さあ、たのむからな、言つてごらん。「天にましますわれらの父よ……」」

そこでもし私が、「ヤーク ジェ（如くに）」つて何のこ

「おい、アレクセイ、今日は何をしたんぢやな？」

また悪戯をしたんぢやらう！ 額の瘤をみれば、ちやんとわかるわ。瘤をこさへるのは、わけのねえこつたからな！ それはさうと、「われらの父よ」はおぼえたかな？ 伯母がひくい聲でいつた。

「この子は、ものおぼえが悪くつて。」

祖父は鼻のさきでフアンとわらひ、諸毛の眉を愉快さうにつりあげた。

「よし、そんなら一つ、管をくらはせてくんなくちや！」

そしてまた私に訊いた。

「親父はお前をぶんなぐつたかい？」

私は彼がなんのことを言つてるのかわからなかつたので、だまつてゐた。すると母がいつた。

「いいえ、マクシムは打ちやしなかつたよ、私にも打つちやいけないつて言つてました。」

「ふーん、それはまたなぜぢやな？」

「打つたつて、よくなりやしなかつて言つてたんです。」

「あいつは、どこからどこまで馬鹿な野郎だつてな

ある日祖父が訊いた。

あのマクシムの野郎はよ。いまは死んぢまつたから、何もいはねえが。——祖父は腹立たしげに、づけづけいつた。

私はその言葉に腹をたてた。祖父はすぐにそれを見てとつた。

——お前、何だつてそんなに口をとがらせてゐるんぢやい？ 見ろ、その顔……

そして、銀髪のままじつた諸毛の頭髪をなであげて、言ひ足した。

——おれはな、この土曜日にサーシカの野郎を、指貫ゆびぬきのことで、びしびしやつてくれるんだ。

——びしびしやるつて、どりすることなの？ ——私は訊いてみた。

みんながどつと笑つた。すると祖父がいつた。

——まあ待つてろ、見ればわかるわ……
私は心のうちで想像してみた。びしびしやるつてのは染めによこした着物をびりびり引き裂くことであらうし、管をくらはせるつてことは打つことと同じことなのだらう、と。みんな馬や犬や猫はよく打つし、アストラハンでは巡査がベルシヤ人を打つてゐた——それは私も

見たことがある。けれどこんなに小さい子供たちをやたらに打つのは、いままで見ることがなかつた。もつともここでは、伯父たちが自分の子供の額や後頭をびしやりびしやりなくつても、子供たちはそのなぐられた箇所をただなでしておくだけで、平氣なかほをしてゐた。私は再三子供たちに訊いてみた。

——痛いだろう？
すると彼らはいつも元氣よく答へた。

——ううん、ちつとも痛くなんかねえや！

大さわざをした指貫の一件は私も知つてゐた。毎晩、お茶をのんでから夜食になるまでのあひだ、伯父や職人たちは、染めあがつた布片を縫ひあはせて一本の「反物」のやうにして、それに厚紙の札をつける仕事をした。半盲のグリゴリーをからかつてやらうと思つて、ミハイル伯父は九つになる甥のサーシヤに、職人の指貫を蠟燭の火でやいておけといひつけた。サーシヤは蠟燭のしん蝕で指貫をつかんで、まつ赤になるほど焼いて、そつとグリゴリーの手もとにおいて、燧燭のかけにかくれた。ところが折あしく、ちやうどそのとき祖父が入つてきて、仕事場にむかひ、自分でその焼けた指貫をとつてはめたの

であつた。

騒ぎをききつけて私が蔵所にとんできたときに、祖父は火傷をした指で耳をつかんで、をかした恰好をして飛びはねながら、わめいてゐた。

——だれの仕業だ、うむ、罰あたりどもめが？

ミハイル伯父は卓の上にかがみこんで、その指貫を指でこづきまはして、フーフー吹いてゐた。職人はどこふく風かといつた顔で踊ふことをつづけてゐた。彼の大きな禿頭のうへで影がをどつてゐた。ヤコフ伯父もかけつけてきたが、燧燭のすみにかくれて、くすくす笑つてゐた。祖母がおろし金で生の馬鈴薯をおろしてゐた。

——こりや、ヤコフんとこのサーシヤがやつたこんだよ。——とつぜんミハイル伯父がいつた。

——嘘つけ。——ヤコフが燧燭のかけからをどりだしてきて、どなつた。

すると、どこか隅つこの方で、彼の伴が泣き聲をあけて、わめきだした。

——父ちゃん、嘘だぜ。伯父ちゃんがおれにやれつていつただ！

二人の伯父がまた罵り合ひをはじめた。祖父は急にし

づかになつてしまひ、火傷をした指に馬鈴薯のおろしたのをぬりつけて、だまつて私をつれて出ていつた。

みんなは、ミハイル伯父がわるいといつてゐた。だから私はお茶のときに、ごく正直な氣持で彼が管で打たれるだらうか、どうだらう？ と訊ねてみた。

——そりや、打たれなきやなるめえな。——祖父がよこ眼でじろりと私をながめて、つぶやいた。

ミハイル伯父がドンと卓をたたいて、私の母にどなりつけた。

——おい、ワルワーラ、手前の餓鬼をだまらせる。でねえと、こいつの首をひねつてくれるぞ！

母がいつた。

——やつてみなよ、ちよつとでもこの子に手をふれたら……

すると、みんながびつたり黙つてしまつた。彼女はよくかういふ短い言葉を、なんだかかう相手に叩きつけるやうにして、それでもつて相手をつきのけ、相手をだまらせてしまふ術を心得てゐた。

みんなが母をおそれてゐることは、私にもよくわかつてゐた。祖父までが、母にたいしては、他の者とはまる

でちがつた、しづかな口のきき方をした。それが私にはうれしかった。私は他の子供たちのまへでそれを大いに自慢した。

——おれの母ちゃん、一番強いんだぞ！

彼らも反対はしなかった。

けれど、土曜日におこつたことは、この母にたいする私の氣持をいつべんにくじいてしまった。

.....

土曜日までに、私もまた過失を犯してしまつたのだ。大人たちが巧みに布片を染めかへてゆくのが、私にはとても面白かつた。黄いろい布片をもつてきて、黒い水につけると、それは濃い青色になる、つまり「紺」に染まるのだ。また灰色の布片を赤い水にいとると、薄赤い色、つまり「退紅色」になる。これは非常に簡単なのだが、どうも私にはよく納得できなかつた。

私は自分で何かそめてみたくなつた。そこで、ヤコフの伴のサーシャに話してみた。サーシャは眞面目な子だいつも大人みたいな容子をしてゐて、だれにたいしても愛想がよく、またどんな場合にでも相手に奉仕を惜しまないのであつた。大人たちは、彼がよくいふことをきく

利口な子だといつてはめてゐるな、けれど、祖父だけはサーシャを横眼でいらんで、言ふのであつた。

——ふん、おべんちやら野郎が！

剪せて色のくろい、蟹みたいに眼のとびでたサーシャは、まるで言葉にむせるやうな調子で、せかせかと、しかし低い聲でしゃべつた。そして、しゃべりながら、まるで腹があつたらどこかへ逃げかくれようとでもするやうに、たえずそつとあたりを見まはしてゐた。彼の褐色の瞳は、ふだんはじつと動かないのであるが、興奮すると白眼といつしよにヒクヒクふるへたのであつた。

私は彼がきらひであつた。それよりも、ミハイルの伴のサーシャの方が、あまり人眼につかないのらくら者だつたけれど、ずつと好きになれた。このサーシャの方は、ものしづかな子で、いつも悲しきやうな眼つきをして、人のよささうな微笑をうかべてゐて、柔和な母親にそつくりでもつた。彼はとてもきたない歯をしてゐた。口を閉ぢても歯が口の外につきでてをり、しかも上顎の方は二列になつて生へてゐるのだ。彼はそれをひどく氣にしていつも口のなかに指をつつこんでは、歯をゆすぶり、どろかして後列の方の歯を前にひきださうと苦心してゐる

あるのを知ると、彼は私に戸棚からお客用の白い卓布をもちだしてきて、青くそめることをすすめた。

——白いものが一番よく染まるんだぞ、おらあよく知つてる！——彼は眞面目くさつていつた。

私はおもい卓布をひつぱりだして、それをもつて中庭にかけた。けれど、その端を「藍」の桶につつこんだときに、どこからかツイガノックがとびだしてきて、私の手から卓布をひつぱり、兩手でそれをしぼつて、玄關わきで私のすることを見まもつてゐたサーシャに大聲で叫んだ。

——早く、早く、お祖母さんを呼んできなよ！

そして、黒い、もじやもじやの頭を不吉らしくふりたてて、私にいつた。

——さあ、こんなことしたら、お前もひでえ目にあふぜ！

祖母はかけつけてきて、驚きのあまり、口から出まかせにをかしたことをいつて私を罵りながら泣きだしたほどであつた。

——チョツ、このろくでなしの、おつちよこちよいめ！性のつくほど、ひつぱたいてくんなきや！

のであつた。彼は、望む者には誰にでも平氣でその齒にさはらせた。だが私には、それが彼のうちで一番興味をひかれるものだつたのだ。人がぎつしりつまつてゐるこの家のなかで、彼だけはひとりぼつちで暮してゐた。彼は好んで、うすぐらい隅つこや、夜は窓ぎはに坐つてゐた。黙つてゐるのが、彼には氣もちがよかつたのだ。窓にびつたりとすり寄つて坐り、赤い夕焼窓に、ウスペンスキー寺院の黄金色の圓屋根をめぐつて、黒い鳩のむれが飛びかつてゐるのを、いつまでもじつと黙つて眺めてゐるのが好きだつたのだ。鳩のむれは、高くまひ上るかと思ふと、ずつと低くまひおりてき、ふいにまつ黒な網をはつたやうに空いちめんをおほつてしまふかと思ふと、こんどはたちまちどこかへ飛びさつてしまつて、あとにはただがらんとした大空がのこつてゐるだけ……そんな風景をながめてゐると、なんにも口をききたくなくなり、氣もちのいい哀愁が胸いつぱいにみちてくるのである。

さて、ヤコフ伯父の伴のサーシャは、私がお話をするとき、まるで大人のやうな口ぶりで、いろんなことを、自信ありげに語つた。私が染物職人の眞似をしたがつて

それからツイガノックを説きふせにかかった。

「いいかい、ワニーヤ、お前、お祖父さんにしやべつちやいけないよ！ わしも、このことはかくしてゐるからね。黙つてりや、きつと何とかすむんだよ……」

ワニカは、いろんな色にそまつた前掛で、ぬれた手をふきながら、心配さうにいつた。

「おらが何で言ふもんかい！ おらあ、しやべりやしねえ。ただ氣をつけてゐなせえよ、サーシャの野郎が告げ口しなきやいいだが！」

「あの子には、わしが二番銅貨でもやつて、口どめをしておくよ。——祖母はさういつて、私をつれて家に入つた。」

土曜日の晩禱がはじまるまへに、だれかが私を墓所に連れていつた。そこは暗くて、しづかであつた。玄關の扉も、部屋部屋の扉もびつたりととざされ、窓の外には秋の夜の灰色の闇がたちこめ、雨の音がしてゐたのをおぼえてゐる。燐燐のまつくろな焚口のまへの大きな腰掛に、いつもとはまるで人ちがひしたやうなツイガノックがむつとした顔をして坐つてをり、祖父は部屋のすみの盥のそばに立つて、水につけてある長い木の枝をよりだ

し一本一本重ねて長さをはかつてみたり、ビュービューと空中でふりまはしてみたりしてゐた。祖母は、どこか暗がり突立つて大きな音をたてて喫煙草をかきながら、ぶつぶついつてゐた。

「人を痛い目にあはせて……なにが嬉しいんだらうね……」

ヤコフの伴のサーシャが、墓所のまんなかの腰掛に坐つて、両手の拳で眼をこすりながら、まるで彼の聲とは思はれない、なんだか年とつた乞食みたいな聲で、おどおどと言つた。

「勘忍しておくんなよ、後生だから……」

ミハイル伯父の子供たち、兄妹二人が、腰掛のむかふに、肩と肩をおしつけあつて、木偶のやうに突立つてゐた。

「管を食らつたら、許してやる。——祖父が、水にぬれた長い木の枝をギューツとしごきながらいつた。」

「さあ、ズボンをぬげ……」

彼はおちつきはらつて言つた。彼の聲のひびきも、ギシギシときしむ腰掛の上で少年がもじもじやつてゐる音も、祖母の足すりの音も、何一つとしてこのうす暗い墓

所の、低い煤けた天井の下にこもつた静寂をやぶるものはなかつた。そのときの静けさは、いつまでも私の記憶にのこつてゐた。

サーシャは立ちあがつて、ズボンのボタンをはずして膝までずりおろし、それを両手でささへて、かがみこんで、つまづきながら腰掛の方に歩いていつた。そのありさまは、見てゐて何ともいへない嫌な氣持がした。私も足ががくがくふるへてきた。

しかし、彼がおとなしくうつむいて腰掛のうへに伏しワニカがその胸の下と首とを大きな手拭で腰掛にしぼりつけて、自分は足もとの方にまはつて、サーシャの上にかがみこんで、まつ黒な手で彼の踵をおさへつけたとき

には、いよいよ正視してはゐられなくなつた。

「アレクセイ！——祖父が呼んだ。——もつとこつちへこい！……こいつて言ふのがわからねえのか？……」

さあ、よく見てろ、これから答でひつばたくんちやから……いいか、それ、一つ！……

腕を少しふりあげて、彼は管で裸の肉體をびしりと打つた。サーシャは悲鳴をあげた。

「嘘つけ。——祖父がいつた。——こんなことちや

まだ痛くねえわ！ それちや、こんどはもつと痛くしてやるぞ！

そして、皮膚のうへにたちまち火を吹くやうに、まつ赤な筋がうきあがつてくるほど、つよく打つた。サーシャはヒーヒーと長くのぼして呻いた。

「氣持のいいもんちやねえだろ？——祖父は、ちやんと同じ速度で手をふりあげ、ふりおろしながら、訊ねた。——こんなことは、好きちやねえだろ？ これもみんな指貫の罰だぞ！」

彼が手をふりあげるときには、私の胸のなかでもすべてのものがそれといつしよに上にもちあがり、彼の手がふりおろされると、まるで私の全身もいつしよに下の方へおちてゆくやうであつた。

サーシャはおそろしく細い、あはれつばい聲で呻くやうにいつた。

「もう、やりません……そのかはり、おらあ、卓布のことを言ふだ……あの、卓布のことを……」

祖父は、まるで聖書の詩篇でもよむやうに、おちつきはらつていつた。

「告げ口をしたつて、許しやしねえだぞ！ 告げ口

なんかするやつこそ、先にひつばたいてくんなくつちや。さあ、こんどは卓布の罰だ!

祖母が私のそばにかけよつて、私の両手をつかんで、叫びだした。

アレクセイには、そんなことさせないよ! させるもんかいな、悪黨め!

彼女は片方の足でドンドン扉を蹴つて、母をよんだ。

——ワリーヤ! ワルワラー!……

祖父は彼女にとびかかつていつて、いきなり突きころがし、私をひつつかんで、腰掛の方につれていつた。私は彼の腕のなかでばたばたあばれ、絨毛の頸鬚をひきむしり、彼の指にかみついた。彼は大膽をあげてわめき、私をぎうぎうしめつけて、たうとう腰掛の上に放りだし私の顔に怪我をさせた。私はそのときの祖父の野獸のやうな叫び聲を忘れない。

——しばらくつけれ! 殺しちゃつてくれるわ!……

そのとき母が、まっ蒼な顔に、眼を大きく見ひらいてゐたのもおぼえてゐる。母は腰掛のそばにかけより、しわがれた聲で哀願した。

——お父つあん、そんなことしなくつてもいいでせ

う! ……かへしておくんよ!……

祖父は気がとほくなるまで私を咎うつた、そして私は数日のあひだ、窓が一つあるだけの小さな部屋の大きな寝臺の上に、火のやうにほてる身體を曝びにして、寝こんでゐた。その部屋の隅つこの、聖像がたくさん飾つてある聖籠のまへには、一日ちうお燈明があかあかとついでゐた。

この數日は、私の生涯にとつて、非常に大きな意義をもつた數日であつた。そのあひだに、私はたしかに非常な成長をし、何か特別なものを感じとつたらしかつた。その日以來私のうちには、人人にたいする安心のならぬ警戒心が生れ、そして、私の心臓はまるで皮をはぎとられでもしたやうに、自分の、または他人の、あらゆる侮辱や苦痛にたいして、堪へられないほど敏感になつてきたのであつた。

何よりもまづ第一に私の心を打つたのは、祖母と母との争ひであつた。この狭くらしい部屋のなかで、黒つばい感じのする大柄の祖母は、母にくつてかかり、隅つこの聖像の方にぐいぐいと母をおしこくつていつて、しわ

がれ聲でささやいた。

——お前、どうしてこの子をひつたくつちまはなかつただい、え?

——わたしはびつくりしちまつて、手が出なかつたんです。

——そんな元氣な顔してゐるくな! 恥しくねえかい、ワルワラー! わしはね、もう婆さんだけえど、なあに、ちつともびくつきやしないだよ! お前は少しわが身を恥ぢるがいいだ!……

——放つといちやうだい、おつ母さん、わたしやもうつくづくだよ、そんなこと……

——いいや、お前はこの子がかあいくないんだね、この孤兒が可哀想ぢやないんだね!

母は大きな聲で、吐きだすやうにいつた。

——この私の方が、一生涯孤兒みたいなもんですからね!

それから二人の女は、隅つこの長持の上に腰をおろして、ながいこと泣いてゐた。やがて母がいつた。

——もしアレクセイつてものがなかつたら、わたしやもうとつづくにここを出て、どこかへいつちまつてます

よ! こんな地獄みたいな家には、とても暮していけない、とても駄目なの、おつ母さん! わたしや、もうへどへどとなつちまつて……

——そんなことを言はないでおくれよ、お前はわしの血、わしの心の臓も同じもんだでな——祖母がつぶやいた。

私は、母もつよくはないのだ、みんなと同じやうに彼女も祖父をおそれゐるのだ、といふことをさとつた。もうとてもいつしよには暮してゆけないと言つてゐるこの家から、彼女が逃げだすのを邪魔してゐるのは私なのだ。このことは大へん悲しいことであつた。しかし間もなく、母は本當に家から姿をけした。どこかへ出ていつてしまつたのだ。

とつぜん、まるで天井からとびおりてもきたやうに祖父があらはれて、寝臺に腰かけ、氷のやうに冷い手で私の頭をなでた。

——どうだな、坊主……なんとか返辭をしろよ、さう怒らないでさ! うむ、どうしたい?……

私は彼を蹴とほしてやりたくてたまらなかつた、けれど少しでも身體をうごかすと痛かつた。祖父は髪の手が

まへよりもいつそう緒くなつたやうに思はれた。彼はたへず不安さうに頭をゆすぶり、眼をらんらんと光らせて壁の上に何かをさなしもとめてゐた。ポケットから山羊の形をした蜜入菓子や、角笛の形をした砂糖菓子や、林檎や、青い乾葡萄を一房とりだして、それをみんな私の鼻さきの枕の上にならべた。

— そうら見る、お前におみやげをもつてきてやつたぞ！

かがみこんで、私の頬に接吻し、それから小さな、かたい手で、そつと私の頭をなでながら言ひはじめた。その手は黄いろくそまつてゐて、鳥のやうに曲つた爪のところは、とくに色があざやかだつた。

— おれはあゝのとき、お前を少しひどくやりすぎたな坊主。おれもカートツとしちまつてたでな、何しろお前がおれの腕にかみついたり、ひつかいたりしたんぢやものおれだつて怒つちまふわさ！ しかしな、お前がそれをおぼしたのはいえらかつたぞ、そいつはちやんとおぼえといてやるわ！ いいか、親身の者がなぐるのは、せりや侮辱ぢやねえ、教訓なんぢや！ 他人にや負けてぢやないけねえが、家の者同士ならかまひやしねえだ！ お前

たもんぢや。荷船は水の上をゆくし、おれは陸をいくんだ、とがつた石の上でも、砂地でも、はだして歩いていく、しかもお天道さまがのぼるとから、夜まつ暗になるまでさ！ お天道さまがじりじりとぼんのくぼを灼きつけ、頭はまるで火にかけた薬籠みたいにがらが煮えたりぎつてゐる。かうしてお前、さんざんに追ひ使はれて、骨がみしむしいふほど疲れてくる、ゆけどもゆけども道なんかありやしねえ、眼には汗がながれこんでくる、おれあ心のうちで泣いてたさ、喉をポロポロながしてよ。チヨツ！ アレクセイ、黙つて聞いてろよ！……さうして、どんどん歩いてゆくうちに、曳綱が肩からはずれてぼつたり倒れて、鼻つ面を地面にぶつける。それでも、とても嬉しいんぢや。さうやるとなんだか身軀ぢやうの力が、いつべんにどこかへふつとんぢまふやうな気がするだ。一休みしたい、一息つきたい！ おれはそんな風にして、神さまのまへでよ、慈悲ぶかいイエス・キリストさまの眼のまへでよ、暮してきたもんぢや！……さうしておれは、ヴォルガを三度より下りしたよ。シンピルスクからレイピンスクまでと、サラトフからここままでと、アストラハンからマカリエフの市場までと。この道の

は、このおれがなぐられたことなんかねえと思つてるぢやらうが、どうしてどうして、アレクセイ、おれはな、お前なんか夢にも見る事ができねえほど、ひどく泣かれてきたもんぢやぜ。神さまがごらんになつたら、涙をながしてくださるにちげえねえや。それほどひどく、おれはぶんなぐられたもんだ。さうして、どうなつたかつていふと、女乞食の粹に生れて、ちぎりに孤兒になつたまつたおれが、いまちやここまで漕ぎあげてきただ。職人組合の長老になつて、人の頭に立つやうになつたもんぢや。

均整のとれた、かさかさした身體で私の上にのしかかつて、祖父は自分の子供時代のことを語りはじめた——
— 重たい、しつかりした言葉を、次から次へと軽く巧みにつなぎあはせながら。

彼の緑色の眼はきらきらと燃え、金色の髪が愉快さうに逆立つた。もちまへの甲高い聲を大きくして、彼は私の顔に眞正面から息をふきかけた。

— ほら、お前は汽船にのつてきたらう。お前が蒸氣ではこぼれてきたとこな、あそこをおれあ子供の時分に自分の手で荷船を曳いてヴォルガの流れを遡つていつ

りは何千露里かになるぜ！ 四年目には、おれはもう水汲人夫になつてゐた。そして主人に忠勤をはげんでゐたんぢやよ！……

彼はまるで翼が去來するやうに眼まぐるしく話をすすめた。かさかさした小柄の老人が、私の眼にはいつか、お伽噺のなかの力無双の巨人のやうに見えてきた。彼はたつた一人で灰色の大きな荷船をびつばつて、河をさかのぼつてゆくのだ……

ときどき彼は寝臺からとびおりて、両手をふりまはして、曳船人夫が曳綱をひつばつてゆく恰好や、水を汲みだす身ぶりをしてみせた。低聲で、何か唄をうたつてきかせた。それからまた若い者のやうに身がるに寝臺にとびのつて、まへよりいつそう太い、しつかりした聲で、いろいろ珍らしい話をつづけてゆくのであつた。

— そのかはりな、アレクセイ、船が波止場について休みにたると、夏の晩なぞはよくジグリー邊のどこか青草の丘の下にみんな集つて、焚火をして、粥を煮たりするんぢや。人夫の一人が、心にしみるやうな悲しい歌をうたひだす、すると次から次へとそれに加はつていつて、やがてみんな歌ひだす。そんなときには、背筋

にゾーツと寒気がするやうな気がし、ヴォルガの流れが身にはやくなるやうに思はれる。さあ何と言つたらいいかな、雲までとどくやうな本きな馬にまたがつて、ヴォルガ河がいきなり驅けだしたやうな工合ぢや！ ありとあらゆる悲しみが、埃のやうにとびちつてしまふ。みんなは夢中になつて歌つてゐて、ときどき粥が煮えこぼれるのも知らないでゐる。そんなときには、粥を煮る香にあたつたやつが、杓子で粥をゴツンとぶたれるのぢや、送ぶときや勝手に遊んでいいが、自分の仕事を忘れちゃいけないつてわけぢや。

いく度か人が扉をあけて、彼をむかへにきた。けれどそのたびに私はせがんだ。

—— いかないでよオ！

彼は苦笑して、迎へにき老人たちに手をふつて、かへらせた。

—— 待つてくれ、あつちで……

彼は暗くなるまで話をしてくれた。そしてやさしく私にさよならをいつて出ていつたときに、私は祖父がけつして悪い人間ではないし、恐い人間でもないといふことを知つた。この祖父が私をあんなにひどくせつかんした

ことを思ひだすのは、私には涙のであるほど辛いことであつた、けれどさうかといつて、それを忘れることも私にはできなかった。

祖父の訪問は、家ぢうのものみんなに、ひろく門戸を開放したやうなものであつた。それから毎日、朝から晩までだれかが、枕もとにきて坐つては、いろんなことをして、私をなぐさめようとした。しかしそれはいつも愉快な、楽しいことばかりだつたとはいへないが。だれよりも一番よくきたのは祖母だ。彼女は私のそばに寝姿をならべて寝たこともあつた。だがその数日のあひだに、私にいちばんあざやかな印象をのこしたのは、ツイガノックである。四角ばつた幅ひろな身體で、縮れ毛の大きな頭をしてゐる彼は、よく日暮れがたに姿をあらはした。金ピカの絹のルバーシカを着、ビロードのズボンと、手風琴のやうにキューキューなる長靴をはいて、すつかりよそゆきの仕度をしてゐた。髪はてらてら光り、太い眉毛の下に蟹のやうにとびでてゐる快活さうな眼もきらきら輝き、若者らしい黒い口髭の下に白い歯が見えるルバーシカは一日ぢう黴いてゐる明るいお燈明の火をやはらかに反射して燃えるやうに光つてゐた。

—— ほら、見なよ。—— 彼は袖をまくりあげて、肘までまつ赤に傷痕のついた腕をむきだしにして見せながらいつた。—— えらく腫れちまつたもんだ！ もつとひどかつたんだけど、ずるぶんなほつたんだぜ！

—— お前わかつてたかい、お祖父さんがな、カーツとなつたとき、こりやお前がぶたれるなとわかつたもんだから、おれあすくにこの手をつきだして、かばつてやつたんだぜ。この腕をたたいたら骨が折れる、お祖父さんが別のをとりにいく、そのあひだにお祖母さんかおつ母さんがお前をさらつて逃げちまふ、といふ風にくらんだんだ！ ところがよ、骨が折れねえぢやねえか、よく水につかつて、しなしなしてけつかるんで！ しかしそれでもな、お前は大分たすかつたぜ。さうでなきや、どんなにひどかつたか、お前わかるかい？ おれあなア、兄弟、これでなかなかずるいんだぜ！……

彼は腫れあがつた腕をもういちどつくづく眺めて、人のいい、やさしい微笑をうかべた、そして笑ひながらまた言つた。

—— おれあ本當にお前がかあいさうでな、まるで咽喉をしめつけられるやうな気がしたぜ！ ひでえやな！

あの人は、ピシリピシリなぐるんだものな……

馬のやうにブルル……と鼻をならし、頭をふりたてながら、彼は祖父のことを何やかやと話した。するとたちまち子供みたいに單純になつて、私に近しいものになつてきた。

私は彼が大へん好きだといつた。すると彼はいかにも單純な調子で答へた。

—— おれだつても、お前がとても好きさ。こんな痛い目にあつたのも、お前が好きだつたからさ！ 他のものなら、おれあこんなことするもんか！ お前だから、平氣なんだだけ……

それから彼は、ときどき扉の方をうかがひながら、そつと私に教へてくれた。

—— こんどまた骨でぶたれるやうなことがあつたら、そんなときには、いいかい、あんまり身體をかたくしないでやうにしたよ、わかつたかい？ 身體をかたくしていると、倍も痛いんだから、身體をらくにして、やわらかくしておくんだ、つまり、ぐにやぐにやにしておくんだな。それから、意地をはつて我慢してゐちやいけないぜ、なんでもいいから、あつたけの膝をだして、ワアワア

泣いちゃふんだ。それがいちばんいいんだ、よくおぼえときなよ！

私は訊いてみた。

——また管でぶたれることがあるの？

——そりやあるともさ。——ツイガノツクが平然として答へた。——むろん、あるよ。ときどきやられるぜ

……

——なんのために

——そいつあ、お祖父さんが探しだしてくれらア……

そしてまた気がかりさうに教へてくれた。

もしお祖父さんがただ上から打ちおろすだけなら、つまりただ管をふりあげて、それをふりおろすだけなら、身体をくくりにしておいて、大人しくそれを受けてればいいんだが、もし皮をひきさかうと思つて、打ちおろした管を手もとに引かうとするやうだつたら、そんなときには、お前もその管といつしよに自分の身体をそつちへもつてゆくやうにするだ、わかつかない？ さうすりや、ずつとらくだよ！

暗い色をした斜視の眼をバチバチやつて、彼は言ひ足した。

——おれあ、このことかけちや、どんな署長さまよりもよく知つてるんだ。なあ兄弟、おれの皮でなら、手袋だつて纏へるぜ！

彼の元氣な顔を見てみると、私は祖母が話してくれたイワン王子や、馬鹿のイワメシカの話などをおもひだした。

三

快くなつてから私は、ツイガノツクがこの家で特別な地位を占めてゐることを知つた。祖父は、彼にむかつては、息子たちにほどがみがみと、やかましくどなりつけはしなかつた。ある日彼のゐないところで、祖父は眼を細めて、首をふりふり、彼のことをこんな風に言つた。

——あの野郎は實にいい腕をもつてやがる、畜生め！ 嘘ぢやねえ、まあ見てゐろ、大した職人になるからな！ 二人の伯父もツイガノツクにたいしては下手にでて、叮嚀にしてゐた。そして職人のドリゴリイにするやうな「悪戯」は、けつしてしなかつた。實際伯父たちは、ドリゴリイにたいしては、ほとんど毎晩のやうに、たちの

わるい悪戯をたくらんでゐた。たとへば、鉄の柄をやりておいたり、彼の腰掛の蒲團のなかに釘の先を上にして入れておいたり、あるひはまた、半圓の彼にいろんな色の布片をあてがつて、彼が知らずにそれを繕ひあはせて「反物」にしてしまつて、祖父にひどく叱られたりするやうなことばかりしてゐた。

ある日、彼が晝飯のあと、臺所の板敷床の上でねてゐるときに、その顔を唐紅でそめてしまつたので、それから後ながいこと、彼は滑稽な、おそろしい形相をして歩きまはつてゐた。灰色の頬髭のなかから、二つの丸い眼鏡の玉がぼんやりとのぞき、舌のやうに赤黒い、長い鼻が悲しげにたれさがつてゐるのであつた。

伯父たちのかういふ思ひつきは、全くつきるところがなかつた、けれど職人はいつも黙つて耐えしのび、ただそつと溜息をつくだけであつた。だから、アイロンや、鉄や、火箸や、指貫に手をふれるまへには、いつも指にべつとりと唾をつけるのであつた。それがいつのまにか彼のくせになつてしまつて、食事のときでさへ、ナイフやフォークをとるまへには指に唾をつけては、子供たちに大笑ひをされた。熱かつたときには、その大きな顔に

波のやうに皺がより、それが妙な工合に顔の方にすべつていつて、眉をつりあげ、それから禿げた頭の天邊の方に消えてゆくのであつた。

この伯父たちの悪戯にたいして、祖父がどんな態度をとつたかはおぼえてゐない、けれど祖母は拳固をふりあげては彼らをおどかし、どなりつけたものであつた。

——なんでいふ恥しらずの、悪戯どもだ！

だが、伯父たちは、ツイガノツクのことも、かげでは腹立たしげに、嘲弄するやうな調子で悪口をいひ、彼の仕事をけなし、泥棒とか、意け者とか罵つてゐた。

私は祖母にそのわけを訊いてみた。

祖母はいつものやうに快く、よくわかるやうに説明してくれた。

——いいかね、二人ともめいめいに自分の工場をもつやうになつたら、ワーニニシカにきてもらひたくつて仕様がないんだよ、だからお互ひに相手のまへでは、彼を褒みそに言つて、あれはろくでなしの職人だとけなしつけたりするんだよ。そんなことはみんな嘘さ、さういつてごまかさうとしるだよ。ところが、その二人がまたいつしよになつて恐れてゐることは、ワーニニシカが自

分たちの方へこないで、お祖父さんのところに留まつてやしないかつてことさ。お祖父さんは、何しろ片意地な人だからね、自分でももう一つ工場をこさへて、ワーニシカといつしよにやつてゆかうとするかもしれないだよ。さうなる、お祖父さんたちには工合がわるいこととなるわけだがね、お前わかるかい？

祖母はかすかに笑ひをうかべた。
「みんなするいことばかりしてゐるんだよ、神さまに笑はれるわな！」ところが、お祖父さんはまたお祖父さんで、そのたくらみをちやんと見ぬいぢまつてゐて、わざとヤコフとミハイルとを焦らしてゐるだよ。「おれはな、イワンの野郎に、兵役免状を買つてやるだ、おれが兵隊にとられねえやうにな。なんしろあいつは、おれにや一番大切な人間だからな！」なんて言つてさ。二人の伯父さんたちはぶんぶんしてゐる。二人とも、そんなことはしてやりたくねえからさ、お金が惜しいものな兵役免状といへば、とてもたかいかもんだからね。

私はまた汽船のときと同じやうに、祖母といつしよに寝起きすることになつた。毎晩眠るまへに彼女は私にお伽噺や、お伽噺に似た自分の身の上話をしてくれた

とても口では言ひつくせないほどのひどい貧乏があるんだよ！それに、まだ嫁いかない娘は子供を生んぢやいけない、それは恥しいことだとされてゐるからね。お祖父さんはワーニシカを警察へとどけようといつただが、わしが止めただよ。わしらが自分の子にして育てようといつてな。これは神さまがわしに、死んだ子供のかはりにくたされたものだと思つてね。なんしろ、わしは十八人も子供を生んだもんさ、みんな生きてたら、町がいつぱいになつちまふわ、十八軒も家を建ててやらなきやならないものわ！わしは十四の歳にお嫁にきて、十五の歳にはもう子供ができてたんだよ。だけど、神さまはわしの血がお好きだつたとみえてな、次から次へとわしの子供を天へお召しになつたもんだ。わしは切なかつたけえど、考へてみれば嬉しいことも嬉しかつたさ！
下着一つで寝臺の端にこしかけて、黒い髪の毛をすつかりふりほどき、ばらばらにみだしてゐる大柄の祖母はちやうど、つひこのごろ鬚むじやの森の百姓がセルガツチからつれてきた靴熊につくりであつた。雪のやうに白い、きれいな胸に十字を切つて、彼女は襟をたてずにそつと笑ひ、ブルツと身ぶるひをする。

だが家の毎日の暮しのことについては、たとへば財産の分配とか、祖父が自分のために新しい家を買つたとかといふやうな話は、彼女はニヤニヤ笑ひながら、まるで他處のことのやうに話した。まるでその當の家の主婦が話してゐるのではなく、どこか近所の人が話してゐるやうな口ぶりだ。

私は祖母の口から、ツイガノックが棄兒であつたことを聞いた。早春のある雨の夜に、家の門のわきのベンチの上に捨てられてゐたのであつた。

前掛にきりきりくるんで寝せてあつたよ。——祖母は考へ考へ、ひそひそと話した。——もう泣聲もでなくなつてね、すつかり凍えちまつてゐたつけ。

「どうして子供を捨てたりするの？」

「お母さんにお乳が出なくなつてな、育ていけなくなつたからよ。さういふお母さんは、近ごろ子供が生れて、死んだやうな家をさがして、そこへもつていつて自分の子供をおいてくるんだよ。」

しばらく口をつぐんで、顔を掻いてから、祖母はまた天井をながめて溜息をつきながら、話しつづけた。

「みんな貧乏のせいだよ、アレクセイ。世の中には

——いい子をみんなお召しになつて、わるい子ばかりわしの手もとに残してくたされたもんだ。だからわしは、イワンをさづかつたのが、とても嬉しかつたんだよ。

何しろわしは、お前たちみたいなお孫がとても好きだよな！さうして、それを拾ひあげて、洗禮をうけさせた。どんだん大きくなつていつたよ。わしははじめ甲蟲と呼んでたんだよ、まるで甲蟲みたいにジージーつて變な聲をだして、居間なんかを這ひまはつてゐるんだものな。お前もあの人は仲よくしなよ、さつぱりした氣持のいい人だからね。

私もこの「ツイガノック」のイワンが大好きであつた。そして口もきけないほどの驚嘆の眼で彼を見てゐたものだ。

土曜日ごとに祖父は、その一週間のあひだにやつた悪戯の罰として子供たちを管うつた、さうしてから、晩御飯にでかけていつた。祖父がなくなるまで、筆紙につくせない面白い遊びがはじまるのであつた。ツイガノックが燻燻のかげから黒い油蟲をつかまへてきて、すばやく糸で曳綱をこしらへ、紙を切つて楕をこしらへてつけてやる。きれいにけづつた黄いろい卓の上を

小さな黒馬どもが籠をひつばつてゆく。それを小さな木片で指圖してやりながら、イワンは夢中になつて金切聲をあげる。

——僧正さまとこへ行くんだぞオ！
油蝋の背中に小さな紙片をはりつけて、籠からはなしでやり、説明する。

——みんなが袋を忘れていつちまつたんで、坊主がそれをかっついて、馳けだしていくところでござあい！
油蝋の足を糸でしばつてやる、するとそいつは頭をふりたてて這ひまはる。それを見てワニカは手をたたいて大さわぎをする。

——寺男が酔つぱらつて酒場から夜の勤行おつとらにいくとこだア！

彼はまた二十日鼠を見せてくれた。その鼠どもは、彼のいふとほりになつて、後肢で立つて、長い尻尾をひきずつて、ガラス玉のやうに黒い、キョトキョトした眼を奇妙にばちつかせながら歩きまはるのであつた。彼はその二十鼠をとつても大切にしてみて、ふところに入れてつれあるき、口うつしに砂糖をたべさせたり、やさしく接吻して、話しかけたりした。

——鼠つてやつは、かあいい、利口な生き物でな、うちの大将も大好きなんだよ。だから鼠を飼つてるのを、お祖父さんは大眼に見てくれてゐるんだぜ……

彼はカルタや鏡の用品もうちまかつた。子供たちに負けないぐらゐ大さわぎをして、まるで子供とちつともちがはなかつた。あるとき、子供たちが彼とカルタをやつて何度もつづけさまに彼を負かした、すると彼はすつかりしよげてしまひ、むつと口をふくらませてカルタを放りだしてしまつた。あとになつて、彼は鼻をこすりながら、私に不平をこぼした。

——あいつらがインチキをやつたのを、おれはちやんと知つてるんだ。あいつらは眼くばせをしちや、卓の下でこつそり札をやりとりしてたんだけ。そんなやり方つてあるもんか！ インチキをやらせりや、おれだつていくらも上手にやつてみせるけどさ……

彼は十九だつたから、私たち四人の歳を合せたよりも大きかつたわけだ。

彼の姿がとくにあざやかに印象にのこつてゐるのは、お祭の晩であつた。祖父とミハイル伯父とは他家へお客にいってゐた。臺所には、縮れ毛をもじやもじやにした

——さあて、いよいよおはじめにたるかな！

縮れ毛をゆすぶつて、彼はギターの座の上にかがみこんで、鷲鳥のやうに首をのぼした。彼のまんまるい、屈托のなささうな顔が、だんだんに眠さうになつてきて、生き生きとした、一刻もじつとしてゐない眼が油のやうにどろりとした體につつまれる、そしてしづかに弦をかきながら、何か心をかきたて、思はず人を立ちあがらせるやうな曲をひきだすのであつた。

彼の音楽は緊張した静寂を要求した。それは流れのはやい小川のやうに、どこか遠くの方から馳けてきて、床や壁にしみとほつていつた、そして人の心をゆすぶり、なにかわけのわからない、もの悲しい、不安な氣持をかきたてた。その音楽をきいてゐると、自分をはじめとして、そこにゐる人たちみんなが可哀相になつてきた。大人も子供みたいに見えてきた。みんな黙つて、ふかい物思ひにしづんで、じつとうごかずに坐つてゐた。

とくに一生懸命になつて聞いてゐたのは、ミハイルの悴のサーシャであつた。彼はヤコフ伯父の方に全身をのりだして、ポカンと口をあけてギターをのぞきこんでゐた。その口からは涎がたれてゐる。ときどき彼はあんま

ヤコフ伯父がギターをもつてあらはれた。祖母がお茶をいれ、ザクスカや緑色の壺に入つたウオトカをふんだんに出した。その壺の底にはガラスで巧みに赤い花が細工してあつた。晴着をきたツイガノツクが獨樂のやうにまはりながら入つてきた。職人のグリゴリイも、黒眼鏡をひからせながら、蟹の横這ひのやうな恰好でそつと入つてきた。乳母のエヴゲニヤもゐたが、この女はあばた面の緒ら顔で、酒樽みたいにふとつてゐて、絞るさうな眼つきをしてをり、ラツパのやうな聲をたてた。ときどきこの一座には、ウスベンスキイ寺院の毛むくじやらの寺男や、かますか鱈魚に似た陰氣くさい、すべらつこい感じのする人人が加はつた。

みんなは苦しさにフーフーいひながら、たらふく飲んだり、食つたりした。子供たちもいろんな贈り物をもらひ、あまい果實酒を一杯づつ注いでもらつた。さうして、だんだんに、とても烈しい、けれど何だか奇妙な、らんちき騒ぎがもちあがつてゆく。

ヤコフ伯父は一所懸命になつてギターの調子を合せてゐたが、調子が合ふと、いつもきまつて同じことを言ふのであつた。

り夢中になつて、腰かけからすべりおちたのも知らないでゐることさへあつた。そんなときには、彼は両手を床につつばつて身をささへ、凝固したやうな眼をまんましく見ひらいて、そのまま床の上に坐つてゐるのである。

みんなもすつかりそれに魅せられて、まるで凝固したやうになつてゐる。ただサモサーンだけが、しづかに歌をうたつてゐる。けれどそれはギターの騒り泣きを聞く邪魔にはならない。二つの小さな四角の窓が、秋の夜の闇にむかつて口をひらいてゐる。ときをりだれかがそつとその窓をたたく。卓の上には、二本の脂燭の黄いろい炎がゆらめいてゐる。槍の穂先のやうにとがった炎……

ヤコフ伯父はますます夢中になつて弾きつづけた。彼は齒をくひしぼつて深い眠りにおちてゐるやうであつた。ただ手だけが別の生きもののやうに動いてゐるのだ。右手の曲げた指は、ちやうど小鳥どもが枝から枝にとびかひ、ぶつかりあふやうに、暗い色をした管部の弦の上でひつきりなしにをどつてをり、左手の指は眼にとまらぬ速さで頸部を駆けめぐつた。

一杯ひつかけると、彼はほとんどいつも、あまり聞き

よくない際で、鼻唄をうたひだすのであつた。それはどこまでいつてもきりのない唄だ。

ヤコフが犬になつたなら
朝から晩まで吠えるだろ

ああ、つまらない

ああ、切ない!

尼さん町を歩いてく

鴉が扉にとまつてる

ああ、つまらない、つまらない

こほろぎコロコロ鳴いてゐる

そはそはしてゐる油蝋

ああ、つまらない、つまらない

乞食が靴下ほしてゐた

一人は靴下盗つてきた

ああ、つまらない

ああ、切ない!

私はこの唄が我慢できなかつた。だから伯父がこの乞食の唄をうたひだすと、私はこらへきれなくなつてワア

ツと泣きだしてしまふのであつた。

ツイガノツクも、みんなと同じやうに、一所懸命に音楽をきいてゐた。まつ黒な髪の中の指をつつこんで、じつと隅つこの方を見つめ、鼻をぐすぐすいはせながら、そしてときをり彼はふいに、悲痛な聲をあげて叫んだ。

「チェツ、畜生、おれがもつといい際をしてたらなあ、うんと歌ひまくるんだがなあ!

祖母がためいきを吐きながら、いふ。

「ヤコフ、いまにお前の心臓が破けちまひやしないかい! それより、ワニカ、お前をどつたらどうだい……」

彼らはいつも必ず祖母のたのみをすぐにくいといふわけではなかつたが、大抵のときは、弾き手がふいに掌で弦をつかんでおさへつけ、それから何か眼に見えない、音もしないものを床の上に力まかせに投げすてようとでもするやうに、拳をにぎつてふりまはし、元氣よく叫ぶのであつた。

「悲しみや尋常なんて、どこかへとんでいつちまへ! ワニカ、さあ、やれ!

ツイガノツクは黄いろいルバーシカの皺をびんとのばして、まるで釘のうへを歩くやうに用心ぶかい足どりで、臺所の中央に進みでる。淺くろい頬を紅潮させ、どきまぎしたやうな微笑をうかべて、たのんだ。

「なんでもいいから、速いやつをたのむぜ、ヤコフ・ワシリイッチ!

ギターが物狂はしく鳴りだした。靴の踵がこきざみに床をならした。卓の上や戸棚のなかで食器がカタカタ音をたてた。ツイガノツクは臺所のまんなかで、炎のやうにをどり狂つた。翼のやうに両手をひろげて、眼にもとまらぬ早さで足をふみかへながら、蒼のやうに宙に舞ひあがつた。かと思ふとふいにワツと叫んで、床にうづくまり、あたりいちめんルバーシカの絹のかがやきを撒きちらしながら、黄色い燕のやうにとびまはつた。絹は燃えあがり、溶けてゆくやうに、ゆらめき、流れた。

ツイガノツクは疲れも知らず、我をわすれてをどつてゐた。もし勝手に扉をあけてやつたら、後はそのまま走りながら通りに出てゆき、町をとほり、はては何處ともしれずに行つてしまふであらうと思はれた。

「横に切れ! ヤコフ伯父が足ぶみをしながら叫

んだ。
 をして、つんざくやうな口笛をふいて、忌忌しさうに
 駄洒落の唄をどなつた。

えい、わらちを惜しんだばつかりに
 おやぢは今ぢやこの苦勞!

食卓についてゐた人たちも、じつとしてゐられなくなつた。彼らもときどき、まるで身體に火がついたやうに頓狂な聲をあげた。鬚むじやの職人のグリゴリイは、自分の禿頭をビチャビチャたいて、口のなかで何かぶつぶついつてゐた。あるとき、彼は私にもたれかかつて、やはらかい頬鬚で私の肩をつつんで、まるで大人に話すやうに、私の耳もとでささやいた。

「なア、アレクセイ・マクシムイチ、お前のお父つあんがゐればいいんだがなア。あの人ゐれば、みんなの氣持がまるでかはつちまふだ! いつもニコニコしてゐて、あたりのいい人だつけない。お前はおぼえてゐるかい?」

「ううん。」

「まあ、うんと笑つとくれ、笑ふのは身體のためにいいでな! それぢや、ヤコフ、音楽をたのむよ!

伯父はさつと身をひき、身體をのばして、眼をつぶりゆつくりと覗きだした。ツイガノツクはちよつとの間、じつと立つて待つてゐたが、やがてバット踊りだして、踏み踊りをしながら祖母のまはりをはねまはつた。祖母はそれにつれられて、まるで宙をゆくやうに音もなく床の上をすべりあるいた——兩手をひろげ、肩をつりあげて暗い色の眼でどこか遠くの方をながめながら。私にはその容子が滑稽にみえたので、クスクス笑ひだした。すると職人がいかめしい顔をして指をたてて私をおどかした。他の大人たちもみんな、こわい眼つきをして私の方を眺めてゐた。

「もういいぜ、イワン!——職人がニヤリと笑つて言つた。ツイガノツクはおとなしく、いふことをきいてわきにとびのき、しきひに腰をおろした。すると、乳母のエツゲニヤが咽喉をまるめて、ひくいけれど氣持のいい聲で歌ひだした。

一週間をまるまる六日

「さうかな? よくなア、あの人は、お祖母さんと踊つたもんだつて……ああ、さうだ、ちよつと待ちなよ!

彼は立ちあがつた。背がたかくていかにも疲れたやうな容子をしてゐるのが、聖像をつくりであつた。祖母のまへにいつてお辭儀をして、人なみはづれて太い聲で彼女にたのんだ。

「アクリナ・イワノヴナ、お願ひですから、一度をどつておくんすつて! むかしよくマクシム・サフワテイツチと踊つたやうにね。氣ばらしに一つ、ぜひ、どうか!

「まあ、グリゴリイ・イワヌイチ、お前さん、何をとんでもないことを言ひだすだね?——祖母はかるく笑ひながら、ちよつと身をすくめて、いつた。——わしはもう踊れやしないよ! みんなのお笑ひ草にたはるばかりでさ……」

だが、みんながたのみはじめたので、祖母はふいに若若しく立ちあがり、スカートをなほし、しやんと身體をのばし、重さうな首をまつすぐに立てた。そして臺所ちうをあるきまはつて、甲高い聲でいつた。

娘はレースを編んでゐた

それですつかり疲れはて

生きてゐるとは名ばかりよ。

祖母はをどらなかつた。何か物語をしてゐるやうな容子であつた。彼女は物思ひにしづみ、首をふりふり、しづかに足をはこんで、小手をかざしてあたりを見まはすその大きな身體が、たへずあやふやに揺れ、足は用心ぶかく道をさぐつてゐる。ふと何かにおどろいて、立ちどまり顔をビクツとうごかして、眉をしかめる。が次の瞬間には、その顔に善良さうな、愛想のいい微笑がかがやいてくる。サツとわきにのいて、だれかに道をゆづり、だれかの手をひいてつれてゆく。頭をたれて、息をこらし、一心に耳をかたむけてゐる。顔の微笑はますます慈しさうになつてくる。——と、ふいに、彼女はその場からバットとびたち、旋風のやうにまはりだした。彼女は急に背がたかくなり、身體の恰好も美しくなつた。もう彼女からは眼をはなすことができないくらだ。すばらしく若がへつた。この瞬間の祖母は、それほど美しくかあいらしかつた。

乳母のエツゲニヤが、ラツバのやうな聲でうなりだした。

日曜にや、晝から夜半まで踊つたよ

往來で、一番しまひまで踊つたよ

あーあ、日曜がもつと澤山あればいい!

踊りをはると、祖母はサモワールのそばの自分の席にきて坐つた。みんながほめた。すると彼女は髪をなほしながらいつた。

——もうたくさんだよ、みなさん! お前さんたちは本當の踊りつてもを見たことがないんだね。わしらのバラフナ村にね、一人の娘つ子がゐたんだがね、もう名前も何もわすれちまつたが、その娘の踊りを見てゐるつていふとね、みんな嬉しくて、嬉しくて、涙がホロホロでてきたもんだよ! まつたく、その娘を見ると、だれだつて、休みの日よりほかにや何も要らないつて氣になつたもんだよ。わしはその娘が羨しくつてね……馬鹿だつたもんだ!

——歌唄ひと踊り手、これがこの世で第一等の人間で

すおしやべりになるだけであつた、そしてほとんどもうひつきりなしに、私にむかつて、父のことを話しつづけるのであつた。

——太つ腹の人だつたぜ、お前、あのマクシム・サフワテイツチつて人はよ……

祖母が相繩をうちながら、溜息をついた。

——ああ、キリストさま……

何もかもがおそろしく面白かつた。すべてのものが私を緊張にひきずりこんでいつた。すべてのものから、なにかある靜かな、つきることのない悲しみの情がわきおこり、人の心にしみこんできた。この悲しみも、この喜びも、ともに人の心のなかに住んでゐるのだ。その二つのものは、眼にもとまらぬ早さで交るがはるにあらはれてくるので、ほとんど區別がつかかぬ。

あるとき、ヤコフ伯父が、そのときにはまだ餘り酔つてはゐなかつたのに、いきなり自分のルバシカをひきやぶり、縮れ毛の髪や、うすい白つぼい口髭や、唇の上までたれさがつた鼻なぞを、がむしやらにかきむしりはじめたことがあつた。

——いつたい、これや何だ? うむ、何だ? ——彼は

すさ! ——乳母のエツゲニヤがきつぱりと言つた、そしてダビテ王のことかたにかを歌ひはじめた。ヤコフ伯父が、ツイガノックを抱いて、いつた。

——お前をひとつ酒場で踊らせてみてえもんだな。さうしたら、お前はきつとみんなを氣狂ひにしちまふぜ! ……

——おれはいい咽喉がほしいんだよ! ——ツイガノックが歎じた。——おれは醜さへよきやな、千年間ばかり歌ひまくつてさ、それからあとは修道院へ入つちまつたつて何だつてかまひやしねえんだ!

みんながウオトカをのんだ。こゝにたくさん飲んだのはグリゴイであつた。次から次へと彼のコップに注いでやりながら、祖母は注意した。

——氣をつけたよ、グリゴイ、すつかり眼が見えなくなつちまふぞい!

——彼は強情に答へた。

——かまひやしねえ、放つといておくん! ——おらにやもう眼なんて用はねえだ、おらあもう何もかも見えてきたから……

彼はいくらのんでも酔つばらはなかつた、ただますます

涙をポロポロながしながら、わめいた。——なんのために、こんなことしるんだ。

自分で自分の頬べたや、鎖や、胸をビシャビシャたたいて、オイオイ泣いた。

——うすのろやくざ野郎め、こんなポロポロの魂をひきずつてけつかつて!

グリゴイが大聲でどなつた。

——あーあ! それ、それ、そのぞまだ! ……

やはり酒が入つていささか御機嫌になつてゐた祖母は、伯父の手をつかんで、なだめた。

——もういいよ、ヤーシヤ、神さまが御存知だからねいまにおしへてくれるだよ!

酒がまはつてくると、彼女はますます御機嫌がよくなつた。黒つぼい色をした眼は、微笑みながら、みんなの罪ぶかい魂のうへに光をそそぎかけた。彼女はカッカとほてる顔を頭布でつつんで、歌ふやうな調子でいつた。

——神さま、神さま! なんていい氣持なんでござえませう! 神さま、ごらんせえまし、何もかも氣持がよくつて!

これは彼女の心からの叫びであり、彼女の一生の旗

るしでもあつたのだ。

いつも屈托のなさうな伯父が泣いたり、わめいたりするのを見て、私はひどくたまげてしまった。で、祖母に、なぜ伯父が、泣いたり、わめいたり、自分で自分の身體をたたいたりするのか、と訊いてみた。

お前にも、そのうちにわかるだよ。——いつになく祖母は、いやいやながらに答へた。——まあ待つてなまだまだお前はそんなことに首をつつこむのは早いだよ……

さういわれると、私はなさら好奇心をかきたてられた。私は仕事場へいつて、イワンにまことひついた。しかし、彼もやはりそれには答へたくない容子で、職人の方をよこ眼で見ながら、そつと笑つて、私を仕事場からひつぱりだして、どなりつけた。

——さあ、あつちへいつてるだ！ いふこときかないと、釜んなかへ放りこんで、染めちまふぞ！

職人は、釜を三つはめこんだ、口のひろい低いかまどのまへに立つて、長い黒い攪拌棒で、釜のなかをかきまはしてゐた、そして棒をもちあげては、そのさきから色のついた水が滴りおちるさまをながめてゐた。火はが

がん燃えてゐて、僧侶の袈裟のやうにいろんな色にそまつた皮の前掛の裾に照りかへつてゐた。釜のなかでは、

色のついた水が煮えたぎつてゐた。つんつんと鼻をつく湯気が、濃い雲のやうに、扉口の方にたなびいてをり、中庭いつばいに乾いた染料のにほひがたたよつてゐた。

職人は黒眼鏡の下から、どろんと赤くにこつた眼で私を見つめてゐたが、やがて狂暴な調子でイワンにいつた。

——おい、薪だ！ わかんねえのか？

ツイガノツクが薪をとりにつけてゆくと、ギリギリは白檀の俵のうへに腰をおろして、私をさしまねいた。

——こつちへこいよ！

私を膝にのせて、あたたかい、やわらかい頬で私の頬べたを突つきながら、いつまでも忘れられないやうな調子で語つた。

——お前の伯父貴はな、女房を死ぬほどぶんなぐつたんだぜ、ひでえ眼にあはせたもんだ。それで、いまちや良心に責められてるだ。お前わかるかな？ お前はなにもかもちやんと頭にいれておかなくちやいけねえぜ、い

いかい、でねえとお前も駄目な人間になつちまふからな！

ギリゴリイといつしよにゐるときは祖母といつしよにゐるときと同じやうに、らかな氣持であられた。ただ少し洩氣味がわるいだけだ。といふのは、あの黒眼鏡の底から、彼は何もかもを見とほしてゐるやうな氣がしたからだ。

——どんな風にしてぶんなぐつたのか、つていふと、つまりこんな風なんだ。——彼はゆつくりとしやべつた。——女房といつしよに寝てゐる、とふいに女房の頭から蒲團をおつかぶせて、ギューギューしめつけ、ぶんなぐるんだ。なぜそんなことをするのか、つていふのかい？ そりや、なぐつてゐる當人にだつても、きつと、わかりやしねえんだ。

一抱への薪をもつてかへつてきたイワンの方には眼もくれず、火のまへにしやがみこんで、手をあたためながら、職人は囁んでふくめるやうに言ひつづけた。

——きつとな、女房の方が自分より偉かつたんで、それが嫉ましくつて、あの人はぶんなぐつたもんだらうよなあ兄弟、カシーリン家の人たちはな、立派な人間を好

かねえんだ。さういふ人を、みんなで嫉んで、けつして仲間にしよとはしねえ、あべこべにやつつけてやらうとばかり考へてゐるんだ！ お前、お祖母さんに訊いてみな、なぜお前のお父つあんを、みんなであんなにいぢめたのかつて？ お祖母さんなら、何もかも話してくれらだよ、あの人は嘘いふことが嫌ひだからだ。ひよつとしたらあの人は嘘つくことを知らねえのか。まつたくあのお祖母さんは聖者みてえだな、そりや酒をのんだり煙草を喫いだりはするけどさ。仕合せな人だよ、あれは。お前も、あのお祖母さんには、しつかりくつついてるよ……

彼は私をおしのけた。私はすつかりおどろいてしまひなんだがつかかりしたやうな氣もちで中庭に出ていつた。家の支關のところツイガノツクが私に追ひついて私の首をつかんで、そつとささやいた。

——あの人をおつかながることはねえよ、ありやいい人だからな。お前こんどはあの人の眼をまつすぐに見てゐるやうにしなよ、あの人はさうするのが好きなんだ。

何もかもが奇妙で、しかも私を興奮させた。私は他の生活は知らなかつた、けれど私の父母はこんな風な暮し

方をしてゐなかつたことだけは、ぼんやりとながら覺えてゐる。父母の家庭には、もつと別な言葉が、もつと別な楽しみがあつた。二人はいつもならんで歩き、びつたりとよりそつて坐つてゐた。夜なぞ、ときどき二人で窓べに坐つて、ながいこと笑ひあつてゐたり、大きな聲で歌をうたつたりした。往來に人があつまつてきて、二人の方をながめてゐた。その人人の仰向いた顔が、私に食事をすませたあとの、汚れた服を思ひださせて、をかしかつた。ところが、この家ではめつたに笑ふことがない。たまに笑つても、何のために笑ふのかわけがわからなかつた。それに二六時中^{じゅうろくじちゆうちゆう}だれかがだれかをどなりつけたり、わめきたたり、さうかと思ふと隅っこへいつてこり、そこそささやき合つたりしてゐる。子供たちはひつそりしてゐて、ゐるんだかゝるないんだかわからなかつた。まるで雨にうたれた埃のやうに、地面にへばりついてゐるのであつた。私はこの家のなかで、自分だけが他人のやうな気がしてゐた。そしてこの生活全體が、まるで何十本もの針でつきさすやうに、私を刺戟して、鬱鬱的な気分をひきずりこみ、すべてのことを非常に緊張した注意をもつて觀察させたのであつた。

私とイワンとはだんだんに仲よしになつていつた。祖母は朝早くから夜おそくまで家の仕事にいそがしくとびまはつてゐるので、私はほとんど一日ちうツイガノックにまどひついてゐた。彼はあひかはらず、祖父が私を管うつときには、きつとその管の下に自分の腕をさしだすのであつた。そしてあくる日になると、腫れあがつた指を私に見せては、こぼした。

「こんなことをしたつて、何も意味はねえんだがな！ お前も別に苦しみが減るわけぢやねえし、おれだつてごらんのとほりだ！ おれはもうこれつきりやらねえよ、いいかい、お前！」

そのくせ、そのつぎのときにはまた、餘計な苦しみをうけるのであつた。

「お前、もうそんなことしないつて言つたぢやないか？」

「うん、しねえつもりだつたけえど、つひ手がぢもまつたのさ……なぜだか、自分でも、わかんねえだけだな……」

「まもなく私はツイガノックについて、別の新しいことを知つた、そしてそれは彼にたいする私の興味と愛情と

をいつそう強めた。

金曜日になるといつもツイガノックは、大きな機にツヤラップといふ栗毛の去勢馬をつける。これは祖母のお氣にいりの、悍のつよいじやじや馬だ。そして自分は膝までの短い半外套を着、重たい帽子をかぶり、緑色の皮帶をきつくしめて、市場へ食料の買ひだしに出かけるのであつた。いつまでたつても、なかなか歸つてこないことがよくあつた。家ぢうのものがみんな心配して、窓べによつてきて、吐く息で白くくもる窓ガラスを拭きながら、往來をながめてゐた。

「こないかい？」

「まだだよ！」

「だれよりも一番心配してゐるのは祖母であつた。」

「チョッ、しやうがないねえ！」 彼女は祖父や伯父たちにむかつて、いつた。——あんたらは、わしの人間を殺しちまふだ、馬までも殺しちまふだ！ あんたらは、恥かしくないだかね？ よくまあ、そんなしやあしやあした顔してゐられたもんだね！ 自分ものだけぢや、まだ足りねえつていふのかね？ あーあ、なんてわからずやの、懲ばりな人たちはつかりなんだらうな……」

いまに神さまの罰があたるから！

祖父が氣むづかしげになつた。

「まあ、いいさ、こんどだけおしほひぢやからなア……」

ツイガノックはときどき、お豊ごろになつてやつとかへつてくる。すると、祖父や伯父たちがいそいで中庭にかけだしていつた。そのあとから、つよい煙草のほひをふりまきながら、熊のやうな恰好で祖母も出てゆく。彼女はなぜかこの時刻には御機嫌がよくないのだ。子供たちもかけだしてゆく。そして、仔豚や鳥や魚や、その他いろいろな種類の肉片をいっぱい積みこんだ籠から、たのしい荷おろしがはじまつた。

「言つてやつたものは、みんな買つてきたか？」

祖父が鋭い眼ざしで、積荷の方を横眼ににらみながら、訊いた。

「はあ、入り用なものは、みんな買つてきました。イワムが元氣よく答へた、そして煙を吐くために、ちうをかけたまはりながら、耳を聳するばかりの大きな音をたてて両袖を打ちあはせた。

「おい、その革手袋をあんまりバタバタやるなよ、」

そいつにや金が出るとるんぢやからな。——祖父がやかましく小言をいつた。——ところで剩残はあるかい？

——ありません。

祖父はゆつくりと積荷のまはりを歩きまはつてみて、あまり大きくない聲でいつた。

——また、きさま、べらぼうにしこたま仕込んできたもんぢやねえか。また、金をはらはわえて買ひこんぞきたんぢやねえのか？ うちぢや、こんなに要りやしねえのにな。

さういつて、顔をしかめて、急ぎ足に去つていつた。

伯父たちは大よろこびで積荷のそばに馳け寄り、鳥や魚や、鷺鳥の臍物や、牛の足や、大きな肉片なぞを、手でもちあげてみて、口笛をふいたり、歡聲をあげたりした。

——うん、うまく取つてきやがつたなア！

ミハイル伯父は、ことに有頂天になつてしまつた。積荷のまはりを、バネのやうにピョンピョン跳ねとんで、啄木鳥のやうな鼻をつきだして端から臭ひをかいでまはり、甘さうに唇をビチャビチャなめし、おちつきのない眼をたへずパチパチやつてゐた。彼は父親に似てかさか

さした感じの男であつたが、父親よりは背がたくくて、一麥の黒穂みたいの色がくろかつた。凍えた手を袖のなかにかくして、彼はツイガノツクに訊いた。

——祖父はお前にいくらやつたい？

——五留よ。

——んだが、ここにや十五留がものはあるな。それで一體、お前いくらかつたんだい？

——四留と十留さ。

——と、つまり、九十哥は着服したつてわけか。見ろよ、ヤコフ、金つてもものは、ふえるもんでねえか！

ヤコフ伯父は、ルバーシカ一枚で寒風のなかに立つてまつ青な寒空を見あげながら、くすくす笑つてゐた。

——おい、ワーニカ、おらたちにも半塊づつたのむせ——彼はものうげにいつた。

——祖母が馬をほどいた。

——どうした、どうした、こらよ？ この小僧め？

ふざけてえのかい？ そんなら、ふざけなよ、さあ、さあ、好きにな！

大きな鬚をしたシャラーブは、濃いたてがみをふりながら、白い歯をむきだして祖母の肩をかみ、頭から綱

の頭布をむしりとり、嬉しさうな眼つきで彼女の顔をのぞきこんで、まつ毛の霜をふりおとしながら、しづかにいなないた。

——パンが欲しいんだね？

祖母は馬の口に、鹽のよくきいた大きなパンの皮をおしこんでやり、その口の下に袋のやうに前掛をひろげて馬が食べてゐるさまを考へぶかげに見まもつてゐた。

ツイガノツクは、仔馬のやうにふざけたがら、彼女のそばにかけよつてきた。

——どうだね、お祖母さん、いい馬ぢやねえですかいいいっは。とても利口で……

——あつちへいきな、うるさくつきまよふもんぢやないよ！——祖母は足ぶみをして、どなつた。——わしは

な、お前がこんなことをしてきたときにや、お前が大嫌ひになるつてことは知つてゐるだらうに。

彼女は私に、ツイガノツクが市場では餘り買ひ物をせず、大抵は盗んできたのだと話してきかせた。

——お祖父さんはあれに五留しかやらないんだよ、するとあれはそのうち三留だけ買ひ物をして、あと十留くらゐるのは盗んでくるんだよ。——祖母は不愉快さ

うにいつた。——泥棒が好きでな、こまつたもんだ！

いちど試しにやつてみて、うまくいつた、そして家へかへつてきたら、みんなが笑つて、うまくやつたといつてほめてくれた。そんなことを二度三度とくりかへし、うちに、盗み癖がついちまつたんだね。ところがお祖父さんの方はまた、若いころから貧乏の辛さを、職人なるほどなめてきたもんでね、年老つてからはすっかり各人坊になつちまつてさ、自分の血をかけた子供たちより、お金の方が大切だつてわけ。買ひものさへしてりや、喜んでるんだ。ところがミハイルとヤコフはまた……

彼女は手をふつて、しばらく黙つてゐたが、やがて、また開いた煙草入を見つめながら、ぶつぶつと言ひ足した。

——なア、アレクセイ、世の中のこととは、レースみたいなもんだな、しかも盲女の騙んだレースみたいなものだよ。わしには、どこから結び目をほどいていつたらいいのかわかりやしなないんだよ！ いまにな、イワンの奴め、きつと泥棒してるとこ捕まつて、死ぬほどぶんなくられるから……

そしてまたしばらく黙つてゐてから、そつと言つた。

——やれやれ！世の中にや、規則だけはうんとできてるけれど、^{ほんた}眞實の道つてものはありやしねえだよ……あくる日、私はツイガノックに、もう泥棒はしないやうにしてくれとたのんだ。

——んでねえと、お前、死ぬほどぶんなぐられるだらうつて。

——なあに、捕まるもんか、うまく逃げちまふよ。おれあ、競走馬みたい、すばしこいんだからな！——彼はニヤリと笑つていつた、がすぐにまた陰気さうに顔をしかめた。——もつとも、泥棒をすることはよくないことで、危い懸當だつてことも、おれあよく知つてるよ。ただどな、つひそんなことをやつちまふのは、退屈のせいさ。それにおれあ別に金を貯めてゐるわけぢやねえ、一週間はたつうちに前前の伯父貴どもが、何とかうまいことをいつちや、みんなおれあから働きあげていつちまふんだ。おれあ、そんなものは惜しかねえさ。ほんとによ！おれあ、これで満足してゐるんだもの。

彼はふいに私の手をつかんで、そつとゆすぶつた。

——お前は瘦つぽちで、軽いな。しかし骨組はがつしりしてゐるから、力持ちになるぞ。どうだい、ひとつお前

ギターを習ひなよ、ヤコフ伯父さんに教へてもらひな、いいかい、本當にさ。お前はまた小つちやいんだから、いますぐにやうまくならねえだらうけどな。お前は小つちやいくせに、指輪もちだなア！お祖父さんはきらひかい？

——知らねえや、そんなこと。

——ところがねればね、このカシーリンの家の人たちは、お祖母さんのほかは。みんなきらひなんだ。あの人たちを好きだなんていふ人の氣が知れねえや！

——それぢや、おれもきらひなの？

——お前はカシーリン家の者ぢやねえ、ベシヨフ家の者だ。血がちがふんだよ、別の一族なんだよ……

そしてふいに、私をきつく抱きしめて、彼はほとんど唸るやうな聲でいひはじめた。

——あーあ、おれがもう少しいい聲だつたらなア、畜生！おれは國ぢうの人をみんな夢中にさせちまふんだがなア……さあ、あつちへいつてろよ、兄弟、仕事をしなくつちや……

彼は私を床におろしてから、自分の口に小さな釘をひとつかみ頰張つて、大きな四角い板に、ぬれた黒い布地

をひきのばして張つて、うちつけるのであつた。

それからまもなく、彼は不慮の死をとげた。

その出来事はかうである。中庭の門のわきに、樫の木でできた大きな十字架が、根根によりかけて横たへてあつた。それは根もとの方が太くて、節くれだつてゐた。もうずいぶん長いことそこに横はつてゐた。私はこの家へきた當座に、それに眼をつけた。そのころはまだもつと新しく、もつと黄いろかつた。けれど秋になつてからずうつと雨にうたれつづけてゐたため、すつかりくろずんでしまつた。それはつんつんと鼻をつくやうな、腐つた木の臭ひを放つてゐた。この狭い、ごたごたした中庭では、それはたしかに餘計物であつた。

それはヤコフ伯父が、亡くなつた妻の墓に立てようとして買ったもので、その一周忌の日に自分でその十字架を墓までかづいでゆくといふ誓ひを立ててゐた。

ちや、ど冬のはじめの土曜日で、寒い風の日であつた。屋根から雪がまひおちてゐた。家ぢうのものが中庭にでゐた。祖父と祖母は三人の孫をつれて、もう一足さきに墓地へいつて、供養をしてゐた。私は何かわるいことをした罰で、家にのこされてゐたのであつた。

二人の伯父は、おそろひの黒いルバーシカを着て、十字架をもちあげ、昇り段の下に立つてゐた。グリゴリイともう一人よその人が、おもい根もとをやつとのことでもちあげ、ツイガノックの頑丈な肩にのせてやつた。ツイガノックはよろよろとよろめいて、足をふんばつた。

——大丈夫かい、おい？——グリゴリイが訊いた。

——わからねえな。なんしろ、重いことは重いんだ……

ミハイル伯父が腹だたしげにどなつた。

——門をあける、わからねえのか、馬鹿！

すると、ヤコフ伯父がいつた。

——弱音をばくなよ、ワニカ。おいらは二人ともお前よりへなへななんだからな！

だが、グリゴリイは門をあけながら、遠慮なしにイワシに忠告した。

——氣をつけてな、無理するなよ！ぢや無事でいつてこいよ！

——チョツ、禿頭の野呂馬野郎め！——ミハイル伯父が往來からどなつた。

中庭にゐたものがみんなドツと笑つた、そして十字架

が選びさらされたのがいかにも愉快だといふやうに、聲高にがやがや話した。

グリゴリイ・イワノウイチは私の手をひいて、仕事につれていつて言つた。

——きつと今日は、お祖父さんはお前を管でなぐりやしねえよ、今日はやさしい眼つきをしてるもんな……

仕事場に入ると、これから染め仕からうとする毛織物が山のやうにつんである上に私を坐らせ、叮嚀に肩までその毛織物でくるんでくれて、彼は、釜から立ちのぼる湯気をかきながら、ポツリポツリと語つた。

——おれはなア、お前、三十七年もまへからお祖父さんを知つてるんだぜ。この仕事をはじめたときのことも知つてるし、これがおしまひになるのも見るこつちやらう。おれとあの人は、はじめは仲のいい仲間同士でな、この仕事もいつしよに考へて、いつしよにはじめたもんな。ところが、お前のお祖父さんは利口な人でな、いまぢや親方になつちまつてるだ。おれはだめだけだ。しかし、神さまはおれたちのだれよりも利口だよ。神さまは、ただ笑つてゐるなさるだけだ。それでゐてちやんと、どんな馬鹿の人間のなかにも、世の中で一番賢い人とお

ひよろ長い、骨と皮ばかりのグリゴリイは、ひげむじやで、帽子をかぶつてをらず、大きな耳をびんとおつ立ててゐるので、まるで人のいい悪魔みたいだ。彼は煮えたぎつてゐる染料をかきまはしながら、いろんなことを私におしへてくれる。

——だれでもまつ正面からグツと睨んでやるんだぜ。犬がとびついてきたときだつて、さうしてやりや、犬の方が逃げてつちまふわ……

重い眼鏡が彼の鼻柱をおしつけ、鼻のさきが青く充血してゐて、まるで女の鼻みたいに見えた。

——ちよつと待てよ！——ふいに彼はさういつて、聞き耳をたてた。それからかまどの戸を足でボタンと閉めて、ピョーンピョーン中庭にとびだしていつた。私もそのあとを追つてかけた。

臺所のまんなかの床の上に、ツイガノツクが仰向けにひっくりかへつてゐた。窓からさしこむ陽光がひろい綿をなして、一つは頭と胸をてらし、一つは足をてらしてゐた。彼の額が奇妙に光つてゐる。眉がたかくつりあがり斜視の眼が黒い天井をじつとにらんでゐる。くろずんだ唇はひくひくふるへ、うす桃色の泡をふきだしてをり、

なじものがときをり顔をだすつてことを知つてなさるんだ。お前にはまだ、人が言つたり、したりしてることが何のためなのかわかりやしねえだらうが、おひおひに何もかもを知るやうにならなきやいけねえせ。親なしつ子つてものは、辛いもんだでな。お前の親父のマクシム・サフワテイツチつて人は、なかなか贈り物の玉の坐つた人だつてよ。何もかもよく心得てゐた。だもんで、お祖父さんはあの人を好かんでな、家へもよせつけなかつたもんな……

かまどのなかで赤と金の炎がをどつてゐるのや、釜のうへに乳色の蟹のやうな湯気が立ちのぼるのを眺めながら、この人のいい職人の話をきいてゐるのは氣持がよかつた。湯気は天井うらに斜にはつた板に凝つて鳩羽色の霜のやうになつた。その天井のささくれだつた隙間から青い空が紐のやうに細く見えた。風がしづかになつた。どこかで太陽がかがやきだし、庭いちめんガラスの粉をまきちらしたやうにきらめいてゐる。往來から橋の滑り木のギシギシいふ音がきこえる。家の煙突から青い煙がながれだし、そのかるい影が何がお話でもしながら雪の上をすべつてゆくやうだ。

唇の両端から頬をつたはつて、頸にかけて、血が流れてゐる。その血は床に濡れおちて、背中の下から、どろどろと流れだしてゐた。兩足も、妙な工合にびんとび、ズボンがぐつしよりぬれてゐるのが一眼でわかつた。ズボンは床板にびつたり貼りついてゐた。床は砂利できれいに磨いてあり、陽光にかがやいてゐる。血汐の流れが陽光の綿を反射し、とてもあざやかな色をみせて、しきゐるの方に流れていつてゐる。

ツイガノツクは身動きをしない。ただ、兩脇になげだされた手の指だけがピクピクふるへて、床をひつかき、染料でそまつた爪が日光にかがやいてゐた。

乳母のエツゲニヤがしやがみこんで、イワンの手にはそい蠟燭をもたせた。けれどイワンはもうそれをつかむ力がなかつたので、蠟燭はたはれて、炎が血のなかで消えた。乳母はそれを拾ひあげて、前掛の端でふいて、もういちどそのたよりない指に握らせようとした。臺所のなかに、風のざわめきのやうな、ささやきが流れた。それはまるで風のやうに、私をしきりからおしのけようとしたけれど私は扉の把手にしっかりとしがみついていた。——こいつが、つまづいたんだ。——ヤコフ、伯父が、

全身をがたがたふるはせ、首をふりたてて、しわがれた
壁でいつた。彼は全身がなんだか灰色の感じで、しわく
ちやに見え、両眼がすつかり色あせて、しきりにパチパ
チと眼ばたきをしてゐた。

「ころんで、下敷きになつて、背中をどすんとやら
れたんだ。おれたちはすばやく十字架を放りだしまつ
たからよかつたけれど、さうでなきや、おれたちまでい
つしよに不具^{かたは}なるよ。」

「お前さんたちが隠し殺したやうなもんだな。――
グリゴリイがぼんやりといった。

「そんなことあるもんか……」

「いいや、さうだ！」

血はなほも流れつづけ、しきのぎはにたまつて、くろ
ずんでなんだか盛りあがつてきたやうであつた。ツイガ
ノツクは、桃色の泡をふきながら、夢でうなされてゐる
みたいに呻きつづけ、くつたりとなつた。そしてだんだ
んに平べつたくなつていつて、床にべつたりとへばりつ
き、そのなかに消えてしまひさうに思はれた。

「ミハイルは馬で教會へ親父をむかへにいつた。
――ヤコフ伯父がつぶやいた。――そこでおれは、取者

をせきたてて、大急ぎでここへひきかへしてきただ……
おれは、自分で根もとの方をおつがなくて、よかつた
よ、でねえと、いまんころはなア……」

「乳母がまたツイガノツクの手には蠟燭をおしつけた、そ
して彼の掌に蠟と涙とをもちたつた。」

「グリゴリイが大きな聲をたてて、ぶりぶりしていつ
た。」

「そんなものは、お前、枕もとの床の上に立てとき
やいいちやねえか、馬鹿め！」

「そりやさうだね。」

「帽子もとつてやれよ！」

乳母はイワンの頭から帽子をとつてやつた。彼はゴッ
ンと鈍い音をたてて、後頭を床にぶつけた。こんどは頭
が横むきになつたので、血がまへよりもいつそうひどく
流れだした。しかもこんどは口の一方の端からだけであ
る。それはおそろしく長いことつづいた。はじめ私は、
ツイガノツクが一休みしたら、起きあがつて、床に坐り
こんで、ペツと唾を吐いて、「フウー、暑い、暑い……」

とでも言ふのだらうと思つて待つてゐた。

日曜日の晝飯のあとなど、彼は一寝入りしてから、よ

その人たちが大急ぎ入つてきた。

「外資を床にぬぎすてると、祖父は叫んだ。」

「馬鹿野郎ども！ きさまらは、あつたらいい若者
をころしちまひやがつたな！ こいつはもう五年もして
みろ、それこそ金ぢや買へねえ立派な腕前になつたぢや
ろがな……」

床になげだされた外資が邪魔になつて、イワンの姿が
見えなくなつたので、私はそこを這ひだして、祖父の足
もとにいつてうづくまつた。彼は私をつきのけ、小さな
赤い拳固をふりまはして、二人の伯父を感嘆した。

「畜生どもめ！」

そして腰掛に腰をおろすと、両手で身體をささえて、
涙もださずに張り泣きをしながら、しわがれた聲でいつ
た。

「おれあ知つてるぞ。あいつは、きさまらの眼の上
の瘤だつたんぢや……あーあ、ワーニニシカ……馬鹿
め！ これから、どうしたらいいんぢやつて言ふんだ。
乗りなれた馬もなくなつちまつたし、おまけに手綱はく
さつちまつたときどきある。なあ、おつ母ア、近ごろは神

さまもわしををかあいがつちやくんなさらねえやうだ

くそんな風にして起きあがつたものであつた。けれど今
日は、彼は起きあがらないどころか、ますますぐつたり
となつてゆく一方であつた。陽光はもう彼のところから
外れて、光の縞はずつと短くなり、窓のすぐ際におちて
ゐた。彼は全身がくろずんできて、もう指もふるへなく
なり、唇の泡もきえてしまつた。頭の天邊と、両方の耳
のわきとに、都合三本の蠟燭が立てられ、それが黄金色
の炎をゆらめかせて、ばらばらにみだれた漆黒の髪の毛
をてらしてゐた。黄色い陽光のてりかへしが、淺ぐろい
頬の上にふるへ、とがつた鼻の先と、バラ色にそまつた
齒とが光つてゐた。

「乳母はひざまづいて、おいおい泣きながら、つぶやい
た。」

「お前がかあいい子だつづけが……ほんとにたのもし
い、元氣のいい子だつづけが……」

「寒いし、それに氣味がわるかつたので、私は卓の下に
もぐりこんで、かくれてゐた。やがて、浣熊の毛皮の外
資をきた祖父が、おもしろい足どりで臺所に入つてき
た。つづいて、襟のところに尻尾がついてゐる婦人外資
をきた祖母や、ミハイル伯父や、子供たちや、その他よ

な。なあ、おつ母ア、さうぢやねえか？

祖母は床に這ひつくばつて、両手でイワンの顔や頭や胸をなでまはし、彼の眼に息をはきかけ、兩方の手をとつてもんでやつたりした、そして蠟燭をみんなころばしてしまつた。

それから彼女は大儀さうに立ちあがつた。黒づくめの着物をきて、全身まつ黒な感じのする彼女は眼をおそろしげに大きく見ひらき、ひくい聲でいつた。

みんな、あつちへいつとぐれ、ほんとにいまいまいましいつたら！

祖父をのこして、みんな墓所からでていつた。

……ツイガノツタの葬式はごく質素なものであつた。

だから、ほとんど何も記憶にのこつてゐない。

四

五月三日

私は大きな寝臺にねて、四つ折りにした重い蒲團にくるまり、祖母が床にひざまづいて、片方の手でときたまゆつくりと十字を切りながら、神さまにお祈りをささげてゐるのを聞いてゐる。

外はミシミシいふほど凍みかへつてゐる。うす緑色の月の光が、氷で結核様のついた窓ガラスをとほしてのぞきこみ、鼻のたかい人のよささうな顔と、襟の見えるやうにさらさらと光つてゐる暗い色の眼とを、はつきりと照らしだしてゐる。祖母の髪の手をつつんでゐる絹の頭布は、草頭巾のやうに光り、暗い色の着物がゆらゆらしながら、肩からたれさがつて、床の上にひろがつてゐる。

祈禱がはると、祖母はだまつて着物をぬいで、きちんとたたんで隅つこの長持にしまひ、寝臺にこつてくる。私はぐつすり眠つたふりをしてゐる。

だめだよ、狸寝入りしたつて、こいつめ、ほんとに寝てやしないんだから！ 彼女はそつといふ。

眠つちやゐないんだらう、お前、まだ？ さあ、蒲團をおくれ！

それからさきのことを考へると、私はもう微笑をおさへることができない。すると祖母が大きな聲をたてる。

ああ、それ、それ、そんなことをして、お前、このおばあさんをからかはうなんて思つて！

蒲團のはじをつかんで、彼女はうまい工合に自分の方

へひつぱり、おかげで私は外に放りだされてしまふ。そこで私は何度も寝がへりをうつては、やはりかい羽毛蒲團をバタバタたく。すると祖母は大膽をあげて笑ひだす。

——どうしたい、大根小僧？ 蚊にくはれたのかい？

だが、ときをりお祈りがとても長くなつて、私はほん

とに寝入つてしまひ、彼女が寝るのを知らないでゐることもある。

長いお祈りをするのは、いつもきまつて、晝間喧嘩白論をしたり、何か辛いことがあつたりしたあとだ。それを聞いてゐるのは、とてもおもしろかつた。祖母は家のなかでおこつたことをすつかり、こと細かに神さまに語るのである。大きな丘みたい、どつかりと床にひざまづいて、はじめは人にききとれないやうな早口でぼそぼそつぶやいてゐるが、やがてだんだんに太い、高い聲になつてゆく。

神さま、お前さまはみんながもつとらしくになりてえと思つてゐることは、よく御存じでござえませう。ミハイルは兎でござえますから、町にのこるのがあたりまへで、あれを川向ふへやるのは、あれを見くびつたり

方でござえます。あつちはまだ、だれも手をつけてゐねえ、あたらしい場所です。どうなつていくことか、さきのこととはわかりやしません。ところがお父つあんなはVコフの方を餘計かあいがつてゐるんでござえます。自分の子供をえこひいきするなんて、これはいいことぢやねえと思ひますがな。なんせえ、家のお父つあんなは、強情つぱりなぢぢいでござえますで、神さま、どうかお前さまのお力で、あの人の眼をひらいてやつておくん

さいまし。

キラキラひかる大きな眼で、くろずんだ聖像をながめながら、彼女は神さまに相談をもちかける。

神さま、お前さまのお力で、あの人にいい夢を見せて、子供たちに財産を分けてやらなくつちやいけな

つてことを、わからせてやつておくんさい！

十字を切つて、頭が床につくほどでいれいなお辭儀をする。大きな額がゴツンと床板にぶつかると、それからまたしやんと身體をおこして、神さまに喘んでふくめるやうにいふ。

——マルワラにも何か喜びをめぐんでやつておくん

なさいまし！

いつたいあの娘は、お前さまに、どんな

悪いことをしたんでござえますか？ どうして他の者より罪がふかいんでござえますか？ 若い、丈夫な女が、あけくれ泣いてくらしめてゐるなんて、これはどうしたこんでござえますか？ それから、神さま、グリゴリーのこともお忘れねえやうに。あれは眼がますます悪くなるばかりです。いまに盲んなつちまつたら、物乞ひに出かけていきます。そんなことになつたら、こりや飛んでもねえこつてす！ あれは家のお祖父さまのために、ありつたけの力をつかひはたしたのに、お祖父さんは助けてやるかどうかわがやしない……お、神さま、神さま……

彼女は頭と両手をじつと垂れて、ながいことだまつてゐる。まるで深い眠りにおちたのか、凍えてしまつたかしたやうだ。

まだ何かあつたつけかな？

彼女は肩をひそめて、口にだして考へてみる。トサべての正教徒をあはれみ、救ひたまへ。この馬鹿なわしを許しておくんないまし。お前さまはよくご存じでござえませうが、わしが罰を犯すのは、けつして悪い氣でするのでなく、みんなこの馬鹿な頭がさせるわざでござえませうか。

せえませうか。

そして、ふかい溜息をついてから、彼女はやさしく、満足さうにいふ。

神さま、お前さまは何もかもご存じです。父なる神さま、お前さまは何もかも見とほしてござるだ。

私は、こんなにも身近かにゐる祖母の神さまといふのが、大へん好きであつた。そして、よく彼女にせがんだものだ。

神さまのお話をしておくれよ！

彼女は神さまの話になると特別な話し方をした。とてもしづかに、妙な工合に言葉をひつぽつて、いつも眼をつぶり、必ず坐つて話した。話しの最中に、ちよつと立ちあがつたり、また坐つたり、巻き髪の上に頭布をひつかけたりしながら、眠りつくまではいつまでも話しつづける。

神さまはな、天國の牧場のまんなかの丘の上の、銀色の菩提樹の下に、青い寶石の玉座に坐つておいでなさるだ。この菩提樹は一年ちう花がさいてゐるんだよ。天國には冬も秋もないから、花がほむときがないのさ。さうして二六時中咲きつづけて、神さまのお氣に入

りの者たちの眼をたのしませてゐるんだよ。神さまのまはりには、たくさんのお天使が舞つてゐる、ちやうど雪が降つてゐるやうに、あるひは蜜蜂がとんでゐるやうに、それとも白い鳩がたくさん空から地上へまひおり、また空へまひあがつてゆくやうに言つた方がいいかな。その天使たちが神さまに、わしらの人間のことをみんなお話し申しあげるので、そこには、お前の天使も、わしの天使も、お祖父さまの天使もある――めいめいに天使がきまつてゐるんだよ、神さまはみんなに公平だぞ。さうして、お前の天使が神さまに、こんな風に申しあげろ――「アレクセイがお祖父さまに舌をだしました」。すると神さまが、「よしそんならお祖父さまにいつて、その子を舌でなぐらせる」つて指圖をなされる。こんな風に話して神さまは、皆なにそれぞれを報いをくださるのだよ、いいことをした人には喜びを、わるいことをした人には悲しみを。神さまのおそばは、ほんとにいいとこなんだよ、いつも天使たちがおもしろさうに舞ひおどり、神さまのために歌をうたつてゐるんだよ――「神よ、御榮あれ！ 御榮あれ！」つて。神さまはそれをニコニコ笑つて眺めておいでなされ、よしよし、ちとおつしやるん

だよ。

そして彼女は頭をふりながら、自分でも笑つてゐる。

お祖母さんはそれ見たの？

いいや、見たことはないけど、わしはよく知つてゐるんだよ！――彼女は考へぶかく答へる。

神さまや天國の天使の話をするときには、彼女は急に小さなお婆さんになつたやうに見え、その顔は若若しくなり、潤んだ眼はとくべつに溜い光をおびてくる。私はその重い帽子のやうな垂れ髪をつかんで、それを自分の首にまきつけ、身うごきもせずに、このいつまでたつても涯しのない、そしていつまで聞いてゐてもあきることのない物語を、じつと耳をすませて聞いてゐた。

人間には神さまを見ることは許されななんだよ、眼がつかふれちまふ。ただ聖者だけが、大きな眼をあいて、まともな神さまを見ることが出来るんだよ。だけれどね、天使ならわしも見たことがあるよ。心が清くすみわたつたときには、天使が姿をあらはすことがあるんだよ。なんでも、朝早く教會の禮拜式につらなつてゐたときだが、二人の天使が祭壇を歩いてゐたのさ。霧のやうにすきとほつてゐて、明るい、明るいお姿をして、床

につくほど長い、レースかモスリンのやうな冠をつけてゐた。二人は祭壇のまはりを歩きまはつて、あの年よりのイリヤ神父さまを助けてあげてゐる。神父さまが捜せさらばえた手をあげてお祈りをするときには、両方からその胸をささへてあげるといつた工合にね。あの方はもうとてもおちいさんで、眼もかすんでしまつて、何にでもよくつまづいたもんだ。それから間もなく、亡くなつちまはれたがね。わしはその天使たちを見たときには、嬉しさのあまり身體がかたくなつちまひ、心がうづき、ポロポロ涙がでてきて仕方がなかつたよ。あゝあ、ほんとにすてきだつたよ！ ねえ、アレクセイや、天国でも、この地上でも、神さまのおいでなさるところでは、何もかもがうまくいつてゐるんだよ……

「なんだつて、この家はうまくいつてないぢやないかい？」

「十字を切つて、自分を祝福してから、祖母は答へた。聖らかな聖母さまのおかげで、幸ひとうまくいつてゐるだよ、何もかもね。」

「これは私をまごつかせた。この家で、何もかもがうまくいつてゐるとは、どうも認めにくかつた。いや、あべ

こべに、この家の暮しはだんだんに悪くなつてゆく一方だと私には思はれた。

ある日私は、ミハイル伯父の部屋の扉口のまへをとりかかつて、ナタリヤ伯母が、まつ白な着物をきて片手を胸におしつけて、ひくいけれどおそろしい叫び聲をあげながら、部屋のなかをのたうちまはつてゐるのを見た。

「神さま、どうかわたしをお召しください、わたしをお連れになつてください……」

私には彼女の祈りがよくわかつた。そしてまた私にはグリゴリーがこんなことをつぶやいた氣持もよくわかつた。

「眼がみえなくなつたら、物乞ひにでるだよ、その方がましだよ……」

私は彼が早く盲になつてくれればいいと思つた。さうしたら私は、彼の手引きにしてみらつて、いつしよに物乞ひをしてあるかう。私はもう彼にそのことを話しておいた。職人はひげのなかでニヤニヤ笑ひながら答へた。

「それもいいだらうな、いつしよにいかう！ さうしたらおらあ、町のまんなかで、これが職人組合の長老

のワムリイ・カシーリンの孫でござえます、娘の予供でござえます、つて大きな聲で言ひ立ててやるわ。おもしろいぜ……」

私はナタリヤ伯母のとろんとした空ろな眼の下が青くはれあがつてゐたり、蔑い顔に唇が大きくはれあがつてゐたりするのを、いくどとなく見た。で、祖母に訊いてみた。

「伯父さんは、伯母さんをなぐるの？」

祖母は溜息をつきながら答へた。

「こつそりなぐるんだよ、あの畜生め！ お祖父さんが、なぐつちやいけないいつてゐるもんだから、夜になつてからこつそりなぐるんだよ。いけないやつだよ、あれは。それにナタリヤの方はまた氣が弱すぎるしな……」

それから祖母は急に元氣づいて語りつづける。

「それでもやつぱりな、いまはもう昔みたいはないな。いなぐり方はしなくなつたよ。齒をなぐつたり、耳をぶつたり、髪の手をつかんでちよつとひきずりまはしたりするぐらゐなもんだ。ところが昔ときたら、しよつちう拷問だつたからね。わしも一度、お祖父さんに、

復活祭の初めの日だつたつけが、お晝から晩までぶたれたことがあつたよ。なぐりつかれると、一休みして、またなぐりつづけるだよ。答も次から次へととりかへて、ありとあらゆる脅でなぐるだ。

「なぜそんなにぶたれたの？」

「さあ、もうおぼえてないね。その次にぶたれたときは、わしはまるで半殺しの目にあつて、おまけに五日五晩も何も食べさせられなかつたもんだ。そのときはもう息もたえだえだつたよ。さうでなきや、もつと……」

この話を聞いたとき、私は驚きのあまり口もきけなかつた。祖母は祖父の二倍もあるやうな大きな身體をしてゐるのだから、そんなにしろく祖父に負けるとは、どうも私には信じられなかつたのだ。

「本當にお祖父さんは、お祖母さんより強いのかい？」

「強かないけど、年上だからね！ それに、お祖父さん！ あの人があることするのにも神さまのおいひつけで、わしはまたそれを手抱してゐるやうにいひつけられてゐるんだよ……」

彼女が聖像の埃をはらつたり、その飾りをみがいたり

するのを見てゐるのは、面白くて氣もちがよかつた。聖像は後光のところへ眞珠や銀やいろんな色の寶石をちりばめた豪華なものであつた。祖母はそれを巧みな手つきでとりおろして、ニコニコしながら眺め、感動をこめていつた。

「なんて、かあいい顔をしてるこんだか！
十字を切つて、接吻をした。」

「すべてのものを助け、涙めどもつきせぬ喜びを興へたまふ聖母さま、お前さまは、すっかり煤けて、埃にまみれて、汚くなつちまひなされただね！ まあ見なよアレクセイ、なんて細がい筆づかひだらうね。小つちやな人の姿が、みんなちやんと一人一人に描いてあるぢやないかい。これが「十二使徒」つていふんだよ。このまんなかにゐるのが、一番やさしいフョードルの聖母さま。それからこれが、「母よ、墓にわれを見るときも泣くなかれ」つていふんだよ……」

ときどき私には、祖母が、ちやうど從姉のカテリーナが人形に夢中になつてゐるのと同じやうに、夢中になつて、眞面目くさつた顔をして、聖像と遊んでゐるのではないかと思はれた。

彼女はときどき悪魔を見た、大ぜいでくるのも見たし一人づつでくるのも見た。

「なんでも大齋日の夜だつたと思ふが、ルドルフの家のを通つたんだよ。乳をながしたやうな月の夜でね。するととつぜんわしは、黒い悪魔が屋根の峰に馬のりになつてゐるのを見つけただよ。煙突のそばでね、角のはえた頭を煙突の口にのつけて、マガマガ鼻をならしながら、匂ひをかいでるだ。髪をぼさぼさにした、でつかいやつだつたよ。くんくん嗅ぎながら、さらさら尻尾で屋根を掃いてるんだよ。わしはすぐに十字を切つて「神よみがへりたまひて、怪しき物を追ひはらひたまふ」つて言つてやつたんだよ。さうしたら悪魔のやつ、キヤーツて低い叫びごゑをたてて、もんどりうつて屋根から庭へすべりおち、どこかへ消えうせちまつただよ！ きつとルドルフの家ではその日、生ぐさものを煮てゐたんだね、悪魔のやつめ、それをかぎつけて、大喜びでとんできたんだらうよ。」

私は悪魔が屋根からもんどりうつてころがりおちるところを想像して、笑ひだした。すると祖母も笑つて、いつた。

悪魔つてやつはな、まるで小つちやい子供みたいに、悪魔が好きなんだよ。あるとき、わしが風呂場で洗濯をしてゐて、夜半までかかつちまつたきとがあるだ。

すると、ふいにかまどの焚口の扉がボンとあいた、さうして悪魔のやつらがとびだしてきた。とても小つちやいのが、次から次へととびだしてくる、赤いやつ、青いやつ、黒いやつ、まるで油虫みたいなんだよ。わしはすぐ扉口の方へいかうと思つたが、歩けない。悪魔どものまんなかにひきずゑられちまつた。風呂場のなかぢう悪魔でいつばいで、身うごきもできない。足の下に這ひこんでくるやつもあれば、ひつかきむしるやつもある、みんなでギウギウおさへつけるだ、十字を切ることもできやしないだ！ もじやもじや毛がはえてゐて、やはらかに、カツカツとほてつてゐて、まあ仔猫みたいなものさ。ただ後脚だけで立つてるところが違ふんだがね、ぐるぐるまはつて、悪魔をして、鼠のやうな歯をむきだしてる。眼は青くつて、角はやつと生えかけたばかりで、痛みたくにもりあがつてゐるだけ、尻尾は豚の尻尾みたいなのをくつつげてる。あーあ、神さま！ わしはそこで氣がとほくなつちまつただ！ それから氣がついたと

きには、蠟燭がもう消えさうになつてるし、桶の水は冷たくなつちまつてる、洗濯物は床に放りだしてあるつてわけさ。あーあ、畜生め、きさまらをみんなどこかへ吹つとばしてくれろぞ！ つて思つたもんさ、わしは。

眼をつぶつて私は、かまどの焚口の丸石のあひだから、もじやもじや毛の生えた、いろんな色をした小悪魔が、うちやうちや飛びだしてきて、小さな風呂場いつばいに、蠟燭をふきつけて、いたづらつ子らしい、赤い舌をペロペロだしてゐるありさまを想像してみる。これもやはりおもしろかつたが、しかしちよつと薄氣味がある。祖母は首をふりながら、しばらくだまつてゐたが、ふいにまた全身の血がかかけめぐりだしたやうである。

「それからね、既はれた人間どもを見たこともあるだよ。それもやつぱり冬の夜で、吹雪がビュービュー吹きまくつてゐたときだつて。わしはデューコーフの谷を通つてゐた。ほら、おほえーるだろ、いつか話してやつたぢやないか、ヤコフ伯父とミハイル伯父とが二人でお前のお父つあんを池の氷の割れ日につきおとさうとしたつて。あそこのことさ。どんどん歩いていつて、降りの小徑にさしかかつたときよ、いきなり谷底の方で、ピービ

一口笛をならし、ギーギーと谷ちうにひびくやうないや
な音をたてるものがあるぢやないか！ 見るつてえと、
三頭の黒馬をつけたトロイカが、わしの方にむかつて驅
けてくるんだよ。赤い頭巾をかぶつて、でぶでぶにふと
つた悪魔が棒くいのやうに突立つて馬を駆してゐる。馱
者臺に立ちあがつて、両手をひろげてゐる、その手には
皮を鎖のやうに編んだ手綱をにぎつてゐるんだよ。谷底
には橋道がないので、トロイカはまっすぐ池にむかつて
飛んせいき、雪けむりにつつまれて見えなくなつちまつ
ただ。トロイカの客席の方にのつてゐたのも、やつぱり
みんな悪魔で、口笛をふいたり、どなつたり、頭巾をふ
つたりしてゐたよ。かういつたやうなトロイカが、七つ
とんでいつただ、まるで消防の車みたいな勢ひでな。ど
のトロイカの馬も、みんな同じ黒馬ばかりだ。それは
みんな、^{ふたわ}兩親にまで呪はれたやうな極道の人間どものな
れの果よ。そいつらは、かうして悪魔の慰みものになつ
てゐるんだよ。悪魔はそいつらにトロイカをひかせては
毎晩あつちこつちと、自分たちのいろんなお祭りにでか
けていくのさ。その晩わしが見たのは、たしかに悪魔の
舞臺だつたと思ふがね……

ねえ、アレクセイ、油虫が這つてるよ。つぶして
おくれ、おねがひだから！

私は眠い眼をこすりながら、蠟燭をつけて、床を這ひ
まはり、敵をさがす。しかし、なかなか見つかかりな
いし、またいつも必ず見つかるものとはかぎらなかつ
た。

——どこにもひやしないよ。——私がさういふと、彼
女は頭から蒲團をひつかぶつて、身うごきもせず寝た
まま、まるで聞えないぐらゐの聲で、たのむのであつ
た。

——いいや、あるよ！ よく探しておくれ、たのむか
ら！ それ、そこにあるのが、わしにはちやんとわかつ
てるんだがね……

彼女の言葉にはけつして間違ひがなかつた。私は寝臺
からずつとはなれた、どこかとんでもないところで、油
虫を見つけた。

——ころしちまつたかい？ ああ、よかつた、よかつ
た！ どうも、ありがたう……

そして頭から蒲團をはねのけ、ニッコリ笑つて、ホッ
としたやうに溜息をついた。

祖母の話は、どうも信じないわけにはいかなかった。
彼女はそれほど單純に、よく納得のゆくやうに話すので
あつた。

だが彼女がとくに上手に話してくれたのは、聖母が地
上の苦しみのなかを歩きまはり、通稱「女領主」とい
はれてゐる女の強盜のエンガリイチェワに、ロシア人
に手をふれないし、ロシア人からは盗みもしない、と誓
はせた物語や、神人アレクセイの物語や、戦士のイワンの
物語や、賢女ワシリツサのお話や、山羊僧正と神の教へ
子らのお話などであつた。また恐かつた話といへば、代
官の夫人のマルファの話や、山賊の首領のウスタ婆さん
の話や、エジプトの罪人のマリヤの話や、盜賊の母の悲
しみの話などであつた。お伽噺や、傳説や、物語詩を、
祖母はかぞへきれないほどたくさん知つてゐた。

どんな人間でも、祖父でも、悪魔でも、それからどん
な魔力でも、けつしておそれない祖母が、ただ黒い油虫
だけは身の毛の上だつほどこわがつた。とんでもない速
くにゐるのさへ、すぐにそれと感づくぐらゐであつた。
よく夜中に私をおこしては、こんなことをささやくので
あつた。

もし私が油虫を見つけなかつたら、彼女はもう眠つく
ことができないのであつた。夜の死のやうな静寂のなか
で、ゴソリとでも音がすると、そのたびに彼女の身體が
びくびくふるへるのが、私にもよくわかつた、そして彼
女が息をこらして、ぼそぼそつぶやいてゐるのが聞え
た。

——ああ、しきゐのきはにゐるんだよ……それ、長持
の下に這つていつた。

——お祖母さんは、なぜそんなに油虫がおつかないん
だい？

すると彼女は、いかにも筋のとほつた答へをする。
——あいつらは何のためにこの世の中にあるんだか、
わしにやわかないんだよ。まつ黒な身體をして、ただ
ぞろぞろ這ひまはつてばかりけつかるだ。神さまはどん
なものにでも、それぞれの役目をおさづけになつたもん
だよ。たとへば、草鞋虫は家のなかを這つてゐることを
知らせるし、南京虫がでるのは壁が汚れてゐる證據だし
風がつけば人間は病氣になるし……さういふ工合にみん
な役目がわかつてるだ。ところが、この油虫ときやがつ
たら、いつたいいどんな力をもつてやがるだか、何のため

にぞろぞろ這ひだしてきやがるだか、だれにもわかりやしないぢやないか。

ある夜、祖母がひざまづいて、熱心に神さまと相談をしてゐるときに、祖父が部屋扉をおしあけて、しわがれた聲でいつた。

——おい、おつ母アや、神さまのおいでだぞ。どんどん燃えてるわい!

——どうしたい、お前さん! ——祖母は床からとび立つて、大きな聲をたてた。そして二人ともバタバタと重苦しい足音をたて、表玄関の大きな部屋の障やみのなかにとびこんでいつた。

——エッ、ゲニヤ、聖像をおろしておくれ! ——ナタリヤ子供たちに着物をさせな! ——祖母は張りのある聲で、てきばきと指圖した。祖父はひとりですつと溜息をついた。

——うーむ……

私は蕨断へかけだしていつた。中庭に向いた窓が黄金色にかがやき、床の上に黄いろい光の斑點が這ひまはつてゐた。ヤコフ伯父がはだしの足にちかに長靴をはき、

まるで足のうらに火傷でもしたやうにびよんびよん飛びはねながら、わめいた。

——こりやマイルが火をつけたんだよ、火をつけといて、逃げちまつた、畜生!

——しつ、だまつてな、馬鹿め! ——祖母がさういつて、彼を扉口の方につきとばした。ヤコフ伯父はあぶなくつんのめりさうになつた。

霜でくもつた窓ガラスをとほして、仕事場の屋根もえてゐるのが、そしてあけはなされた扉の奥で炎が渦まきかへつて燃えあがつてゐるのが、よく見えた。このしづかな夜のなかで、まつ赤な炎は煙もたてずに燃えさかつてゐた。ただずつと上の方に、わづかばかりの煙がうつすらと雲のやうにただよつてゐるが、それも銀河の銀色の流れを人の眼からさへぎるほどのものではない。雪がまつ赤に照り映え、建物の壁はがたがた身ぶるををして、その熱い中庭の片隅に突き進んでゆかるとしてゐるやうだ。そこでは炎が、仕事場の壁の大きな裂れ目をまつ赤にうづめ、そこから灼熱した曲り釘のやうな赤い舌をペロペロだして、おもしろさうに踊りくるつてゐるのであつた。かさかさした乾いた履袋のくろずんだ板を、赤

てきた。頭をふりふり、身をかがめて、鼻の入つた大きな樽を両手にかかへてきたのだ。

——お父つあん、馬衣をとつとくれよ! ——しわがれた聲で彼女は叫んだ。——脱がしておくれよ、早くさ!

燃えてるのが、わかんないのかい?……
——グリゴリイが彼女の肩から燃つてゐる馬衣をひつぱいだ。そして、身體を二重に折りまげて、シヤベルで大きな雪のかたまりをすくつては、仕事場の扉口になげこみはじめた。伯父が斧をもつて、そのそばではねまはつてゐた。祖父は祖母のまはりを馳けまはり、せつせと祖母の身體に雪をなげつけてやつた。祖母は海を雪堆のなかにうづめると、門の方にかけてだしてゆき、それをおしひらいて、かけつけてきてくれた人たちに挨拶をして、言つた。

——みなさん、物置の方を防いで、おくんすつて! 火が物置や、乾草置場の方へうつたら、わしらはもう丸焼けどころか、御近所もあぶなくなるだからね! ——屋根をぶちこわして、乾草を庭へだしておくんな! ——グリゴリイ、上から投げるんだよ、そんな風に地面にばかり投げてたらちや仕様がなぢやないか! ——これ、ヤコフ

や金のリボンでしるやうな工合に、炎がまたたくまになめていつた。そのまんまに、細い瀬戸の燵突が煙にまきこまれて、いたづらツ子らしく頭をつきだしてゐた。パチパチと物のくだける音や、シューシューと燃える音が、こつちの窓ガラスにぶつかつた。火はますます燃えさかり、仕事場はすつかりそれにのみこまれて、ちやうど教會の聖壇の帷をつくりに見えてきた。それは何もかもを自分の方におびきよせずにはおかなかつた。

頭から重い半外套をむつかぶり、足にはだれかの長靴をはいて、私はそつと玄関にでてみた。けれど、猛烈な炎の圓舞に眼をまはし、祖父やグリゴリイや伯父の叫び聲と、パチパチ木の燃える音、に耳をふさがれ、おまけに祖母の勇敢な行動にびつくりさせられて、昇り段の上で茫然と立ちすくんでしまつた。祖母は、頭を窓の袋でつつみ、馬衣にくるまつて、まつしぐらに仕事場の方にかけてゆき、火のなかにとびこんでいつて、叫んだ。

——馬鹿、馬鹿、鼻が破裂するぢやないか……
——グリゴリイ、止めろ、あいつを! ——祖父がうなづいた。——おい、あぶねえ……

だが、祖母はもう全身煙につつまれて、ひよつこり出

まごまごしてないでさ、斧をみなさんにあげなよ、それからシャベルもさ！ さあ、御近所の衆、ひとつ力を合せてやつとくんなすつて！ 神さまもお助けくださるだに。

彼女も火事と同じやうにおもしろい観物であつた。まつ黒な姿をした彼女をつかまへようと追つかけまはしてゐるやうに見える炎に、あかあかととらされた、彼女は庭ちうをかけずりまはり、いたるところに首をつつこんで、意にもかも見とどけ、みんなに指圖をしてゐた。

シャローブが中庭にかけこんできて、後肢で突立ち、手綱をとつた祖父の手をふりもぎつた。火がその大きな二つの眼をてりつけ、眼がまつ赤に光つた。馬はいなないて、前肢をつつばつた。祖父は手綱を放して、わきにとびのいて、叫んだ。

おつ母アや、おさへてくれ！

祖母は跳ねあがつてゐる馬の足もとにとびこんでゆき、両手をひろげてそのまへに突立つた。馬は不服さうにいななき、炎の方を横眼でにらんで、彼女の方に頸をのばしてきた。

狂ひまはり、炎が中庭にむかつて長い舌をのばしては、そこに集つてシャベルで雪を放りこんでゐる人人をなめようとしてゐた。火のなかでは、いくつもの釜が猛烈に沸騰し、そこから湯氣と煙がもうもうと濃い雲のやうにまきあがり、へんな匂ひが庭ちうにただよつて、人人の眼を刺戟してボロボロ涙をこぼさせた。私は昇り段の下からとびだしていつて、祖母の足もとにからみついた。

あつちへいきなよ！——祖母が叫んだ。——ふみつぶされるよ。あつちへいつてなつてば……

鶏冠のついてゐる眞鍮の帽子をかぶつた騎馬の人が、中庭にかけこんできた。あか毛の馬が口から泡をふいてゐる。馬上の人は、鞭をもつた手をたかくあげて、みんなを威嚇するやうにわめいた。

道をあける！
元氣よく、忙しげに鈴の音がした。なにもかもがお祭のやうに賑やかで、美しかった。祖母は私を昇り段の方につきとばした。

あつちへいきなつて言つてるのに、わからないのかい！
こんどはどうしても祖母のいふことをきかないわけに

——何もお前、おつかながることはねえだよ！——祖母が男のやうに太い膝でいつて、手綱をとり、馬の頸をバタバタとたたいてやつた。——わしがお前をこんなおそろしいところへ、すつばかしておくもんかい！ おお、よしよし、小鼠や……

祖母の三倍もあるこの大きな小鼠は、いふことをきいておとなしく彼女のあとについて門の方にあるいてゆき、彼女のまつ赤にほてつた顔のをぞきこんで、ブルブルと鼻をならした。

祖母のエヅゲニヤが、まるまると脂ぶくれて、めそめそ泣いてゐる子供たちを家のなかからつれだしてきて、叫んだ。

お祖父さん、アレクセイがゐるねえだよ……

もうどこかへ逃げちまつたんぢや。——祖父が手をふつて、答へた。私は、祖母につれてゆかれぬやうにと昇り段の下にかくれた。

仕事場の屋根はもう焼けおち、たるきの細い棒が煙をからませて空に突立つてゐた。その火になつたところが黄金色に輝いてゐる。建物の内部では、緑や青や赤の旋風が、がうがうバチバチ……とものすごい音をたてて

はいかなかつた。私は臺所に逃げこんで、また窓ガラスに顔をおしつけた。けれど、くろくろとした澤山の人の群にさへぎられて、もう火は見えなかつた。ただ、黒い冬帽子と縁無帽とのなかにまぢつて、眞鍮の帽子がきらきら輝いてゐるのが見えるだけであつた。

火はたちまち地面におしつけられ、消され、踏みつけられてしまつた。警官が群衆を這ひちらした。祖母が臺所に入つてきた。

だれかい？ お前かい？ まだ寝ないのかい？

おつかなかつたんだね。だけど、もうこわいことではないだよ、すつかりおしまひになつちまつたからね……

祖母は私とやらんで坐り、こまかく身體をゆすぶりながら、だまつてゐた。また静かな夜の闇がかへつてきたので、氣もちがよかつた。けれど、火もかあひさうであつた。

祖父が入つてきて、しきゐぎはに立ちどまつて訊いた。

おつ母アかい？

なんだね？

火傷しなかつたかや？

はあ、ちつとも。

彼はマッチをすつた。油煙でまっ黒に煤けた彼の山猫のやうな顔を、青い炎がてきだした。卓の上に蠟燭を見つけて、それに火をつけると、ゆつくりとこつちに歩いてきて、祖母とならんで腰をおろした。

洗つてくればいいに。祖母がいつた。さういふ彼女も、まっ黒に煤け、つんつん鼻をつくやうな煙のほひが全身にしみこんでゐた。祖父がため息をついた。

「神さまはときどきお前にお恵みをくださるだ、いい智慧をかしてくださるだ……」

そして、彼女の肩をなで、ちらりと齒を見せて、いひそへた。

——ほんのちよつとの間だつたけえど……

祖母もまたニヤツと笑つて、何かいほうとしたが、そのときにはもう祖父は睡顔をしてゐた。

グリゴリイにや時をださなきやなんねえ。これは野郎の不始末ぢやでな！ 野郎もいよいよ年貢の納めどきだ、もうおしまひぢや！ ヤーシカの野郎は昇り段のところに坐りこんで、泣いてけつかる、馬鹿な野郎だ……お前、いつて見てやれや……

は、馬鹿か、泥棒にきまつてらあ！ どうしても、さうしなくちやいけねえ。さうすりや、火事もなくなるぢやらうて！……さあ、あつちへいつて寝ろよ、なんだつてそんなところに坐りこんでるんだい？

私はそこを立ち去つた、けれどその晩はたうとう眠ることができなかつた。寢床に入るか入らないに、私はまたちまぢ、とても人間の聲とは思はれないやうな叫びごゑをききつけて、とびおきてしまつた。そしてもう一度臺所にとんでいつてみた、臺所のまんなかに、祖父がルバーシカも着ずに、手に蠟燭をもつて突立つてゐた。蠟燭がふるへてゐた。彼は一つ場所できかんに地團駄をふんで、しわがれ聲をはりあげてゐた。

——おつ母ア、ヤコフ、何ぢや、これは？

私は燧燼のうへに這ひあがつて、隅っこにかくれた。家のなかではまた、火事におとらないさわざがはしまつてゐた。ちやんと正確に聞かして、しかしだんだんに強く、苦しうになつてゆく呻き聲が、天井や四方の壁に波のやうにぶつかつていつた。祖父と伯父とは氣狂ひのやうになつて騒げまはり、それを祖母がどなりつけてどこかに追ひだしてやつた。グリゴリイが大きな晋をた

祖母は立ちあがり、片方の手を顔のまへにもちあげて「フレア」と指を吹きながら出ていつた。祖父が私の方を見もしないで、そつと訊いた。

——お前、はじめつからずつと火事を見てゐたかや？ お祖母さんは、どうだい？ あんな婆あのかせして……さんざんいぢめつけたから、もう使ひものにはならねえと思つてゐただに……あの働きつぶりぢや！ えい、こいつらめ……

晋中をきるめて、ながいこと黙つてゐたが、やがて立ちあがつて、指で蠟燭のしんをつまみとりながら、また訊いた。

——お前、おつかかなかつたかや？

——ううん。

——なんにも、おつかねえことはねえさ……ぶりぶりして、ルバーシカを肩からむしりとるやうに腕いで、彼は隅つごの手洗場に行った、そしてその暗闇のなかで足ぶみをしながら、大きな聲でいつた。

——火事なんて、本常に馬鹿げたこつた！ 火事をだしたやつは、厩場へいつぱりだして、管でうんといつぱりたいてくなくつちやいけねえだ。火事なんて出すやつ

てて薪を放りだし、燧燼につめこんだ。それから、鐵鍋に水をくんできて、まるでアストラハンの駱駝みたいに首をふりながら、臺所ちう歩きまはつてゐた。

——さきに火を焚きつけるんだよ！——祖母が指隠した。

彼は焚つけをとりにあがつてきて、私の足にさわり、びつくりして叫んだ。

——だれだい、そこにあるのは？、なんだ下たまげるぢやねえか……お前ときたら、いつでも要らざるとこに出しやばつてゐるぢやねえか……

——どうしたんだい？

——ナタリヤ伯母さんがな、子供うむだよ。——彼は床にとびおいて、何でもないことのやうに言つた。

私は、母がお産をしたときには、こんなにひどくわめかなかつたことを思ひだした。

鍋を火にかけると、グリゴリイは燧燼の上の私のそばに這ひあがつてきて、ポケットから土焼きのパイプをとりだして見せた。

——煙草を吸ひはじめただよ、眼のためにいつていふでな！ お祖母さんは、嗅煙草をやれつてすすめる

だけえど、おれあ吸ふ方がいいと思つてな……
彼は燧燭の端に腰かけて、足をたらし、足もとの燧燭の蒼白い煙を見おろしてゐた。彼の耳も、頬も油煙でまっ黒にすくけ、ルバーシカはわきがほころびて、そこから桶のたがみたに大きな肋骨が見えた。黒眼鏡の片方の玉がわれて、縁のなかに半分しかのこつてゐない。そのガラスのなくなつたところから、まるで傷口みたいに赤くどろんどろんとこつた眼がのぞいてゐた。パイプに葉煙草をつめながら、彼は産婦の呻きごえに耳をかたむけ、まるで酔つぱらひみたいのに、のべつまくなしに口のなかでぶつぶついつてゐた。

「お祖母さんも洩くつちまつたらな。どんな風にして、とりあげるだらうかな？ どうだい、伯母さんの呻ることつたら！ 火事のさわぎでみんなが忘れちまつただけんど、あの人は「火事だア」つていふといつしよに、おつたまげて、産氣づいぢまつただよ。まつたく、人ひとり産むつてことは、難儀なこつたな。それなのにみんな女衆を大切にしやしねえ！ いいかい、お前、女衆は大切にしなさいけねえぜ、みんなおつ母アになるだものな……」

「燧燭へたたきつけてくれるぞ。
私が氣がついたのは、表玄関の部屋の隅つこであつた、聖像の下で、祖父の蔭にだかれてゐた。祖父は天井をにらみながら、私をゆすぶつて、ひくい聲でいつた。
「おれたちは何とも申しひらきはできねえだ、だれにむかつてもな……」

彼の頭上にはランプがあかあかと燃え、部屋のまんなかの卓の上には燧燭が立つてゐた、そしてもうどんよりとした冬の朝が窓からのぞきこんでゐた。

祖父は私の方に身をかがめて、訊いた。

「どうぢや、いてえかや？」

全身がずきずき痛んだ。頭がぐつしよりぬれ、身體のふしぶしが變にだるかつた。けれど、それを言ひたくなかつた。あたりの様子は何だか妙であつた。部屋にある腰掛といふ腰掛に、見知らぬ人たちが坐つてゐた。薄紫色の袈裟をきたおぢさんや、軍服をきて眼鏡をかけた白髪の老人や、その他いろんな人がたくさんゐた。みんなまるで木偶人形みたいに、じつと動かないで坐つてゐた。何ごとかを待ちうけてゐるやうであつた。どこかすぐ近くで水がバシャバシャ音をたててゐるのを、みんなが耳

私はとろとろと居眠りをした、がすぐにまた人人のざわめきや、扉をバタンとしめる音や、ミハイル伯父の酔つぱらつたわめき聲なぞが耳に入つて、眼がさめた。へんな言葉が耳をかすめた。

「祭壇のまんなかの扉をあげなくつちや……」

お燈明の油に、ラム酒と油煙をまぜてあげておくれ。油をコップに半分、ラム酒をやつぱりコップに半分、それから油煙を六さじに一杯ね……

「おれに、ちよつと見せてくれよ……」

彼は兩足を大きくひらいて、床の上に坐りこんで、掌でビチャビチャ床をたたきながら、自分の前にベッベツと唾を吐いてゐた。燧燭の上があつくなつて、居たたまれなくなつたので、私は下へ這ひおりた、そして、伯父のわきをとほりぬけようとしたら、伯父がいきなり私の足をつかんでひつぱつたので、私は仰向けにたはれ、後頭をゴツンと床にぶちつけた。

「馬鹿ッ！ 私には彼にいつてやつた。」

伯父はバツととび立ち、もういちど私をつかまへて、ぐいぐいふりたてながら、どなつた。

をすまして聞いてゐた。ヤコフ伯父が、両手を背中はまはし、身體をぐつとのはして、扉口の側柱によりかかつて立つてゐた。祖父が彼にいつた。

「さあ、おい、この子をあつちへ連れてつて、寝かしてやれや……」

伯父は指で私をさしまねき、爪先きでちで、祖母の部屋の扉口にちかづいていつた。私が寢室にもぐりこんだときに、彼がそつとささやいた。

「ナタリヤ伯母さんが死んだだ……」

これは別に私をおどろかせはしなかつた。彼女はもう大分まへから、私たちのまへに姿を見せなかつたのだ。食事をしに臺所へ出てくることもなかつた。

「お祖母さんはどこにゐるの？」

「あつちだ。伯父が手をふつて答へた、そして来るときと同じやうに、はだしの足で、爪先き立ちをして出ていつた。」

私は寢臺にねたままで、あたりを見まはした。窓ガラスに、だれかが、白髪の毛をぼさぼさにみだした、眼の見えない顔をおしつけてゐた。部屋の隅の長持の上に、祖母の遺物がかかつてゐる。それは私のよく知つてゐる

濟物なのだが、いまは何かそこに生き物がかくれて、何かをねらつてゐるやうな気がしてならない。頭を枕の下にかくして、私は片方の眼だけで扉口を見まもつてゐたこの羽毛蒲團の下からとびだして、早くどこかへ逃げてゆきたくてたまらなかつた。ふとツイガノツタの死んだときのことを思ひだし、床のうへに血の川がながれてゐたありさまを思ひうかべると、急に息ぐるしくなつてきて、濃い重苦しい匂ひが私の胸をつまらせた。頭のなかか、心臓のなかに、何か腫れものができたやうな氣持だ。この部屋のなかで眼に入るすべてのものが、ちやうど冬の往來を走つてゆく荷ぞりのやうに、私の身體のなかをつきぬけてゆき、私をおしつぶし、殺してしまふやうに思はれた……

扉口が非常にゆつくりとあいて、祖母が部屋のなかに入つてき、肩で扉をしめて、そのまま脊中でもたれかかり、まだつけっぱなしになつてゐるランプの青い灯の方々に兩手をのばし、まるで子供みたいに哀れつぽい、しづかな調子でいつた。

——このお手が、お手がいたくつて……

五

春になると、二人の伯父はそれぞれ分家した。ヤコフが町にのこり、ミハイルが河むかうに出ていつた。祖父も自分のために、ボレワヤ街に大きな、おもしろい家を買つた。石造りの地下室は酒場になつてをり、屋根裏にはとても氣もちのいい小部屋があり、庭は、逆毛をたてたやうに柳が裸の枝をぎつしりとからみあはせてゐる窪地までつづいてゐた。

——答にする枝がうんとあるぞ！——祖父が愉快さうに私に眼くばせして、いつた。私が祖父と二人で、やはりかい雪どけの道をふんで、庭を見まはつて歩いてゐたときだ。——さて、お前にもそろそろ讀み書きを教へてやらうと思ふんぢやがな、こいつはなかなか役に立つもんだて……

家ぢやうに間借人がぎつしりつまつてゐた。祖父はただ階上の大きな部屋を一つだけ自分の住居と來客用にとつておいた。祖母は私といつしよに屋根裏の部屋に住んでゐた。この部屋の窓は往來にむかつて開いてゐたので、

窓枠から身をのりだして見ると、夜ふけやお祭りの日には、酒場から酔つぱらひが這ひだしてきて、よろよろしながら往來を歩いてゆき、大聲をあげてわめいたり、ぶつたほれたりするのが見えた。ときどき、酔つぱらひが寝みだいに往來におつぱりだされることがあつた。するとそいつらはまたおきあがつて酒場の扉口に突進してゆく。扉をドンドンとたたき、ガタガタゆすぶり、蝶番をギンギンならした、そしてあげくの果には喧嘩がはじまる……これをすつかり上から見ているのは、とてもおもしろかつた。祖父は朝から息子たちの仕事場にかけていつて、手傳ひをしてやつた、そして夕方、ぐつたり疲れて、不機嫌になつてかへつてきた。

祖母はお料理をしたり、針しごとをしたり、野菜畑や庭をみるきまはつたり、そんな風にして一日ちやう、まるで眼にみえない難で追ひたてられる大きな獨樂みたいになり、ぐるぐるどびまはつてゐた。そして嗅煙草をやつて氣持よさそうにくさめをしては、顔の汗をふきながら、言つた。

——未來永劫にわたつて正しいこの世の神さまに、お禮を申しますだ！ なア、アレクセイや、わしらの暮し

もやつとおちつてきたね！ これもみんな天の神さまのおかげだよ、どうだい、何もかもうまくいくやうになつてきたぢやないかい！

だが私には、この家の暮しもまた靜かなおちつたものだとは思へなかつた。朝から夜なまで、間借人たちが家といはず、中庭といはず、さうぞうしく馳けまはりおまけにときどき近所の人たちもやつてきた。みんなどこかへ急いでゐるやうで、いつもおくれまいとして、ハアハア息せききつて歩いてをり、何かしやうとするときには、きつと祖母を呼んだ。

——アクリナ・イワノヅナ！

だれにたいしても同じやうに愛想のいい笑顔を見せ、みんなにやさしく注意ふかくふるまつてゐるアクリナ・イワノヅナは、親指で鼻の孔に煙草をつめると赤い格子縞の手巾をだして鼻と指をきれいにふいていつた。

——風を退治するにはね、奥さん、せいぜいよくお風呂に入つて身體を洗ひ、薄荷の湯氣で蒸されるのがいいです。もし風が皮膚の下にくひこんでたら、まぢりつけない鷲鳥の脂を大匙に一杯と、昇永を茶匙に一杯、水銀を三滴と、これだけませあはせ、小皿の上で、額戸

物のかけらでもつてよく摺りあせて、塗りつければよいです。木の匙や骨などで摺りなると、水銀がだめなつちやいます。銅や銀もいけねえだ、漆ですだよ！

ときには彼女は、じつと考へこんだあげくに、こんな忠告をする事もあつた。

「なア、おつ母さんや、ベチヨールイの坊さんのアサフさまとこへゆきなされ。わしにはとてもお答へできねえだ。」

彼女はまた産婆の役もつとめれば、内輪喧嘩の仲裁もしてやり、子供の病氣も診てやれば、あるひは女たちがこれをおぼえれば任せになるからといって、「聖母の夢」をぞらで話つてきかせたりもした。家事の相談にもよくのつてやつた。

胡瓜はね、いつ賑げにしたらいいのか、自分でちやんと言つてくれるだよ。つまりね、胡瓜に土のほひやその他のいろんな匂ひがなくなつたとき、そのときに漬けこめばいいだよ。クワスは、よく殺菌して、よく酒がたつやうにするには、うんといぢめなくちやいけなだよ。クワスは甘いものがきらひだからね、乾葡萄か

ほうれ、また何か考がえだしたな！——彼女は苦笑をした、がすぐに考へぶかさうにいひそへた。

「とんでもねえこつた！ 魔法はむづかしい學問だよ。ところが、わしは讀み書きがちつともできないんだよ、イロハも知りやしないんだよ。お祖父さんは、あのとほり讀み書きが得意だけど、聖母さまはわしにはそんな習熟をさづけてはくたさならなかつただよ。」

そして私に、自分の生涯の一端を語つてくれた。

「わしもな、やつぱり孤兒で育つたもんだな。わしのおふくろは、水呑百姓の娘で、おまけに不具者だつたんだよ。なんでもまだ小娘の時分に、旦那にひどい眼にあはされただよ。おふくろはびつくりして、夜中に窓からとびおりて、横ッ腹をうち、肩にひどい怪我をしまつた。それ以来、いちばん大切なの腕がきかなくなつちまつたんだよ。おふくろは、レース編みにかけるちや、その邊でも指折りの腕だつたんだがね。さうなるともう旦那にや用のねえ人間だ、そこでさつさとおつぱりだされてしまつたわけさ。あとは勝手に自分でくらしにいけつていふわけだが、手がきかなくてどうして暮していけるもんかね？ それでおふくろは乞食になつて、

なんかで味をつけるのが一番いいんだよ、もし砂糖をつかふんなら、まあ一種にせいせい一つまみも放りこんでおくだね。クリームには、いろんな作り方があつてな、たとへばドナウ式の作り方とか、スペイン式のとか、さうでなきやまたヨーカサス式の作り方とかね……」

私は一日ぢう祖母にまつはりついて、裏庭や中庭に近たり、近所の家へいつたりした。彼女はときどきそつ近所の家へお茶をのみにでかけていつては、いろんな話を一人でのべつまくしたててくるのであつた。彼はまるで祖母の頼みたいであつた。いま思ひかへしてみても、そのころの生活では、この忙しい、彼れをしらない、人の好い老婆の他には何も眼に入つてはこなかつたやうであつた。

ときをり、ほんのちよつとの間、母がどこから来をあらはした。自尊心がつよくて、強情つぱりな彼女は、みんなを、まるで冬の太陽のやうに冷い、灰色の眼でながめ、すぐにまた姿をけしてしまふのであつた。その去つたあとには、ほとんど何の印象ものこらなかつた。

ある日、私は祖母に訊いてみた。
「お祖母さんは、魔法使ひかい？」

他人さまのお情けにすがつて歩きまはつたもんだ。しかしそのころは、みんなの暮しがいまよりもずつと良で、みんなもつと親切だつた。あの有名なバラホンの大工とかゾレス編みの女とかいふものは、人民の自慢の種だつただからね！ わしはおふくろと二人で、秋から冬の寒いさなかに町を歩きまはつたもんだ。それから、天使長のガヴリーロが剣をふるつて冬を追つたら、春が地上におとづれてくると、わしらはこんどは遠くまで出かけていつた。どこでも顔のむいた方にさ、ムーロムへもいつたし、ユリエツエツへもいつたし、ヴォルガ河をさかのぼつていつたこともあるし、オカ河の岸をつたはつていつたこともある。春から夏にかけては、歩きまはるのがとてもいいんだよ、地面は愛想よくもてなしてくれるし、草はやはらかくつてきれいだし、聖母さまが美しい花を野原いちめん撒きちらしてくださるし、ほんとに楽しくつて、心がうきうきするやうだ。おふくろはよく、青い眼をつぶつて、高い調子をはつて、唄をうたつたつて。おふくろの聲はそんなに大きな聲ぢやないけれど、よくとほる聲だつたよ。あたりのものはみんな眼つてしまつたやうに、ゴソリとも音をたてずに、聞き

惚れてゐたもんだ。この世に生きていくつてことが、ほんとおもしろいと思つたね！ そんな風にして、わしが九歳になつたとき、おふくろは急に物乞ひに私をつれてあるくの止めるといひだした、おふくろは恥しくなつてきただね。そこで、バラファに尻をおちつけて、こんどはおふくろ一人で、町を端から一軒ごとに物乞ひしてあるいた。お祭りの日には、教會へいつて、喜捨をあつめた。一日も早くおふくろの手だすけをしたいと思つてな。ときどき、うまくいかないことがまると、わしはポロポロ涙をこぼしたね。二年と少しはかりでな、いいかいお前、わしはその仕事をおぼえてしまつた、そして町ぢうの評判になつたもんだよ。どこかにいい仕事があると、すぐにわしらのそこへもちこんできて、「さあ、アクリナ、ひと編みやつておくれ！」つていふんだよ。わしはもう大喜びで、まるでお正月がきたやうな氣持さむろん、それはわしひとりの仕事ではなくて、おふくろの指圖でやつたもんだ。おふくろは片方の手しかつかへないで、自分が仕事をするとはできなかつたけれど、ね、そのかわりにとても上手におしへてくれたよ。一人のいい先生がゐたら、あたりまへの職人が十人ゐるより

もいい仕事ができるだよ。さてそこで、わしはそろそろ、それを鼻にかけはじめた、そしておふくろに、おつ母さん、お前ももう乞食をして歩くのなんか止めなよ、これからはお前が自分ではたらいで、お前を食はしてやるからつていつたのさ。するとおふくろがわしに言ふだ。
馬鹿こくでねえ、わからねえだか、そりやお前が自分で自分の持參金にためておくれいだ、つて。それから聞もなく、お祖父さんがわしらのまへにあらはれただよ。ちよつと眼にたつ若衆だつた。年は二十二だつたのに、もう水汲人夫になつてただよ。お祖父さんのおつ母さんのがね、いつもわしを見はつてゐたもんだ。わしは女工で、乞食の娘だで、なんでも大人しくいふことをきくだらう、と思つてゐたらしいだね……あの人はバツ賣りをしてゐただが、腹の黒いお婆さんでな……いやもうそんな話は止さう……よくないことは、思ひだしたつて何もなりやしないだからね。そんなことは、神さまが御自分で、みんなもう見ておいでなさるのだ。神さまはそれを見ておいでなさるだけだけれど、悪魔のやつらはまたそれを大喜びするだよ。
そして祖母は、心からおもしろさうに笑ふ。その鼻が

いかにも滑稽にふるふる。だが、眼だけは物思はしげに光り、やさしい眼ざしで私を愛撫して、いろんなことを口で話すよりもよくわかるやうに語つてくれる。

しづかな晩だつたのをおぼえてゐる。私は祖母といつしよに、祖父の部屋でお茶をのんでゐた。祖父は加減がわるくて、ルバーシカもきかないで寢臺の上に坐り、長いタオルで肩をくるんで、ひつきりなしに流れる汗をふきながら、ときどき深い息をし、咽喉をせいせい言はせてゐた。彼の緑色の眼はどろんとごり、顔はむくんで、赤くろくなつてゐた。小さなとがつた耳が、とくにまつ赤になつてゐた。茶碗をとらうとして手をのぼしたときその手があはれつぽくふるへてゐた。彼はとてもおとなしくて、いつもの彼とは思へなかつた。

どうしておれんのは、砂糖をいれてくれないんだい？ 駄駄つ子みたいな甘つたれた調子で、彼は祖母に訊いた。祖母がやさしく、けれどきつぱりと答へた。
——蜂蜜をいれてお飲みなされよ、その方が身體にいいで！
溜息をついたり、呻いたりしながら、彼は大いそぎで

熱いお茶をこくこくのんでいつた。

——たのむぞや、お前、おれあ死にたくねえだ！

——そんなこと氣に病んぢやいけねえだよ、わしがちやんとつててあつるだから、大丈夫だつてば。

——さうだなア。いま死んだんぢや、おれあこの世に生れてきた甲斐がねえやうなもんぢや。いままでの苦勞が水の泡ぢやでな！

——そんな話もう止めて、だまつて寝ておいでなされ。

彼は眼をつぶつて、くろずんだ唇をピチャピチャならしながら、しばらくだまつてゐたが、ふいにまた突つかれたやうに身體をピクリとふるはせて、ひとり言をいつた。

——ヤーシカにも、ミーシカにも、はやく嫁をとつてやらなくつちやなんねえな。女房もつて、子供でもできたら、身持もおさまるぢやらうが、なア、どうぢやらう？

そして、町のだれそれのところがいい娘があるなぞと數へあげはじめた。祖母は黙つて、何杯もお茶をお代りしてのんでゐた。私は窓べに坐つて、町の空が夕焼けで

まつ赤になつてゆき、それを反射して家家の窓のガラスが、あかあかとかがやくのを眺めてゐた。そのとき私は何かの罰で、中庭や裏庭にできることを祖父から禁じられてゐたのだ。

裏庭の白樺のまはりには、甲蟲がぶんぶんいひながら舞つてゐた。となりの家の中庭では、桶屋が仕事をしていた。どこかすぐ近くで、だれかがナイアを削いでゐた裏庭のむかふの窪地では、子供たちが灌木のしげみのなかにもぐりこんでいつて、大きなおもりをして遊んでゐた。私も戸外にでて自由にとびまはりたい氣持にかられた。夕暮れのもの悲しさが心にしみこんできた。

とつぜん祖父がどこから新しい本をもつてきて、掌で大きな音をたててそれをパンパンたたき、勢ひよく私をよんだ。

「さあ、小僧、こつちへこい！ここへ坐れや、このひよつとこめ！見ろ、いいか、この字がわかるか？」

これが「アー」だ。言つてみる、「アー」！「ペー」！「ウェー」！これは何だ？

「ペー」！
「うむ、よし！これは？」

つた。彼はもう夢中になつて、しわがれ膝をはりあげて私の耳もとでどなつた。

「ゼー」……「エル」！

筆は知つてゐた、けれどスラッ文字を見ると、どうもびつたりしなかつた。「ゼー」は芋虫みたいだし、「ゲ」は猫背のグリゴリイにそっくり、「ヤー」は祖母が私をつれてゐるところといつた恰好だ。そして祖父の中には、アルファベットのどの文字にも共通する何ものかがあるやうな氣がした。彼はながいこと私を、このアルファベットのうでひきずりまはした。順順に訊いたり、順序をとぼして訊いたりした。彼が自分の方からもうすっかり夢中になつてしまつたので、それが私にもつたはり私もまたびつしより汗をかいて、ありつたけの膝をはりあげてどなつた。それが祖父をひどくおもしろがらせた。彼は胸をつかんで、ゴホゴホと咳をしながら、本をもみくちやにして、しわがれ膝でいつた。

おつ母ア、まあ見ろや、野郎すつかりのほせあがつちまひやがつて！まるで、アストラハンの熱病にでもかかつたやうぢやねえか！お前、なんでそんなに吠えたてるんぢやい？

「ウェー」。

「嘘いへ、「アー」だ！ さあ、いいか、それから、「デー」、「デー」、「イエー」……ほれ、これは何だい？

「デー」。
「よし！これは？」

「デー」。

「うむ、そのとおりだ！ ぢや、これは？」

「アー」。

祖母が口をいれた。
「お父つあんや、お前はおとなしく寝てゐなかつた方がいいがなア……」

「うむ、せえ、だまつちよれ！ おれはな、いまはこんなことやつてるのが一番いいんぢや。さうでねえと、おれは考へごとくに壓しつぶされちまふからな。さあ、やれ、アレクセイ！」

彼は火のやうにほてつてゐる。べとべとした手で私の首をだいて、本を私の鼻の下におき、私の肩ごしに手をおぼして、指で字を一つ一つ突いていつた。彼の身體からは、醋のほひと、汗のほひと、焼いた玉葱のほひとがむんむんし、私はいまにも息がつまりさうである。

「なんだつてさ、お祖父さんもでつかい、膝だすだの……」

私は、祖父と祖母とを眺めてゐるのが氣もちよかつた。祖母は椅子の腕木に膝をついて、拳で頬をささへ、私たちの方を見て、ひくい膝をたてて笑ひながら、いつた。

「それぢや、いまに二人とも破裂しちまふぞい！」

祖父が私にうちよけた調子で説明した。

「おれがでつかい膝だすのは、加減がわるいからぢやが、お前は何だつてそんな膝だすんぢやい？ そして、ぐつしよりぬれた頭をふりながら、祖母にむかつていつた。

「死んだナタリヤがな、この子は物おほえがわるいつていつたけれど、そいつは大間違ひぢや。どうして、どうして、おつそろしく物おほえのいい方ぢやい！ さあ小僧、さきをやらや！ とうとう最後に、彼はふさけて私を寢臺からつきとばした。

「さあ、本をもつていけ。明日までに、お前、アルファベットをまちがひなしに言へるやうにしておくんぢやい？」

やぞ。もしうまくできたなら、五^{コペイカ}哥^カやるからな……
私が手をのぼして木をとらうとする、彼はまた私を
ひきよせて、氣むづかしい顔をしていった。

——お前のおふくろは、お前をおつほりだしていつち
まつた、なア……

祖母がふいとびあがつた。

——まあ、お父つさん、お前また何だつてそんなこと
言ひだすだね……

——うん、言はなきやよかつたかな……言へばまた切
ながらせるわけか……あーあ、葉つたれ女め、道でねえ
ことばかりしてけつかつて……

彼は、はげしく私をつきのけた。

——外へいつて、遊んでこい！ だがな、往來へでち
やいけねえぞ、中庭か、裏庭であそんでるんぢや……

私には、實はその裏庭へでゆくことが必要だつたの
だ。私が庭へでて、小高くなつたところに姿をあらはす
と、さるでそれを待ちうけてゐたやうに、窪地にゐる子
供たちが石をなげはじめた。私も大よろこびで、すぐに
それに應酬した。

——ブイリがきたぞ！——彼らは私の姿をみると、さ

り叫んで、すぐに戦闘準備をととのへるのであつた。一
やつつけちまへ！

「ブイリ」といふのは、いつたい何のことだか私にはわ
からなかつた。だからこの籍名は少しも私をおこらせは
しなかつた。ただ、一人で多数を相手に喧嘩をするのが
おもしろかつたのだ。そして私のなげた石がうまく敵の
なかに落ち、敵がさつと退却して、灌木のしげみのなか
にかくれるのを見たりするのが氣もちよかつたのだ。こ
の戦ひは、何も悪意をもつておこなはれたのではなかつ
たから、いつも氣持よくおしまひにすることができた。

讀み書きはたやすくものになつた。祖父はだんだんに
私に眼をかけてくれるやうになつてきた、そしてもうめ
つたに答で打つことはなくなつた。私が自分で考へてみ
ても、以前よりもつとたびたび管を食らふのが當然だと
思ふくらゐなのに。私はだんだんに大きくなり、大膽に
なるにしたがつて、だんだんに祖父のたてた規則をやぶ
り、いひつけにそむくやうになつてきた、けれど祖父は
ただ口さきだけで叱り、手をふりあげておどかさだけで
あつた。

私にはどうも、祖父が以前私をなぐつたのは何の役に

やつにきまつてるんぢや。よくおぼえとけよ！ それぢ
や、遊びにいつてこい……

おきに私は、舊約の詩篇を一字一字ひろひながら讀む
やうになつた。毎晩、夜のお茶のあとで、勉強をするこ
とになつてゐた。そのときにはきまつて聖歌も一つづつ
讀まなければならなかつた。

——ベエ、エル、アー——ブラア……、ジェ、イエー

——ブライージェ……、エヌ、硬音符——ブライージェン、

……私は人差し指で頁の上をつきながら讀んだ、そし
て退屈して訊いた。

——幸福なる男つて、ヤエフ伯父さんのことかい？

——この野郎、頭ぶんなぐるぞ。だれが幸福な男か、
そんなこと、きさまになんかわかるもんか！——腹立

たしげに鼻をならして、祖父がいつた。しかし、彼はた
だ物の順序をつけるために、いつもの癖で、ぶりぶりし
てゐるだけだといふことが私にはわかつてゐた。

大抵いつもそのとほりであつた。だから一分もすると
私のことなぞ忘れちまつて、大きな聲でわめきたてるの
だ。

もたたなかつたやうに思はれたので、ある一き彼にその
ことをぼつてやつた。

すると祖父は、私の顔を指でかるく突ついて、顔をあ
げさせ、自分は眼をパチパチやりながら、ゆつくりと言
葉をひきのばしていつた。

——なぜぢやい？

そして、人のよささうな笑ひをうかべていつた。

——この罰あたりめ！ きさまをどのくらゐぶんなく
つてやつたらいいのか、それがきさまになんかわかるも
んか、このおれのほかに、誰にそんなことがわかるかつ
てんぢや？ さつさと出てうせろ！

だが、すぐに私の肩をつかまへて、また私の顔をのぞ
きこんで、訊いた。

——きさまはづるいのか、それとも正直なのかや？

うむ？

——そんなこと、おらあわからねえ……

——わからねえだとオ？ ふん、そんなら、おれが言
つてきかせてやるわ。づるい人間になれよ、その方がい
いだ。まつ正直なんてのは、ありや馬鹿と同じconsin、
わかつたか？ まつ正直な人間なんてのは、おめでたい

「さうともさ。踊りと歌にかけちや、あいつは誰にもひけをとらねえが、仕事の腕はどうもあやふやでな！歌ばかりこさへて、少し道化でゐて、おしやべりぢや……えーい、こいつらめ！愉快にをどつて、とんでいけ」……なんて、それで遠くまでとんでいけるかつてんぢや？ うむ、遠くまでよ？

私は本をよむのをやめて、祖父の心配さうな、陰氣くさい顔をながめながら、耳をかたむけた。彼は眼をペチペチやりながら、私の頭ごしに、どこか宙をながめてゐた。その眼には、物悲しげな、あたたかい光が輝いてゐる。祖父のいつもの粗暴さが、いまはそこに溶けこんでしまつてゐることが、私にもわかつた。彼はほそい指で卓をコツコツたたいてゐた。染料にそまつた爪がひかり黄金色の眉毛がピクピクふるへてゐた。

お祖父さん！

なんぢやい！

何かお話ししてくれよ。

「お前は本をよめ、このなまけ者め！」——祖父は眼がさめたやうに、指で眼をこすりながら、ぶつぶついつた。お話をかり好きで、聖書はきらひなんぢやな、

こいつめ……

だが、さういふ祖父自身も聖書よりお話の方が好きなのではないだらうか、と私は思つた。彼は舊約の詩篇をほとんど全部そらでおぼえてゐて、神さまにちやんと誓ひをたてて、毎晩寝るまへに必ず一章づつ聖書をあげて讀んだ。ちやうど教會で司祭が日讀祈禱書をよむやうな工合に。

私はなほも一所懸命にせがむ。すると祖父はだんだんに軟化してきて、結局私にまけてしまふのだ。

よしよし、それぢや、してやらうかな。聖書はいつまでもお前といつしよに寝つゝるおやらうが、おれはもうちき神さまのお裁きに召されるのぢやでな……

背に毛糸で縫ひとりをした古い安樂椅子にとつかりと腰をおろし、そのなかでだんだんに身體を小さくちぢめるやうにして、椅子の背に首をもたせて天井をながめながら、彼はしづかに、考へ考へ話していつた。祖父の父親の話である。あるときバラファナの町に盗賊の一團がおしよせてきて、商人のザエフのところから掠奪をしていつた。祖父の父親が鐘樓にかけあがつていつて、警鐘をならさうとした。ところが、盗賊どもが追ひついてき

て、劍をぬいて彼を斬つて、鐘樓の上から放りおとしたのであつた。

おれはそのころはまだ小つちやい子供でな、そんな事件を見もしなけりや、おぼえてゐるなかつた。おれが自分のことをはつきり覚えてゐるやうになつたのは、十二年のフランス人（一八一二年のナポレオンの侵入のこと——譯者）からこつちのことぢや。そのときには、わしもちやうど十二になつてたわけだ。そのころ、このバラファナの町に捕虜が三十人ばかり送られてきた。みんな捜せこけた、小柄な連中で、なかには乞食よりもひどいなりをしてふるへてゐるやつもあれば、また凍えて、ちやんと立つてゐることができないやつもあつた。百姓たちは、そいつらを叩き殺してくれるといつてさわざたてた、だれんど警備兵が許さなかつた。衛戍兵がかけつけてきて、百姓たちを外に追ひだしまつた。それからあとは、もう何もおきなかつたさ。みんな慣れちまつたんぢやな。そのフランス人どもは、みんな如才なくて、物わかりがよくて、おまけにみんななかなか陽氣な連中であつた。よく喉をうたつてゐたつけ。ニージニイの酒場からときどきトロイカをとばして、その捕虜たちを見物にき

たもんだ。さうして、ある者は、捕虜に縋づき、拳固をふりあげておどかしつけ、ときには本當にぶんなぐることもあつたな。ところがまたある者は、やつらの言葉、やつらと仲よく話をし、饒をやつたり、いろんな暖い古着をもつてきてやつたりしたもんぢやよ。ある年よりの旦那などは、両手で顔をおほつて泣きだした。さうしておしまひにかう言つたもんぢや。悪黨のボナバルトの野郎め、フランス人をほろぼしちまひやがつた、つて。どうぢやい、わかつたか、ロシア人つてのはこんな人間なんぢやぞ、旦那でも、とても人が好いだ、よその國の人にまで同情してやるんぢやからな……

一分間ばかり彼は眼をつぶつて、掌で髪をなでながら黙つてゐた。がちきにきた、過ぎさつたことをこころごとくと記憶によみがへらせて、話をつづけていつた。

多のことで、吹雪が往來をふきまくり、ひどい凍みが家を見しめしいはせてゐた。そんなときよくフランス人どもは、おれの家の窓の下にとんできて、おふくろを呼ぶんぢや。おふくろはパンをやいて、賣つてゐたんでな。やつらは窓をたたいて、ビョンビョン跳ねまはりながら、熱いパンをくれつてどなつてゐるんぢや。おふ

くろはやつらを家んなかには入れないで、窓からパンをだしてやる。するとフランス人はそれをとつて胸にだきかかへるんぢや、ちやうど心臓のあたりの、肌へちかきに燃けるやうなやつを押しつけるんぢや。そんながむしやらかなことが、どうしてできたのか、わからねえんだよ！ 慶さがあんまりひどいで、半分凍え死んだやうになつてるものがたくさんあつた。やつらは暖い方の人間だいな、こんなひでえ寒さにや慣れてるねえんぢやな。おら家の野菜畑にある湯殿にも、士官が従卒のミロンといふのと二人で住んでゐた。この士官は、まるで骨と皮ばかりのやうに瘦せこけた、ひよろ長い男で、膝までしかない婦人外套をきてあるいてゐた。とても愛想のいい男だつて、辞つばらひでな、うちのおふくろがこつそりビールを作つて賣つてゐたもんだから、それを買つては、ぐいぐい飲んで、唄をうたつてゐたつて。ロシア語を少しおぼえて、よく片言で何か言つてゐたもんぢや。アナタノ國、白クナイ、黒イ、意地ワルイヨ。ロシア語としちや、なつてねえけんども、言はうとすることはわかるわな。こりやたしかにそのとほりなんぢや。ロシアの北の方ときたら、まつたくやさしくねえからな。それでも、

ヴォルガの下流の方へいけば、ずつと暖かくなるし、カスピ海に向ふへいけば雪なんてまつたく降らねえこともあるだに。そりや啗ぢやねえだ、その證據にや、福音書にも、使徒行傳にも、詩篇にやむろんのことさ、雪のことや冬のことは一つも書いてねえだ、つさりキリストさまの住んでおいでなすつたのは、さういふ地方だつてがな……さてと、詩篇がすんだから、こんどは福音書を讀むことにするからな。

彼はまた、まるで眠りこんでしまつたやうに黙りこむそして何かふかい物思ひにしつみ、横眼で窓の方をにらんでゐる。そんなときの彼は、いよいよ小さく、とげとげしく見える。

——それからどうしたの？ ——私はそつとうながす。

——うむ、それからな。——彼はぶるつと身をふるはせて、はじめめる。——フランス人だつて、つまり、おらたちと同じやうに、罪ぶかい人間さ。やつらはよくおふくろを、マダム、マダム、つて呼んでたつて、こりやつまり、夫人とか、奥さまとかいふ意味なんぢやな。ところがこの奥方ときたら、粉屋から五ブドもある粉袋をひつかついでくるんだからな。まつたくおふくろは、

女とは思へねえ力持ちだつてよ、おれなぞは二十歳の年まで、髪の毛をつかまれちや、らくにふりまはされたもんだ。二十歳つていやあ、おれだつてもういい若けえ者だつてがな。ところで、あの従卒のミロンといふ野郎はな、馬の好きな男でよ、そこらぢうの家を歩きまはつては、手まねで、馬の手入れをさせてくれつて頼んでまはつたもんだ。はじめのうちは、みんな信用しねえで、何しろ敵のやつだから馬を臺なしにされるかもしれねえと惧れてゐただが、しまひには百姓たちの方から、「おーいミロン、きてくれや！」といつて彼を呼びにゆくやうになつた。すると彼はニヤリと笑つて、お辭儀をして、願ひだしてゆく。まるで餅の色といつてもいいほどの端毛で、鼻が大きくて、唇の厚い男ぢやつたよ。とても上手に馬の世話をし、馬の病氣もみごとになほしたりしたここを去つてからは、エージニイで馬醫者をやつてゐたが、そのうちに氣が狂ひ、消防夫になぐりころされてしまつた。士官の方は、春さきからへんな暖をしだして春のニコライの日にしづかに死んでいつた。湯殿の窓の下に坐つて、物思ひにしづんでゐたが、そのままがつくりと首をたれて、鼻をひきとつちまつた。おれあ、そ

の人がかはいさうでな、人にかくれてこつそりと、その人のために漁いたぐれえちやよ。あの人は悪い心をもつた人でな、よくおれの耳をひつばつちや、やさしく自分の身の上ばなしなぞをしてくれた。よくはわからなかつたけれど、聞いてれば何かいい氣持だつたよ！ 人間の愛情つてものはな、店ぢや買ふことのできねえもんだ。あの人はおれにフランス語をしへてくれるつていひだしただが、おふくろに止められちまつた。おふくろはおれを管でひつばたけなんていつたもんだ、おまけに士官にまで叱言をいつたもんさ。そのころの暮しときたらとてもきびしくつてな、お前なんぞはもうとてもそんな眼にあふことはねえちやよ、そのかはりお前はまたお前で別な苦しみを受けることにならちやらうが、いまからその覺悟であらう！ たとへば、このおれなんかも、ずあふんいろんな眼にあつてきたものぢやぞ……

くらくなつてきた。うす暗がりのなかで見ると、祖父は妙に大きくみえた。その眼は、猫のやうに光つてゐる。彼は他のことなら何でも、低い、慎重な、考へぶかい調子で話したが、自分のことになると、いきりたつて、早

口で、口角潮をとばして語るのであつた。しかし、彼が自分のことを話すのを、私はあまり好かなかつた。それに彼がしよつちう「よくおぼえとけよ！ こいつを忘れちやいけねぞ！」と、命令するのが嫌だつた。

彼が話してくれることの大部分は、おぼえてゐたくはなかつた。けれどそれは、彼のそんな命令がなくても、まるで鞭のやうにぎりぎり、記憶に無理矢理にきざみつけられるのであつた。彼はけつしてお伽噺なぞはじなかつた、いつも本當にあつたことしか話さない。それに彼は質問をされるのが嫌ひなことを見てとつたので、私はわざとしつこく質問をあびせかけた。

フランス人とロシア人とは、どつちがいい人間なの？

そんなこと、わかるもんか！ なんだつて、おれあフランス人が自分の家でどんな風に暮してゐるか、見たことがねえだもんな。彼はぶりぶりしていふ、そして附加へる。

自分の穴にゐるときは、むじなだつて殿さまぢやな……

んぢや、ロシア人はいい人間かい？

んぢや、フランス人はなぞロシア人と戦争したの？

うん、戦争か、こりや天子様ツァーリのなさること、おれたちが口を入れることのできねえこつちや。

だが、ボナパルトとはどういふ人かといふ私の質問にたいしては、祖父はねんごろに答へてくれた。

ナポレオン・ボナパルトつて人はな、贈つ玉の太い男ぢやつた。世界ぢうを征服しようと思つとつたんぢやからな。さうしておいて、世界ぢうの人間がみんな同じやうな暮らしをするやうにしようと思つたんぢや。領主も、役人も要らねえ、ただみんなが上下の差別なしに暮すやうにするつてわけなんぢや！ ただ名前がいろいろ違つてるだけで、権利はみんな同じ、信仰も同じになるつてわけさ。むろん、こりや馬鹿げた話さ。エビだけぢや見分けがつかねえだが、魚になるいろいろな違ひがあつて、チョウザメとナマズぢやちがふし、イワシ魚とニシンでもちやんと區別があるんぢや。このナポレオンみたいな人間は、ロシアにもあつたもんだ——ステンカ・ラージンとか、ブガチョフとかな。その人たちのことは、またあとで話してやるわ……

いろいろなあるさ。農奴時代にや、もつとよかつただがな、みんなもつとしつかりしちやつた。ところが今日ぢや、みんな自由になつたけえど、食ふや食はずぢや！ 旦那がたも、むろん、人情がうすくなつたさ、さうしてそのかはりに智慧だけがうんとたまつちまつた。もつとも、これはみんながみんなさうだつてわけぢやねえがな。もし本當にいい旦那だら、だれだつてお慕ひ申すさ！ なんだが、さうでねえ馬鹿な旦那もある。そんな人は袋みてえなもんで、内容をいつばいつめても、ぢきからつぽになつちまふだ。ロシア人には、外殻だけの人間が多かつてな、外から見れやなるほど人間の形はしてゐる、けんどもそれが外殻だけで、内容はなんにもねえんぢや、すつかり邊に蝕はれちまつてるんぢやな。ロシア人はもつと勉強して、智慧をみがなくなつちやなんねえ、ところがそれを磨く砥石もねえときでやがる……

ロシア人は強いかい？

そりや力持ちもあるさ。だがな、力のあるなしなんかが問題ぢやねえだぞ、すばしこくなきやいけねえだ。見ろや、馬はそんなに力はあるやしねえだが、一番つよいぢやねえか。

ときをり彼はながいこと口をつぐんで、まるではじめに見るやうに眼をまるくして、ぢいつと私の顔を見つめてゐることがあつた。それはあまり氣もちのいいものではなかつた。

だが、私の父と母のことについては、一言も私に話してくれなかつた。

ときどき祖母もこの話の仲間に加はつた。

彼女はしづかに部屋の隅つこに腰をおろし、ながいこと、まるでゐるのゐるのかわらないやうに、黙つて坐つてゐた。そして、ふいに、そつと人を抱きしめるやうな聲で訊くのであつた。

なあ、お父つあんや、覚えてゐなさるかね、わしら二人でムーロムへ巡禮にいつたときのことをさ？ あんときは、ほんとによかつたね。えーと、あれは何年のことだつてか？

祖父はしばらく考へてから、几帳面にこたへた。

おれもはつきりは言へねえが、何でもコレラの流行つたまへだつてな。たしか、あつちこつちの森でオロネツツ人どもをつかまへた年ぢやつたらう。

「たしか、さうだつたね。わしらもまだ、オロネツツ人がおつかなくつてね……」

「さう、さう、さうぢやつたな。私は、そのオロネツツ人といふのはどういふ人間なのか、またなぜ彼らが森へ逃げこんでゐたのか、といふやうなことを訊いてみた。祖父はあんまり気がすすまないらしい態度で説明してくれた。」

「オロネツツ人つていふのはな、ただの百姓さ。懲役から逃げだしてきたんぢやよ、その工場で働らかされるのが辛くつてな。」

「うん、どんな風にしてつかまへたの？」

「うん、どんな風にしてつかまへたの？ まあ子供の鬼ごっこみてえなもんさ。一方が逃げる、それを一方が探しだして、とつかまへる、つてわけぢや。つかまへたら管でビシビシひつばたき、鼻の孔をひきさいてやり、前科者の目印に額へ烙印をおしてやつたもんぢや。」

「なぜそんなことしたの？」
「こらしめのためぢやな。しかし、この事件は、どうもよくわけがわからんのぢや。逃げた方がわるいのか捕へた方がわるいのか、どつちだかおらたちにはわからん」

「のぢやよ……」

「それはさうと、お父つあん、おぼえてゐなざるかね？——また祖母がいひだす。——あの大火事のあとさ……」
ところが、正確を愛する祖父は、やかましく訊きただす。

「どの大火事ぢや？」

「むかしの話をはじめると、二人は私のことなど忘れてしまふ。二人はあまり高くない聲で、おたがひに調子を合せて話しあつてゐるので、ときにはまるで二人で聲を合せて唄をうたつてゐるやうに思へることがある。だがそれはいつも陰気な歌ばかりであつた——病氣のことや、火事のことや、人ごろしのことや、不慮の災難のことや、すばしつこい泥棒の話や、馬鹿な乞食のことや、怒りつばい旦那衆のことや……そんな話ばかりであつた。」

「おらたちも、ずいぶん養生をして、ずいぶんいゝるんなことを見てきたなア——祖父がしづかにつぶやいた。」
「わしらの一生は、そんなにつまらないもんでもな

「お父つあん、おぼえてゐなざるかね、わしがワリーヤを生んだ年の春から、どんだん景氣がよくなつてきたのをさ？」

「あれは、と、一八四八年だから、ちやうどハンガリーと戦争した年だつたな。名付親のチーホンが、洗禮の翌日に勤負されてよ……」

「それで、戦死しちまつたつたね。——祖母が溜息をつく。」

「うん、戦死しちまつたつたな。あの年からこつち、神さまのお恵みが川のやうにおいらの家へ流れてきて、ちやうど水が筏をはこんでいくやうに、おらたちを運んでいつてくれたもんだ。さういへば、あのワルワラの女つちよめ……」

「ああ、お父つあん、もうたくさんだよ……」

「祖父は、しかし、ぶりぶりして、顔をしかめた。——何がたくさんぢやい？ 子供たちはみんな、どこから見たつて出来そこなひぢやわえか。おらたちの丹精は、どこへいつちまつただ？ おらたちは、立派な籠へいれて育ててやらうと思つてゐたに、神さまがおらたちの手にくだされたのは、ぼろぼろの籠ぢや……」

彼は大聲でわめきたて、まるで火傷でもしたやうに部屋ぢやをとびまはり、ウムム呻きながら、子供たちを番づき、小さなかさかした手で拳固をにぎつて祖母をおどかしつけた。

「きさまが子供らを甘やかしすぎたからいけねえんぢや、このずぼら女め！ きさまがわるいんぢや！」

悲痛な興奮にかられて、彼はつひに涙腺になり、部屋の隅の聖像の下にとんでいつて、自分のひからびた胸を力まかせにどんだんとたたくつた。

「ああ、神さま、わしが他の者より罪ぶかいといふんでござえますか？ なぜでござえますか？」
そして、涙にぬれた眼を憎憎しげに、意地わるく光らせながら、全身をふるふるはせた。

祖母は暗がりになつて、だまつて十字を切り、それからおもむろに彼に近づいていつて、さとした。
「なにをそんなに歎いてゐなざるだわ？ 神さまは自分のしなざることは、みんなよくご存じだよ。わしらよりいい子供をもつてる人が、そんなにたくさんあるだかね？、どこへいつちまつたつてさ、お父つあん、同じやうなもんだよ。言ひあひをして、はては取つ組あひになるの

がおちだよ。どこの父親だつて、母親だつて、みんな自分の罪を涙で洗ひきよめるだ、あんたひとりだけぢやねえだよ……

このお説教が彼の心をしづめることもあつた。彼は無言で、ぐつたりして寢床に身をなげだす。そして私と祖母とはそつと自分たちの屋根裏の部屋にかへつてくるのであつた。

ところがあるとき、祖母がやはりさうして彼のそばによつていつて、やさしい言葉をかけると、彼はくるりとふりむいて、いきなり拳を固め、祖母の顔を力まかせにガンとたくつた。祖母はよろよろとよるめき、片方の手で唇をおさへてぐらぐらしてゐたが、おきにしやんと足をふんばり、ひくいおちついた階でいつた。

「チエツ、馬鹿ぢぢい!……」
さういつて、彼の足もとに、血のまぢつたつばをべつと吐いた。祖父はもう一度大膽をあげてほえたて、また両手をふりあげた。

「あつちへいけ! 叩つ殺すぞ!」
「馬鹿ぢぢい!」 祖母は扉口をでてゆきながら、くりかへしていつた。祖父がすぐに後を追ひかけたが、

私は、あたたかい寝煖爐の煉瓦が氷のやうに思へて、いそいで這ひおきて、外に逃げだしてしまつた。上の部屋では、祖母が部屋ぢうを歩きまはりながら、口をすゝいでゐた。

「お祖母さん、痛いかい?」
彼女は躊躇つこへいつて、汚水桶に口の水を吐きだしてきて、おちついて答へた。

「何ともないよ、齒は丈夫だ。唇が少し切れただけだ。」
「なぜ、なぐつたの?」

祖母は窓から往來をながめて、いつた。
「蟲の居所がわるかつたんだよ。年をとつてくるといろんなやりそこなひが氣にかかると……さあ、お前は寢なよ、そんなこと心配しないでさ……」

私は彼女にまだ何か訊ねた、けれど彼女はいつになくきびしく叫んだ。
「寢なつていつてるのに! いふことをきかない子だね……」

祖母は窓べに坐つて、唇をチュートチュートしては、しきりにハンカチにつばを唾いてゐた。私は着物をぬぎな

祖母はゆつくりとしきりをまたぐと、彼の鼻のさきで、びしやりと扉をしめてしまつた。

「老いぼれのけだものめ。」 祖父は扉口の側柱にしがみついて、指でそれをひつかきなが、炭火のやうに顔をまつ赤にして、しわがれ聲でわめいた。

私は寝煖爐の上に生きた心地もなく坐つてゐた。いま見たことは、どうしても木當とは思へなかつた。私の眼のまへで祖父が祖母をなぐつたのは、これがはじめてであつた。これは何ともいへない嫌な氣持を私におこさせうつつてきたのだ。私はどうしたつてそれと妥協することとはできなかつた、いやそれは私を壓しつぶしさうな氣さへした。祖父はなほも側柱にしがみついて突立つてゐた。まるで灰をかぶつたやうに全身が灰色に見え、小さい身體をますます小さくちぢこめてゐた。そのうちに、ふいに部屋のまんなかに歩いてきて、ひざまづき、もうこらへきれないやうにへたへたと前にのめり、片手を床についた。がすぐにまた身をおこして、両手で自分の胸をどんとんとたたいた。

「ああ、神さま……」

がら、祖母の方をうかがつた。彼女の頭上の、青い四角な窓のむかふに、星がかがやいてゐた。往來はもうひっそりとし、部屋のなかはくらかつた。

私が横になると、祖母は近づいてきて、そつと私の頭をなでて、いつた。

「さあ、ぐつすり眠なよ。わしは、お祖父さんのとこへ、ちよつといつてくるからね……お前、お祖母さんのことをあんまり心配しないがいだよ、わしの方にもやつぱりわるいところがあるだね……んぢや、もう眠なよ!」

私に接吻をして、彼女は出ていつた。私はたまらなく悪しくなつてきて、ゆつくりした、柔かいあたたかい寢蓆からとびおきて、窓べにちかづいた。そしてがらんとした往來を見おろしながら、たえきれない寂しさに身體を石のやうに固くちぢこめてゐた。

六

また何か悪夢のやうなことがはじまつた。ある晩、お茶をのんでから、私は祖父と桌にむかつて詩篇をよんで

をり、祖母が食器をあらひはじめた、そこへヤコフ伯父が、いつものことながら髪を古幣のやうにふりみだしてとびこんできた。挨拶もせず、帽子を部屋の隅にかなぐりすてると、彼は全身をぶるぶるふるはせ、兩手をふりまはしながら、早口にしゃべりだした。

「お父つあん、ミシカの野郎がめちやくちやに暴れてゐるだよ。おれんとこへきて飯を食つてさ、一杯やつたら、酔わばらつて、氣狂ひさわぎをはじめちまつた。食器はこはす、お客さんからのたのまれものの毛織物をずたずたに切つちまふ、窓はたたきわる、そのあげくにおれやグリゴリイにからんでくるつてわけさ。いまにこへおしかけてきて、一騒ぎやるせ。「親父の野郎、ひげつかんで、叩き殺してくれよ！」つてどなつてたからな氣をつけなよ、お父つあん……」祖母は卓に兩手をついてゆつくりと立ちあがつた。顔をへんにひきゆがめ、顔ぢうのしわを鼻にあつめたので、なんだか斧そつくりの不氣味な顔になつた。

「聞いたか、おつ母ア？——彼はキーキー聲でいつた。——なんちうこつた、あア？ 血をかけた伴が、親父をころしにくるつていふだ！ 時世ぢやな、これも！」

……

肩をしゃんと張り、部屋をよこぎつて、扉口にちかづいていつて、輪鉤におもい掛金をガチャリとおろして、ヤコフのところにもどつてきた。

「きさまらはみんな、ワルワラの持參金をねらつてるんぢやらう？ んなら、これをやるわ！」

彼は人差指と中指とのあひだから親指をのぞかせる拳をにぎつて、ヤコフの鼻の下にニユーツとつきだしたヤコフはむつとして、うしろに飛びのいた。

「お父つあん、おらあ何もそんな？」

「なんだと、この野郎！ おれあちやんと知つてるぞ！」

祖母は一言も口をいれず、いそいで茶碗を戸棚にしまつてゐた。

「おらあ、お前たちの身を案じて、とんできただに

……

「ふうん？——祖母は鼻のさきで笑つて、叫んだ。

「そりや感心なこつた！ お禮をいふぜ、伴や！ さあ、おつ母ア、このおべつか野郎の手に、火桶棒か、火のしでも持たせてやれや！ おい、ヤコフ、きさま、兄

貴が入つてきたら、それでなぐりつけてみる！ お前の頭をぶんなぐるかはりにな！」

伯父はポケットに兩手をつつこんで、部屋の隅にひきさがつていつた。

「お父つあんたちが、おらを信用しねえんなら……」

「信用だと？——祖母が足をふみならして叫んだ。——とんでもねえ、おれはな、どんなけだものでも信用してゐるだ、犬でも、ハリネズミでもな。しかし、きさまだけはまあ「待つた」だな！ きさまがあいつに飲ませで、吹きこんだつてことぐれえは、おれにはちやんとわかつてるんぢや。さあ、ぶんなぐつてみる！ おれか、兄貴の野郎か、どつちかをぶんなぐれ……」

祖母がそつと私に耳うちした。

「階上へかけてつて、窓からのぞいて見てゐておくれ。往來に、ミハイル伯父さんが見えたらな、すぐここへとんできて、いふんだよ！ さあ、早くいきな……」そこで私は、たけりくるつた伯父が襲撃してくるのをいささかびくびくしながらも、しかし自分に課せられた任務に鼻をたくししながら、窓にはりついて、往來を見はつてゐた。ひろい往來は、濃い埃の屑におほはれ、そ

の埃のなかから大きな丸石が一つ、睡物のやうに凸出してゐた。往來は、窪地をよこぎつて、左の方へずつとのびてゆき、監獄廣場につづいてゐる。そこには、四隅に塔のついた灰色の建物が、粘土質の地面の上にとつしりとたつてゐる。古い監獄なのだ。その建物には、何かもの悲しい、心にしみいるやうな美しさがあつた。右手の方には、三軒ばかりおいたさきから、ひろびろとしたセリヤヤ廣場がひろがつてゐる、そこには、拘留所の黄いろい建物と、鉛色をした消防の火の見とが建つてゐる。火の見の櫓のまわりを、見張りの消防夫が、ちやうど鎖につながれた犬のやうに、ぐるぐる歩きまわつてゐる。廣場のいたるところに窪みがあつて、その一つの底には青ぐろい泥水がたまつてゐる。そこからさらに右手にあつて、腐つた臭ひを放つてゐるデューコフ池がある。ある年の冬、伯父たちが私の父親を氷のわれ目になげこんだと祖母が話してくれた、あの池だ。窓のほぼ正面にささまの色のをした小さな家が立ちならんでゐる小路がある。この小路は、三棟者教會のずんぐりした、太短い建物にしがみついてゐるやうに見える。まともに見ると家家の屋根は、庭の緑の波のなかに、底をだしてひつく

りかへつてゐるポットのやうに見えた。

ながい冬の吹雪にふきさらされ、果しない秋の長雨にあらはれて、色のさめてしまつたこの通りの家は、すつかり埃をかぶつてゐる。その家は、ちやうど教會の入口にあつまつた乞食のやうに、おたがひに身をよせあひ、大きな眼のやうな窓をいぶかしげに見ひらいて、私といつしよに、だれかを待つてゐるやうである。人どほりは、ごくまれだ。しかもその人人は、煙爐の跡をおそるおそる這つてゆく油蟲みたいな、のろのろと歩いてゐる。息づまるやうな蒸暑さが、私のところまでのぼつてくる。私の大嫌ひな、青ねぎと人窓とをいれたまん頭をやく匂ひが、ぶんぶんしてきた。この匂ひをかくと、私はいつも情けなくなつてしまふのだ。

寂しい。なんだかまるで、やりきれないほど寂しい。胸に、どろどろした熱い鉛を注ぎこまれたやうだ。それが内側から私をおしつけ、胸をおしひらき、肋骨をむしりとりやうとする。なんだか私は、シャボン玉のやうにプーツとふくれてくるやうな気がした。棺桶のやうな感じのする天井の下の、この小さな部屋が、私には狭すぎるやうな気がしてきた。

そら、きた！ ミハイル伯父だ。彼は小路の、灰色の

家の角から、こつちをのぞいてゐる。帽子を耳のところまで眼深にかぶり、耳が兩側にびんと突立つてゐる。罽茶色の上衣を着、膝まである泥だらけの長靴をはき、片手を格子じまのズボンのポケットにつっこみ、片方の手で鬘をつかんでゐる。こつちからは顔は見えないけれども彼はまるで一飛びに往來をとびこえて、そのくろい毛むくぢやらの手で祖父の家につかみかからうと、身がまへてゐるやうであつた。すぐに驅けおりていつて、彼がきたことを告げなければならぬのに、私はなかなかその窓へをはなれることができなかった。往來の埃に自分の長靴をよごされるのをおそれるやうに、伯父が用心ぶかい足どりで往來を横ぎつてくるのを見、彼が酒場の扉をあけるのを耳にした。扉がギーときしり、窓ガラスがガタガタとなつた。

私はいそいで驅けおりて、祖父の部屋の扉をたたいた。

だれぢや？ 祖父が扉をしめたままで、亂暴に訊いた。お前か？ うむ、何？ 酒場へ入つてつたと？ よし、んぢやまたむかふへいつてろ！

——んでも、おらあ、あそこおつかねえだもん……
——まあ、我慢しろ！

もう一度私は窓にへばりつく。あたりは暗くなつてきて、往來の埃はふくれあがり、だんだんに深く、黒くなつてきたやうだ。家の窓からは、黄色い燈の光がながれだしてくる。向ひの家では音楽をはじめ、さまざまの音色が、もの悲しい歌や楽しい歌を奏でだす。酒場でも歌をうたつてゐる。扉があくと、疲れきつたやうな、無茶苦茶に調子のはづれた聲が、往來に流れていく。それは眼つかちの乞食のニキキ、シカの聲であること、私は知つてゐる。この男は、鬚むじやの老人で、右の眼のあるべきところに、赤い炭火みたいなものがくつついてゐるだけで、左の眼はびつたりと閉されてゐる。扉がしまると、彼の聲も、斧で断ちきられたやうに、ぶつたりと聞えなくなる。

——祖母は、この乞食をうらやましがつて、よく彼の歌をききながら、溜息をついて、いふのである。

——ほんとに仕合せなものだよ。なんていろんな歌を知つてゐるこつたらうね。うまいもんぢやないかい！
ときをり彼女は彼を中庭に呼びいれる。彼は昇り段に

腰かけて、杖をつつばつて、歌をうたつたり、物語をしたりする。祖母は、ならんで腰をかけて、それに聞き入りながら、いろんな質問をする。

——ちよつと待つとくれ、そんぢや聖母さまは、リヤザンにもゐたことがあるだかね？
すると乞食は、自身ありげに、低聲で答へる。

——聖母さまは、どこへでもいきなすつただよ、どこかへでもな……
ねむいやうな疲勞が、眼にみえない流れとなつて往來にたまたまひ、心臓や眼をギューギューおしつける。祖母がきてくれたら、どんなにいいだらう！ いや、祖父でもいい。いつたい私の父はどんな人間だつたのだらう？ 祖母やグリゴイや乳母のエヴゲニヤがあんなにほめるのに、祖父や伯父たちはなぜきらひなんだらう？ それから、私の母はどこにゐるんだらう？

私はよく、祖母からきいたお伽噺や昔話の主人公に母を見たて、母のことを考へる。母がこの家に住むことをのぞまないといふことが、私の夢のなかで、彼女をますます高貴なものにみせる。彼女はきつと大きな街道にある旅館にとまつてゐて、その街道をとほる金持から

掠奪をしては、盗つたものを乞食たちに分けてやる強盗團の仲間に入つてゐるのであらう、と私は夢想する。あるひは、ひよつとしたら、彼女は森のなかの洞窟に住んでゐて、むしろ善良な強盗たちといつしよなのだが、そこで彼らのために煮炊きをしたり、盗つてきた黄金の見張りをしたりしてゐるのかもしれない。それとも、「女領主」のエンガレイチエワが聖母といつしよに歩きまはつたやうに、自分の宮をかぞへながら世界ちうを歩きまわつてゐるのかもしれない。さうすると、聖母が、「女領主」を罰したやうに、やつぱり私の母をも、かういつて罰すであらう。

—— 欲ふかい 僕よ、汝には世界ちうの

金銀をあつめることはできはせぬ

飢えた魂よ、世界のすべての寶もて

汝の裸身を蔽ふことはできはせぬ……

すると母が、やはり強盜の「女領主」の言葉で答へる。

—— 聖なる母よ、ゆるしたまへ

罪ふかきわが魂をあはれみたまへ

わが盗みは、わが身のためではありませぬ

ただ一人のいとしいわが子のためでございます！

……

すると、祖母のやうにやさしい聖母は、母を許して、いふ。

—— おお、ワリーヤよ、ダツタンの血よ

キリスト教徒のわざはひよ！

さらば、汝はすきな道をゆけ

涙にみちた、その小徑を！

されど、ロシアの民には手をふれるな

森をゆきてモルドワ人を掠め

野をゆきてカルムイク人を追へ！——

そんな話を思ひうかべながら、私は夢のなかにあるやうな氣持であつた。と、ふいに階下の方の玄関や中庭で人の足音や、叫び聲や、わめき聲がおこつて、私はハツと眼をさました。窓から身をのりだしてみると、祖父と

ヤコフ伯父と、酒場ではたらいである滑稽なチエレミス人のメリヤンとの三人で、ミハイル伯父を耳門から往來にひつぱりだしてゐるのが見えた。伯父はさかんに抵抗してゐたが、みんなで腕や、背中や、首をぶんなぐり、蹴とばし、たうとう往來の埃のなかにつんのめるやうに突とばしてしまつた。そして、耳門をバタンとしめ、掛金をガチャガチャとかけた。しわくちやになつた帽子が門ごしに放りだされた。それきり靜かになつた。

伯父はしばらくそこに横はつてゐたが、やがて立ちあがる。着物はずたずたにひきさかれて、ぼろぼろになつてゐる。大きな丸石をひろつて、門になげつける。ちやうど蠶の底をわつたみたいで、陰にこもつた大きな音がする。酒場から黒い人影がいくつも這ひだしてきて、手をふりまはして、ワアワア叫ぶ。家家の窓から、人人が顔をつきだす。往來は急にまた活氣づき、笑ひ聲や叫び聲があふれる。これもまたお伽噺のなかの光景のやうだ。ちよつと好奇心をそそられるけれど、なんだかひどくこんぐらかつてゐて、不愉快である。

と、ふいに、すべてが拭ひさられたやうに消えさり、何もかもが沈黙してしまふ。

……しきのぎはの長持の上に、祖母が腰をおろして、まるで思もせず身うごきもせず、背を丸めてゐる。私はそのまへに立つて、彼女のあたたかい、やはらかな、涙にぬれた頬をなでてやる。だが彼女は、どうやらそれを感じないらしく、陰氣な顔をして一人ぶつぶつ言つてゐる。

—— 神さま、お前さまんこには、わしや、わしの子供らに、くださる智慧がなくなつちまつたんでござえますか？ 神さま、どうか憐れんでおくんさいまし……

ボレワヤ街の家には、祖父は春から春まで、せいせい丸一年しかゐなかつたやうに思ふ。だが、そのあひだにこの家は町ちうの評判になつてしまつた。ほとんど日曜ごとに子供たちが門のまへにあつてきては、大よろこびで町ちうにふれまはるのであつた。

—— カシーリンの家ちや、また喧嘩してゐるよ！

ミハイル伯父はいつも夕方姿をあらはして、夜ちう家を包圍してゐた。家の住人たちはみんなびくびくものであつた。ときどき二三人の加勢がいつしよにくることもあつた。クナヴィノ町の鼻つまみの亂暴者たちで、いつ

も窪地の方から裏庭にしのびこんできては、いちごやすぐりの木をみんなひっこぬいたりして、酔っぱらひの狼ぞきのかぎりをつくしていつた。いちどなどは、風呂場をぶちこはし、風呂臺とか、腰掛とか、湯桶とか、そこにあつたこわせるものは何でもみんなたたきこわして、かまどまでたたきわり、床板をはぎ、扉や窓枠までひきむしってしまった。

祖父は暗い顔をしてむつつりと窓べに立つて、彼の家財をだいなしにしてゐる人人の暴行に耳をかたむけてゐた。祖母が中庭にかけだして、闇のなかに姿をけした。やがて、哀願するやうな叫び聲がきこえた。

——ミーシャ、お前何をするんだね、ミーシャ！

裏庭の方から、それに答へて、ロシア特有の閑くにたえない、馬鹿げた、ひどいわる口がとんできた。彼女に尋づいてゐるその畜生どもには、その言葉の意味がきつとはつきりわからないのだらう。

そんなときには、祖母のあとを追つてゆくわけにはいかない。けれど祖母がゐないとこわいので、私は祖父の部屋におりてゆく。ところが祖父は私を見ると、しわがれ顔をたてて、どなりつける。

——あつちへいつとれ、馬鹿野郎！

私はまた屋根裏の部屋にかけあがり、その明り窓から中庭や裏庭の闇のなかを見つめ、祖母から眼をはなすまいとしてゐた。急に私は祖母が殺さればしまいかといふ考へにおそはれ、いきなり大きな聲をたててわめきだした。祖母が歩みをとめる。酔っぱらつた伯父は、私の聲をききつけると、亂暴に、口ぎたなく私の母を罵る。

そんな風なある晩、祖父は加減がわるくて床についてゐた。そして、手拭でしばつた頭を枕の上でふりたてながら、口やかましく泣言をならべてゐた。

——ほんとにな、何のために生きてきたただか何のため罪をおかし、身代をこさへてきたただか？ 恥や外聞さへなけりや、すぐにこれから警察へいつてきて、明日は知事んとこへでもいくんぢやに……みつともねえこつた！ 自分で自分の子供を警察の手にわたす親がどこの世間にあるもんで！ さうするつてえと、つまり、年よりはおとなしく寝てろつてわけか。

彼はふいに寝臺からおりて、よろよろとよるめきながら、窓べによつていつた。祖母が彼の脇の下をかかへた。

——どこへいくだね、お前さん、どこへいくだね？

——灯をつける！——咽喉をせいぜいひかせて息をすひこみ、ふかい溜息をついて、彼はひひつけた。

祖母が燭燭をつける。彼はその燭臺をとつて、ちやうど兵隊が擡げ銃をするやうに、それを自分のまへに擡げて、窓から大きな聲をだしてどなつた。その恰好は、見てゐてもをかしかつた。

——おーい、ミーシカ、この泥棒野郎！ カイゼンかきの狂犬め！

それと同時に、窓の土のガラスがガチャンとわれて、勢いなにとびちつた。そして祖母のちかくの卓の上に、半分にあつた煉瓦がおちた。

——あたるもんか！——祖父がわめいた、そしてヒヒヒ……と笑ひだした、いや泣きだしたのかもしれない。祖母はまるで私にするやうに、祖父の腕をぐいとつかんで、寝臺の方につれもどして、眼をキョロキョロさせて言ひきかせた。

——どうもなかつたかね、お前さん？ まあ、おかげさまで、よかつたにな！ あんなことしたら、あの子はシベリヤ行きですよ。ところが、あの子は、カーツとな

ると、シベリヤ行きだらうが何だらうが、わけがわからなくなつちまふだよ！……

祖父は足をばたばたさせて、ひからびたしわがれ聲でむせび泣いた。

——殺すなら殺せ……

窓の外では、がんがん怒鳴つたり、足をふみならしたり、壁をひつ掻いたりしてゐた。私は卓から煉瓦をつかんで、窓べにかけよつた。もう一歩といふところで祖母が私をつかまへて、隅っこにつきとばして、しかりつけた。

——何をするんだい、馬鹿め！

その次のときには、伯父は太い棒くいをかかへて、中庭から玄關にをどりこんできて、黒く塗つた昇り段の上につつ立つて、扉をぶちこはじにかかつた。扉の内側には、祖父がつかえもち、二人の下宿人がやはり何か棒きれをもち、それに酒場のおかみさんの背のたかい女が繩棒をにぎつて、待ちふせてゐた。そのうしろを、祖母がおろろして歩きまはりながら、しきりに哀願してゐた。

——わしをあの子のどこへ出しておくんない！ あの子に一言いはせておくんない……

祖父は、ちやうど『熊狩』の繪にある獵槍をもつた百姓そつくり、足をまへにふんばつて立つてゐた。祖母がそばに駆けよつてゆくと、彼はだまつて眩と足で彼女をつきのけた。四人はおそろしい恰好で身がまへをして立つてゐた。頭上の壁にランプがついてゐて、彼らの頭に不吉な光を殺作的にならしてゐる。私は壁裏裏のぼる階段からこのありさまをながめてゐた、そして祖母を早く階上につれてゆきたくなつた。

伯父は一所懸命に扉をぶちこはしにかかつてゐた。扉はもうすこしで上の蝶番がとびさうになつて、はげしくゆれてゐる。下の蝶番はもうとつくにこはれて、ギキギキと氣持のわるい音をたててゐた。祖父はそれとよく似た氣持のわるいキキキ音をたてて、加勢の人たちにつた。

腕か、足をぶんなぐつておくんよ、頭はいけねえせ……

扉とならんで、壁に、ちやうど頭が入るぐらゐの小さな窓があつた。伯父はもうそのガラスをとつくに叩きわつてしまひ、ガラスの破片のつきでたその窓は、眼玉をくりぬかれた眼のやうに、黒く見えた。

祖母はその窓口にかけよつて、そこから手をだしてふりながら叫んだ、

——ミィシャ、おねがひだから止めとくれ！ みんながお前を不具にしちまふつていつてゐるだでな、止めとくれよ！

伯父は確いいで、彼女の腕をなぐつた。何だか輻のひろいものが、窓のそばをすべりおりて、彼女の腕の上におちてきた。それにつづいて、祖母がヘタヘタと坐りこみ仰向けにひっくりかへつた。ひっくりかへりながらも、彼女は叫んだ。

——ミィシャ、逃げとくれ！

——おう、どうしたい、おつ母ア？——祖父がおそろしい聲で吠えた。

扉がガタンとおしあけられて、その黒い扉口から伯父がとびこんできた、が、たちまち、シャベルで放りだされた塵芥みたいに昇り段から庭に放りだされてしまつた。

酒場の主婦が、祖母を祖父の部屋につれていつた。祖父もまもなくそこへやつてきた、そして氣むづかしい顔をして祖母のところによつていつた。

——骨は大丈夫かや？

——それがわ、どうも折れたらしいだよ。——祖母が眼をつぶつたまままでいつた。——それはさうと、あの子はどうしたですい？ あの子は？

——まあまあ、おちつけ！——祖父がいかめしい調子で叫んだ。——まさか、おれがけだものでもあるめに！ やつは、ぐるぐる巻きにして、納屋に放りこんだいた。おれが、さんぶり水をぶつかけてやつたさ……ふん、とんでもねえ悪黨野郎だ！ だれに似て、あんな奴ができやがつたもんかな？

祖母が呻きだした。

——いま整骨醫を迎へにやつといたからな、もう少し我慢しろよ！——祖父は、祖母によりそつて寝臺に腰かけながら、いつた。——おらたち二人は、まつたくこれが苦の種ぢや、本當に壽命がちぢまるわい！

——お前さんがあれらにみんな分けてやつちまへばいいだに……

——んぢや、ワルワラはどうするだ？

二人はながいこと話しあつてゐた。祖母は低い聲で、訴へるやうに。祖父はぶりぶりした、甲高い聲で。

やがて、せむしの小さな老婆が入つてきた。耳までさけてゐるやうな大きな口をしてゐて下あごがガクガクふるへてをり、そのためにいつも魚のやうにポカンと口をあけてゐた。そして尖つた鼻がぐつと垂れさがつてきて、

上唇ごしにその口のなかをのぞきこんでゐる。眼が見えないので、杖をズーゾーひきずつて、足をやつと一歩づつうごかしてゆく。片方の手に、何かがらから鳴る包みをもつてゐる。

これは祖母を迎へにきた死の使者つかひのやうに思はれたので、私はいきなりその前に立ちふさがつて、ありつたけの聲でどなつた。

——出ていけッ、畜生！

祖父が無造作に私をつかまへて、ぐいぐいと亂暴に屋根裏の部屋につれさつた……

七

私はもうずつと前から、祖父の神さまと祖母の神さまとは、まるで別な神さまだといふことがわかつてゐた。よくこんなことがあつた。祖母が眼をさまして、長い

こと寝臺の上に坐つて、その驚嘆すべき髪の毛を梳いてゐる。絹のやうに光澤のある長い、まつ黒な毛の房を手でつかんで、齒をくひしばつてぐいぐいひつぱつたりする。そして、私の眼をささないやうに、口のなかでぶつぶつ文句をいつてゐる。

「チョツ、しやうがないね！ もつれちまつて。しやくにさはる髪つたら……」

やつとのことで梳きをはると、いそいでそれを太い房に調み、ちよこちよこつと顔をあらひ、腹立たしげに鼻をならし、まだ睡む氣のさらない大きな前立たしさを残したまま、聖像のまへに立つ。これからやつと、本當の朝の洗面がはじまるのだ、そしてたちまち彼女の全身が生き生きとしてくる。

猫背の背をまつすぐにのぼし、頭をぐつともたげて、カザンの聖母のまんまるい顔をやさしく眺めながら、彼女は念を入れて大きく十字を切り、熱心に騒ごうしく祈りの言葉をささやいた。

「清らかな聖母さま、今日も、お恵みをたれたまへ！」

地面につくほどお辭儀をして、ゆつくりと背中をのぼ

すと、またなはいつそう熱心に、感動をこめて、ささやいた。

「喜びの源よ、清らかな美女よ、花ざかりの林檎の木よ……！」

彼女はほとんど毎朝、新しい讚美の言葉をみつけた。それがあつたために私はいつも、特別に注意をはらつて、彼女のお祈りに耳をかたむけてゐるのであつた。

「わが清らかな天の御心よ！ わが防ぎ、わが守りよ、黄金の太陽よ、神の母よ、悪の誘惑から守りたまへだれをも辱しめることがなく、またこのわしが徒らに他人から辱しめられることもないやうに守りたまへ！

暗い色の眼に微笑をたたへ、いくぶん若返つたやうな感じのする彼女は、重さうな腕をゆつくりとうごかしてまた十字を切る。

「神の子、イエス・キリストさま、この罪ぶかいわたしに、お恵みをたれておくんないまし、聖母さまに免じて……」

彼女のお祈りは、いつもきまつて、純朴な心の底からの讚美をはるのであつた。

彼女の朝のお祈りは、そんなに長くはなかつた。とい

ふのは、サモワールを立てなければならなかつたからだ。祖父はもう女中をつかつてはるなかつた、だから祖母が、いひつけられた時間までにはちやんとお茶の支度をしておかないと、祖父は機嫌がわるくて、いつまでも悪たれてゐた。

ときをり彼は祖母より早く眼をさまし、屋根裏の部屋にのぼつてきて、彼女のお祈りの場に立ちあひ、うすいくろげんだ唇をいかにも人を小馬鹿にしたやうにひんまげて、しばらくのあひだ彼女のささやきを聞いてゐる。そして、あとでお茶をのみながら、文句をいふのであつた。

「おれがお祈りのしかたを、いくら教へてやつてもきさまは自分勝手なことばかりほざいてけつかる、しやうのねえ馬鹿女だ！ よくそれで神さまが辛抱しておいでなさるだな！」

「神さまはちやんとおわかりになるだ。——祖母が確信をもつて答へる。——神さまにや、何を申しあげても、ちやんとわかつてくださるだよ……」

「何をこくか、すべた女め！ えーい、こいつらめ……」

祖母の神さまは、一日ちう彼女といつしよにゐた。彼女は動物にまでも、神さまの話をした。この神さまには人間でも、犬でも、鳥でも蜜蜂でも、草でも、何でもかんでもすべてのものがたやすく、そしておとなしく従つてをり、神さまの方でもまた地上のありとあらゆるものに、いつも同じやうにやさしくふるまひ、大へんに近いものになつてゐる、といふことが私にもよくわかつた。

あるとき、酒場の主婦の猫が、庭からむく鳥をくはへてきたことがある。この猫は、なかなかすばしこくて、せい澤で、おべつかももので、毛は煙色、眼は金色で、家ぢうの人氣者となつてゐた。祖母は、すぐにその傷ついた小鳥をとつて、猫をしかりつけた。

「お前は神さまをおそれねえだかい、この馬鹿猫め！」

酒場の主婦と門番とがそれをきいてアハハ……と笑ひだした。すると祖母は、むつとしてその人たちをどなりつけた。

「お前さんらは猫にや神さまがわからないとでも思つてるだかね？ どんな生き物だつてみんな、お前さん

らと同じやうに、神さまがわかつてるだ。思ひやりのねえ人たちだよ、お前さんらは……

少し肥りすぎて、すつかり元気がなくなつてしまつた馬のシャラーブを車につけながら、彼女はそれに話しかける。

——これ、神の候や、何をそんなにしよげこんでゐるだね、え？ お前も年をとつたなア……

馬はフーツと溜息をついて、首をふつた。

それでもやつぱり、祖母の方がまだ祖父よりも神の名を口にするには少なかつたのだ。祖母の神さまは、私にもよくわかり、ちつともこはくはなかつたが、ただそのまへで嘘をつくことだけはできなかつた。恥しいのである。その神さまは、私の心に打ち克つことのできない恥しさの念をよびおこすだけであつたが、そのために私はけつして祖母には嘘をつかなかつたものだ。要するにただこの善良な神さまには、何かかくしだてすることができないのだ、いや隠しだてをしようといふ氣持さへおきないのだといつていいだらう。

あるとき、酒場の主婦が祖父と喧嘩をして、彼の眼のまへで、その喧嘩には何のかかはりもない祖母まで罵り

ひどい黒熊をついて、あげくのはてに彼女に人蔭をなげつけた。

——おかみさんや、お前さんも馬鹿な人だね。——祖母はおちつきはらつていつた。しかし私はひどく腹をたててしまつて、この意地わる女に仕返しをしてやらうと決心した。

この二重あごで、眼がなくなつてしまふほどに肥つた、あか毛の女を、どうしたら一番ひどい目にあはせることができるだらうかと、私はながいこと考へた。

私は、この家の住人たちの内輪喧嘩を觀察した結果、彼らがおたがひに侮辱された仕返しとしては、猫の尻尾を切つたり、犬に毒を食はせたり、鶏をころしたり、あるひは夜なかに相手の穴蔵にしのびこんで、キャベツや胡瓜をつはである桶に石油を注ぎこんだり、クワスの樽に穴をあけたりすることを知つた。けれど、そんなことはみんな、どうも私の氣に入らなかつた。もつと徹底した、もつとおそろしいことを、何か考へだす必要があつた。

私は考へついた。酒場の主婦が穴倉へおりていつたのを見はからつて、その上から戸をはたんと閉め、錠をかやつてくれたつてわけだね？ さうかい！ そんならわしは、そのお禮に、お前を煙囪の下の鼠んなかへでも放りこんでやるわ、さうしたら眼がさめるだらう。とんでもねえ忠義立てをしてくれたもんさ。まつたく、子供だと思つて油断してりや、何をしでかすかわかつたもんぢやないね！ お祖父さんにいひつけてやるから、お祖父さんがきつとお前の皮をひんむいてくれるだよ！ さあ早く階上へいつて、本でも讀んでな……

その日は一日ちう祖母は私に口をきかなかつた。けれど夜になつて、お祈りをするまへに、彼女は寢臺に坐つて、懇懇と私に説いてきかせた。その言葉はいつまでも深く印象にのこつてゐた。

——いいかい、アレクセイや、わしのいふことをよく聞いておきなよ。大人のことには、けつして首をつっこむんぢやないよ！ 大人つてものはな、何處も神さまの試練をうけて、もう強なしになつちまつた人間なんだよ。んだけえと、お前はまだそんな眼には透つちやらない、だから子供は子供らしくしていかなきやいけねえだ。まあ待つてゐなよ、そのうちに神さまの方からお祈りの心にふれてきて、お前のなすべきことをちやんと指圖してく

けて、その上で復讐の踊りををどりまくつたあげく、錠を煙囪の上に放りなげておいて、祖母が料理をしてゐる竈所へア目散にかけこんだ。祖母はなぜ私がそんなに有頂天になつてゐるのかすぐにはわからなかつたが、そのわけがわかるといきなり私の横面をビシヤリとはりつけ、中庭にひつぱりだして、屋根へ錠をとりにつけてこいといひつけた。彼女の襦袢にびつくりして、私はだまつて錠をとつてきた、そして中庭の隅に上げていつて、そこから、祖母が戸閉めにあつた主婦をだしてやり、二人が仲よささうに笑ひかはして庭を歩いてゆくさまをながめてゐた。

——おぼえてたよ。——酒場の主婦はぶつくりとぶくれた拳をつきだして私をおどかした。けれど眼のないやうなその顔はいかにも人が好きさうに笑つてゐた。だが祖母は私の襟首をつかまへて、ぐいぐい竈所につれていつて、訊いた。

——なんだつてお前、あんなことをしたんだい。

——んだつて、あいつがお祖母さんに人蔭なんてぶつけるだもん……

——さうすると、つまり何かい、お前はわしのために

だされ、お前のゆくべき道を示しておくんなさるだ。わかつたかな？ 誰がわるいとかいいとかいふことは、お前なんかの口だしをすべき事柄ぢやないんだよ。神さまがちゃんと言きをして、罰しておくんなさるだ。それは神さまの仕事であつて、わしらの仕事ぢやねえだよ！

彼女はしばらく目を閉じて、ちよつと煙草をかいだりしたが、やがてまた右の眼をパチパチやつて、いひそへた。

「そりやな、神さまだつて、さういつもいづも、誰のどこがわるいかなんてことが、いちいちおわかりになるもんぢやないけえどな。」

「んぢや、神さまは何もかもご存じぢやないの？」

「私はびつくりして訊きただした。すると祖母はそつと、悲しげに答へた。」

「もし何もかもご存じだら、人間がこんなにあるいことばつかりしやしないだらうがね。きつと神さまは、天國から、この地上のわしらみんなを、いつもじいつと眺めおろしておいでになつて、ときどきポロポロと涙をながしてお嘆きになるんだらうよ。「おお、わしのかはいい人間どもよ！ わしはお前たちが、かはいさうでな

らぬ！」つてな。

彼女は自分でも泣きだした、そしてぬれた頬をふきもしないで、部屋の隅へお祈りをささげにいつた。

それ以来、祖母の神さまは私にはいつそう近しい、いつそうわかりやすいものになつた。

祖父もやはり私に教へて、神さまはどこにでもゐて何でもでき、何でも見とほしてゐて、人間のあらゆる仕事によき助力をあたへてくれるものだといつた。けれど彼のお祈りのしかたは、祖母とはまるでちがつてゐた。

毎朝、部屋の隅の聖像のそばに立つまへに、彼はながいことかかつて顔をあらひ、それからちやんと着物をき念入りにあか毛の髪にくしをいれ、ひげをとかし、鏡にむかつて、ルバーシカのをのぼしたり、チョッキの下の黒いネクタイをなほしたりする。さうしておいて、まるで泥縁にでも入つたやうに用心ぶかく、聖像のまへに足をはこんでゆく。彼はもういつも必ず、馬の眼みたいいな床板の節の上に立ちどまり、頭をたれ、兵隊みたいに両手を脇にしやんとのはして、しばらく黙つて立つてゐる。それから、抑揚のない、ほそい聲で、勿體をつけいでいふのであつた。

らにこんなことを要求する。

「わが家の醫者よ、わが親のながき年月の煩惱を癒したまへ！ われは心の嘆きをつねに御身のまへに投げ出さん。主よ、わがために心を配りたまへ！」

そして、緑色の眼に涙をいつばいたため、大きな聲でわめく。

「信仰が行ひに代りて、われに負はされたり。神よことさらに自分をつくらふとき行ひを、われは求めず。」

こんどは彼は、手をぶるぶるふるはせて、なんども十字をきり、まるで角でもつて突きたてようともするやうな工合に頭をふりたてる。聲がだんだんに甲走つて、しわがれてくる。後に私はユダヤ教會へときどきゆくやうになつてから、祖父がユダヤ人式のお祈りをやつてゐるのだといふことがわかつた。

サモワールはもうさつきから卓の上で音をたててゐるし、部屋にはクリーム入りのツイ麥の揚まん頭のあげたての匂ひがいつばいにこもつてゐて、食慾をそそる。祖母は氣むづかしい顔をして扉口の欄柱によりかかり、床に眼をおとして、溜息をついてゐる。楽しげな太陽の光が

父と子と聖靈の御名において！

この言葉をきくと、部屋のなかが急にしーんとしづまりかへり、響さへも羽音を遠慮するやうに思はれた。

彼はぐつと頭をもたげて立つてゐる。眉毛がつりあがり、髪が逆だち、黄金色のほゝひげが横につつばつてゐる。彼はまるで生徒が先生の質問にこたへるやうに、てきばきとお祈りの文句を讀んでゆく。その際は、はつきりとおごそかにひびく。

「理由なきに裁く者きたりて、人みな所の業をあばけり……」

自分の胸を拳固でかるくたたいて、なほも執拗に懇願する。

「神よ、御身の前にあるは、罪ある者らなり。わが罪に、御身の顔をむけたまへ……」

言葉を一つ一つはつきりと區切つて、「祈禱書」を讀んでゆく。彼の右足はまるでそのお祈りに調子を合せてそつと足ぶみをしてゐるやうに、こきざみにふるへてゐる。そして、こざつぱりとし、きちんと身なりをととのへてゐる彼の全身が、きつと緊張して聖像の方にのびてゆきだんだんに細く、ひからびてゆくやうに思へた。彼はさ

庭から窓をのぞきこむ。樹木の枝には露が真珠のやうに光つてゐる。朝の大気は、すぐりや熱れた林檎などの、おいしいさうな匂ひを散放してゐる。祖父はまだ一心に祈つてゐる。身體をゆすぶり、ゆすぶり、甲高い聲をあげる。

「わが煩惱の火を消したまへ、人の世の災ひを道ひはらふごとく！」

私は朝の祈禱も、寝るまへの祈禱も、みんなそれらで知つてゐる。すつかり知つてゐるので、私は祖父が間違ひはしないか、何か文句をおとしはしないかと、「所懸命に聞き耳をたててゐる。」

間違ふことはごくまれであつたが、そんなときにはいつも私は人のわるい喜びを感じた。

お祈りがはると、祖父は私と祖母に挨拶をする。

「お早やう！」

私たちもお辭儀をする、そしてやつと食卓につく。そこで私は祖父にいつた。

「お祖父さん、今日は「満すなり」つてところを、ぬかしちまつたよ！」

祖父は満面に朱をそそぎ、ぶるぶる身體をふるはせて腰掛の上にとびあがり、卓上の小皿をとつて彼女の頭に投げつけ、鍬が木の節のところをひくときのやうなキーキー聲をあげて叫んだ。

「出てうせろ、雲つたれ婆アめ！」

祖父は私に、神さまの限りなく大きい力の話をすると、きには、いつもきまつて、何よりもその無慈悲さを殊さらに強調するのであつた。人間が罪を犯したために、まづ大洪水がきたし、それから大火災があり、町がすつかりこはされてしまつた。それからまた神さまは飢餓と疫病とで人間を罰した、こんな風に神さまはいつも地上の世界には剣をもつてのぞみ、罪人には笞をもつてのぞんでゐる、といふのだ。

「神さまの掟にしたがはないで、それをやぶつたものは、だれでも、悲しみと破滅とをもつて報いられるものぢや！」ほそい指の骨で卓をごつんとたたいて、祖父は教へさせた。

私は神が無慈悲であるといふことは、どうも信じられなかつた。祖父は、神さまではなく自分にたいする恐怖を私に注ぎこまうとおもつて、わざとこんな話を考へだ

しきりに訊きただす。

「ううん、本當にぬかしたんだよ！」「されどわが信仰はすべてを満すなり」つていふところで、「満すなり」を言はなかつたのだよ。

「ふうん、さうだつたかなア！」彼はぱつがあるさうに眼をバチバチやつて、叫んだ。

そんなときには、あとで彼はさつと私に何かこつぽどい仕返しをするのであるが、しかし私は彼のどぎまぎした顔を見るだけで、しばらくは有頂天になつてゐるのだ。

あるとき祖母が冗談にいつた。

「なあ、お父つあんや、お前さんのお祈りは神さまも聞きあきたでせうがね。お前さんは、あけてもくれても同じお祈りばかりくりがへしゝるだもの。」

「なんぢやとオ、この女ア？」彼は語尾をひきのばして、憎憎しげにどなつた。「何とほざいた、きさまは？」

「わしがいふのはね、お父つあん、何度聞いてもお前さんのお祈りは、自分の心からの正直な言葉を一言も神さまに申しあげたことはないつていふのさ。」

したのではないかと、私は疑ひをいだいた。そこで私は遠慮なしに訊いてみた。

「お祖父さんは、おれに自分のいふことをきかせようと思つて、そんなこといふの？」

「むろん、さうぢやオ、それでもまだきさまは、いふことをきかんつもりかや？」

「んぢや、お祖母さんの話はどうなの？」

「あんな馬鹿婆のいふことを、きさま本氣にしちやいけねえぞ！」彼は嚴重にいつた。「あの女は若いときからのろまでな、讀み書きもできなけりや、智慧もねえだ。よし、おれがさういつてやるわ、神さまのお話なんか孫にしてきかせては絶対にいかん、といつてな。さあ、言つてみる、アレクセイ、天使の位はいくつある？」

私はそれに答へた、そしてすぐに訊きかへした。

「んぢや、お役人つてのは、何なの？」

「こいつ、また妙なことを言ひだしやがつたな！」彼は苦笑ひをして、眼をつぶり、唇をかみしめていやいやながら説明した。

庭から窓をのぞきこむ。樹木の枝には露が真珠のやうに光つてゐる。朝の大気は、すぐりや熱れた林檎などの、おいしいさうな匂ひを散放してゐる。祖父はまだ一心に祈つてゐる。身體をゆすぶり、ゆすぶり、甲高い聲をあげる。

「わが煩惱の火を消したまへ、人の世の災ひを道ひはらふごとく！」

私は朝の祈禱も、寝るまへの祈禱も、みんなそれらで知つてゐる。すつかり知つてゐるので、私は祖父が間違ひはしないか、何か文句をおとしはしないかと、「所懸命に聞き耳をたててゐる。」

間違ふことはごくまれであつたが、そんなときにはいつも私は人のわるい喜びを感じた。

お祈りがはると、祖父は私と祖母に挨拶をする。

「お早やう！」

私たちもお辭儀をする、そしてやつと食卓につく。そこで私は祖父にいつた。

— そんなことは神さまの知ったこつちやねえ。役人つてのは、こりや人間だでな。役人つてのは、法律の虫みてえなもんよ、法律ばつかり食つて生きてゐるだ。

— んぢや、法律つてどんなもの？

— 法律か？ それは、つまり、習慣だな。—— 祖父

はだんだんに元氣になつてきて、人を射すくめるやうな鋭い眼をきらきら光らして、調子にのつて語つてゆく。

人間が生きてゆくのにア、それには、こんな風にしたら一番いいぢやらうなんて、おたがひに相談しあふわけぢや。さうしてそれが習慣になつてくる、つまりそこで、掟といふものを立てて、法律ができてくるわけぢや！ たとへばな、子供たちがあつまつて何か遊びごとをするときに、まづどんな風にして、どんな遊びをするかつて、前もつて申し合せをするぢやらう。あれぢやよあの申し合せが、つまり法律つてわけさ！

— んぢや、お役人は？

— 役人か、これはまあいたづらつ子みたいなものぢやな。そこへやつてきて、申し合せた掟をみんなぶちこはしちまふだ。

— なぜなの？

— そりやまだきさまには、わからんな！—— 祖父は大げさに顔をしかめて言つた、がすぐにまた教へ訓すやうな口調になつてつづけた。

— 人間のやることは何でもみんな神さまが見ておいでになるんぢや！ 人間がのぞんでゐること、神さまがのぞんでゐることは違ふ。人間のすることは、みんなはかないもんでな、神さまがブツと吹けば、みんな灰か埃みたいになつとんぢまふんぢや。

私が役人のことにこだはつてゐるのには、いろんな理由があつたのだ。で私はまた言ひ足した。

— んでも、ヤコフ伯父さんが、こんな歌をうたつてるだよ……

聖なる天使は神の位

官吏は悪魔の召使！

祖父は掌であごひげをおしあげて、その端を口にすひこみ眼をとちた。兩頬がヒクヒクふるへてゐる。彼が心のうちで笑つてゐるのが、私にはよくわかつた。

— きさまら二人の足と足をしばつて、川んなかへ

放りこんでくれるわ！—— 彼はいつた。

— そんな歌をいくらヤコフが歌つたつて、きさまは何もそれを聞いてゐなくつたつていいんぢや。そんなものは、出まかせの、でたらめぢや。異端者の罰あたりどもが考へだしたこんぢやらう。

そして、私の頭ごしに、どこか遠くの方へ視線をなげて、ぢつと考へこんでゐるが、やがて低い聲で例の口ぐせの言葉をつぶやいた。

— えーい、こいつらめ……

祖父は神を人間より一段高いもので、こはいものとしてゐるけれど、そのくせ祖母と同じやうに、やつぱり自分のすることなすことに、いちいち神さまを引き入れるのであつた。いや神さまだけではない、數かぎりない聖者たちをもみんな引き入れた。祖母の方はといふと、聖者といへばニコラフと、ユリイと、マロールとラウルのほかは、ほとんど知らないやうな工合だ。そして、その聖者たちはやはり、大へんに善良で、人間に近しくて、村や町を歩きまはり、めいめいが人間のあらゆる性質を具へて、人間の生活のなかにわりこんでくるのである。ところが祖父の方の聖者は、ほとんどみな受難者ばかり

であつた。偶像を破壊したり、ローマの帝王と争つたりして、そのためにごう間にあつたり、饑かれたり、皮をはがれたりするのであつた。

ときをり祖父はこんなことを夢みる。

— この家を賣るのに、神さまが助けてくださつてな五百留も儲けさせてくださるとな、おれはニコラフ聖者さまに祈禱會をひらいてあげるだかな！

祖母がそれをあざわらつて、私にいつた。

— お祖父さんは馬鹿なことばかり言つてるだよ。ニコラフが家を賣つてくれると思つてるだ。まるでニコラフさまには、それより立派なお仕事がないとでもいふやうぢやないかね！

祖父の手でいろんな文句がかきつけてある聖曆が、ながいこと私の手もとにのこつてゐた。たとへばそのなかのヨアキムとアンナの日の反対側の頁には、セビヤのイソクで、まづすぐに立つた字體で「慈悲ぶかき聖者ら災ひより救ひたまへり」と書いてあつた。

私はこの「災ひ」をおぼえてゐる。子供たちの方の事業がうまくいつてゐないので、それを助けてやる心ぐみで、祖父は金貸しをはじめ、こつそりと聖物をこりはじ

めた。だれかがそれを密告して、ある晩警官と刑事がふいにのりこんできた。大へんなさわぎであつた。けれど萬事はまあうまくけりがついた。祖父は陽が出るまでお祈りをささげてゐた、そして朝になつてから、私の眼のまへで、聖曆にこの文句をかきつけたのである。

夕飯まへに、彼は私といつしよに詩篇や、日讀新譯書や、あるひはエフレム・シリンの重たい本などをよんだ、そして夕飯がすむとまたお祈りをささげるのであつた。夜のしづけさのなかに、もの悲しげな、かきくどくやうな文句が、いつまでもひびいてゐた。

御身に何をもちたらし、御身に何を返さん、全智全能にして不死なる主よ……われらをすべての迷ひより守りたまへ……神よ、われを悪しき人より守りたまへ……われに涙と忘却とを興へたまへ……

ところが祖母の方は、よくこんなことをいつた。

「あーあ、今日はすつかりくたびれちまつた。こりやもう、お祈りもしねえで、寝ちまふかもしんねえな……」

……
祖父は私を教會へつれていつた。土曜日には晩禱に、祭日にはおそい禮拜式に。私は教會へいつても、對象に

悲しみをおこさせるだけであつた。神さまは、私をとりまいてゐるあらゆるもののなかで、一番いいもの、一番かがやかしいものであつた。祖母の神さまは、すべての生きものにたいして、それほどやさしい友だちであつた。そして當然、祖父はどうしてこんないい神さまを見ないのだらうといふ疑問が、私を苦しめずにはおがなかつた。

私は表に遊びにでることを禁じられてゐた。といふのは、往來にでると刺戟がつよすぎて、おきには鼻血が流れてしまふのであつた。私はまるでその強烈な印象に酔つたやうになり、いつもきつととんでもない亂暴をはじめてしまふのであつた。私には友だちがでなかつた。近所の子供たちは、いつも私に敵意の眼を向けてゐた。私は、彼らが私をカシーリンと呼ぶのが嫌だつた。ところが子供たちはそれをちゃんと呼んでゐて、なほもしつとくお互ひ隣士で呼びかはずのであつた。

——金貸しのカシーリンの孫がでてきたぞ。ほら見ろ！

——やつつけちまへ！
そして喧嘩がはじまるのであつた。

なる神さまを二つに分けてゐた。司祭や助祭が祈禱をさきける神さまは祖父の神さまであり、唱歌隊が讃美歌をうたつてあげる神さまはいつも祖母の神さまである、といふ風に。

むろん私はこの二つの神さまの子供つばい區別を、ごく大ざつげに書きあらはしてゐるのであるが、とにかくこれは私の心を二つにひきさいて、何かかう私を不安な氣持にしてゐたことをおぼえてゐる。祖父の神は私に恐怖と醜惡とおこさせた。その神は、だれをも愛してゐず、いつもいがめしい眼を光らせてみんなを監視してゐり、何よりもまづ人間のなかに愚かなこと、悪いこと、罪ぶかいことを探しもとめ、見つけたのであつた。その神は人間を信用せず、いつも人間の嘆きを期待し、人間を罰することを喜んでゐる、といふことがよくわかつてゐた。

そのころは、神さまのことを考へ、神さまを感じるところが、私の心にとつてはもつとも大切な滋養物となつてをり、またそれがこの世の中で一番美しいものとなつてゐた。その他のいろんな印象はみんな、その苛酷さと醜くさによつて、ただ私をいためつけ、私の心で反感とゐた。

私は年に似合はず力があり、おまげに喧嘩になるともすばしこかつた。相手の方でもそれをちゃんと知つてゐるので、いつも一かたまりになつて私にとびかかつてくるのである。そんなわけで、往來にでるときつと私はひどい眼にあつては、鼻血をだしたり、唇を切つたり頭に血あさをこしらへたり、着物をすたすたにひきさかれ、泥まみれになつたりして歸つてくることにきまつてゐた。

祖母はそのたびに、びつくりして私をむかへては、こぼすのであつた。

——またこの子は喧嘩してきたんだね？　なんて恰好だよ、そのさまは！　いつたいどこからどう手をつけていいもんやら……

祖母は私の顔をあらうてくれたり、血あざのところド海綿か、銅貨か、あるひは醋酸鹽の液をつけてくれたりして、お説教をした。

——どうしてお前はいつも喧嘩ばかりしてゐるんだね？　家にあるときは大人しいくせに、往來にでるとまるで人が變つちまふやうになるだもの！　しやうのない子だね。いいよ、お祖父さんにさういつて、お前をもう

まにださせないやうにしてやるから……

祖父は私のあざを見ても、けして叱らなかつた。ただ深い息を吐いて、うなるだけだ。

——また勳章をもらつてきたな！ おい、家の大將、もう表へとびだしちやいかんぞ、わかつたか？

往來がひつそりしてゐるときには、私は外に出たいなんて氣持は全然おきなかつた。けれど子供たちの楽しさうな騒ぎがきこえてくると、もうじつとしてほゝめられない。祖父の禁止などは無視して、中庭にかけだしてしまふ。血あざや擦り傷くらゐでへこたれはしない。猛烈な往來の遊びが、いつも私の心をあふりたてるのだ。それがあまり猛烈になつて、しまひには氣狂ひじみてくることまで、私は自分でも知りすぎほどよく知つてゐるのだ。私は、子供たちが犬や鶏に毒をくはせたり、猫をいぢめたり、ユダヤ人の山羊を追ひまはしたり、「ポケット」に死神を入れてゐる「イゴシヤ」といふ酔つばらひの白痴の乞食をからかつたりするのが、我慢できなかつた。

このイゴシヤといふのは骨と皮ばかりの、背のたか、い、ふすぶれかへつた男で、羊の毛皮の重い外套を着、

骨ばつた、さびのついたやうな顔に硬い髪の毛がぼさぼ

さにたれさがつてゐる。彼は、背中をまるめて、妙な工合に身體をゆすりながら往來を歩いてゆく。いつもちつと自分の足もとの地面ばかり見つめて、だまつて歩いてゆく。陰氣くさい、小さな眼をした、彼の鑷物のやうな顔は、私の心に何が畏怖の念をおこした。この人は本氣になつてある一つの仕事に熱中してゐるのだ、何かを探し求めてゐるのだ、だからこの人の邪魔をしてはならない、といふ風に思はれた。

子供たちは彼のあとを追ひかけていつては、猫背の背中に石をなげつけた。彼はなかなかそれに氣がつかないやうであつたし、石の痛みなども感じないやうであつたけれどそのうちに足を止めて、ぼろぼろの帽子をかぶつた頭をもたげ、ひくひくふるふる手で帽子をかぶりなほして、やつといま眼がさめたばかりだといつた顔つきで後ろをふりかへる。

——ポケットに死神を入れてるイゴシヤ！ どこへいくんだい、イゴシヤ？ ほれ見ろ、ポケットに死神が入つてらア！——子供たちがはやしたてた。

彼は片方の手でポケットをおさへて、いそいで身を屈

窓の下にたちどまつては、老婆がいつもどこかわきの方をむいて、めそめそした態をあはれつぽく引きのばして施しを乞うた。

——どうぞ目の乞食に何か恵んでやつておくんせえまし……

だがグリゴリイ・イワノウィチはだまつてゐた。彼の黒眼鏡は家の壁や、窓や、相手の人の顔なぞをまつすぐ睨んでゐた、そして、染料で一面にまつてしまつた手でゆたかなほゝひげをしづかになで、唇をかたくむすんでゐた。私は彼によく出逢つたけれど、そのかたくむすんだ口から言葉が發せられたのを聞いたことがなかつた。この黙りこくつてゐる姿が、いつそう私には重苦しくのしかかつてきた。私は彼のそばによつてゆくことがどうしてもできなかつた、だから一度もそばにいつたことがない、いやそれどころかあべこべに、彼の姿を眼にするとうどんどん家へ逃げかへつてきて、祖母に話すのであつた。

——グリゴリイがね、往來を歩いてるよ！

——さうかい？——祖母は不安さうに、同情のこもつた聲で叫んだ。——さあ、とんでいつて、これをやつと

めて、地面から石や棒きれや乾いた土塊なぞをひろひあげ、長い腕をぎこちなくふりまはして、ぶつぶつと口のなかで悪口をつぶやいた。彼の悪口といへば、いつもきまつて、おそろしく汚い言葉を三つならべるだけであつた。その點では、子供たちの方が、比べものにならないほど豊富であつた。ときどき彼は、びつこをひきながら子供たちを追ひかけてゆくことがあつた。長い毛皮外套をきてゐるので、それが邪魔になつてよく走れず、しまひには足をからまれてころんでしまふ。さうして、どすぐろい兩腕を地面につつばつて、這ひつくばつた恰好は瘦せ犬そっくりであつた。子供たちはまたその背中や脇腹をめがけて石をなげたり、中でも一番勇敢なやつは、すぐそばまで駆けよつていつて、一握りのごみを頭からぶつかけて、逃げてくるのであつた。

もう一人、おそらくそれ以上に重苦しい印象を往來になげちらしていつたのは、かつての職人のグリゴリイ・イワノウィチである。彼はもうすつかり眼が見えなくなつて、物乞ひをして歩いてゐた。背がたかくて、ちよつと容子のいい彼は、しかしまるで唾みたいであつた。小柄な、灰色の老婆が、手をひいてゐるいてゐた。家家の

いで！
私はぶりぶりして、風暴にはねつける。すると祖母は自分で門の外まで出ていつて、舗道に立つて、ながいことと彼と話してするのであつた。彼はニヤツと笑つてひげをふるはせる、けれど自分ではぬつたに口をきかない。口をきいてもポツリポツリと、ほんの一言二言いふだけだ。

ときをり祖母は彼を臺所によびこんで、お茶をのませたり、御飯をたべさせてやつたりした。たまに彼は、私がどこにゐるか訊くことがあつた。祖母が私を呼んだけれど私は逃げだして、薪のなかにかくれてしまふ。どうしても私は彼のそばにゆくことができなかった。彼のまへにでると、たまらなく恥しくなるのであつた。祖母だつてやつぱり恥しがつてゐることを、私は知つてゐた。一度だけ私は祖母と、ギリギリイの話をしたことがあつた。祖母が彼を門の外に送りだしておいて、しづかに中庭を歩いてきた。うなだれて、泣いてゐた。私は彼女のそばによつていつて、その手をとつた。

——どうしてお前は、あの人がと逃げちまふんだい？——彼女はそつと訊いた。——あの人はお前をかは

を壓迫し、私を往來から追ひたてたのは、色情狂のゾ

オロニハ婆さんである。彼女は祭日といふときまつて、大きな團體をして雲をふりみだし、酔つぱらつて、往來に雲をあらはした。彼女は一種特別な歩きかたをした。ちやんと兩足で地面をふみつけて歩いてゆくのではなく、足が地面につかないで、何だか雲のやうにふわふわと宙をとんでゆくやうなのだ。そして、みだらな歌を八聲でうたひまくつた。會ふ人はみな彼女をさけて、門のなかに逃げこんだり、家の角や店のなかにかくれたりした。彼女はちやうど往來を描ききよめてゆくやうであつた。その顔は肺物のやうに蒼んぶくれ、大きく見ひらかれた灰色の眼はおそろしいけれど、何か滑稽味をおびてゐた。彼女はよくボロボロ涙をこぼして泣きわめいた。

——わしの子供たちも、どこべいつたが？
私は、いったい何のことをいつてるのかと祖母に訊いてみた。

——お前なんか知らなくたつていいんだよ！——彼女は氣むづかしい顔をして答へた。けれどやはり手みじかに話してくれた。この女には、官吏のゾオロウツといふ亭主があつたのだが、その男がもつとい役につきた

いがつてるだよ。いい人だのになア……

——んぢや、お祖父さんはなぜあの人に食べる物やら、

ないの？——私が訊きかへした。

——お祖父さんがかい？
彼女は立ちどまつて、ぐつと私をひきよめ、ちやうど電話でもするやうに膝をひそめて、豫言するやうにいつた。

——いまに見てゐな、あの人のことで神さまはわしら一家にひどい罰をくだされるからね。ひどい罰をな……
彼女の言つたことはまちはなかつた。それから十年ばかりたつて、祖母がもう亡くなつてしまつてから、祖父は氣がへんになり、乞食になつて街を歩きまはり、家の窓の下へいつては、あはれつぽい聲で物乞ひをして歩くやうになつたのだ。

——ご親切なコツクさんや、まん頭を一つめぐんでおれや、まん頭をよ！——こいつらめ……

以前の彼の面影をつたへてゐるのは、この悲痛な、重苦しい、「えい、こいつらめ」といふ叫び聲だけであつた。それは何かしら人の心をかきむしつた。

イゴリヤとギリゴリイ・イワノウイチとの他に、私

いといふ一心から、自分の女房を上役の人に賣つたのである。上役は彼女をどこかへつれていつた。彼女は二年ばかり家にかへつてこなかつた。その後で、家にかへつてきてみると、男の子と女の子が一人づつあつたのが、二人とも死んでしまひ、亭主はカルタで官金を費ひこんで、監獄に入つてゐた。そんな悲しみから、彼女は酒をのみはじめ、往來をぶらつきまはり、暴れ歩くやうになつたのだ。祭日の夜といへば、もうきまつて彼女は警察の御厄介になつた……

いや、やつぱり往來よりも家の方がよかつた。ことに豊食をすませて、祖父がヤコフ伯父の工場にでかけていつたあとは、一番よかつた。祖母が窓べに坐つて、おもしろいお伽噺や昔話を語つてくれたり、私の父の話をしてくれたりした。

仔猫がくはへてきた丸官鳥をとりあげて、彼女はいたんだ羽を切つてやり、折れた脚に木片をあてて縛帯してやつた、そして小鳥が元氣になると、物をしやることを教へはじめた。よく窓際につりさげである鳥籠の前に例の大きな身體で、まるで善良な獣みたいに、一時間も突立つてゐては、太いかすれた聲で、石炭のやうにまつ

黒な、ものおぼえのいい小鳥にむかつて、せつせとおさ、らひをしてゐるのであつた。

——さあ、言つてみなよ、九官鳥さんにおかゆをおくれつて。

九官鳥は、ユーモラスなまんなまり、生き生きとした眼で祖母を横眼に見て、木片をゆはひつけた脚で、うすい鳥籠の底をコツコツならし、くびをのぼして、高麗鷲の鳴聲をしたり、かけすや郭公のまねをしたり、また一生懸命になつて仔猫の鳴聲をたてたり、犬の吠え聲をまねてみたりする。けれど人間の言葉はどうしてもうまくでない。

——ふざけちゃいけないよ！——祖母が真面目になつていふ。——さあ、言つてみなよ、九官鳥さんにおかゆをおくれつて。

このまつ黒な羽を生した物真似鳥は、ありつたけの聲をだして、何か祖母の言葉に似たやうなことをわめいた。祖母は大喜びも、ニコニコ笑ひ、きびのかゆを指のさきにつけて小鳥にたべさせていふ。

——わしはな、ちやんと知つてるだよ、この嘘つきめ！ お前がいくら空つとぼけてゐたつて、ちやんと

まくできるくせに。

そんな風にして、たうとう彼女はすっかり教へこんでしまつた。しばらくたつと、九官鳥はもうかなりはつきりと、おかゆをくれといふやうになつたし、祖母の姿を見かけると、ゆつくりと言葉をひきのぼして、「こんちわア……」と聞えるやうなことを言つた。

はじめそれは祖父の部屋につりさげてあつたのだが、まもなく祖父が屋根裏の私たちの部屋にそれを追ひまくつてしまつたのだ。といふ理由は、九官鳥が祖父をからかふことをおぼえてしまつたからだ。祖父が一生懸命にお祈りの言葉をとなへてゐると、九官鳥のやつめ、鳥籠の目から蠅をひいたやうな、黄いろいくちほしをつきだして、さへづりなてるのだ。

——チユー、チユー、チユイル、チユイル、チイル、チユウウ！

祖父はひどく馬鹿にされたやうに思ひ、ある日たうとうお祈りを中途で止めて、地団駄ふんで、どなりたてた。

——あつちへもつていけ、畜生、ひねりころしちまふぞ！

家のなかには面白いこともたくさんあつたし、楽しいこともたくさんあつた。けれど私はときどき、どうにも抜け道のないふさぎの蟲にとりつかれてしまふのであつた。私はまるで全身に何か重苦しい液體を注ぎこまれたやうで、しばらくのあひだは、まつ暗な、ふかい穴にでもゐるみたいに、視力も失ひ、聴覚も失ひ、その他すべての感覚も失つてしまつて、盲目になり、半分死んだやうになつて暮してゐるのであつた……

八

祖父はとつぜんその家を酒場の主人にうつて、自分はカナトナヤ街に別の家を買つた。これは草の生えしげつた、あまりバツとしない、けれど小綺麗でしづかな家でいろんな色に塗つた小さな貸間をずらりとならべて、まっすぐ野原につきだしてゐた。

この新しい家は、前の家よりもしやれた、氣持のいい家であつた。正面はおちついた、あたたかみのある暗紅色にぬられ、三つの窓の青い鏡戸と屋根裏の窓の簡單な格子戸とがきはだつた對照を見せてをり、屋根は左手か

ら楡と菩提樹との濃い緑で美しくおほはれてゐた。中庭と裏庭には氣持のいい小徑がたくさんあつて、まるでわざとかくれんぼするたけに作つてあるやうであつた。とくに裏庭はよくできてゐた。狭いけれど、樹樹がこんもりとしげつてゐて、いろんなものが氣持よく入り組んでゐる。一方の隅には、まるで玩具みたいな、小さな風呂場があつた。そこにはブリヤン草がいつぱい生えてをり、以前の風呂場の懐付のこりの太い権杖が突立つてゐた。庭の左手は、オフシヤニコフ大佐の既の壁でさへぎられ、右手はベトレングの邸になつてゐた。奥は牛乳しぼりのベトロヴナの宅地に接してゐるが、このベトロヴナといふのは、緒ら顔のふとつた女で、まるで半鐘みたいなさうさうしい人であつた。その小さな住居は陰氣な古ぼけた小舎で、土のなかにめりこむやうに建つてをりすつかり苔におほはれてゐた。二つの窓が野原にむかつてやさしい眼をひらいてゐる。その野原は、いたるところ深い谷で断ちきられ、はるかかなたには青い重たい雲がたなびいてゐるやうに森がひろがつてゐる。一日ちうそこを兵隊がかけまはつてゐた。斜めにふりそそぐ秋の

陽光に、銃剣の白い刃先がキラキラ光つてゐた。家のなかには、私の見知らぬ人がぎつしりつまつてゐた。表の方半分を借りて住んでゐるのはダットン人の軍人で小柄な丸顔の細君といつしよであつた。この細君は朝から晩までキヤツキヤツとさわいだり、笑つたりして、贅澤な飾りをつけたギターをひいては、甲高い聲でしよつちう浮きうきした歌をうたつてゐた。

——戀の相手は一人ぢやつまらぬ
もう一人相手を採さにやらぬ

うまく採したそのときは

そこにはきつと御褒美が

おまへを待つてゐるでせう

甘い、たのしい御褒美が！

まりのやうにまんまるい身體をした軍人は、窓べに坐つて、青ぶくれた頬をいつそうふくらませ、抹茶色の眼を愉快さうにくるくるさせて、ひつきりなしに煙草をふかし、犬のなき聲に似た、奇妙なしはがれ聲をたててゐた。

うが、いつも彼を「結構さん」と呼んでゐた。

——アレクセイや、「結構さん」にお茶をおあがりつていつてきな……さあ、「結構さん」どうしてそんなに遠慮してゐるんですかい？

彼の部屋にはいつぱいに、たくさん箱や、私のまだ知らない新しいロシア文字で書かれた厚い本などがつまかさねてあり、いたるところにいろんな色の液體をいれた壺がならんでをり、銅や鐵の切れつばしとか、鉛の棒などがちらかつてゐた。彼は赤い皮の上衣を着、灰色の格子縞のズボンをはき、さまざまの藥品で身體ちうが染まつて、いやな匂ひを放つてゐる。髪をふりみだし、不器用な手つきで、朝から晩まで、鉛をとかしたり、銅片をハンダづけしたり、小さなはかりで何かはかつたり、唸つたり、指を火傷してあわててフーフフ吹いたり、そつと爪先だちで壁に張つた圖面のそばによつていつて、眼鏡をふいて、細いまつすくな、奇妙に白ちやけた鼻を紙におしつけないばかりにして圖面をのぞきこんだりしてゐた。そしてときどき、ふいに部屋のままなかや窓のきには立ちどまつて、まるで氣を失つたやうに、黙りこくつて、顔をもちあげ、眼をつぶつて、ながいこと突立

——ダットン、ダットン、ダットン……

穴倉と既の上になつてゐる、あたたかい傍屋には、荷馬車の馱者が二人——白髪で小柄のピョートルじいさんと、その甥で煙のヌヂョバといふ、赤銅のお盆みたいな顔をして、鑄物みたいにつべりした若者、それにもう一人、いつもつまらなさうな顔をしてゐる、背のたかい從卒のワレイといふダットン人が住んでゐた。この人たちはみんな、私には全然なじみのない新しい、したがつて貴重な人たちであつた。

だがとくに強く私をとらへ、ひきつけたのは、下宿人の「結構さん」だ。彼は家の裏の方半分をしめてゐる、臺所とやらんだ長い部屋に陣どつてゐた。その部屋には中庭と裏庭とにむかつて窓が一つづつひらいてゐた。

この人は瘦せぎすで、猫背で、色白な顔に、二つに分けたまつ黒な鬚をはやし、やさしい眼つきをして、眼鏡をかけてゐた。彼は無口で、あまり人眼につかない。食事やお茶によばれると、いつもきまつて、かう答へるのであつた。

——結構です。

そこで祖母は、彼の眼のまへであらうが、かげであら

つてゐた。

私は納屋の屋根に這ひあがつて、中庭ごしに彼のすることを窺もつてゐた。あけはなつた窓から、卓の上にあるアルコール・ランプの青い炎や、暗い人影が見えたり、彼がばらばらにほごれたノットに何か書いてゐるのが見えたりした。そんなときには、彼の眼鏡は氷のやうに冷たく、青く光つてゐる。この人の魔法使ひみたいな仕事は、しばしば私の好奇心を苦しいほどかきたてて、私をいつまでも屋根にひきとめておくのであつた。

ときをり彼は、ちやうど額ぶちに入つた肖像みたいに窓べにきて手をうしろに組んで突立ち、じつと屋根をながめてゐた。けれど、どうやら私には氣がつかないらしかつた。これがまた私をひどく苛立たせた。するとまた彼はふいに卓にとびかへり、えびのやうに身體を二つに折つて卓にかがみこんで、仕事に没頭するのであつた。

私は、彼がもつと金持ちで、もつといふ着物をきてゐたら、彼をこわがつたかもしれないと思ふ。だが、彼は貧乏であつた。上衣の襟から、よれよれになつた汚れたルバーシカの襟がはみだしてをり、ズボンはしみとつきだらけで、足には靴下もはかずにちかにはきふるした土

靴をはいてゐた。貧乏人はこわくはなかつたし、危険も感じなかつた。祖母が、さういふ人たちにたいして、いつも同情的な態度を示してゐたことと、祖父が輕蔑的な態度を示してゐたことが、いつかしらぬまに私にもさういふ確信を植えつけたのである。

家ちゆうたれ一人「結構さん」を好かなかつた。みんな彼の話をするときには、せせら笑つた。陽氣な軍人の細君は彼のことを「白ツ鼻」とよび、ビートルじいさんは「薬屋」とか「魔法使」とかいひ、祖父も「妖術師」とか「フリーメイソン」とかいひつた。

あの人は何してるの？——私は祖母に訊いてみた。すると祖母はきつく私をしかりつけた。

お前の知つたこつちやないよ、黙つてなッたら

ある日私は勇を鼓してその窓の下によつていつて、やつとのことで興奮をおさへながら、訊いた。

何を心てるの？

彼はびくつとして、眼鏡ごしにながいこと私を見つめてゐたが、やがて火傷のきずとひつつりのできてる手を私の方にのぼしていつた。

入つといで……

彼が、扉口へまはらずに、窓から入つてこいといつたので、私の眼には彼がいよいよたのもしく見えた。彼は箱に腰かけて、私を前に立たせ、むかふへおしやつたりまた自分の方へ引きよせたりしてみても、最後にひくい膝で訊いた。

君はどこの子だい？

これは少し變であつた。だつて私は毎日四度づつ臺所で彼と食卓を共にしてゐるではないか！——で、私は答へてやつた。

——この家のもんだい……

ああ、さうか。——彼はさういつて、自分の指をじつと見つめながら、また黙りこんでしまつた。

そこで私は彼に一應説明をしてやる必要を感じた。

おれはね、カシーリンつていふ苗字ぢやないんだよ、ベシヨーアつていふんだよ……

——ベシヨーアつていふのかい？——彼はアクセントをまちがへて、くりかへした。そりや結構だな。

私をわきの方へおしやつておいて、自分は立ちあがつて、卓に近づつていつた。そして言つた。

——しかし君、いつもさうだとばかりはかぎらないよ。ところで、君は小骨遊びをするかね？

小骨遊びかい？

うん、小骨遊びだ、やるかい？

うん、やる。

——それぢや、どうだい、一つ鑄込みの棒をこしらへてやらうか？——と、これもいい投棒ができるぜ！

うん、こさへとくれよ。

——ぢや、バーブカをもつといで。

彼は煙のたつてゐる茶碗を片手にもつて、片方の眼でそれをのぞきこみながら、また私のそばに寄つてきた、さうして言つた。

君には鑄込みの棒をこしらへてあげるからね、そのかはりもうここへきちやいけなげ。いいかい？

この言葉に私はひどい侮辱を感じた。

ようし、もう二度とこんなところへくるもんか……むかむかして私は裏庭にかけだした。そこでは祖父が火さわぎをして、林檎の根に肥料をやつてゐた。秋であつた。もうとつとに落葉がはじまつてゐた。

うん、さうだ。お前は毎の枝を切れや。——祖父

——さあ、おとなしく坐つてなよ……私はいつまでもそこに坐つて、彼のすることを見まもつてゐた。彼は檯木でおさへた銅片を荒やすりでけずる、檯木の下にしいたボール紙の土に金色をした銅の粉がパフパフおちる、それを一つまみ集めて、大きな厚手のお碗に入れて、そこに鹽みたいな白い粉を小壺からだして加ふる。それから、黒つばい壺に入つた何かの液體を注ぐ。お碗のなかではシューシューいひだし、煙が立ち、いやな匂ひが鼻をつく。私はむせて、ゴホゴホと咳きこみ、頭をふりまわした。すると彼は、いかにも魔法使らしく威張りかへつて訊いた。

いやな匂ひがするかい？

うん！

——これなんだよ！——こいつが、君、すばらしくいいぢやないか！

何をいはつてるんだらう？——私はちよつと考へた。そして、づけづけといつた。

——んだつて、いやな匂ひがすれや、よかないぢやないかい……

——ふうむ？——彼は眼をパチパチやりながら、叫ん

はさういつて、私に缺をわたした。

私は祖父に訊いてみた。

「結構さんは、何をこしらへてるの？」

「部屋をいためちまつて、仕様がねえんぢや。——
彼はぶりぶりして答へた。——床にや焼焦げをこさへる
し、壁紙は汚したり、やぶいたりしやがるし。いまに言
つてやるわ、出ていつてもらひませうつてな。」

「うん、言つてやつた方がいいや。——私は枯れた
葎の枝をバチバチと切りながら、賛成した。
しかし私は少し早まりすぎた。

雨の晩なぞ、祖父が留守だと、祖母はよく家ぢうの人
たちをお茶によんで、臺所でもとおもしろい集りをひ
らくのであつた。馭者もよんだし、従卒もよんだ。圓圖
しいベトロヅナもよく姿をあらはしたし、陽氣な軍人の
細君もときどきやつてきた。「結構さんはいいつも部屋の
隅つこの燭燼のそばにじつと動かず、煙のやうにだまり
こくつて突立つてゐた。煙のスチヨバはダツタン人とカ
ルタをやつてゐた。ワレイはよくスチヨバの大きな鼻を
カルタでぼんとたたいては言つた。

——ああ、畜生！

ピョートルじいさんは白パンの大きな切れつばしと、
大きな土焼きの壺に入れた「向日葵の種子」のジャムと
をかかへてきて、パンを小さくちぎつては、それにジャ
ムをべつとりとぬり、そのおいしさうな苺色のパン片を
掌にのせて、うやうやしくお辭儀をしながら、みんなに
分けてまはつた。

——どうか一つ召しあがつて見ておくんなさい！

彼は丁寧にたのんだ、そしてパン片がみんなにわたると
彼は自分のうすぐらい手のひらを仔細にながめて、ジャ
ムが一滴でもついてゐるのを見つけたと、舌をだしてベ
ロリとなめるのであつた。

ベトロヅナは櫻桃の果實酒を壺に入れてもつてきた
し、陽氣な奥さんは胡桃とお菓子をもつてきた。かうし
て祖母の大好きな、すばらしい酒宴がはじまるのだ。

「結構さん」が賄路をつかつて私を自分の部屋にこさせ
ないやうにした日から、しはらくたつて後のこと、祖母
が一夕かういつた酒宴を催した。むせび泣くやうな秋の
雨が小止なしに降りしきり、風がほえ、樹樹がざわめき
その枝が壁をザザツとこすつた。けれど臺所のなか
はあたたかで、氣持よかつた。みんなはお互ひに寄りそ

鼻が空洞のなかにゐるやうに、悪業のただ中に暮
してゐた。

ゴルヂオンが一番きらひなのは

隠者のミロンじいさんだ

ミロンは正しい道を守る人

世のために怖れをしらず徳をつむ人。

大將は、忠實な家來、勇ましい武士の

イワンを呼んで、命令する。

——「イワンよ、行つて、あの高慢ちきな
ミロンのじじをころしてまいれ！」

行つて彼の首をはねて

白髪の髯をつかんで引いてこい、

犬の餌食にしてやるわ！」

イワンは命を曇みて出かけていつた

途中で彼は考へる——

「自分が好きで行くのぢやない
貧乏のために仕方なし行くのだ
おれはつまりこんな廻りあはせになつてゐるの
だな」

鋭い剣を握にかくしてイワンは

つて坐つてゐた。一種特別のなごやかな、おちついた氣
分にひたつてゐた。祖母はいつにないこと珍らしく、い
ろんなお話を次から次へとふんだんに語つてくれた。
彼女は燧燼の端に腰かけ、兩脚を踏板の上にふんばつ
て、小さいブリキのランプの燈にてらしたされてゐる人
人の方に身をかがめてゐた。御機嫌がいいときには、い
つも彼女は燧燼の上に這ひあがるのだ、こんな申し譯を
いひながら。

——わしは高いところで話さなくつちや……高いとこの
方がうまく話せるだよ！

私は彼女の足もとの、ひろい踏板の上に陣どつてゐ
た。そこはちやうど「結構さん」のすぐ頭の上にあつ
てゐた。祖母は武士のイワンと隠者のミロンとのおもし
ろい物語をした。潤ひがあり、重味がある言葉が調子よ
くながれた。

昔むかしゴルヂオンと呼ぶ悪い大將が住んでゐた
腹が黒くて、冷酷無比で

正しいことを追ひはらひ、人民を塗炭の苦しみに
おとし

隠者のまへにきてお辭儀をした

「御機嫌はいかがですか、老人よ？ 神さまのどんなお恵みがございましたかな？
すると懇話の隠者は嘲笑ひ
賢い口をひらいて言ふ

「澤山ぢやよ、イワン、まことをかくすのは！」

神さまは何もかもみんな御存知ぢや
善も悪も手のうちぢや！

お前が何しにきたのかは、わしにもちやんとわか
つゝる！」

イワンは隠者のまへで恥しくなつた
けれど命令に背くのをおそれた。

彼は藁の鞘から劍をぬきはなち
ゆるやかな裾で刃をふいた。

「ミロンよ、おれは劍を見せないで
お前を斬らうと思つたのだ。

さあ、覺悟をきめて、神に祈れ
最後の祈りをささげるがいい

自分のために、おれのために、また世の人全ての

ために

それがすんだらお前の首を切らう！……」

老いたるミロンは若い樫の木の下に
しづかにひざまづいた

樫は彼のまへに頭をたれる。
隠者は微笑をうかべていつた

「おお、イワンよ、いいか、長く待たねばな
らぬぞよ！」

世の人全てのために祈る祈りは大きいからな！

それよりもすぐわしを切つた方がよくないか
お前が餘計な苦勞をせぬまへに！」

するとイワンは腹立たしげに顔をしかめ
愚かしく肩をそびやかした

「否、一度口に出したことは引込めぬ！
さあお前は祈れ、おれは百年でも待つてゐる！」

隠者は夕方まで祈つてゐる
夕方から翌朝まで祈つてゐる

朝からまた夜半まで祈つてゐる
夏から翌年の春まで祈つてゐる

かうしてミロンは何年も何年も

祈りつづけてゐるのである。

若い樫は雲つく巨木となり
實がこぼれて深い森ができた

けれど聖なる祈りはまだ終らない！
かうして祈りは今日までもつづいてゐる。」

隠者はしづかに神に嘆願してゐる
人人のために神の助けを乞ひ

聖母に喜びを求めてゐる。
武士のイワンはそのそばに立つてゐる

劍はもはやポロポロにくだけ
甲冑の鐵はさびに蝕まれ

美しい衣裳はくさりはて
イワンは冬も夏も裸で立つてゐる。

炎熱がこがしても 焦がしきれず
蛆が血を吸つても 吸ひきれぬ

熊も狼も、もう手をふれぬ
吹雪や嚴寒ももはや感じない

彼は自分で一歩も動くことができないのだ
手をあげることも、物をいふ力もないのだ。

これが彼の罪に與へられた罰だ

悪い命令をきかなければよかつたのに！

他人の良心のかげにかくれなければよかつたの
に！

罪ふかいわれらのために祈つてゐる
聖なる隠者ミロンの祈りは

今もなほ神に向つて流れていつてゐる
明るい川が大洋に注ぐやうに！

「祖母が物語をはじめたところから、私はもう「結構さん」
が何かそはそはしてゐるのに氣がついてゐた。彼は両手
を妙な具合にひくひくとうごかしたり、眼鏡をはづした
りかけたり、それをまた祖母の物語の調子にあはせてふ
いたり、うなづいたり、眼をおさへて指先でギューギュー

いおしつたり、さうかと思ふとひどく汗でもかいたや
うに額や頬を掌でこしこすつたりした。聴衆のなか
のどれかが身動きをしたり、咳をしたり、足をすりあは
せたりすると、この下宿人はやかましく注意した。

「ッ！」

祖母が話しをはつて口をつぐむと、彼ははげしく立ち
あがり、両手をふりまはして、何か氣負つた様子でぐる

ぐる歩きまはりながら、つぶやいた。

「どうです、すばらしいぢやないですか！ こりやぜひ響きとめておかなくつちや！ こりや、おそろしく本當のことを言つてゐるんだ、このわれわれの……」

やつと彼が泣いてゐることがはつきりわかつた。兩眼に涙がいつばいたまつてゐた。涙は上からも下からも沸騰とわいてきて、眼にあふれた。それはちよつと妙ではあつたけれど、大へん氣の毒に思はれた。彼はいかに不器用な、滑稽な恰好ではねあがりながら、豪所ぢゆうをぐるぐる馳けまはつた。眼鏡をかけようと思つて、鼻さきでさかんにふりたくつてゐるのだが、どうしても弦がうまく耳にからなかつた。ビョートルじいさんは、その様子をながめながらニヤニヤ笑つてゐた。みんなどきまぎして黙りこんでゐた。祖母がひどく急ぎこんで言つた。

「書きとめておきなされや、そりやわるくねえこつた。わしはかういふのなら、まだいくらでも知つてゐるでな……」

「いや、これがいんです、このいま聞いたやつが！ こいつはおそろしくロシヤ的で……」 下宿人は

「且那方つてのは、みんなあんな風な氣まぐれ者ば

つかしき！」

ワレイが氣むづかしい顔をして、ぶつぶついつた。

「獨り者は馬鹿なまねばかりしてけつかる！」

みんながどつと笑つた。ビョートルじいさんがまたのんびりした調子でいつた。

「たうとう泣いちまひやがつた。どうやら、昔のよかつたことを考へだしたんだらうな……」

さびしくなつた。何ともいへない佻しさがみんなの心をかきむしつた。「結構さん」はひどく私をおどろかせた。彼の涙にぬれた眼がはつきりと私の頭に焼きつけられて、私は彼がかはいさうでたまらなかつた。

その晩は彼は家で泊らないで、翌日のひるすぎになつてかへつてきた。なんだかすつかりたくたになつて、ひどくばつがわるさうにおとなしくしてゐた。

昨夜は大騒ぎをしちまつて。彼は祖母にむかつて、まるで子供みたいな調子で、間がわるさうにいつた。「あなたは怒つてないですか？」

「何をだね？」

「ぼくが出しやばつて、いろんなことをしやべつた

興奮して叫んだ、そしてふいに臺所のまんなかに棒立ちになつて、右手を元氣よくふりまはしながら、大きな聲でしやべりだした。左手には依然として眼鏡がふるへてゐた。彼は足をふみならし、甲高い聲をふりしぼつて、夢中になつて長いことしやべつてゐた。同じ言葉が何度何度もとびだしてきた。

「他人の良心にたよつて生きていつちやいけねえつでの、まつたくだ！」

そのうちに、ふいにブツンと言葉を切つて黙りこみ、みんなの顔をじろじろ眺めまはしてから、首をうなだれて、てれくささうに、そつと出ていつた。人人はおちつきのない眼を見かはして、苦笑した。祖母は煙爐の奥にひつこんで、暗がりのなかで、深い溜息をついた。

ペトロヅナが掌で厚ぼつたい、まつ赤な唇をこすりながら、訊いた。

「怒つたやうだね？」

「いんにや。ビョートルじいさんが答へた。――」

あれがあいつのくせでな……」

祖母が煙爐から這ひおりて、だまつてサモワールを立てはじめた。ビョートルじいさんがゆつくりと言つた。

のを。

「何もあんたは、だれにも悪いことなんて言ひやし

なかつただよ……」

私は祖母が彼をこわがつてゐるのを感じた。祖母は彼の顔をまともに見ようとせず、またいつになく遠慮して、しづかすぎるほどの調子で話してゐるのだ。

「結構さん」は祖母のそばにびつたりとよりそつて、おどろくほど卒直にいつた。

「あなたにもおわかりでせうが、ぼくはまつたくの一人ぼつちで、友だちが一人もないんです！ いづもいつも黙つてばかりゐると、そのうちにふいに心のなかが沸き立つてきて、それがいきなり爆發するんです……」石だつて、木だつて、いざとなれば物を言ひたくつてうづりづしてゐるものなんですよ……」

祖母は身をひいた。

「あんたもお嫁さんをもらへばいいのにさ……」

「えッ！」彼は顔をしかめて、頓狂な聲をあげた

そして、手をふつて、出ていつた。

祖母も顔をしかめて彼のあとを見おくり、煙草をだして鼻につめ、それからきつぱりと私に言ひわたしたし

「いいかい、お前、あんまりあの人にまとひついちやいけないぜ。あの人は、何をやりだすかわかりやしなからわ……」

しかし私はふたたび彼に惹きつけられた。

私は彼が「まつたくの一人ぼっち」だといつたときにその顔つきががらりと變つてゐたのをちやんと見てゐたのだ。この言葉には、何か私にもよくわかり、私の心にふれてくるものがあつた。私は彼のあとを追つて外にでた。

中庭から窓越しに彼の部屋をのぞいてみると、からっぽで、ちやうどこれからいろんながらくたを手あたりしだいに放りこまうとする前の物置みたいな、妙にがらんとしてゐた。左様、その使ひ主と同様に、何の役にもたぬ、奇妙ながらくた物を、である。そこで私は裏庭にでた、そして庭の隅の穴のなかに彼を見つけた。彼は背中をまるめ、両手で頭をかかへ、膝を膝のうへにのせて、焼けのこつた丸太の端に工合わるさうに腰かけてゐた。その丸太は土にまみれ、端が石炭のやりに光つて、しほれた苦草にがよもぎやいら草や午夢のなかからニューツと突きでてゐた。彼がいかに工合わるさうに坐つてゐるので、

一層注意をひかれた。

彼は鼻のやうにうつろな眼でどこかわきの方を見てゐて、ながいこと私に気がつかないでゐたが、やがて気がつくといましましさに訊いた。

「あとをつけてきたのかい？」

「ううん。」

「それぢや、どうしたんだい？」

「ただ、ここへきたんだよ。」

彼は眼鏡をはずして、赤や黒の汚點しみのついた手巾で玉をふいていつた。

「ぢや、ここへきたさへ！」

私がならんで腰をおろすと、彼は私の肩をしつかりと抱きしめた。

「さあ坐れよ。だまつて、坐つてゐような。いいかい！」

「はら、かうしてゐるのが一番……君は強情つぽいだらう？」

「うん。」

「そりや結構だな！」

ながいこと黙つてゐた。しづかなおだやかな夕方であつた。あたりいちめん花が咲きみだれ、その花が刻一

刻と色あせ、しぼんでゆくのがはつきりとわかる。大地はもう水水しい夏の匂ひを失つて、いまはただ冷い、濕つぽい匂ひを放つてゐるだけだ。大氣は妙にすみわたります赤くけぶつた空には鳥が氣ぜはしげに鳴きかほし、人の心に不吉な思ひをかきたてる。さういつた秋の初めの何かもの悲しい宵であつた。すべてのものがひつそりと静まりかへつてゐる。小鳥の鳴き聲や、落葉の音などが、ひどく大きな音にきこえ、思はずびくつとさせられるが、びくつとしたあととはまたすぐに静寂にかへり、沈黙が地上をすつかりつつみ、人の胸をみたす。

こんなときに、特に清らかな、軽やかな想ひが生れてくるのだ、しかしそれは蜘蛛の巣のやうに、あまりにも細く、透明なので、言葉でつかむことはむづかしい。それは流星のやうにパツときらめいて、すぐに消えてゆく。それは何か漠然とした悲しみで心を傷き、心を愛撫し、心をかきみだす。心はわきたち、生涯の形をさづけられ、隠ひだす。かうして魂の相貌が作られるのだ。

「結構さん」のあたたかい脇腹にびつたりとよりそつて、私は彼といつしよになつて、黒い林檎の枝のあひだをすかして赤い夕燒を見あげ、忙しさうにとんでゆく

紅雀の群を見おくつたり、金鶯雀が枯れた牛蒡の頭をこつこつと突つき、その濛い穂子をついばんでゐるありさまを眺めたりしてゐた。毛羽だつた鎌が、あかあかと燃えてゐる灰色の雲が野原の方からのびてきて、その雲の下を墓地の時にかへる鳥が大儀さうにとんでゆく。何もかもがすばらしい。いつもとはちがつて、何もかもがなんだか特別にわかりやすく、近しく思はれた。

ときをりその人は深い溜息をついて、訊いた。

「いい氣持だらう、お君？ そうら、な！ しかし濕つぽかないかい？ え、寒かないかい？」

空が暗くなり、あたりのものみだが、濕つぽい夕闇につつまれて、ふんわりとふくれあがつてくると、彼はいつた。

「さあ、歸るとしようか。ぢや、いかう……」

庭の耳門みものそばで彼は足をとめて、そつとささやいた。

「君のおばあさんはいいい人だね。あーあ、この世の中は實際すばらしいよ！」

眼をつぶつて、頬に微笑をうかべながら、彼はひくいけれどはつきりした聲で、祖母の物語の一節をくりかへ

した。」

これが彼の罪に與へられた罰だ
悪い命令をきかなければよかつたのに！
他人の良心のかけにかくれなければよかつたの
に！

——おい、兄弟、きみもこれをよく覚えておくんだ
ぜ！

そして私を前におしこくりながら訊いた。

——字は書けるかい？

——ううん。

——それぢや習ふんだね。字をおぼえて、お祖母さん
の話をみんな書きとめておくんだ。それは君、後でとて
も役に立つことなんだよ……

私たちは仲よしになつた。その日以来私は、好きなと
きに「結構さん」のところへでかけていつては、何かぼ
ろのつまつた箱に腰をかけて、邪魔をしないやうにして
彼が鉛をとかしたり、銅片を熱したり、まつ赤に焼いた
鐵板を小さな鐵砧かじきの上で赤い柄のついた小さな鎚でトン

トンとたたいたり、粗鐵や普通の鐵や研磨紙サンドペーパーや糸のヤ

りに細い鐵なぞでいろんな仕事をしたりするのを見守つ
てゐた。どんなものでもみんな小さな銅の計量器はかりにかけ
る。白い厚手のお碗わんにいろんな液體を注いで、そこから
煙がたちのぼり、いやな匂ひが部屋ちゆうにこもるのを
眺めたり、額に鐵をよせて厚い本をのぞきこんだり、ま
つ赤な唇をかねて唸つたり、しわがれた膝ひざでそつとこん
な歌を口ずさんだりしてゐる。

——おお、サロンのバラよ……

——小父さんは何をこさへてるの？

——ある一つのものな……

——どんなものなの？

——それがな、どうも君にわかるやうに話してあげる

のはむづかしいんだがね……

——うちのお祖父おじいさんはね、小父さんはきつと腰金を
こさへてるんだらうつて言つてるぜ……

——お祖父さんが？ ふーむ、つまらないことをいふ
もんだね！ 金なんて、きみ、くだらんもんだぜ……

私は中庭になにも特別に變つたものを見やしない。け

れど彼に膝でかく突つかれ、ちよつとした彼の言葉ことばを
きくと、眼のまへに見えるものがすべて特別に深い意味
をもつてき、すべてのものがしつかりと心に焼きついて
てるのである。たとへば猫が庭をとんでいつて、明るい
水溜りのまへに立ちどまり、そこにうつる自分の影を見
て、まるでそれを打たうとでもするやうに柔かな前肢を
もちあげる。すると「結構さん」はそつとささやく。

——猫つてやつは高慢ごうまんちきで、疑りぶかいね……

金色がかつた絨毛じゅうもうの雄鶏おんどりのママイが、裏庭の垣にまひ
あがり、しつかしつかと棒にしがみついて、あぶなく落ちち
さうになりながら羽をばたばたやつたあとで、いかにも
人を馬鹿にしたやうな恰好かっこうに首をのばして、腹立たしげ
にココココと文句をいふ。

——堂堂たる大將さまみたいだが、あんまり利口ぢや
ないね……

ダツタン人のワレイが不機嫌なかほをして、まるで老
いぼれた馬みたいに大儀さうな足どりで、庭の泥をこね
くりながら歩いてゆく。頬骨のとびでた顔がはれぼつた
い。彼は眼をほそめて空を見あげる。白い秋の陽光がま

——んでも、おやパンを買ふのに何で買ふの？
——なるほど、パンを買ふにやお金があるね、そりや
君のいふとほりだ……

——さうだらう。牛肉だつても、やつぱりお金が必要
ね……

——うん、牛肉だつてもな……

——彼はそつと、びつくりするほどやさしい微笑をうかべ
て、まるで仔猫をじやらすやうな工合に、私の耳をくす
くつていふ。

——どうも君にはかなはないな。みごとにやられたよ
もう黙つてゐた方がいいな……

——ときをり彼は仕事を中断して、私のそばにきて並んで
坐つた。私たちは雨がパッパと屋根をうち、草の生え
しげつた中庭にふりそそぎ、林檎の木が葉をおとしてだ
んだんに佻たがしくなつてゆくさまを眺めてゐた。「結構さ
ん」はあまり口かずをきかなかつた、そのかはりたまに
物をいふと、いつも何か非常に大切なことをいふのであ
つた。またよく何かに私の注意をむけさせようとしては
そつと私をついて、眼をパチパチやりながら、眼でそつ
ちをしらせたりした。

つすぐに彼の胸におちてきて、上衣の眞鍮のボタンを光らせる。彼は歩みをとめて、曲つた指でそのボタンにさはつてみる。

「まるでメタルをもらつて、よろこんであるやうだ……」

私はたちまちのうちに「結構さん」にしつかりと結びつけられてしまった。ひどい辱めをうけた悲しいときでも、また嬉しいときでも、彼は私にとつてなくてはならない人となつてきた。彼は無口だつたけれど、私には頭にかんだことを何でも勝手にしやべらせておいた。ところが祖父ときては、いつだつて私の話を中途でさへぎつて、やかましくどなりつけるのであつた。

「うるさいな、だまつてろ、餓鬼め！」

祖母はまた祖母でいつも自分のことで頭がいつぱいで、他人の話なぞ耳に入らず、こつちのいふことはてんで受けつけてくれないのだ。

ところが「結構さん」はいつも私のおしやべりを熱心に聞いてくれて、ときどき笑ひながらこんなことを言つたりした。

「いや、君、そんなことはないぜ、そりや君が自分

で勝手に考へだしたことなんだから……」

かういつた彼の短い注意は、いつも必要なときに間違ひなくピシリときた。彼はまるで私の心のなかや頭のなかでうごいてゐるものをすつかり見とほしてゐるやうであり、餘計な言葉や嘘の言葉は私がそれを口にしないまへに早くも見ぬいてしまつてゐるやうであつた。そしてやさしい一言でそれをおさへてしまふのであつた。

「嘘をいつちやいけないよ、君！」

私はときをりわざと彼のその千里眼をためさうと思つて、よくいろんなことを考へだしては、それが本當にあつたことのやうにして話した、けれど彼はちよつと聞くと、すぐに首を横にふつた。

「いや、嘘をいつちやいけないよ、君……」

「どうして小父さんにや嘘だつてことがわかるの？」

「そりや、ちゃんとわかるさ……」

ときどき祖母は、センナヤ廣場に水をくみにゆくときに、私をいつしよにつれていつた。ある日私たちは、町の者が五人で一人の百姓をぶんなぐつてゐるのを見た。

百姓を地面につきたほして、まるで犬の喧嘩みたいに無茶苦茶にやつつけてゐた。祖母は水桶から天秤棒をはず

して、それをふりまはしながら、町の者たちにむかつていつた、そして私にむかつて叫んだ。

「早く逃げな！」

けれど私は気が顛倒してしまつて祖母のあとからいつしよに馳けだしていつて、町の者たちのところへ砂利や石を投げてやつた。祖母は天秤棒をふるつて勇敢に町の者たちのなかにとびこんでゆき、彼らの肩や頭を打ちのめした。そこへ他の人たちもかけつけてきたので、町の連中は逃げてしまつた。祖母は怪我をした百姓を洗つてやつた。彼の顔はめちやめちやに傷をうけてゐた。私はいま思ひだしても氣持がわるいくらゐるが、彼は泥だらけの指で切れた鼻の孔をおさへて、唸つたり、咽喉をせいでいせいはせたりしてゐた。その指のあひだから血がとんで、祖母の顔や胸にかかつた。彼女も全身をぶるぶるふるはせて、大聲をあげてどなつてゐた。

私は家にかへるこゝろに「結構さん」のところへとびこんでいつて、その話をはじめた。すると彼は仕事をおつぼりだして、私のまへにきて立つた。長い鍵をサーベルのやうにもつて、眼鏡の奥からじつと私の顔を穴のあきほど見つめてゐるが、やがていきなり私の話をさへぎ

つて、いつになく眞剣になつて言つた。

「すてきだ！ たしかにそのとほりだつたらうね！ とてもうまいぞ！」

いま見てきたことに心をうばはれてゐた私は、彼の言葉なぞ耳に入れる餘裕がなくて、なほも話をつづけた。けれど彼は私をだきあげて、部屋のなかを歩きまはつて吃りながら言ひだした。

「もういいよ、もうそれ以上は聞かなくつたつていい！ 君はもう言ふだけのことはすつかり言つちまつたんだからね。わかるかい？ すつかりだよ！」

私はむつとして口をつぐんだ、けれど考へてみると、彼がちやうどいいときに私を止めてくれたのだといふことが、私自身にもおどろくほどはつきりとわかかつてきた。まつたく私は、言ふだけのことはもうすつかり言つてしまつたのだ。

「きみはね、こんなことにこだはつてゐない方がいいんだよ。こんなことは、後で思ひだしたつて氣持のいいことぢやないからね。——彼はいつた。」

ときをり彼は私にむかつて、生涯私の記憶にのこつてゐるやうな言葉をひよいひよいと言つた。私が喧嘩相手

のクリニシニコフのことを話す。こいつは新町の餓鬼大将で、ふとつた、頭でつかちの子供だ。私はどうしてもそいつを負かすことができなかった、といつて私の方も負けはしなかつたが。「結構さん」はこの私の歎きを熱心にきいてゐたあとでいつた。

——そりや馬鹿な話ぢやないか。そんなのは本當の力ぢやないんだよ。本當の力つてのは、すばしこく立ちまはることだ。すばしければすばしこいほど、強いつてわけぢやないか、わかつたかね？

そのつぎの日曜日に私はそれを試してみた。すばしこく立ちまはつて、いきなり拳固をくらはせて、たやすくクリシニコフを打ちまかしてしまつた。こんなことがあつてから、私は「結構さん」の言葉にいつそう注意をひかれるやうになつた。

——どんなものでも、しつかりとつかまなくてはいけない。わかるかね！ これはなかなかむづかしいことなんだよ、このしつかりつかむつてことはね！

私は何もわからなかつた、けれどかういつたやうな言葉は、いつか知らぬまにはつきりと記憶にのこつてゐた、といふのは、これらの言葉は非常に單純でありなが

ら、そのなかに何かしら心に食ひ入るやうな神秘なものがひそんでゐて、そのためによくおぼえてゐるのであつた。何しろ、石やパン片や茶碗や植をつかむのには、何も特別な腕前は要りやしないのだから。

だが家の者はみんな「結構さん」を、依然として嫌つてゐた。鬻氣な奥さんのかあいがつてゐる猫までが、他の人の膝へはのるくせに、彼の膝へだけはどうしてものらなかつた、そして彼がいくらやさしく呼んでもそばへこなかつた。私はそのために腹を立てて、猫をぶんなくり、耳をひつばつた、そしてほとんど泣かんばかりにしてこの人はけつして恐い人ではないと説いてきかせたりした。

——ぼくの着物が酸のにほひがするんで、それで猫がよつてこないんだよ。——彼はさう説明した、けれど私はみんなが、左様、お祖母さんまでが、それとはまるで別な解釋をくだしてゐるのを知つてゐた。彼らは「結構さん」に敵意をもつた、でたための、いかにも人を馬鹿にした解釋をくだしてゐるのであつた。

——なんだつてお前は、そんなにあの人の肩をもつんだい？——祖母が腹立たしさうに訊いた。——あいつは

お前に何を教へこむかわかつたもんぢやない……

私が「結構さん」のとこへいつたことが、端毛の鬮、つまり祖父にわがると、そのたびに私はひどくなぐられた。私はむろん「結構さん」には、私が彼とつきあふことを禁じられてゐるなんてことは一言もいひはしなかつた、けれど家ぢゆうの者が彼にどんな態度をとつてゐるかといふことは、かなりざつとばらんに話してやつた。

——お祖母さんはね、小父さんをこわがつてゐるんだよ、魔法使だつていつてゐるぜ。お祖父さんもね、小父さんは神さまの敵で、あぶない人間だつていつてゐるよ……彼は網を追ふやうな工合に頭をふつた。彼の白ちやけた頭にホーツと赤みがさして、微笑がきらめいた。私の心をギューツと締めつけるやうな微笑であつた。そして眼がよいよ青みをましてきた。

——ぼくはもうそれはちやんと知つてゐるんだよ。——彼はしづかにいつた。——こいつは、情けないことぢやないか、ね？

——うん。

——まったく情けないことだよ、君……
——たうとうしまひに彼は追ひだされてしまつた。——

ある日、朝のお茶がすんでから彼の部屋にいつてみると、彼は床の上に坐つて自分の荷物を箱につめてゐた。サロンのパフの歌をてつと口ずさみながら。

——やあ、君、もうさよならだよ、ぼくはこれから出ていくんだ……

——なぜ？

——彼は私の顔を穴のあくほど見つめてゐて言つた。

——君は知らなかつたのかい？ 君のおつ母さんがかへつてくるんで、この部屋が要り用なんぢつて……

——だががそんなこと言つたの？

——お祖父さんがさ……

——嘘だ、嘘いつてゐるんだい？

——「結構さん」は私の手をとつてひきよせた。私が床の上に坐ると、彼はしづかに話した。

——怒つちやいけないよ！ ぼくは、君が知つてゐながらわざとぼくには言はなかつたのだとばかり思つてた。こりやよくないことだ、さうぼくは思つてた……

私は何かしら彼にたいして口惜しいやうな、腹立たしいやうな氣持を感じた。

——あのね。——彼は微笑みながら、ほとんどささや

くやうに言った。——ぼくが君に、ここへきちやいけな
いつて言つたらう、おぼえてるかね？

私はうなづいた。

——きみはそのときぼくに侮辱されたやうな気がした

らう？

うん……

しかし、ぼくはね、君を侮辱しようなんてつもり
はなかつたんだよ。もし君がね、ぼくと仲よしになつた
ら、きつと君の家の人たちが君をいぢめるやうになるだ
らうつてことが、ぼくにはよくわかつてたんでね。

彼はまるで私と同年配の子供みたいな調子で話した。
私はその言葉をきいてゐるのが、おそろしく氣持がよか
つた。私はもうそのときから、すつかり彼を理解してゐ
たやうな氣さへした、そこでかういつた。

おれにも、それはもうずつとまへからわかつてた
の。

——ふうん、さうかい！ さうだらうな。ところでね
君、その一番大切なことは……

私はもうたまらないほど心が疼いてきた。

——どうしてみんな小父さんを嫌ひなんだらうな？

彼は私をしつかりと抱きしめて、眼をパチパチやりな
がら、答へた。

——人間がちがふからなんだよ。わかるかい？ つま
り、これが一番大切なことさ。あの人たちとはまるで別
な人間なんだ……

私はもう何とも言ひやうがなくて、ただ彼の袖をつか
んで引つばつた。

——おこつちやいけないよ。——彼はくりかへしてい
つた、そして私の耳に口をよせて、そつと言ひ足した。

——泣くこともないんだよ……

さういふ彼自身も、くもつた眼鏡の底からボロボロと
涙をこぼしてゐるのだ。

それからあとは、いつものやうに、私たちは長いこと
だまつて坐つてゐた、ただときどき短い言葉をとりかは
すだけだ。

夕方彼はまつていつた。みんなに丁寧に眼乞ひをし、

私だけはしつかりと抱いてくれた。私は門の外までかけ
だしていつて、泥濘が凍つてでこぼこになつた道ををど
つてゆく荷馬車の上でゆられてゐる彼のすがたを見送つ
た。彼が去るとすぐに、祖母はその汚れた部屋の拭き掃

除をはじめた。私はわざとその部屋をあつちこつちと歩

きまはつて、祖母の邪魔をした。

——あつちへいつといで！——彼女は私をつきとばし

て、どなつた。

——お祖母さんたちは、なぜあの人を追ひだしたの？

——またそんなことをいふ！

——お祖母さんたちは、みんな馬鹿だ。——私はいつ

た。

彼女はぬれた雑巾でびしやびしや私をたたいて、叫ん
だ。

——お前もいけない子になつたね、そんな生意氣な口
をきいてさ！

——お祖母さんのこと言つたんぢやないよ、他のみん
なが馬鹿だつていつたんだよ。——私は言ひなほした、
けれどそれは少しも彼女の心を和らげはしなかつた。

夕飯のときに祖父がいつた。

——やれやれ、おかげさまで助かつた。かうしないと
どうもな、あいつの顔を見るたびに、胸に小刀をつき
さされたやうな氣がしてな。やつぱり、追ひ出すのが一
番よかつたんぢや！

私は腹立ちまぎれにスプーンを折つて、また折檻をう
けた。

わが國の愛人たち——それはわが國でもつともすぐれ
た人たちのだが——その人たちの無限につづく列のう
ちで、最初に出現した人との私の親交は、かうして終り
をつげたのであつた……

九

子供の時分の私を想像してみると、ちやうど蜜蜂の集
箱のやうであつたといへる。ままたまの素樸な、平凡な
人たちが、ちやうど蜜蜂が蜜をはこんでくるやうに、い
ろんな知識や思想をはこびこんできてくれて、めいめい
の力に應じて、私の心を思ふ存分豊かにしてくれてので
ある。その蜜には、ときには汚らしいもの、辛いものも
あつたけれど、しかしどんな知識でもやはり蜜にはちが
ひなかつた。

「結構さん」が出ていつてしまつてからは、私はビョー
トルぢいさんと仲よしになつた。彼は祖父によく似て、
同じやうに干からびてゐて、几帳面で、小ざつぱりとし

てゐた。しかし、彼の方が祖父よりも少し脊がひくく、全體にいく分か小柄であつた。彼はまるで若い者が冗談に老人の風をしたといったやうな風つきをしてゐた。彼の顔は皺だらけで、細い革の紐を飾の網のやうにこまかく編んでかぶせたと言つたやう、そしてそのなかに、ちやうど鱈に入つた蚤みたい、二つの眼がをどつてゐた。白眼のところは黄いろく濁つた、おそろしく滑稽な元氣のいい眼であつた。しらがの髪はひどくちぢれ、鬚も渦をまいてたくさん小さな輪になつてゐた。パイプをくゆらしてゐると、その煙が――髪のと同じ色をして――やはり渦をまいてゆく。彼の言葉も、やたらに洒落なぞがとびだしてきて、なんだかどろろを巻いてゐるといつた感じだ。彼はゼーゼーいふ聲で、丁寧に話をしてゐるつもりらしいのだが、私にはいつも彼がみんなを嘲弄してゐるやうに思へてならなかつた。

「ずつとはじめのころ、伯爵の奥方のタチヤン・レクヤツナさまがよ、おらに「鍛冶におなり」つていひつけたもんだ。ところが、しばらくすると、こんどは「植木屋の手傳ひをしないさい」といふ御命令だ。まあいいさと思つてやつたが、この仕事は何をやらされたつてうま

くできない！　そこでまた奥方がいはつしやるだ――「ビョートルルや、お前は魚捕りをしなさい！」おらにとつちや何だつて同じことさ、魚だらうが何だらうが……しかしな、やつと魚捕りを打ちこんでやれるやうになつたころには、また魚とおさらばさ。ありがてえこつた。さうしてこんどは町へ出て、馭者になつた。人頭税をはらふためによ。しかし、馭者になつたところで、別にどうなるもんでもねえさ。ところが、もうおらと奥方とのあひだには、何もとりかへつこするものがなくなつちまつたつてわけだ。そこで、おらは自由の身になつて、馬と二人つきりでおつ放りだされたのよ。いまちやその馬のやつめが、おらのところでは奥方さまの役目をつとめてゐるわけさ。

その馬はもう若いほれで、ちやうど酔つばらつたペンキ屋が白いところへいろんな色をべたべたとぬりつけ、しかも塗りかけたまま中途で止めてしまつて、そのままになつてゐるといつた工合の毛なみであつた。脚は脱臼してをり、全身がぼろで纏ひくるんだやう。どろんとにごつた眼を見ひらいてゐる骨ばつた頭を悲しげにたれてゐる。その首は、太くふくれあがつた血管と、古ぼけて

毛のすりきれた皮とで、やつと胴筋に結びつけられてゐるといつた恰好だ。ビョートルルおれいさんはこの馬をとても大団にしてゐて、けつしてなぐつたりはしない。いつも「ターニカ」と呼んでゐた。

ある　き祖父が彼にいつた。
「お前はなんだつて人間みてえに、基督名があるのかつてとくだい？」

「とんでもねえ、ワシリー・ワシリエフ、そんなことはねえだよ！　ターニカなんて基督名があるもんかい。基督名ならタチアナつていふだよ！」

ビョートルルおれいさんも讀み書きができて、聖書にかいてあることはみんなそらで知つてゐた。彼と祖父とはよく聖者のなかではだれがいちばん偉いかなんていふ議論をしたり、おたがひに競争で昔の罪人を猛烈に攻撃しあつたりした、そんなとき、いつもアヴェサロムが特にひどく槍玉にあがつた。またときどき議論は純然たる文法的な性質をおびることもあつた。「罪人、違法者、不信者」なんていふのを、祖父は語尾を「シーホム」といつた、ところがビョートルルは「シーシャ」と言はなければいけないのだと主張した。

「おれんのはおれの、お前んのはお前んので、これはまるで話がちがふんぢや！　祖父はカンカンになつて、顔をまつ赤にして、相手にくつてかかつた。お前ときたら、シャ、シャばか言つてけつかつて！」

「だがビョートルルおれいさんは身體のまはりにもうもうと煙草の煙を吐きながら、執拗に食ひさがつてきた。

「んぢや。お前さんのホムはどこがいんだい？　神さまにとつちや、そんなものはちつともよかおえだ！　神さまはお前さんのお祈りをききながら、こんな風に考げえてゐるかもしれねえぜ、勝手にゐるがいいさ、そんな祈りは三文の値打もわえつてな。」

「あつちへいつてろ、アレクセイ！　祖父は綠色の眼をひからせて、憤然と私をどなりつけた。

ビョートルルはきれいに、きちんと片づいてゐるのが好きであつた。だから中庭なぞ歩くときには、いつも木片や顔戸物のかけらや骨片なぞを足でわきの方におしのけていつた。おしのけておいて、あとからきつとこんな言葉をあびせかけた。

「餘計もののくせして、人の邪魔ばかりしてけつかつて！」

彼はおしやべりであつた。好人物で、陽氣な人間みだりに見えるが、しかしときには、眼がまつ赤に充血してどろんどろんとこぼり、まるで死人の眼のやうに動かなくなつてしまふことがあつた。よく彼はどこか隅つこの暗がりにはひつこんで、煙の勢みたいにむつつりと黙りこみ、氣むづかしい顔をして、全身をひくひくふるはせながら坐つてゐることがあつた。

——どうしたんだい、ピョートルぢいさん？
——あつちへいつてるよ。——彼はぼんやりした聲でしかしきつぱりといつた。

この町のある一軒の家に、風がはりな旦那が住んでゐた。頼に病があつて、おそろしく奇妙な習癖をもつてゐたといふのは、休みの日といふときまつて窓ぎはに坐りこんでゐて、鐵砲に散弾をつめて、犬や猫や鴉や鳥を射つのだが、そこへ氣に入らない人間が通りかかると、それまで射つちまふのであつた。いちど彼は「結構さん」の脇腹に散弾を射つ放したことがある。幸ひ弾は皮上衣をうちぬかなかつたからよかつたものの、ポケットのなかへいくつか入つてゐた。「結構さん」が眼鏡ごしに、その背黒い散弾を熱心にしらべてゐたのをおぼえてゐる。祖

父は彼に訴へるとすすめたが、彼はその散弾を臺所の隅になげすてていつた。

——それには及びません。
ところがその次に、例の旦那は祖父の足に散弾を何發かうちこんでしまつたのだ。祖父は火のやうになつて怒り、裁判所に告訴して、町の被害者や證人をまつめはじめた。するとその旦那は、ふいにどこかへ姿をけしてしまつた。

往來に鐵砲の音がすると、いつもきつとピョートルぢいさんは——家にゐるときだと——急いで、大きな鶴のついた、もうすづかり色のさめてゐる、他處ゆきの帽子を白髪頭にちよいとつけて、あわてて門の外にかけだしてゆくのであつた。さうして彼は、兩手を背中にまはして緩上衣の下につつこんで、鴉の尻尾みたいにおつ立てて、お腹をつきだし、旦那の家のまへの歩道をゆつくりと歩いてゆくのであつた。通りすぎると、くるりと踵をかへして戻つてくる。そしてそれを何度もくりかへす。私たちはみんな家のこつて、門のわきに立つて見てゐる。窓からは例の軍人の蒼い顔がのぞき、その上に陽氣な細君のブロンズの頭がかさなつてゐる。パトレングの

家からもだれかがとびだしてくる。ただ死んだやうにひつそりしてゐるオッシュャニコフ大佐の灰色の家からだけは、だれも姿をあらはさない。
ときどきピョートルぢいさんのこの散歩は失敗にははることがある。旦那の方で、この眼のまへにあらはれた砲は射つだけの値打がないと認めたのであらう。しかし、またときには、銃聲が二發つづけさまに響くことがある。

——プッフ、プッフ……
別に足をはやめるでもなく、ピョートルぢいさんはゆつくりとかへつてきて、大満足の状態いふ。

——とんでもねえとこを射つてやがる。
いちど肩と首に弾丸が入つたことがあつた。祖母が針でその弾丸をほじくりだしながら、ピョートルぢいさんに叱言をいつた。

——何だつてお前は、あの野蠻人をからかふんだい？
そんなことをしてたら、いまに眼んなかへでも弾丸うちこまれるぜ！

——そんなことあるもんかい、アクリチ・イワンナ。
ピョートルはいかにも人を馬鹿にしたやうな調子

で、ゆつくりといつた。——あいつの弾丸なんかあたるもんかい……

——なんだつてお前、そんなあぶない感嘆ばかりしてゐるんだい？

——悪感だつて？ とんでもねえや。おらあ旦那をちよいとからかつてやりてえんだよ……
そして、ほじくりだした散弾を掌にのせてと見かう見しながら、いつた。

——なつちやるねえや、あいつの腕は！ わかし奥方のタチヤン・レクセヅナさまとこで一時旦那の役をつとめてゐた——つてのは、奥方はさるで召使でもとりかへるやうに、旦那をとりかへたからな、それでおらあそんな風にいふわけだがね——その一人で、マモント・イリイチつていふ軍人の人はな、とても射撃がうまいもんだつたよ！ あの人の射つた弾丸ときたら、はづれつこはねえんだからわ！ 馬鹿のイダナシカを四十歩ばかりむかふに立たせておいてさ、その帯に煙をしばらくつけて、イダナシカが兩足をひらいて立つとそのまんなかに煙がぶらさがらうやうな工合にしておく。イダナシカの野郎は馬鹿だから、ただゲラゲラ笑つてゐる。マモント・イリ

イチがパンとピストルを射つと、爆音がガチャンとわれたもんだ。ところが一度つきり、馬鹿かなんかがイグナシカを刺したんだね、それで奴が身ぶるひをしたために、弾丸がちやうど陸小僧のところにあたつちまつた。すぐに醫者を呼んで、足を切りおとしたがね、それでまあおしまひさ！ 切つた足は土んなかへ埋めただよ……

— その馬鹿はどうしたい、それで？

— 奴は何ともねえさ。馬鹿にや手も足も要りやしねえものな。奴はただ自分の馬鹿を賣り物にして、腹いっぱい食つてのけてゐるだよ。馬鹿つてものは、みんなが面白いがるだからな、何しろ馬鹿にや悪気はないんだからいいよ。昔からかう言つてるぢやねえかい、役人が馬鹿だら、人民はこんなに苦しみやしねえつてよ……

祖母はこんな話にはおどろかなかつた。祖母自身からいつた話を何十となく知つてゐるのであつた。だが私は少し氣味がわるくなつてしまつて、ピョートルに訊ねた。

— 旦那は、そんなにやたら人を射ちころしてもいいの？

— どうしていけねえことがあるもんかね？ いいん

だともさ。旦那がた同士で、おたがひにやり合ふことだつてあるだものな。タチヤン・レクセツナさまんとこへ一人の龍騎兵がきただよ。その人がな、マモンと喧嘩をしてさ、そこで二人ともピストルをもつて、公園にでかけていつて、池の端の小道でな、その龍騎兵がマモン

トをパンとやつちまつた。ちやうど肝臓のどこをな！ それでマモンはお墓へ、龍騎兵はコーカサスへいつただよ。もつとも龍騎兵の方は、さう大して長い期間でもないんだがね！ こんなのは旦那がおたがひ同士でやつたことだからいいだがな！ 百姓たちやなんかのことになると、とてもお話にもなんにもなつたもんぢやねえさ！ いまぢや旦那がたが、ことさらに百姓どもを憐れむつてことはなくなつたね、百姓がもう自分のものぢやなくなつたからよ。それでも、以前には憐れんだもんだ

百姓が自分の身代だつたからな。

— いや、昔だつて、それほど大して憐れみもしなかつたぞい。祖母がいつた。

— ピョートルぢいさんは同意した。

— そりやたしかにさうだよ。自分の身代つていつても、大して値打のあるもんぢやなかつたでな……

て、鉤をおろすとはせやうぐひが先をあらそつて食ひついてくるありさまを、とても面白さうに語つてきかされた。—— お祖父さんに答でたたかれるときには、お前腹が立つだらう。—— 彼は慰めるやうにいつた。—— しかしな、若旦那、腹を立てることはないんだぜ、そりやつま

りお前の教訓のためになぐるんだでな。響の管はつまり子供のためを思へばこそその管だでな。ところが、おらの御主人のタチヤン・レクセツナさまな、この人の管ときたら有名なもんだつたぜ。わざわざ給料をやつて、叩く男を雇つておいただからな。その管打ちの名人は、フリストフォルツで名前だ、よく他部落の旦那がたから

奥方さんとこへたのみにきたもんだ、「タチヤン・レクセツナさま、うちの召使を折檻するだから、フリストフォルツを貸しておくんなすつて！」なんていつてな。さうすると、さつそく貸してやつたもんさ。

奥方が白いモスリンの着物をきて、空色の軽いふわふわした頭布をかぶり、昇り段のうへの柱廊のある廊下で赤い安樂椅子に坐つてゐる、そのまへでフリストフォルツが百姓の男や女をピシピシ管打つ—— そのありさまを彼は、悪氣のない調子で、詳しく語つてきかされた。

彼は私にたいしては非常にやさしくふるまい、大人と話しをするときよりもずつと親切に話をしてくれ、話の最中に眼をわきへそらすやうなことをしなかつた、それでゐながら彼のうちには何かしら嫌なものがあつた。愛用のジャムをみんなにふるまふときにも、私のパンにはとくにごひいき分にごつてりと塗りつけてくれたり、あるひは町から麥芽のお菓子やけしの饅頭などを買つてきてくれたり、また私と話をするときには、いつも眞面目な、おちついた調子で口をきいたりするのであつた。

— 若旦那、大きくなつたら、何になりなさるかね？

— 軍人かな？ それとも殺人かね？

— 軍人になるんだい。

— そりやいいな。けふ日は軍人も大して苦勞なことではなくなつたからね。しかし、牧師になるのもまたいいな、「神よ恵みをたれたまへ」とかなんとか、自分の勝手なことをほざいてれば、それで済んでいくんだからね！ 牧師の方が軍人よりもらくなことはたしかだよ。それよりもつとらくな商賣つていつたら、漁師だね。漁師にや

學問なんて何も要らねえ、ただ熟練だ！……

— そして彼は、魚どもが誘ひ餌のところにあつまつてき

——このフリストフォオルつて男はな、若旦那、リヤザンの者でな、ジブジーか小ロシヤ人みてえに口髭が耳にとどくぐれえ長くて、顔が青んぶくれてゐて、鬚鬚は剃つてあつただ。べつに本當の馬鹿ぢやなかつただが、餘計なことを訊かれるのがうるさいつてんで、馬鹿のふりをしてゐたもんだ。よく臺所で、茶碗に水をいっぱい入れて、蠅や、さうでなきや油虫とか甲虫なんかをとつてきて、そこに放りこんで、棒きれでそれを突つては溺らせようとしてゐるだ、それをいつまでももやつてゐるだ。さうかと思ふと、襟の下から自分の垢をこすりつて、それをその茶碗のなかに放りこんでみたりさ……

かういつた話はもう私はよく知つてゐた。祖母や祖父の口からずぶん聞かされてゐたのだ。ちよつと見たところは、いろいろ變つた話がたくさんあつたが、しかしみんな奇妙にどこか似かよつた點があつた。どれもこれもみんな人間が虐待され、嘲笑され、ふみつけにされてゐた。私はそんな話もうあきあきしてゐた、ちつとも聞きたくなかつた。で、ビョートルルおいさんにたのんだ。

——もつと他の話をしておくれよ！
彼は頭ぢうの皺を口のはたにあつめ、それからそれを

——そんな話、ちつともおもしろくないぢやないか！
——んぢや、何かおもしろいんだい？ さあ、言つて

みな！

——そんなこと、おら知らねえ……

——それぢや、だまつてなよ！

さうして彼はまた蜘蛛が巢をはるやうな工合に、退屈な話をつづけてゆくのであつた。

休みの日には、ときどき従兄たちが遊びにきた。いつも情けなささうな顔をしてゐる意け者のミハイルの伴のサーシャと、いつもきちんとしてゐる、物知りのヤコフんとこのサーシャとだ。ある日、三人で家根の上であそんでゐるとき、となりのペトレングの家の庭に緑色の毛織のフロッグをきた旦那の姿をみつめた。彼は駭きはいつんだ薪の上に腰かけて、仔大を相手にしてあそんでゐた。黄色く禿げた小さな頭は、帽子もかぶらず、むきだしになつてゐた。従兄のどつちかが、あの仔大をぬすんでやらうといひだした、そしてたちまちその場で巧妙なプランを立てた。二人の従兄がすぐにこれから往來にでていつて、ペトレングの家の方にはまる。私が旦那をおどかす。旦那がびつくりして逃げだしていつたら

だんだんに眼の方にうつしていつて、ぐなづいた。

——いいとも。もつと他の話をききたいんだな。それぢやな、むかしおらんとこに料理人が一人ゐただがな……

——おらんとこつて、どこだい？

——タチヤン・レクセザナさんとこさ。

——どうして奥方のことを、男みたいにタチヤンなんていふんだい？ その奥方は、男なの？

彼はかすかに笑つた。

——むろん、そりや女さ。だけんどな、髭がはえてるんだぜ。黒いやつがな。あの人は黒いドイツ人の血をうけた人でな、まあ黒ん坊と同じ人種だ。そんなわけさ、料理人が一人ゐたんだよ。これはな、若旦那、とてもをかした話だがね……

このをかした話といふのは、要するに、その料理人が魚肉入りの饅頭を作りそなたつて、罰としてそれを一度に全部むりやりに食べさせられた、料理人はどうにか全部食べたけれど、それで病氣になつてしまつた、といふだけのことであつた。

私は腹をたててしまつた。

二人はすぐに庭へしのびこんで、仔大をさらつてくる

……といふのだ。

——どうやつておどかすんだい？

——する。従兄の一人がいつた。

——あいつの禿頭を唾を吐きかけろよ！

人の頭に唾を吐きかけるといふことは大きな罪だらうか？ 私はそんなことと比べものにならないほどわるいことを、もうたくさん話に聞いたり、自分の眼でも見たりしてゐた、だからむろん私はいさぎよく自分に課せられた役目を忠實に實行した。

大へんな騒ぎがもちあがつてしまつた。ペトレングの家から私の家の中庭にむかつて、男女の一隊がおしよせてきたのだ。その先頭に立つて指圖をしてゐるのは若い綺麗な士官であつた。従兄たちは、犯罪の行はれた瞬間には、私のこんな野蠻きはまる悪戯なぞは何にもしらずにおとなしく往來を歩いてゐたわけなのであるから、祖父は私ひとりを折檻した。それでペトレングの家の人たちはみんなやつと納得して、かへつていつた。

私がすつかりへたばつて、臺所の板敷床の上にならると、他處ゆきの着物をきて、嬉しうなほをした

「トールちゃんさんが、そつと入つてきた。」

若旦那、お前なかなかうまいことを思ひついたわ。彼は私の耳もとでささやいた。——あんな老いぼれの山羊野郎には、そのくらゐなこととしてやらなくつちや嘘だよ。さうだともさ、唾を吐つかけてやるがいいだよ！ 唾どころか、あのくさつた禿頭に、石でもぶつつけてやるがいいだ！

私の眼のまへには、つるつるに禿げた、まるい、子供みたいな、旦那の顔がうかんできた。私は、彼がまるで仔犬みたいにかほそい、情けない悲鳴をあげて、黄いろい禿頭を小さな手でこすつてゐたのを思ひだし、自分が恥しくてたまらなくなつた。私は二人の従兄を憎んだ。けれど、トールちゃんさんの皺につつまれた顔を見たら、そんな考へはみんな、たちまちどこかへふつ飛んでしまつた。彼の顔は、ちやうど祖父が私を管打つときの顔そつくり、ぞつとするやうな恐ろしい敵意をみなぎらせてふるへてゐた。

「あつちへいつとくれよ！」 私は手と足とでトールをつきのけながら、大聲をあげて叫んだ。

彼はヒヒヒ……と笑ひ、眼をバチバチやつて、板敷床

のそばからはなれていつた。

そのとき以来私けもう彼と話をしようといふ氣持を失つてしまつた。私は彼を避けはじめた。そして同時に、漠然と何かを期待しながら、疑ひの眼で彼をながめるやうになつてきた。

隣りの旦那との一件があつてからまもなく、また一つの事件をひきおこしてしまつた。私はもうずつとまへから、レオンとひそまりかへつてゐるオッシュニコフ大佐の家にはひどく興味をひかれてゐた。この灰色の家のなかではきつと、一風かはつた、神秘的な、お伽噺のやうな生活が行はれてゐるやうな氣がしてゐた。

ペトレングの家では陽氣に、にぎやかに暮してゐた。そこには、きれいな夫人がたくさんゐたし、士官や學生たちがしよつちうやつてきて、いつも笑つたり、叫んだら、歌つたり、あるひはまた音楽をやつたりしてゐた。家の様子そのものまでがひどく陽氣で、窓のガラスはまぶしく光り、窓のなかにある草花はいろんな色をあざやかに浮きださせてゐた。祖父はこの家を好かなかつた。

不信心の罰あたりどもめ！——彼はそこに住んでゐる人たちみんなをさう言つた。それから婦人たちにた

いしては、おそろしく下品な言葉をあびせかけた。その言葉の意味を一度、トールちゃんさんがやはりおそろしく下卑た、いやらしい調子で説明してくれたことがある。

それに反して、大へんしづかで、厳格なオッシュニコフの家は、祖父に尊敬の念をおこさせた。

この平屋建てだが、かなり脊のたかい家は、芝をはりつめた、きれいな、がらんとした中庭にくつとつきでゐた。その中庭のまんなか井戸があつて、二本の柱をたてて屋根がかけてある。この家は、まるで往來からかくれようとでもするやうに、ひつこんでいた。アーチのついた狭い三つの窓は、地面からずつとはなれた高いところを開いてゐて、そこにはめられた曇りガラスは陽光にてらされると虹のやうに七色にかがやいた。門から入ると、その別の側に、正面の體裁はこの家とそつくりの物置が立つてゐた。同じやうに三つの窓がついてゐるのだが、これは眞物ではない、灰色の壁に窓枠をはめこんで、そのなかへ白いペンキで窓の棧を描いてあるだけなのだ。このあかずの窓は、氣持のいいものではなかつた。そして物置全體がまた、世間から姿をかくして、こつそ

りと暮してゆかうとしてゐるこの邸の氣持を、どこかはなしに漂はしてゐるのであつた。底に怒りをひそめた静けさといふか、誇りをもつた静けさといふか、何かさういつたものが、この屋敷全體にみなぎつてゐた。からつぽの厩にも、また大きな門のついてゐる、けれどやはり中はからつぽの納屋にも……

ときをり背のたかい老人が、少しびつこをひきながら、中庭をあるいてゐた。彼は顔にきれいに剃刀をあて、白い口髭を生やしてゐるのだが、その髭はまるで針のやうに兩側にびんとつきでゐた。またときには、鬚を生やし、鼻のまがつた、もう一人の老人が、厩から足のながい灰色の馬をひつぱりだしてゐることがあつた。細い脚をした、胸のせまいこの馬は、中庭にでてくると、まるで信心ぶかい尼さんみたいに、あたりのもの何にでもやたらにお辭儀をするのであつた。ひつこの老人はいい音をたてて掌で馬の背中をたたいてやり、口笛をふいて、荒い溜息をついた、すると馬はまた暗い厩のなかにひつこんでゆくのであつた。私には何だか、この老人が馬にのつてどこかへ出かけたかと思つてゐるのに、魔法にかかつてゐて、それができないのだ、といふやうな氣がし

てならなかつた。

ほとんど毎日、おひるごろから夕方まで、三人の男の子がこの中庭であそんでゐた。みんな同じやうに灰色の上衣とズボンをつけ、おそろひの帽子をかぶつてゐた。みんな丸顔で、灰色の眼をしてゐて、とてもよく似てゐた。私などには、背の高さでやつと區別がつくくらゐであつた。

私は垣根のすきまから彼らのすることを見てゐた。彼らは私には気がつかなくなつたが、私は気がついてもらひたいと思つた。三人が仲よく、とても面白さうに、私の知らない遊びごとになつてゐるありさまは、すつかり私の氣に入つてしまつた。彼らの着てゐるものも氣に入つたし、おたがひによくいたはりあひ、ことに年上の子供が小つちやい、やんちや坊主の弟にたいしてはとてもゆきとどいた心くほりをしてゐる態度も、氣に入つた。小つちやい弟がころんだりすると、みんながドット笑ふ人がころんだのを見ると、だれでも笑ふやうに。けれどその笑ひには、ちつとも意地悪なところはなほない。すぐに助けおこしてやる。そしてもし手や膝が汚れてゐると、牛蒡の葉や手巾で手の指やズボンの膝をふいてやる。中

の子が人のよささうな調子でいつた。

「やあ、下手やつちやつたな!……」

彼らはお互ひに悪口をいひあつたり、散しあつたりするやうなことは一度もなかつた。しかも三人が三人ともとてもすばしくくて、元氣で、強さうだつた。

ある日私は木にのぼつて、彼らに口笛をふいた。彼らは口笛をききつけたところで立ちどまり、それからゆつくりとした足どりで一ところによりあつて、ちらりと私の方を見あげながら、なにかそつと相談をはじめた。私はきつと彼らが私に石をなげてよこすだらうと思つたので、いそいで地面にとびおひり、ポケットにたくさん石をつめこんで、しばらく間をおいてから、また木によちのぼつていつた。ところが彼らはもうすつとむかふの庭の隅へいつて遊んでゐて、私のことなどは忘れてしまつてゐるやうであつた。私はどうも腹の虫がおさまらなかつた。けれどこちらから戦争をしかけてゆく氣にはなれなかつた。まもなくだれかが、窓の通風口から彼らをやんだ。

子供たちや、家へお入り!

彼らは鷲鳥のやうに、ゆつくりと、おとなしく家に入

つていつた。

たびたび私は垣根の上になつて木の上によちのぼつて、彼らが私を呼んで遊び仲間に入れてくれないかと思つて待つてゐた。けれど彼らは、呼んではくれないかと思つて私もう頭のなかでは彼らと遊んでゐるつもりになつてゐた。そしてときどき夢中になつてしまつて、思はず大聲をたてて叫んだり、笑つたりした。すると三人は私の方を見あげて、そつと何かささやきあふのであつた。私はどきまきしてしまつて、あわてて地面にとびおひりた。

ある日三人はかくれんぼをはじめた。中の子が鬼の番になつた。彼は物置の角に立つて、正直に両手で眼をふさいでゐた。あとの二人は、どこかへかくれに走つていつた。上の方の子は、物置の軒下にある大きな櫛のなかにすばやくもぐりこんだ。けれど小つちやい弟はかくれる場所が見つかからなくて、あわててしまひ、井戸のまはりまごまご騙けまはつてゐた。

「イーチ。——上の子が叫んだ——ニイッ……」

小つちやい弟は井桁にとびあがり、繩につかまつて、からの釣瓶に兩足をかけた。釣瓶は井桁にぶつかつて、にぶい音をたてて、井戸のなかに消えていつた。

私は、よく油をさしてある滑車が音もなく、くるくると急速にまはるのを眺めて茫然としてゐたが、すぐに何をしたらいのかといふことがピンと頭にきたので、隣りの庭にとびおひりて、叫んだ。

「井戸へおちたよオ!……」

中の子が井戸のところにかけつけたのは、私と同時にあつた。彼は繩をつかんだので、ぐうつと上にひつぱりあげられ、両手をまつ赤にすりむいた。けれど私はうまく繩をとめることができた。そこへ上の子もかけつけてきて、私に手つだつて釣瓶をひきあげた。彼はいつた。

「しづかにやつておくれよ、ね!……」

私たちはいそいで小つちやい弟をひきあげた。彼もすつかりびつくりしてしまつてゐた。右手の指からは血がポタポタとたれ、頬にひどい擦り傷をこしらへてゐた。腰までぐつしよりぬれて、血の氣がなかつた。それでゐながら、眼を大きく見ひらき、口をバクバクやつて、微笑してゐた。そして甘つたれた調子でいつた。

「ぼくウ、おつこつちやつたア……」

「氣でも狂つたのかい、おい、あんなことしてさ。——中の子がさういつて、弟をだいて、手巾で顔の血を

ふいてやつた。上の子が苦笑ひをしながらいった。

——さあ、いかう。どうせかくせやしなもの……

——お前たち、打たれるだらう？——私は訊いた。

彼は首をふつた、そして私の方に手をさしだして言った。

——きみは、とても早く駆けつけてくれたね。

ほめられてわくわくしてしまつた私が、彼の手をまだ握らないうちに、彼はもうまた中の子にむかつて言つたものだ。

——さあ、いかうよ、これが風邪をひくぜ！ この子はころんだんだ、と言つておかうよ、ね。井戸のことなんかは、言はない方がいいやね。

——うん、いはない方がいいよ。——下の子が、まだガタガタふるへながら、賛成した。——これは、ぼく水溜りへころんだんだよ、ね？

彼らは去つていつた。

すべては瞬くまの出来事であつた、だから私がいまとびおりにきた木の枝を見あげると、その枝はまだ黄色い葉をふりおとしながら、ゆれてゐたほどであつた。

一週間はかりその子供たちは庭にでてこなかつた。け

れどそのうちにまた出てくるやうになり、前にもましてにぎやかに騒ぎだつた。上の子が、木の上にある私を見つけて、愛想よくよびかけた。

——こつちへおいでよ！

私たちは物置の軒下にある、古い大櫓のなかにあつまつて、おたがひにまじまじと相手の顔を見つめながら、ながいこといろんな話をかはした。

——君たちは、打たれたことあるかい？——私は訊いてみた。

——そりや、あるともさ。——上の子が答へた。

この子供たちが私と同じやうに打たれるといふことは、どうもなかなか信じられなかつたし、第一そんなことを考へるのは彼らを侮辱するものだと思はれた。

——なぜ君は鳥をとつたりするの？——小つちやい子が訊いた。

——よく歌をうたふからさ。

——でも、鳥なんかとるのはお止めよ、好きに飛ばせておいた方がいいぢやないか……

——うん、そりやさうだ、んぢやもう止めるよ！

——ただそのまへにね、一羽だけとつて、ぼくにおく

れよ。

——いいとも、どんなのがいいんだい？

——元氣のいいやつがいいな。籠へいれとくんだよ。

——んぢや、まひはにしようかな。

——猫にとられちまふぜ。——中の子がいつた。

それに、お父さんが許してくんないだらう。

——上の子もそれに賛成した。

——とても許してくれないね……

——君たち、お母さんはあるの？

——ううん、ない。——上の子がいつた。けれど中の

子がすぐにそれを訂正した。

——あるよ。ただね、ぼくらのお母さんぢやない、別

のお母さんなんだよ。ぼくらの本當のお母さんは、ない

んだよ、もう死んぢまつた。

——別のお母さんなら、繼母つていふんだらう。——

——私がつた。上の子がうなづいた。

——うん、さうだよ。

そして三人とも陰氣になつて、考へこんでしまつた。祖母の話によつて私は繼母といふものがどういふものであるか知つてゐたので、彼らが考へこんでしまつたわ

けもよくわかつた。彼らはおたがひにびつたりと身體をよせあつて坐つてゐた。まるでひよつ子みたいに、みんな同じ恰好をしてゐた。私は、人を欺して生みの母親にとつてかはつた悪魔の繼母のことを思ひだした。そこで彼らに誓つていつた。

——ほんとお母さんは、またかへつてくるよ。待つ

てでござらん！

——上の子が肩をすくめた。

——死んぢまつてもかい？ そんなことあるもんか

……

そんなことはないであらうか？ だつて神さまは、死んだ人を、ずたずたに切りさかれてしまつたやうな人でさへも、何度でも甦へらせたではないか！ 死は神さまから下された本當の死ではなく、妖羅や妖女の惑しにすぎないのだから、生の水さへふりかければ、何度でも甦へるのではないか！

私は一所懸命になつて、祖母からきいた話を、彼らに語つてきかせた。上の子は、はじめからニヤニヤ笑つてゐたが、そのうちにそつといつた。

——そんなこと、ぼくたちも知つてるよ。でもそれは

お伽嬬なんだ……
しかし二人の弟はだまつて聞いてゐた。小さい弟の方はきつと唇をかみしめて、頬をふくらませてゐたし、申の子は腕を膝のうへにつつばつて、私の方にかがみこみ弟の首に腕をまきつけて、いつしよにかがみこませてゐた。

白い口髭をはやして、司祭のきるやうな褐色の長い着物をき、ボヤボヤと毛ぼだつた毛皮の帽子をかぶつた老人が私たちのそばにあらはれたときには、あたりはもうすつかり夕暮の色がたちこめ、赤い夕陽が屋根の上の空にかかつてゐた。

——こりや誰ぢや？——彼は私を指して、訊いた。

上の子が立ちあがつて、私の祖父の家の方を顎でしやくつて、答へた。

——あすこの家の子です……

——だれが呼んだんぢや？

子供たちはいつせいに、だまつて大櫓から這ひだして家に入つていつた。その様子はまた私に、おとなしい驚鳥を思ひださせた。

老人は私の肩をじやけんにつかんで、中庭をとほつて

大佐は家ぢゆうにきこえるやうな大きな聲をだして深い溜息をつき、木の柱みたいにくるりとまはつて、出ていつた。しばらくしてから私は、中庭にゐたピョートルぢいさんの荷馬車のなかに放りだされた。

——また何かやつただわ、若旦那？——彼は馬を解きながら訊いた。——何でまたなぐられたわね？

私はそのわけを話してやると、彼は急に顔をまつ赤にして、口から唾をとばして文句をいひだした。

——お前、なんだつてあんな野郎どもと友だちになつただい？ あいつらあ、旦那んとこの餓鬼どもぢやねえか、あんな野郎どものおかげでひでえ眼にあふなんて法はねえだ！——こんどは一つ、お前の方からやつらをやしつけてやれ。ぼやぼやしてゐることはねえや！

彼はそんな調子でながいこと文句をいつてゐた。さつきの折檻ですつかり唇のたかぶつてゐた私は、はじめのうちには彼の言葉を同感して聞いてゐたが、やがてだんだんにその皺のたたまつた顔が不愉快に見えてきた。すると、あの子供たちもやつぱりなぐられてゐるであらう、しかもあの子供たちは私のことで何も罪はありやしないのだ、といふことをふつと思ひだした。

門の方にひつばつていつた。私はおそろしさのあまり、泣きだしたくなつた、けれど彼が大股でぐいぐいとひつばつてゆくので、私は泣きだすひまもなく、たちまち往來に出されてしまつた。老人は耳門のわきに立ちどまつて、指を立てて私を威嚇していつた。

——こんどきたら承知せんぞ！

私もすつかり憤慨してしまつた。

——だれがきてやるもんか！畜生！糞つたれ爺い！彼は長い手をのばしてまた私をつかまへて、歩道をひつばつていつた。道みち彼は、まるで鎧で私の頭をうちくたくやうな調子で訊いた。

——お祖父さんは家にゐるか？

残念ながら祖父は家にゐた。祖父は、ものすごい權幕できた老人のまへに突立ち、ぐつと反り身になつて、額髯をまへにつきだして、二番、鎧貸みたいにどろんと赤くにごつた、まんまるい相手の眼をにらみかへして、早口でいつた。

——これのお母はいま他處へいつてるだし、わしはまたいちいちこれの世話を見てゐる暇もねえですだでな……まあ勘辯してやつておくんなされや、大佐殿！

——あの子たちを打つことなんてないよ。みんないい子だもん。お前のいふことは嘘ばかりだ。——私はいつた。

彼はしばらく私の顔を見つめてゐたが、ふいにどなつた。

——この馬車から、トットと出ていけ！

——ピョートルの馬鹿爺い！——私は悪態をついて、地面にとびおりた。

彼は中庭ぢゆう私のあとを追つかけまはした。そしていくら提へようとしても提へられないので、しまひには頓狂な聲をはりあげて、わめいた。

——おらが馬鹿だど？ おらが嘘つきだど？ ようしそれぢや一つきさまを……

臺所の昇り段の上に祖母がでてきたので、私はすぐに彼女にしがみついていつた。すると彼はこんどは祖母に訴へはじめた。

——わしはこんな小坊主に、何の厄介にもなつちやあねえですぜ！ わしはこいつの五倍も年をとつてるだ。そんだのにこいつは、わしにひでえ悪態をついて、嘘つきだとか何だとかぬかしやがるだ……

私は眼のまへでぬけぬけと嘘をいられると、こつちがびつくりしてしまつて、すつかりまごつき、ポカンとしてしまふのであつた。このときにも私は面くらつてしまつたが、祖母がきつぱりとやつてくれた。

「いいや、ビョートル、どうもお前の方が嘘ついてるやうだね。この子は、そんなひどい悪態をつくはづけないぢやないかい！」

祖父ならば、腹者のいふことをそのまま信じこんだことであらう。

それ以来私とビョートルとのあひだには、意地のわるい無言の戦ひがはじまつた。彼は隙をねらつてゐては、ふいに私をつきこるばかり、手綱でぶつたり、私の小鳥をにがしてやつたり、一度などは猫に食はせたりした。そして私のしたことをいちいちおまけをつけては祖父に告げ口するのであつた。彼は外見だけは老人の姿をしてゐるけれど、本當は私と同じぐらゐの子供にすぎない。

「そんな風に私はいつも思つてゐた。私は私でまた、彼の草鞋をほどこき、こつそりとその紐のよりをもどして切つておいたりした。ビョートルがそれをはくと、たちまちブツンと切れてしまふのであつた。あるときはまた

帽子のなかに胡椒をいっばい置いておいて、一時間あまりもくさめをさせたこともある。力でも智恵でも彼におくれをやるまいと、私も一所懸命であつた。休みの日には、彼は一日ぢゆうしつつかく私のあとをつけまはして、禁制の場所で、といふのは私が隣りの子供たちと遊んでゐるところを、再三見つけて、私をつかまへて祖父に告げにゆくのであつた。

この坊ちやんたちとの交際はずつとつづいた、しかもそれは私にとつてはだんだんに面白くなつてきた。祖父の家の壁とオアシ・ニョフ家の垣根とのあひだの小徑には、楡や菩提樹やこんもりしげつたにはこの木などが生えてゐた。そのにはこのしげみのかげに私は垣根をやぶつて半圓形の抜け穴をこしらへた。隣りの子供たちは一人づつ順ぐりに、あるひは二人いちどに、その穴のところをやつてきて、べつたり坐りこんだり、立膝をしたりして、聲をひそめて私と話をするのであつた。いつも三人の兄弟のうちのだれか一人が大佐にふいをつかれないやうに見張つてゐた。

彼らは自分たちの退屈な生活の話をした。そんな話をきくのは私には悲しかった。彼らはまた、私がとつてや

つた小鳥の様子とか、その他いろんな子供らしい話をした。けれど父親と祖母とのことは、つひそ一言も彼らの口にはのぼらなかつた。少くとも私はそれを聞いたのをおぼえてゐない。よく彼らは私にお話をしてくれとせがんだ。私は得意になつて、祖母からきいた話をくりかへしてきかせた。ときどき途中で忘れてたりすると、私は彼らに待つてゐてもらつて、すぐに祖母のところへとんでいつて、忘れたところを聞いてきた。これはいつも祖母を大へん喜ばせた。

私はよく祖母のことも話してやつた。するとあるとき上の子がふかい溜息をついて、いつた。

「お祖母さんといふのは、きつとどこでもみんないい人なんだね。ぼくん家にも、とてもいいお祖母さんがゐるんだ……」

彼は、ゐたどか、あつたとかいふ風に過去のことを、とても十一歳の子供とは思はれない、まるで百年もこの地上に生きてきた人のやうな悲痛な面持ちで、しきりに語つた。彼は肉のうすい、指のほそい、きやしやな手をしてゐた。身軀ぜんたいも細つくくて、弱弱しかった。だが眼はとてもきれいに澄んでゐて、しかも教會の證明

の火のやうになごやかな光を放つてゐた。二人の弟もやつぱりかあいらしくて、深い信頼の念をおこさせた。彼らのためになら、いつでも何か氣持のいいことをしてやりたいといふ氣になつた。しかし、やはり一番上の子が私が一番好きだつた。

話に夢中になつてゐて、私はよく、ビョートル爺さんが姿をあらはしたのにも氣がつかないでゐた。爺さんは、大きな聲をながくひつぱつて私たちをどなりつけて追ひちらすのであつた。

「またかーア？」

私は、彼がますますすひんばんに例の氣むづかしい發作をおこすやうになつたのを見え。そして、彼がどんな御機嫌で仕事からかへつてきたかを、まへもつて察知できるまへになつた。つまり、いつもは彼はゆつくりと門をおしあけてくる、するま蝶番はゆつくりと、ものうげにギーイと鳴る。ところが御機嫌のわるいときには、蝶番がまるで痛さのあまり鳴鳴でもあげるやうに、氣短かにギ、ギツつと鳴るのであつた。

彼の唇の塙は嫁をもらひに田舎へいつてゐた。ビョートルは既の上の、申しわけばかりの小さな怒のついた狭

くるしい部屋に一人で住んでゐた。この部屋には、くさった皮と、タールと、汗と、タバコとのにほひが、むんむんするほどこもつてゐた。その悪臭におそれなして、私はその住居へは一度も足をふみ入れたことがなかつた。彼はランプをけさないで眠つてゐた。祖父はそれを大へんに嫌つた。

——氣をつけるよ、ビョートル、火車を出さねえようにな！

——大丈夫だい、心配しなさんな！ おらあ夜は茶碗に水をいれて、そんなかへ蠟燭をおつたてとくだでな。

——彼はそつぽをむいて答へた。

彼はこのごろは、いつでもそつぽをむいてゐた。祖母の夜會にも、もうずつとまへから出なくなつてゐた。ジヤムをふるまつてくれることもなくなつた。顔はしなび皺がますます深くなつてきた、そして病人のやうに足をひきずつて、よたよた歩いてゐた。

ある朝、私は祖父と二人で、昨夜しこたまふつて積つた中庭の雪をかきよせてゐた。ふいに耳門の掛金が、いつもとちがつて特別大きな音をたてたと思ふと、門があいて、警官が中庭に入つてきた。彼は耳門のまへに立ち

ふさがつて、太い指をあげて祖父をさしまねいた。祖父がそばによつてゆくと、警官はまるで祖父の額を啄むやうな工合に、大きな鼻ののさばつてゐる顔を祖父に近づけてきて、人にきこえないやうにさつそりと何か話しはじめた。祖父はせつかに答へた。

——ここで！ いつ？ そんなことがあつたかな……そしてふいに、滑稽な恰好をしてとびあがつて、叫んだ。

——ああ、神さま！ 本當かねそりや？
——しつ、しづかに！——警官がきびしくいつた。
祖父はあたりを見まはして、私の姿をみつめた。

——雪かきを片づけてな、家へ入つてろ！

私が家の角にかくれて見てゐると、二人は駭者の住居に入つていつた。警官は右手の手袋をぬいで、それで左の掌をバタバタとたたいていつた。

——あいつにや、わかつとるんだ。だから馬をおつぱりだして、自分は姿をかくしちまつたんだ……

私は臺所にかけて、いま見たり聞いたりしたことを、祖母に逐一話した。彼女は粉だらけの顔をふりたてながら、捏り鉢のなかで一所懸命パン粉をねつてゐた

が、私の話をきくと、おちつきはらつていつた。

——きつと、何か泥棒でもしたんだね……さあ、あつちへいつて遊んできな。お前の知つたこつちやないからわ。

私がまた中庭にとびだしてゆくと、祖父が耳門のわきに立つて、帽子をぬいで、空を見あげて、十字を切つてゐた。髪の毛をさかだてて、佛頂面をして、片足をぶるぶるふるはせてゐた。

——家へ入つてろつて言つたぢやねえか！——彼は足をふみならして、私をどなりつけた。

そして自分も私のあとについて臺所に入つてきて、大きな聲で呼んだ。

——おつ母や、ちよつときてくれや！

二人はとなりの部屋に入つて、ながいこと何かささやきあつてゐた。そして祖母がふたたび臺所にかへつてきたとき、私には何かおそろしいことがおこつたのだといふことがはつきりわかつた。

——お祖母さんは何をそんなにたまげてるだい？
——だまつてゐなつたら！——祖母は、しづかに答へた。

その日は一日、家ぢゆうが健な氣分にとざされて、おどおどしてゐた。祖父と祖母は、おちつきのない腰をきよるきよるさせ、聲をひそめて何かわけのわからないことを短い言葉でいつた。それがまたいつそ不安をつのらせた。

——おつ母アや、お前家ぢゆうに灯をつけときなよ。
——祖父が咳こみながら、いひつけた。

あまり食べたくなかつたけれど、みんなおひるを食べた。まるでだれかお客を待つてゐるときみたいに、大いそぎで食べた。祖父はぐつたりしたやうに頬をふくらませて、吐息をついたり、唸つたりした。

——悪魔つてやつは、人間にむかつちや、強いもんだでなア！ なんだつて、あいつはとても信心ぶかくて、まるで坊さんみてえな男だつたにな、それがお前、どうだ、い、え？

祖母は溜息をついた。
銀色にけぶつた冬の日で、一日があきあきするほど長かつた。家のなかには、ますます不安に、ますます重苦しくなつてきた。
日暮れまへに、また警官がやつてきた。こんどは前と

は別の、太つた儲毛の人であつた。彼は藁所のベンチに腰かけて、鼻をならし、コツタリコツタリと居眠りをしていた。

——どうしてわかつたんでござえますか？——祖母がさう訊れると、彼はしばらく口をもぐもぐやつてゐてから、ぼんやりした聲で答へた。

——われわれには何でもわかるんぢや、心配しなくてもよろしい！

私は窓べに坐つて、二コペイカ哥銅貨にハーツと息をかけてあたたためては、蛇を退治してゐるケオルギイ・ポペドノセツツの肖像を、窓ガラスの氷におしつけようと一所懸命になつてゐたのをおぼえてゐる。

ふいに玄關で重くるしいざわめきがおこり、扉がいつばいにおしあけられて、ペトロヅナがしきゐの上に姿をあらはし、耳を聳するばかりの大聲をあげて叫んだ。

——きて見ておくんなさい、お前さん家の裏に何かあるだ！

巡査の姿を見つけると、彼女はまた玄關にかけもどらうとしたが、巡査がすばやくそのスカートをつかんで、大聲でわめいた。

——待て、待て！ だれぢや？ 何があるんぢやい？ しきゐにつまづいて膝をついた彼女は、言葉と涙にむせびながら、また叫びだした。

——牛の乳をしぼりにいくとね、カシーリンさんの家の裏庭に、なんだか長靴みたいなものが見えるでねえですか。

すると祖父が足をふみならして、憤然としてどなた。

——嘘つけ、馬鹿女め！ おらの裏庭に何かあるか、お前に見えるはづがねえでねえか、垣根はたかいし、隙間はねえしき！ 嘘はかついてけつかるわ！ おらとこになんか何もありませんわ！

——まあ、お父つあん！——ペトロヅナは片手を彼の方にさしのべ、もう片方の手で頭をかかへて、泣き聲をたてた。——ほんとですだよ、お父つあん、わたしが嘘なんかつくもんかね！ わたしがいくつてえと、あんなの家の扉の方へ足跡がついてゐるのだ、そして、雪がひとところくしゃくしゃに踏んづけられてるだ。んでわたしや屏ごしにのぞいて見ただがね、するとそこに人が寝てゐるのが見えるだ。

——だ、だれがよ？

この叫び聲はおそろしく長く語尾をひつばつて、結局何をいつたのやらわからなくなつた。

が、ふいにみんなが、まるで気が狂つたやうに、おたがひに突きとばしあひながら、藁所をとびだし、裏庭にかけだしていつた。庭の隅の穴のなかに、ふんわりと雪をかぶつて、ピョートルぢいさんがうづくまつてゐた。藁けのこつた丸太に背中をもたせかけ、首を胸もとふかく垂れてゐた。右の耳の下にふかい傷がまつ赤な口をあけてゐた、そしてそこから何か青白いものが齒のやうにつきでてゐた。私はおそろしきあまり眼をつぶり、わづかに細眼をあけて、ピョートルの跡のあひだに、私にはおなじみの馬用のナイフがあるのを見た。そのすぐそばに、彼の右手の、鉤がたにまがつたくるずんだ指があつた。左の手はわきになげだされて、雪のなかに埋まつてゐた。彼の身體の下になつた雪がとけて、彼の小さな身體はやはらかい、きらきら光る柔毛のやうな雪のなかにふかふかとしづみ、いつそ子供つぼく見えた。彼の右側の雪は血にそまつて、小鳥に似た奇妙な模様を描きだしてをり、左側の雪はだれも手をふれない、降つたまま

のなめらかさで、まぶしいほどきらきらと光つてゐた。

ちやうど顔で首を胸にささへてゐるやうな工合にひくく頭をうつむけてゐるので、濃い縮れ毛の鬚がくしゃくしゃにおしつけられ、裸の胸のうへに一筋流れてまつ赤に凝固した血の上に、赤銅の十字架がかかつてゐた。人のさうさうしいざわめきに、頭がくらくらした。ペトロヅナはひつきりなしに金切聲をあげてゐたし、警官も大聲でどなりちらして、ワレイをどこかへ使ひにやつたりした。祖父も大聲で叫んでゐた。

——足跡をふんづけちやいけねえぞ！

だが、とつぜん顔をしかめて、自分の足もとに眼をおとしながら、彼は警官にむかつて、きめつけるやうに大きな聲でわめいた。

——お前さん、そんな大かい聲ばかり出してたつて仕様がねえぢやねえかい！ かうなつたのも、これは神さまの仕事をや、神さまのお裁きぢや、それをお前さんは何とかかんとか勝手なことをくどくどならべたててさ、……えーい、こいつらめ！

するとみんながふいに黙りこんでしまつた。みんな死者をじつとみつめて、溜息をついて、十字を切つた。

中庭から裏庭の方へ幾人かの人が驅けこんできた。その人たちはベトロヴナの屋敷から扉をのりこえてきたのであるが、おつこちで、がやがやさわいでゐるものもあつた。けれど、祖父があたりを見まはして、絶望的な叫び聲をあげるまでは、それでもまだ静かにしてゐた。

近所の衆、扉をふみつぶさないやうにしてくれやしやうがねえな、氣をつけなきや！

祖母が私の手をとつて、騒りあげながら、家につれこんだ……

あの人は何をしたの？——私は訊いてみた。祖母が答へた。

——お前、見たぢやないか……

その夜はおそくまでずつと、臺所とそのとなりの部屋に、よその人たちがひしめきあひ、さわぎたててゐた。警察の人が指圖をし、教會の司祭によく似た人が「それで？ それで？」と鴨のやうな聲をたてて訊問をしては何か書きつけてゐた。

祖母が臺所でみんなにお茶をだした。髯むしやの丸い

あばた面の男が食卓について、キーキー聲で話した。

——あの男の本當の名前はわからないんです、ただエ

ラチマの生れであるつてことがわかつてるだけなんです。あの煙の揚つてのも、實は全くの煙ぢやなくつてね、何もかも白状しまひましたよ。それから、もう一人のやつも白状しました、もう一人仲間がゐたんですなやつらはもうずつとまへつから、教會を荒しまはつてゐたんですよ、それがやつらの主な仕事だつたわけですが……

——おお、神さま。——赤ら顔で涙でべとべとにぬらして、ベトロヴナがため息をついた。

私は燻爐の上の寢床にもぐりこんで、下の人人をながめてゐた。どの人もみんないやに背がひくく、肥つちよに見え。こわいやうに思はれた……

十

ある土曜日のこと、朝早くから私はベトロヴナの菜園へうそをとりにいつた。ながいことやつたが、この胸の赤い、高慢ちきな小鳥は、どうしてもわなにかからなかつた。彼らは自分の美しさを見せびらかすやうに、一度溶けてまた銀色にはりつめた氷の上を樂しげに歩きまはつ

たり、あたたかさうに霜につつまれた灌木の枝にとびあがつたり、さうして生きた花のやうにその枝にとまつて青い火花をちらすやうに雪をゆすぶりおとしたりした。それは實に美しかつたので、私はうそとりが失敗しても少しも口惜しくはなかつたほどだ。大體私は穢にあまり熱心ではなかつた。穢の結果よりも、むしろその過程が私にはおもしろかつたのだ。私は小鳥の生活をながめ、彼らのことをあれこれと考へるのが好きだつたのだ。

雪の畑の片隅にひとり坐つて、嚴寒の日のすきとほるやうな静寂のなかで小鳥がさえずつてゐるのや、どこかとほくの方から、とほりすがりのトロイカの鈴の音が歌のやうにきこえてくるのを聞いてゐるのは、とても氣持がいい。トロイカはロシアの冬のもの悲しげな雲雀だ。

……
雪の上にてゐてがたがたふるへだすほど寒くなり、耳がすつかり凍えてしまったのを感じて、私はいそいでわなと鳥籠をよせあつめ垣根をのりこえて、祖父の家の裏庭に入り、家へかへつてきた。往來に出る門があけはなされて、大男の百姓が三頭の馬をつけた、屋根のある大きな籠をひきだしてゆくところであつた。馬はひどく汗を

かいて、身體のまはりいぢめんにもうもうと湯氣をたててゐた。百姓は愉快さうに口笛をふいてゐた。私は急が心がおどりだしてきた。

——誰がきたんだい？

彼はくるりとふりむいて、腕の下から私をながめるとひらりと取者臺にとびのつて、いつた。

——坊さんだよ。

ふうん、そんならおれには関係ない。坊さんといへばきつと下宿人のところでもきたんだらう。

——えい、この野郎ども！——取者はさう叫んで口笛をふき、馬どもを手綱でかるくたたいた。

いまままで静まりかへつてゐたあたりが、急にぎやかになつてきた。馬どもは仲よく野原にかけたしていつた。私はそのあとを見おくつて、門をしめた。だが、からつぽの臺所に入ると、となりの部屋から母の力づよい聲がきこえてきた。彼女ははつきりした言葉で、かういつてゐた。

——ぢや、どうするといふの？ わたしを殺しちまはなきやならないんですか？

外巻もぬがず、鳥籠も放りだしたままで、私は玄關に

かけこんでいった。出合ひがしらに、祖父とぶつかつた。祖父は私の肩をつかんで、あらあらしい眼つきで私の顔をのぞきこみ、やつとのことで何かをこくりと呑みくだして、しわがれた聲でいった。

——おつ母さんがかへつてきたぞ、いつてこい！ いや、ちよつと待て……彼は、あぶなく私がよろめきさうになるほどひどく私をゆすぶつて、となりの部屋の扉口におしやつた。——さあ、いつてみる……

私は、フェルトと蠟引布でつつんだ扉のまへに立つて、鼻と鼻とでふるへてゐる手でもつて扉をなでまはしてゐるだけで、把手がなかなか見つからなかつた。が、それでもしまひにやつと探して、そつと扉をひらき、眼がくらんだやうになつて、しきんの上に突立つてゐた。

——おや、あの子だね。——母がいつた。——まあまあ。なんて大きくなつたんでせう！ どうしたの、わたしがわからないの？ なんてなりをさせとくんですわね、これはまあ……ほらほら、耳が凍えてまつ白になつてるぢやありませんか！ おつ母さん、早く鷺鳥の脂をもつてきて……

彼女は部屋のまんなかに立つて、私のうへにかがみこ

み、まるで猫のやうに丸くなるほど着ぶくれてゐる私の

着物をぬがせはじめた。彼女はその大きな身體に、あたたかさうな、やはらかい、赤い着物をまといつてゐた。それは男の寛衣チヤパンのやうにゆつたりしたもので、肩から斜めに裾まで大きな黒いボタンでとめてあつた。私はそんな着物をはじめて見た。

母の顔は、まへよりいくらか小さくなつたやうに見えた。たしかに小さくなり、顔色もわるくなつてゐた。そのかはりに眼が大きくなり、ずつと深くなつて、髪の毛の金色もましたやうであつた。私の着物をぬがせると、それを丸めてしきんの方に放りだし、母のやうにまつ赤な唇を氣むづかしげにひんまげた、そしてまつたく命令的な口調でいつた。

——なぜだまつてるの？ 嬉しい？ チョツ、なんて汚いシャツをきてるのよ！……

それから彼女は、鷺鳥の脂で私の耳をこすつてくれた。痛かつた、けれど彼女の身につけたものから、さわやかな、氣もちのいい香がぶんぶんにはつてきて、そのために痛みが大分まぎらはされた。私は彼女にしがみついて、鼻のあまり野のやうになつて、じつとその眼を

のぞきこんでゐた。母の言葉の合間合間に、祖母の不愉快な、ひくい聲がきこえてきた。

——この子は本當に我ままでね、まつたく手に負へやしないんだよ。お祖父さんさへこわがらないんだものね……ああ、ワリーヤ、ワリーヤつたら……

——まあ、おつ母さん、そんなに文句いふもんぢやないわ、そのうちに大人しくなりますよ！

母にくらべると、まはりの人たちはみんな小さく、あはれつぽく、年よりくさく見えた。私は自分までが、祖父みたいに年よりくさくなつたやうな氣がした。がつしりした膝で私をしめつけて、大きな、あたたかい手で私の髪をなでながら、母はいつた。

——髪を刈らなくつちやならないね。それに、もうそろそろ學校へいく歳だし。お前、勉強したいかい？

——おらもう勉強したよ。
——もう少しなくつちやいけないんだよ。それにしても、ほんとお前強さうになつたぢやないかい、え？
そして、私をもてあそびながら、太い、あたたかみのある聲をたてて笑つた。

祖父が灰色の粗末な着物をきて、髪をさかだてて、眼

を少し血ばしらせて、入つてきた。母は片方の手をうごかして私をわきによせ、大きな聲で訊いた。

——まあ、どうしたんです、お父つあん？ お出かけですか？

彼は窓ぎはに立つて、窓ガラスの氷を爪でひつかきながら、ながいこと黙つてゐた。あたりのものがみんな急にピンと緊張し、息苦しいほどになつてきた、かういつた緊張した瞬間には、私はいつも身體ぢゆうが眼と耳になつてしまふやうな氣がし、胸が妙にふくれあがつてきてありつたけの聲をだしてわめきたてたくなるのであつた。

——アレクセイ、あつちへいつとれ！——祖父がほんやりした聲でいつた。

——なぜです？——母がまたあらためて私をひきよせて、訊いた。

——お前はどこへもいかせやしない、行つちやいけないよ……
母は身をおこして、夕焼雲のやうに部屋のなかをいつたりきたりしたあげく、祖父のうしろにいつて立ちどまつた。

「ねえ、お父つあん、まあわたしのいふことをきいて……」

彼はくるりと母の方にむきかへつて、キーキー聲でさげんだ。

「だまつとれ！」

「ふん、そんなにがみがみ言つてもらひたくないもんですね、わたしは。——母がおちつきはらつていつた。」

祖母が長椅子から立ちあがつてきて、指をたてて威嚇した。

「ワルワラつたら！」

祖父の方は、腰掛に腰をおろして、ぶつぶつ文句をいつた。

「まあ待て、おれは一體お前の何なんぢや？　うむ？　その口のきき方は何ぢや？」

そしてふいに、まるで別人のやうな聲をはりあげて、わめきだした。

「この女め、人を馬鹿にしやがつて……」

「あつちへいつてな。——祖母が私に命令した。私はおしつぶされたやうな氣持になつて、臺所に去り、煙

爐のうへに這ひあがつて、ながいこと壁のむかふの動靜に耳をかたむけてゐた。みんなが一せいに先を争つてがやがしやべりだすかと思ふと、ふいに眠りこんだやうに沈黙してしまつたりした。母が生んだ子供の話が話になつてゐた。その子を、彼女はだれかにやつてしまつたのだ。しかし私には、祖父が何を怒つてゐるのか、よくわからなかつた。——母が彼に無断で子供を生んだことをか、それともその子供を彼のところへつれてこなかつたことをか？

やがて彼は髪をふりみだし、まつ赤な顔をして、くたくたになつて臺所に入つてきた。そのあとから、祖母がゆるい上衣の裾で頬の涙をふきながら入つてきた。祖父は両手で長い腰掛につかまつて腰をおろし、背中をまるめ、灰色の脰をかみしめて、びくびくふるはせてゐた。祖母はそのまへにひざまづいて、ひくいけれど熱のこもつた調子で話しかけた。

「ねえお父つあん、あれを許してやつておくんなすつて！　どんな利口な子だつて、誤ちはあるもんですでな。旦那衆や商人なぞのどこぢや、こんなことがねえとでも言ひなさんですかい？　どうして、どうして、

さういふとこの女がどんなことしてるか、まあ見てもらんなさい、んだから、勘辨してやつておくんなさい。どんな人だつて非のうちどころのない人なんてありやしな

いんだものね……

祖父は壁によりかかつて、祖母の顔をじつとながめ、へんに歪んだ笑ひをうかべて、涙にむせびながら、ぶつぶつ言つた。

「ふん、まだそんなこと言つてやがる！　どうしろつてんぢや？　大體、きさまときたら、だれでもかれでもみんな許しちまひやがるだ、まつたくさ。えい、こいつらめ……」

彼は祖母の方にかがみこんで、その肩をつかんで、しきりにゆすぶりたてながら、早口でベチャベチャしやべりだした。

「ふん、神さまはな、おほかた、何も許しちやくれめえよ！　え、さうぢやねえか？　おらたちはもうそろそろお墓に近くなつてきた、この年よりになつて、このさまぢやねえか。罰つていふもんよ。安心もなけりや、喜びもねえんぢや。これから先だつて、あるはづはねえ！　それどころか、おれの言ふことをよくおぼえとけ

よ、とどのつまりは乞食にでもなつてくたばるのがおちさ、乞食にでもなつてよ！」

祖母は彼の手をとつて、彼とならんで坐り、かるく靜かに笑つた。

「そんなこと、不幸でも何でもないですだよ！　乞食なんて、なにもたまげることはないだに！　乞食になるのも結構ぢやないですかね。あんたは家にじつと坐つてなさりやいだ、物乞ひにはわしが出かけていくだからね。心配することはねえさ、らくな人たちはみんなわしにいろいろ恵んでくれるでせうよ！　ねえ、あんた、何もかもみんな棄てちまひなされや！」

彼はふいに苦笑ひをして、山羊のやうに首をねぢまげ祖母の首をかかへこんだ、そして小柄な身體をもみくたにして、祖母にしがみつき、嘔り泣きをしながらいつた。

「えい、このバ、バカ女め、お前はほんとに仕合せな馬鹿だ。お前は、おれのとこに残つた最後の人間ぢやよ！　お前は馬鹿だが、なんにも黙しくないんぢや、なんにもわからねえんぢや！　お前はおぼえとるか、ア、おらたちは二人で一所懸命はたらいたもんぢやねえ

か。さうしてまたおれは子供たちのためになら、ずるぶんとよくねえこともしたもんぢやねえか、うむ？ いまだつて、まだまだ、子供たちのためになら、よくねえことをやりだすかもしれねえ……

そこまで聞くと私はもう堪えきれなくなつて、ワアワア手ばなしで泣きながら、燧燧からとびおりに、彼らのところにとんでいつた。私は彼らがいまだかつて知らないう、こんなにも立派な話を聞いたのを聞いて、嬉し泣きに泣いたのだ。同時にさういふ二人が氣の毒でもあり、また母がきたことが私の心をゆすぶりたてたせいもある。その涙の仲間にいれてくれて、二人で私をだきしめて、ポロポロと私の上に涙をおとしてくれたのも、いつそ私の涙をさそつたのであつた。やがて祖父は私の眼をのぞきこみ、耳もとでささやいた。

ああ、小僧め、お前もここにゐたのか！ おつ母さんがきたからな、お前はこれからはおつ母さんといつしよに暮していくやうになるんぢやらうな？ もうこんな老いぼれ悪魔の意地わる爺いなんて要らねえつていふんぢやらうな？ それから、この子供に甘いお祖母さん

も要らねえつていふんぢやらう？ えーい、こいつらめ

……
両手をふつて、私たちをわきにおしのけて立ちあがり腹だたしげに大聲でいつた。

みんな出ていつちまふ。みんな好き勝手なことをしてゐる……おい、あれを呼んでくれ！ 何してるんぢや、早くさ……

祖母が臺所から出ていつた。するゝ祖父は首をうなだれて、部屋の間の方にむかつて言つた。

慈悲ぶかき主よ、どうか見ておくんないまし、ごらんのとほりでござえます！

そして拳をかためて自分の胸を力まかせにどんとたたいた。そんなことをするのは、私はきらひだつた。私は慨して、祖父が神さまを話るときは、好かなかつたいつも彼は神さまのまへに自分をひけらかしてゐるやうなので。

母が入つてきた。その美しい清物のせいで、臺所のうちがバツと明るくなつた。母は食卓にむかつた椅子に腰をおろした。祖父と祖母とが、その兩脇に坐つた。母の

つたいどんな生活をしてゐたといふのだらう？

——おら、わかんないや。

——お祖父さんは打つかい？

——このごろは、あんまり打たない。

——さうかい？ それぢやお前、何でもお前のすきな

ことを話してごらん、さあ。

祖父の話はしたくなかつたので、私はこの部屋に以前大へんやさしい人が住んでゐたといふ話をはじめた。しかしだれも彼を好きでなかつたので、たうとう祖父は彼を追ひだしてしまつたことを話した。この話は、どうやらあまり母の興味をひかなかつたらしい。彼女はいつた。

——それぢや、もつと何かほかの話は？

私は三人兄弟の話をした。そして、父親の大佐が私を中庭から追ひだしたことを言つた。すると母はしつかりと私をだきしめた。

——ほんとに誰なやつね……

さういつたきり口をつぐんで、頭をふりふり、眼をバチバチやつて、床を見つめてゐた。私は訊いてみた。

——お祖父さんは、なぜ母さんのこと怒つてるの？

ひろい袖が、二人の肩のうへにつかつた。彼女はひくい聲で、眞面目になにか話した。二人の年よりは、一言も口をさしはさまずに、だまつて聞いてゐた。なんだか二人の年よりがひどく小さくなつたやうで、彼女がその二人の母であるやうにさへ見えた。あまり昂奮したので、すつかり疲れはてて、私は板敷床の上でぐつすり眠つてしまつた。

夜になると年より二人は上をゆきの清物にきかへて、晩禱にでかけていつた。祖母は、職人組合の長老の制服をきて、浣熊の毛皮外套をまとひ、縁をとつたズボンをはいた祖父を見て、うれしさうに眼くばせをした、そして母にむかつていつた。

——ほら、見てごらんよ、お父つあんもなかなか立派ぢやないかい。まるできれいな仔山羊みたいにさ！

母も愉快さうに笑ひだした。母の部屋で、母と二人きりになると、彼女は足を折りまげて長椅子に坐り、自分のすぐそばの席を掌でかるくたたいて、いつた。

——さあ、ここへおいで！ お前、この家のくらしはどうだい、あんまりよくないかね、え？ さあ、私はい

——わたしがお祖父さんにわるいことをしたからね。
——母さんは、お祖父さんのところへ、赤ん坊つれてくれればよかつたのにさ……

母は顔をしかめて、ちよつと身をひいた、そしてギョッとして肩をかみしめてゐたが、やがて私をきつくだきしめると、アハハと大聲をたてて笑ひだした。

——まあ、お前つたら、おかしな子だね！ お前、そんなことは黙つてるもんだよ、わかつたかい？ 人に言つちやいけないよ、考へるのもお止しよ、ね？

彼女はながいこと、低いけれどもいかめしい聲で、私にはよくわからないことを、なにかしきりにしやべつてゐた。それから急に立ちあがつて、濃い眉毛をびくびくうごかし、顔を指でこつこつたたきながら、部屋のなかを歩きまはりはじめた。

卓の上で脂燭がもえてゐた。蠟がとけてながれ、鏡の面に灯影がうつつてゐた。きたならしい影が、床を這つてゐた。隅つこの聖像のまへにランプがともつてゐた。氷のやうに冷い窓ガラスが、月の光をうけて銀色に光つてゐた。母はあたりをぐるぐる見まはした、まるでむきだしの壁の上や天井に何かをさがし求めようとでも

するやうに。

——お前はいつねるの？

——もう少したつてから。

——さうだね、もつとも、晝聞ねたからね。——母は思ひだして、溜息をついた。私は訊いてみた。

——母さん、まだどこかへいくの？

——どこかへつて、どこへさ？——びつくりして母は訊きかへした、そして私の顔をひつぱりあげて、ながいこと私の顔に見入つてゐた。それがあんまり長かつたので、私の眼から涙がこぼれてきた。

——まあ、お前、どうしたの？

——首がいたいんだよ。

首だけではない、實は心も痛んでゐたのだ。私は、母がこの家には住んでゐないだらう、またどこかへ出かけてゆくであらう、といふことをすぐに感づいたのだ。

——お前はお父さん似になるね。——彼女は兩足で敷物をわきにおしのけながら、いつた。——お祖母さんがお前に、お父さんの話をしてくれたかね？

——うん。

——お祖母さんはね、マクシムがとても好きだつたん

だよ、とつてもね！ お父さんの方もまたお祖母さんが好きだつたがね。

——うん、おら知つてるよ。

母は蠟燭の方をちらつと見て、顔をしかめ、マツと吹きつけて、いつた。

——この方がいいよ。

まつたくその方がずつときれいで、気分がさわやかであつた。暗い、汚らしい影はうごめくの止め、うす青い光の斑點が床の上にねそべつて、窓ガラスに黄金色の火花がかがやいてゐた。

——母さんはどこに住んでたの？

——さうでとつとに忘れたことを思ひださうとでもするやうに、彼女はいくつかの町の名前をあげた。そして、鷹のやうに背もたてずに部屋のなかをぐるぐる歩きまはつた。

——そんな着物、どこから買つてきたの？

——自分で縫つたんだよ。わたしはね、何でもみんな自分でやるの。

彼女がだれにも似てゐないのは嬉しかった。けれどあまり口敷をきかないのは物足りなかつた。もしこつちか

ら質問をしなければ、おそらく彼女はずつと沈黙を守つてゐたことであらう。

やがてまた彼女は長椅子の私のわきにきて腰をおろし、二人はおたがひにびつたりと身體をよせあつて、だまつて坐つてゐた。——老人夫婦が、蜜蠟と香油のほひを全身にしるこまきで飾つてきて、おごそかに、しづしづと、しかし愛想のいい笑ひをうかべて、この部屋に入つてくるまで。

お祭りの御馳走のある夕飯をたべた。みんな行儀よくしてゐた。食卓についてゐるあひだは、だれもあまり口をきかず。口をきいても、まるでだれかの浅い眠りをささないやうにと氣をくばつてゐるみたいに、遠慮がちにしやべつた。

まもなく母は私に根氣よく「市民文字」を教へはじめた。本をいく冊か買つてきたが、そのなかの一冊——「國語讀本」といふのでやつた。私は數日にして、市民文字を讀みこなすことができるやうになつた。しかし母はすぐにつづいて、私に詩の暗誦をやらせた。これから私たち二人のお互ひの苦しみがはじまつたのだ。

こんな詩があつた。

大きな道よ、まつすぐな道よ
お前は神の世界を大分ふんどつた
斧も鋤もお前を平らにしなかつた
埃がいつばいで踏に柔かくあたる

私は「世界」といふところを「単純な」と読み、「平らに……」といふところを「切らな……」と読み、「踏」といふところを「貯金」と讀んだ。

「まあ考へてごらん。母が囁んでふくめるやうにいつた。何が「単純な」なの？ おかしな子ね！

「世界」つていふんですよ、わかたかいかい？
私はよくわかつてゐた。そのくせ、讀むとやつぱり、「単純な」となつてしまつて、自分でもびつくりするであつた。

彼女は怒つて、私をわからずやの強情つぱりだといつた。そんなことをいはれるのは辛かつた。私はとても本氣になつて、この呪ふべき詩をおぼえようと努力し、間違へないやうにと思つて考へ考へ讀んだものだ、しかし聲を出して讀むと、どうしても違つてしまふのであつた。私はこのいふことをきかない數行をひどく憎んだ。

そして憎しみのあまり、わざとそれを歪めて、同じやうな音の言葉をでたためによせならべてみた。すると呪ひをかけられた詩はたちまち意味を失つてしまつた——それがひどく私の氣に入つた。

だがこの遊びはただではすまなかつた。ある日、お稽古が大へんうまくいつたあとで、最後に母が、いつかの詩をおぼえてしまつたかどうかと訊いた。私は何の氣なしに、やりだした。

ダローガ(道)、ドゾローガ(二本角)、トゾオローガ(樹乳)、ネダローガ(やすい)
カブイタ(踏)、ボブイ・ト(坊さんたち)、カルイ
ト(槽)……

氣がついたときにはおそかつた。母は両手を卓につけて立ちあがり、ひらきなほつて訊いた。

何です、いつたい、それは？

おら知らない。私は茫然として言つた。

いいえ、いけません。やつぱり、何かあるでせう？

「私は母のいふことを理解することに絶望していつた。彼女は眼をふせて、じはらく黙つて、額や頬をこすつてゐてから、訊いた。

「お祖父さんはお前を隅っこへ立たせたことがあるかい？

「いつ？

「さあ、いつつてことはない、いつでもいいんだが！——彼女は掌で卓をトンドンと二度たたいて、大きな聲をたてた。

「ううん。おら覚えてない。

「隅っこへ立つつてのはね、こりや罰なんだよ。そんなことぐらゐお前知つてるだらう？

「ううん。でも、なぜ罰なんかうけるの？
彼女は溜息をついた。

「あーあ、仕様のない子だね！ こつちへおいで。私はそばによつていつて、訊いてみた。

「なぜ母さんそんなにどなりつけるの？
「おや、お前はなぜわざと詩をでたために讀んだりするの？」

「母さん、どうしろつていふの？ おらわかんねえ

「これは、あのね。

「何です？

「おかしいんだよ。

「隅っこへいつて、立つてなさい。

「なぜ？

「母は低い、けれどおごそかな聲でくりかへした。

「隅っこへいきなさい！

「どこの隅っこへいくの？」

それには答へないで、彼女は私の顔をじつと見つめてゐた。あんまり見つめられてゐたので、しまひには私は、彼女がいつたい私に何をともめてゐるのかわからなくなつて、どきまぎしてしまつた。聖像のかざつてある隅には、圓卓がおいてあつて、その上にはぶんぶん匂ひを放つてゐる乾いた草や花をさしてある花瓶がのつてゐる。表側の方の隅には、長持がおいてあつて、絨氈がかけである。裏側の方の隅は寢臺が占めてゐる。そしてもう一つの隅は、壁につけて屏の側柱が立つてゐて、つまり扉口になつてゐるので、隅っこではないわけである。

私はできるかぎりの説明をした。つまり、眼をつぶると私は詩がどう印刷されてゐるのかちやんと思ひだせるのだけれど、それを口にだしていふと、まるで別な言葉がとびだしてきてしまふのだ。

——お前、わざとそんなふりしてゐるんぢやないかい？

「私は、さうでない」と答へた。けれどすぐそのあとから「ひよつとしたら、そんなふりをしてゐるのかもしれないぞ」と思つた。そしてふいに、ゆつくりと、私はその詩をちつとも間違へずに、正しく暗誦した。これには自分ではびつくりしてしまつた、いやそれ以上に私はぶちめされたやうな氣持であつた。

急に顔が腫れあがり、耳が充血して重くなり、頭のなかが不愉快にがんがんなりだしたのを感じて、私は恥しさに身をやかれる思ひで母のまへに立つてゐた、そして母の顔が悲しさに曇り、唇をキツとむすんで、眉毛がびくびくうごいてゐるのを、私は涙にぬれた眼でながめてゐた。

——こりやいつたいどうしたつていふの？——彼女はまるで別人のやうな聲で訊いた。——つまり、そんなふ

りをしてゐたつてわけなんだね。

——お前、そんなつもりぢやなかつたの……

——お前つて子は、あつかひにくい子だね。——母はうつむいて、いつた。——さあ、もうあつちへおいで！彼女には私にますますたくさん詩をおぼえさせようとした。けれど私の記憶は、それらの流暢な詩句をうけいれることをいよいよ拒み、それらの詩を歪め、作りかへて、そこにまるで別な言葉をよせあつめてきたといふ慾望がますます強く、意地わるく、私の心にはびこつて、どうしてもおさへつけることができなかった。しかもその作りかへは、私にはらくにできるのであつた。無用の言葉は、まるで群をなして湧きだしてきて、それが本にかいてある必要な言葉のあひだにもぐりこみ、たちまちこんぐらかつてしまふのであつた。詩のなかの一行が全然私の眼からきえてしまふといふやうなことがよくあつた。そして私がどんなに本氣になつてそれをとらへようとしても、それはどうしても記憶にうかんでこないものであつた。たしかヴァッセムスキー公爵のもの悲しい詩だつたと思ふが、それなどはこゝに私を苦しめたもの

だ。

日暮れにも、朝早くにも、たくさんの

老人や寡婦やみなし兒らが

施し物を乞ふてゐるく

ところが實は第三行目に次のやうな一句が入つてゐるのだ。

——頭陀袋さげて窓下をさまよひ

この一行を私はきまつて落としてしまふのであつた。

母は腹を立てて、私の行爲を祖父に告げた、すると祖父は意地のわるいことをいつた。

——そりやお前が甘やかかしちよるからさ！ あの子はものおぼえのいい子ぢや、お祈りの文句なぞはわしよりよく知つとる。嘘をついとるんぢや。あいつの記憶とときたら、まるで石みたいで、一度刻みつけたら最後、いつまでもしつかりと残つとるわい！ お前もあれを少し管でひつばたいたらいいわ！

祖母もまた私の記憶力の保證をした。

——お話もよくおぼえてゐるし、歌もよくおぼえる、いつたい歌は詩と同じもんぢやないのかね？

これはみんなほんとのことであつた。私は自分がいけないのだといふ氣がした。そのくせ、詩の勉強をはじめると、たちまち、どこからともなく別の言葉が自然にあらはれてきて、袖虫のやうに這ひまはり、それがまたそれで詩句を作つてしまふのであつた。

おいらの家の門のまへを

たくさんの老人や孤兒が

歩きまはり、泣きさげび

パンを懇んでもらつてゆく。

それを集めて、ペトロツナのとこへ

牛の飼料に賣つてやり

その金で谷間へいつて酒をのむ。

夜になると板壁に祖母と寝て、私は本でおぼえたことや、自分で作つたことをすつかり、いやになるほど何度も何度も語つてきかされた。祖母はときをり大聲をあげて笑つたが、しかし大抵のときは叱言をいつた。

だつてさ、そんなこと、お前だつて知つてゐるだらうがね！ 乞食を笑ひものにしたりしちゃいけないんだよ。乞食には神さまがついておいでなさるでな！ キリストさまだつて乞食だつたし、他の聖者さまだつて、やつぱりみんなさうだつたしね……

私はつぶやいた。

乞食はきらひ

お祖父さんもきらひ

どうして好むよう？

神さま、ごめんよ！

お祖父さんはいつでも

おらをなぐる種はつかり

探してゐるんだもの……

何をいふんだね、そんなことを言ふと舌の根をひっこぬいちゃうぞい！ 祖母が叱つた。——そんなことをお祖父さんが聞いたら、どうするだ？

かまはねえよ。

お前、そんな役にも立たない悪戯をしちゃ、おつ

母さんを怒らせるんだね！ おつ母さんはな、さうでなくつたつて、いまあんまり面白くなく暮してゐるのにな——祖母は考へぶかげに、やさしく、教へたとすやうに言つた。

母ちゃんはどうして面白くないの？

そんなこと訊かなくてもいいんだよ！ お前にや

わかりやしないんだから……

お前知つてるよ、そりやお祖父さんが何かしたんだ……

だ……

だまつといでつたら！

私の暮しも面白くなかつた。私は絶望にちかい氣持を味はつてゐたのだ、けれどなぜか私はそれをかくしてゐたかつた、だからわざと元氣よくふるまひ、亂暴をした母の授業はますます多くなり、ますますむづかしくなつてきた。算術はすぐにおぼえたけれど、習字はどうしても我慢ができず、文法にいたつては全然わからなかつた。だが、私の氣分を重くした一番主なもの、祖父の家に暮してゐることが母にはとても辛さうだといふことが、はつきりわかつたことだ。母はますます氣むづかしい顔つきになり、みんなを赤の他人のやうな冷たい眼でな

しつけようとしてゐるのを知つてゐた。彼はよく母の部屋に入りこんでいつては、鍵をしめておいて、あの肩下りの牧人のニカノールといふ男が吹いてゐる私の大旗ひな木の笛の音に似たキトキト音をたてて、泣きわめいた。さういふ對談をしたある日のこと、母はいきなり家ちゆうにきこえるやうな大きな聲で叫びたてた。

——そんなこと駄目です。いやです！

そして扉をパタンとしまつて出ていつた。祖父がわめき

ちらしてゐた。

それは宵のうちだつた。祖母は臺所の食卓のわきに坐つて、祖父のルバーシカを縫ひながら、たにかぶつぷつ獨言をいつてゐた。扉がパタンとしまつたとき、彼女はわざと聞えるやうに聲をだして言つた。

——下宿人のところへもいつただね、仕様がな子だ

よ！

ふいに祖父が臺所にとびこんできて、祖母のところにかげより、いきなり頭をボカボカとたくつて、怪我をした手をふりまはしながら、しわがれ聲をふりしぼつた。

——餘計なことべちやくちや言ふんぢやねえぞ、獲つたれ女！

がめ、そしてときどき裏庭に面した窓べにながれつと黙つて坐つてゐたりした。何となく、全體に色があせてきたやうな感じであつた。歸つてきた當座は、彼女はきびきびしてゐて、とてもフレッシュな感じであつたが、いまでは眼の下にくろいくまがで、大ていのは髪も梳かさず、しわくちやになつた着物をき、ゆるい上衣にバンドもしめないで歩まはつてゐた。これは彼女をだいなしにしてしまひ、ひどく私を怒らせた。といふのは、私の氣持では、母はいつもきれいな着物をきて、きちんとしてゐて、世界ちゆうで一番美しい人でなければならなかつたのだから。

授業の最中に、彼女はよく、ふかくおちくぼんだ眼で私の頭ごしに壁や窓をぼんやりとながめて、ものうげな聲で質問をしたりした、そして答へを聞くのを忘れてしまつたりするのであつた。腹を立てたり、大きな聲をだしたりすることが、ますます頻繁になつてきた。これも私には悲しいことであつた。母はいつでもお伽噺のなかの人物のやうに、だれよりもいちばん立派な人間でなければならぬと思つてゐたのだから。

私は祖父が何とかかんとか言つては祖母と母をおどか

「遺録しちやいけねえだよ。——祖母がこはされた髪をなほしながら、おちつきはらつて言つた。——わしは何も餘計なことは言ひやしねえだよ、きまつてるだに！ だけえどね、あんたが變なことたくらんだのを見つけたら、そりやみんな話してやるだよ……」

彼は祖母にとびかかつて、拳を固めて祖母の大きな頭をビシヤビシヤたたきだした。祖母はそれを避けようともせず、また彼をおしのけようともしないで、打たれるにまかせておいて、いつた。

——さあ、打て、打て、馬鹿爺い！ うんと、いくらでも打ちな！

私は板敷床のうへから二人をめぐり、枕やふとんとつてなげ、煖爐の上にあつた長靴まで放つてやつた、けれど猛り狂つた祖父はそんなものが眼に入らなかつた。祖母は床のうへに俯伏してしまつた。それを祖父はなほも足で頭をボンボン蹴つた。そしてあげくの果に水のいつばい入つた桶につまづいて、ばつたりたはれた。ベツと唾を吐き、鼻をブルルとならして起きあがると、窮乏しい眼でくるりとあたりを一わたり見まはしたが、ふいに身をひるかへすと、屋根裏の自分の部屋に逃げて

いつてしまつた。祖母もおきあがつて、ハアハアいみながら、長い腰かけに腰をおろして、もつれた髪の毛を解きはじめた。私は板敷床からどびおりた。祖母が私を叱りつけた。

——枕やなんかみんな片づけて、煖爐の上にあけておきな！ 枕を敷るなんて、また、とんでもないことを考へだしたもんだ！ こんなことはお前の知つたことぢやないんだよ！ それにしても、あの馬鹿爺いめ、まるで夢中なつちまつて！ ほんとに馬鹿爺いだ！

と、ふいに彼女は深い溜息をついて、顔をしがめ、頭をひくくたれて、私を呼んだ。

——ちよつと見ておくれ、この痛いところはどうしたんだらうね？

私は彼女のふさふさした髪の毛を分けてみた。するとピンが皮膚にふかくつきささつてゐた。それをぬいてやつた。ところがもう一本見つかつた。私の指がもういふことをきかなくなつた。

——母さんをよんでくるよ、その方がいいや。おら何だかおつかないもの。

祖母は手をふつて止めた。

——どうしたんだね、お前？ だからわしはお前を呼んだんぢやないかい！ あれがこんなことを見たり聞いたりしなかつたんで、助かつたと思つてるんだよ。それをお前は、何だね、そのさま！ もういいから、あつちへいつといで！

そして彼女は自分で、レトス編みをやつたことのあるしなやかな指を、濃いまつ黒な髪の毛のなかにつつこんで、ひつかきまはしはじめた。私も勇気をだして、そのピンをひきぬく手傳ひをした。太い曲つたピンが、まだ二本もささつてゐた。

——痛かつたらう、お祖母さん？

——なんともないよ。明日お風呂へ入つてよく漬つて、洗つたら、ぢきなほつちまふだよ。

そして私にやさしくたのんだ。

——ねえお前、いい子だからね、お祖父さんがわしを打つたことを、おつ母さんに話しちやいけなせ。いいかい？ さうでなくつたつて、あの二人はおたがひに憎みあつてるだものな。お前、きつと言はないね？

——うん。

——さうかい、それぢや忘れないでね！ さあ、あと

をすつかり片づけちまふかな。わしの顔には、怪我はしてないだらうね？ さうかい、それでいいだ、これで何もかも内密ですむだ……

彼女は床を拭きはじめた。私は心底から言つた。

——お祖母さんはまるで聖者みたいだね。みんなからどんなにいぢめられても、平氣であるんだものな！

——なにをばかなこと言ふだ？ 聖者だなんて……どこでそんなことおぼえてきたんだね？

彼女は四つん這ひになつて歩きまはりながら、いつまでもぶつぶつ言つてゐた。私は階段に腰かけて、祖父にどういふ風にして祖母の仇をうつてやらうかと考へてゐた。

彼が私の眼のまへで祖母にこんなにひどく、わざとらしく打つたのは、はじめてであつた。眼のまへのうす暗がりのなかで、彼の顔は火のやうにまつ赤にもえたち、緒毛の髪がさかだつてゐた。私の心はふつふつと怒りに煮えくりかへり、存分の復讐を思ひつくことができなくてじりじりしてゐた。

だが、二三日たつてから、何かの用で屋根裏の祖父の部屋に入つていつたとき、私は彼がひらいた行李をまへ

にして床の上に坐つて、そのなかに入つてゐる書類をしらべてゐるのを見つけた。卓の上に、彼のお氣に入りの聖者曆がのつてゐた。それは厚い灰色の紙を十二枚綴ぢあはせ、一月一日の日附が四角に區切つて入つてゐて、聖者の日にはその四角のなかにそれぞれその聖者の像が描いてあるのであつた。祖父はこの聖者曆をとて大切にしてゐて、私になぞはごくときたま、何かしてひどく私に満足を感じたときかなんかでなければ見せてはくれなかつた。私はこの所狭いまできちんと並んだ灰色の小さな、かあいらしい肖像をみると、いつも一種特別の感興をおぼえるのであつた。私はそのうちのいく人かの事蹟を知つてゐた。たとへばキリトルカ、ウリタ、大殉教者のワルワラ、パンテレイモン、その他いろんな聖者たちのこと。なかでもとくに私の好きだつたのは神人アレクセイの生涯の物語や、彼を歌つた美しい詩である。さういふ詩を祖母はよく非常に感動をこめて、私に歌つてきかせてくれたものだ。この何百といふ肖像をながめてゐると、いつの世でも苦難をうける人があつただといふことがわかつて、大へん心が慰められ、おちついてくるのであつた。

だが、いま私はそれを切つてやらうと決心した。で、祖父が窓ぎはにいつて、双頭の鷲のついた青い本をよんでゐるのを見すまして、私はそのうちの五六枚をひつつかんで、いそいで階下にかけておいた。そして祖母の卓から鉄をだしてきて、板寢床に這ひあがつて、聖者たちの肖像の頭をきりはじめた。一列をすつかり頭なしにしてしまふと、急に聖者たちがかあいさうになつた。そこでこんどは四角を區切つてゐる線をきつてゆくことにした。けれど二列目をすつかり切りをはらないうちに、祖父が姿をあらはして、盤板の上に立ちはだかつて、訊いた。

「だれがお前に、そんなものを持つてきていいと言つたんぢや、うむ？」

板の上にあらばつてゐる四角な紙片を見ると、彼はいそいでそれを拾ひあつめて、鼻のさきにもつていつたがすぐに投げすてた。それをまたもう一度拾ひあげた。彼の顔がへんにゆがみ、鬚髯がはねあがつた。彼は力をこめて強い息をしたので、紙片が床にまひおちた。

「きさまは、何てことをしたんぢや？——おしまひに彼はさうどなりつけて、私の足をつかんでひつぱつ

た。私は宙でとんぼ返りをうつて、放りだされた。祖母がかけよつて私の手をつかまへた。すると祖父は祖母に拳固を一つガーンとくらはせて、金切聲をあげて私にどなりつけた。

「たたつ殺してくれろぞオ！」

母が入つてきた。私は隔つこの、燠爐のそばで氣がついた。母は私をかばひ、彼女の顔のまへでふりまはされてゐる祖父の手をおさへて、わきにおしのけながら、いつた。

「みつともないぢやありませんか？ 氣をしづめてくださいな！」

祖父は窓の下の長腰掛の上に身をなげだして、うなつた。

「人殺しどもめ！ み、みんなおれに楯をつきやがる……」

「恥かしくないんですか、お父つあん？——母のぼんやりした聲がひびいた。——お父つあんはただ自分で勝手にそんな風に思つてるんぢやないんですか？」

祖父は大きな聲をたてたり、兩足で腰掛をドンドン蹴つたりした。鬚髯をかしたな工合に、天井にむかつて突

立つてをり、眼はかたく瞑つてゐた。彼が母親にてれてゐること、實際彼はわざとそんな眞似をしてゐるのだといふことが、私にもよくわかつた。それだから彼は眼をつぶつてゐるのだ。

「わたしはその紙片をちやんとキヤフコに布に貼つてあげますよ、その方がずつとしつかりして、ずつとよくなりませすよ。——母は切りきざまれた紙片を見まはして、いつた。——ごらんさい、みんな黙くちやになつて、いたんぢまつてませすよ。このままにしておいたら、みんなちぎれて、なくなつちまひませすよ……」

彼女は、ちやうど授業の最中になにかわからないことがあつたとき私に話すやうな調子で、祖父に話した。すると祖父はとつぜん立ちあがつて、ルバシカとチョッキをしやんとなほして、ゴホゴホ咳きこんでからいつた。

「んぢや、今日貼つてくれや！ おれがいま、あとのをみんなもつてくるからな……」

扉口までいつたが、しきゐるところでくるりとふりむいてきがつた指で私をさしていつた。

「こいつには管をくんなきやならねえ！」

——そりやさうでせうとも。——母が養成した、そして私の方に身をかがめて、訊いた。——なぜお前はそんなことしたの。

——おら、おさとやつたんだい。お祖父さんがお祖母さんを打たないやうになればいいけど、さうでなくつちや、おらとお祖父さんの髭でもなんでも切つちまふわ……

ずたずたにやぶれた着物をぬいでゐた祖母が、ききとがめて、頭をふりふり、私をしっかりとつめた。

——黙つてゐるつて約束したぢやないかい！

そして、床にベツと睡をはいていつた。

——お前の舌なんか、腫れあがつて、動かなくなつちまへばいいだ。餘計なことをべちやくちやしやべらないやうにさ！

母は祖母の方をちらりとながめ、臺所のなかをぐるりと一廻りしてきて、また私のそばによつてきた。

——お祖父さんがいつお祖母さんを打つたの？

——これ、ワルワラ、お前そんなことを訊いて恥しくないのかい？ お前の知つたことぢやないぢやないか！——祖母がぶりぶりと言つた。

母がやさしく祖母をだいた。

——ねえ、おつ母さん……

——何が、ねえおつ母さんだ！ あつちへいつとくれ……

二人はだまつて、しばらくにらみあつてゐたが、やがて双方にわかれた。玄關に祖父の足音がしてゐた。

歸つてきた當座、母は間借りをしてゐる軍人の陽氣な細君と仲よくしてゐて、表半分を借りてゐる彼らの住居に、ほとんど毎晩のやうにでかけていつた。そこへはベトレンダの家からも、きれいな夫人たちや士官たちがよく遊びにきた。祖父はそれを喜ばなかつた。臺所で夕飯をたべてゐるときに、しばしば彼は匙をふりあげて、文句をいつた。

——糞つたれ野郎どもめ、また集つてけつかる！ 今夜もまた夜つびて人を眠らせねえつもりだな。

まもなく彼は下宿人たちに部屋をあけてくれと請求した、そして彼らが出てゆくとすぐに、どこからかいろんな家具を車に二臺もはこんできた。それを表の方の部屋にそなへつけて、大きな南京錠をピンとかけてしまつた。

——下宿人なんておかなくつたつていいさ、こんどはおれが自分でお客さまをつれてくるわ！

さてそれから、休みの日になるとお客さんがくるやうになつた。祖母の妹のマトリョーナ・イワノヴナがやつてきたが、これは鼻の大きな、やかましやのお婆さんでいつも絹の着物をきて、黄金色の髪飾りをつけてゐた。彼女はよく子供たちをいっしょにつれてきた。ワシリイといふのは製圖工で、長い髪をした、人のいい、愉快な男で、いつも灰色の服をきてゐた。ヴィクトルといふのは馬みために細長脚をして、おまけにそばかすだらけであつた。彼は玄關からもう上靴をぬいで、人形芝居のベトルーシカみたいなビービー聲で歌をうたつた。

——アンドレイ・ペパー、アンドレイ・ペパー……

これは私をひどくびつくりさせた。ヤコフ伯父がギターをもつてやつてきたが、よく眼つかちで禿頭の時計師をいっしょにつれてきた。この男は長い、黒いフロックコートを着て、坊さんのやうに物腰がしづかであつた。彼はいつも隅っこに坐つて、首をよこにかしげ、きれいに刺つた二重顎に指をつつこんで、妙な工合に頭をささへて、ニコニコしてゐた。彼はちよ

つと陰氣くさい男で、一つだけの眼であらゆるものを何か一種特別の執拗さでじつと眺めてゐた。あまり口数はきかなかつたが、よく同じことをくりかへし、くりかへし言つた。

——くよくよしなさんな、同んなじこつてすよ……私を彼をはじめに見たとき、ふいに、ずつとまへ、まな新町に住んでゐたころ、あるとき門の外がやがやとにぎやかに太鼓をたたいて人人が通つていつたのを思ひだした。兵隊と群集にとりまかれ、まつ黒な背のたかい荷馬車が、監獄から廣場に出ていつた。その上の腰掛には、ラジャの丸い帽子をかぶつて、鎖に繋がれた男が坐つてゐた。その胸には、白い文字で大きな名前をかいた、黒い板がぶらさがつてゐた。男は、その名前を讀まうとでもするやうに低く頭をたれてゐた。身體がゆれるたびに、鎖が音をたてた。……それだから母が時計師にむかつて、「これがわたしの息子です」と紹介したとき、私はびつくりして、手をひつこめて、わきにとびのいたものである。

——心配しなさんな。——彼はさういつて、口全體を右の耳の方にぐいとまげて、私の帯をつかまへ、自分の

方にひきよせて、かるく、すばやく私の身體をくろりと一廻りさせてから、放してくれた、そして私をほめたものだ。

——大丈夫ですよ、なかなかしつかりした子だ……

私は隅っこに逃げていつて、皮張りの豪華椅子にかけた。これは大きな椅子なので、私はらくにそこへ寝ることができた。祖父はいつもこれを大へん自慢にしてゐて、ブルジンスキイ公爵の安樂椅子と呼んでゐた。私はそこに身をひそめて、大人たちがいかにも適屈さうにさわいでゐるありさまや、時計師の顔が妙にいぶかしげにかはつてゆくさまなどを眺めてゐた。彼の顔は脂ぎつて、ぶよぶよしてゐて、いまにも溶けて流れてしまふやうであつた。笑ふと厚い唇が右の頬にくつと移り、小さな鼻がまた、肉體頭がお皿の上をすべりあるくやうに、顔がゆるりごきまはるのであつた。ピンと突立つた大きな耳が、これまたすこぶる妙な動きかたをした。見える方の眼の眉毛といつしよにつりあがるかと思ふと、ぐうつと頬骨の方まで動いてくる。もし彼がその氣になつたら掌で鼻をおぼふやうに、その耳で自分の鼻をおぼふことができるかもしれないと思はれた。ときをり彼はふかい

溜息をついて、杵のやうに丸い、くろずんだ舌をベロリとだし、それを巧みにまろくまはして、脂ぎつた厚い唇をなめまはした。しかもそれがけつしてをかしくはなくただもうびつくりして、それから眼をはなすことができないのであつた。

みんながラム入りのお茶をのんだ。それは焼いた玉葱のにはひがした。それから祖母の作った果物酒をのんだ。黄金のやうに黄いろい色をしたのや、タールのやうに黒くにごつたのや、緑色をしたのなぞがあつた。それからこんどは、新しい凝乳や、けしの粒をつけた蜂蜜入りの揚物菓子などを食べた。みんな汗をかいて、フワウウいひながら、祖母をほめた。お腹がいっぱいになるとみんな腫れあがつたやうなまつ赤な顔をして、行儀よく腰かけにならんで坐り、ものうげな調子でヤコフ伯父に何か一曲やつてくれとせがむのであつた。

彼はギターの上にかがみこんで、下手くそな音をたてて、いかにも聞きづらい、やかましい歌をうたひだした。

——えーい、好きな勝手な真似をして

おいらは町ちゆうをさわがせた——

と、カザンからきた奥方に

詳しく話してやつたのさ……

それはひどくいやらしい歌のやうに思へた。すると祖母がいつた。

——ねえ、ヤーシャ、お前もつと別の、まともな歌をうたつたらいいのに、え？ マトリョーナ、お前おぼえてるか、むかしよくうたつた歌をさ？

着物をさらさらいさせてマトリョーナが前に進みだし、教へさすやうな調子でいつた。

——姉さん、いまはあんな歌もう流行つてゐねえですだよ……

伯父は眼をパチパチやつて祖母の方をながめた、まるで祖母がずつと遠くの方にでもゐるといつたやうな工合に。そしてなほ不愉快な音と、やかましい文句とを、しつこく撒きちらした。

祖父は時計師をつかまへて、指のうへに何かのせて見せながら、こつそりと話をかはしてゐた。ところで時計師の方はうはの空で、眉をぎゅつとつりあげては、母の

方をながめ、ひとりであらうなづいてゐた。その脂ぎつた顔は、とらへどころのないやうに、次から次へと表情をかへていつた。

母はいつもセルゲエフ兄弟のあひだにはさまつて坐つてゐた、そして低い聲で、真面目になつてワシリイと話をしてゐた。ワシリイはよく溜息をついてはいつた。

——さうですよ、そいつは考へなくちやならん……

ところがダイクトルときたら、お腹がいっぱいになつて、いい氣持になり、ニコニコ笑つて、ばたりばたりと足をひきずりながら、いきなりピーピー聲で歌ひだすのであつた。

——アンドレイ・ババー、アンドレイ・ババー……みんながびつくりして口をつぐんで、彼をながめた。

するとマトリョーナが勿體ぶつて説明をした。

——これはね、この子が芝居へいつて、おぼえてきた歌なんだよ。あそこで歌つてゐるだよ……

おさへつけられるやうな遠慮さで深く記憶にのこつてゐる、そのやうな晩が二晩か三晩あつた。それからのこと、時計師は日曜の晝間、おそい禮拜式の彌撒がすむとすぐにやつてきた。私は母の部屋に坐つて、きれいな刺繍

の南京玉を糸からぬく手つだひをしてゐた。するとふいにパツと扉があいて、祖母がびつくりしたやうな顔を部屋につつこんだかと思ふと、すぐにまたひつこめてしまつた、そして大きな聲でつぶやいた。

——ワリーヤ、きたよ！

母はじつと身うごきもしなかつた。扉がまたあいてしきのの上に祖父が立ちだかつて、おごそかにいつた。

——さあ、ワルワラ、着物をきて、いくんぢや！

坐つたまま、彼の方を見ようともしないで、母は訊いた。

——どこへです？

——どこだかわかるもんか、行くところへいくんぢや！ つべこべいふな。あの男はなかなかおちついた人間で、仕事の腕もしつかりしとる、それにアレクセイにもいい父親になるぢやらう……

祖父はいつになく勿體ぶつた調子でいつた、そして両手の掌でしきりに脇腹をなでてゐた。両方の脇がぐつと背中の方に曲つて突きでて、びくびくふるへてゐた。——まるで両腕がまへの方にのびようとしてゐるのを、わざとさうさせまいとして争つてゐるやうであつた。

母がおちつきはらつて、相手の言葉をさへぎつた。
——わたしはさういつといたでせう。そんなこと駄目だつて……

祖父が彼女の方に一步あゆみより、まるで眼がみえなくなつたやうに両手をまへにのばし、身體をこころ、髪の毛を逆立てて、わめきたてた。

——いくんぢや！ いふこときかねんなら、おれが引つ張つてやるわ！ 髪の毛をひつつかんでさ……

引つばつてくんですつて？——母が立ちあがつて、訊きかへした。彼女の顔はまつ蒼になり、眼が氣味のわるいほど細くなつた。彼女はすばやく、ゆるい上衣とスカートとぬぎすて、下着ひとつになつて、祖父のそばによつていつた。

——さあ、引つばつてつてちやうだい！

祖父は齒をむきだし、拳固をふりあげて母を威嚇した。

——ワルワラ、着物をきる！

母は片手で彼をつきのけて、扉の把手にしがみついた。

——さあ、いきませう！

——仕様のない女だ、馬鹿め！——祖父がつぶやいた。

——わたしや平氣なんだ。さあ、いきませうつたら！ 彼女は扉をおしあけた。だが、祖父がその下着の裾をつかんで、彼女のまへに膝をつき、たのむやうにいつた。

——ワルワラ、馬鹿め、そんなことしたらおしまひぢやないか！ あんまり人に恥をかかせるもんぢやねえぞ……

そして低い聲で、情なささうに呻いた。

——おつ母や、おつ母ア……

祖母がもう母の行手をさへぎり、ちやうど鶏でも追ふやうに両手をひろげてふりたてて母を扉口に追ひこみ、

苦がにがしげな調子で吐きだすやうにいつた。

——ワリーヤ、馬鹿だわ、お前は、ほんとに、何をしたのさ？ さあ、ひつこんどいで、恥さらしな！

母を部屋におしこんで、扉にガチャリと鍵をかけてしまふと、彼女は祖父の方に身をかがめて、片方の手をのぼして彼をひきおこし、もう片方の手で彼をおどしつめた。

——ほんとに、わからずやの、剛突く張り爺いだよ！ 彼を長椅子に坐らせた。彼はまるで襤褸の人形みたい

に、どたりと椅子の上にあたはれ、口をポカンとあけて、

頭をふりたててゐた。祖母が母をどなりつけた。
——着物をきなよ、お前！

床から着物をひろひあげながら、母はいつた。

——わたしやあの人ところへなんかいかないよ、いんですか。

祖母が私を長椅子からおしのけた。

——柄杓にいつばい水をもつてきておくれ、早くさ！

彼女はまるで囁くやうにひくい聲で、おちついて、しかもおごそかに言つた。私は支那にかけたいていつた。表の半分を占めてゐる部屋の方で、だれかの重たい足音が、規則正しくきこえてゐた。母の部屋から、彼女のわめく聲がきこえた。

——わたしや、明日發ちます！

私は臺所に入つていつて、まるで夢でも見てゐるやうにぼんやりと窓べに腰をおろした。

祖父が呻いたり、嘔り泣きをしたりした。祖母はぶつぶついつてゐた。やがて扉のしみる音がして、氣味のわるいほどしづかになつた。私は何のためにここへきたのかを思ひだして、銅の柄杓に水をくんで、支那にかけたいていつた。すると表の方の部屋から、時計師がうなだ